

香川県丸亀市

中の池遺跡

—第9・10次調査—

総合運動公園整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

丸亀市教育委員会
(財)元興寺文化財研究所

なかのいけ
中の池遺跡

—第9・10次調査—

2004

丸亀市教育委員会
(財)元興寺文化財研究所

序

昨年に引き続き、平成13年度に行なった発掘調査の報告をします。時代の先を見ますと、私たちは宇宙開発や惑星探査、火星進出計画などという所にいますし、反対に、微細な世界に目をやると、地球を1としたとき1ナノはビー玉大というナノサイズの器具を開発し、実用化が目前という所にいます。にも拘らず、時代を遡及して、なぜ弥生時代の調査なのかと、つい、素人の私には思えます。30年程前だったと記憶しているのですが、アポロ11号が月面に着陸した頃、もしも人類が月で生活を始めたら、そこに生まれ住むであろう子どもたちに、何を教えたらいいか識者が対談しておりました。その時一番に出たのが歴史でした。祖先はどの星で生まれ、どう生きてきたかを伝えていくことは、大切なことであるというものでした。そういえば、学問についても同様に、例えば、数学では数学史を大切にしております。同じように、郷土の成り立ちについても私たちの先祖の生き様を、遺跡を調べることで窺い知ることができ、それが人間の研究を深めることに寄与すると思うからです。

この度調査から分かったことは、次の2点です。

1つは、環濠が4本発見できましたが、全部同時期に掘られたものではなく、順番を付ける事ができます。そのことは、集落域が時代と共に変わったことを意味すると思います。

2つは、環濠になる前には、湿地になっていて、その水を抜く事を目的に環濠を掘ったと考えられます。湧水も減ってやがては生活ごみの処理場に転用したと考えられます。

以上が調査から分かった主な成果です。今後、遺物の整理過程で結論が変わる事もあるかと思いますが、その時はお許し下さい。

最後に発掘調査、報告書の作成に際して、各方面より多大なるご支援を頂きました。

ここに篤くお礼を申し上げます。

丸亀市教育委員会 教育長
小 佐 古 公 士

例 言

1. 本書は香川県丸亀市金倉町に位置する、中の池遺跡で行われた中の池遺跡第9次・10次発掘調査についての報告書である。
2. 調査は丸亀市を事業主体とし、丸亀市教育委員会と調査の委託を受けた(財)元興寺文化財研究所が執行した。
3. 現地調査は佐藤亜聖((財)元興寺文化財研究所)が行い、平成13年7月16日～平成14年2月4日までを調査期間とした。
4. 本書に使用した方位は、特に指定の無い限り座標北を指し、遺跡の測量は国土調査法第IV座標系による。
5. 遺構の実測は主に佐藤、片桐節子、堀 純子(現 国分寺町町史編纂室)が行った。
6. 遺物の実測は佐藤、武田浩子、仲井光代、鈴谷曜子((財)元興寺文化財研究所)船築紀子(奈良女子大学大学院)が行った。
7. 遺構の写真は主に佐藤が撮影した。
8. 遺物の写真は久保 治((財)元興寺文化財研究所)が撮影した。
9. 現地調査には地元有志の参加を得た。
10. 整理作業参加者は以下のとおりである。
岡本広義、大西美奈、小田真由美、武田浩子、仲井光代、鈴谷曜子(以上(財)元興寺文化財研究所)、船築紀子
11. 現地調査および整理作業に際しては以下の方々のご協力をいただいた。記して謝意を表する。(五十音順、敬称略)
石黒立人 泉 拓良 梅木謙一 江浦 洋 遠藤 亮 大久保徹也 大嶋和則 片桐孝浩 川畑 聡 蔵本晋司 佐藤 竜馬 鹿野 墨 柴田昌児 田崎博之 中川和哉 中西 克也 中村 豊 西村尋文 信里芳紀 乗松真也 藤沢典彦 藤好史郎 松本和彦 宮崎 武 宮武 進 森岡秀人 森下英治 森下女子 水野正好 安井直也 吉田 広
12. 石器の解説文中法量にカッコ()が付されているものは残存部の計測値である。
13. 石器の光沢痕は肉眼観察による。
14. 自然科学分析については(財)元興寺文化財研究所と(株)古環境研究所が分析を行い、第7章を共同で執筆した。
15. 獣骨については大阪市立大学大学院医学研究科 安部みき子氏に鑑定をお願いした。
16. 本書の執筆は第1・3章を橋本英将((財)元興寺文化財研究所)が、第2章を東 信男(丸亀市教育委員会)が、第4～5章を佐藤が、第6章土器・土製品・木製品を佐藤が、石器を船築が、第8章1・2節を東との協議のもと佐藤が、第8章3節を東との協議のもと船築が執筆した。
17. 本書の編集は東の監修のもと佐藤が行った。

目次

第1章 中の池遺跡の位置と周辺の弥生時代遺跡	1
第2章 調査の経緯と経過	3
第1節 調査の経緯	3
第2節 調査の経過	3
第3章 中の池遺跡における既往の調査と調査区の位置	5
第4章 基本土層	7
第5章 検出遺構	18
第1節 北区の調査	18
第2節 南区の調査	39
第3節 第10次調査検出遺構	47
第6章 出土遺物	48
第1節 北区の調査	48
第1項 表土および包含層出土の遺物	48
第2項 環濠出土の遺物	49
第3項 その他の弥生時代の溝出土遺物	182
第4項 古墳時代の溝出土遺物	184
第5項 古代以降の溝出土遺物	185
第6項 土坑出土の遺物	185
第7項 柱穴ほか出土の遺物	187
第2節 南区出土の遺物	188
第1項 溝出土の遺物	188
第2項 水田域の出土遺物	190
第3項 水田関連の溝出土遺物	192
第4項 墓出土の遺物	195
第5項 深掘り出土の遺物	195
第7章 自然化学分析	197
第1節 分析の目的と資料の採取	197
第2節 中の池遺跡における花粉分析	197
第3節 中の池遺跡における寄生虫卵分析	201
第4節 中の池遺跡における珪藻分析	203
第5節 中の池遺跡におけるプラント・オパール分析	205
第8章 調査のまとめ	219
第1節 出土土器の時期と遺構の変遷	219
第2節 環濠に関する所見	230
第3節 中の池遺跡における石器組成とその特徴	233

第1章 中の池遺跡の位置と周辺の弥生時代遺跡 (Fig.1)

中の池遺跡は、現在の行政区分では香川県丸亀市金倉町に所在する。香川県は四国東北部に位置する四国最小の県であり、北では瀬戸内海を挟んで岡山県と相対し、南では阿讃山脈で徳島県と画されている。土地面積に占める平野の割合が高く、主な平野として西から三豊平野・丸亀平野・高松平野・志度平野などがある。このなかで中の池遺跡が位置する丸亀平野には現在西から弘田川、金倉川、土器川、大東川の4主要河川があり、普通寺市付近と坂出市付近は弘田川・金倉川・大東川の沖積作用によって形成された沖積平野であることがわかっている。中の池遺跡のある平野中央部北よりの丸亀市付近は平野の東・西部と異なり、緩傾状地形を呈した洪積台地が大半を占めている。

中の池遺跡の存在は1940年代から知られていたが、近年の開発に伴う調査によって周辺の弥生遺跡についても多くの所見が蓄積されてきている。中の池遺跡に近接する地域では、遺跡に南接する平池の東西・南において弥生時代の遺跡が確認され、それぞれ平池東遺跡、平池西遺跡、平池南遺跡と呼称されている。平池東遺跡では、弥生時代の溝状遺構が検出されている(東1996)。平池西遺跡では、(縄文時代晩期から)弥生時代前期の遺物を包含する河道、弥生時代前期と後期の溝状遺構が検出された(東1999)。平池南遺跡では、弥生時代前期末から後期中ごろの遺構・遺物が検出されている。中期に属する土器棺蓋が検出され、後期に属するとされる集落内の溝からは青銅製鋸先が出土した。これらの遺跡はいずれも中の池遺跡と有機的な関係を持つことが期待でき、弥生時代の周辺の景観を復元するうえでも、これらの遺跡間の比較検討の必要性が指摘されている(木下1995)。

丸亀平野全体に目を転ずると、弥生時代前期には下川津遺跡、三条番ノ原遺跡、龍川五条遺跡、五条遺跡などで人間活動の痕跡が確認できる。下川津遺跡は環濠集落とはならないが、堅穴住居・溝・土坑などから前期古段階の土器を多量に出土している(藤好・西村1990)。三条番ノ原遺跡では、水量調節を目的としたと見られる杭橋を伴う溝が検出されている(片桐1992)。龍川五条遺跡では環濠を持つ集落の基本構造が完成し、円形住居、掘立柱建物、円形周溝墓や木棺墓、用水路などが確認されている(宮崎1996、森下1998)。五条遺跡ははまだその詳細は明らかでないが、前期後半から後期初頭にかけての大規模集落の存在が想定されている。中期になると平野部において確認されている遺跡数は減少し、丘陵上を指向する遺跡が増加する。山麓部において青銅器の埋納が確認されるのもこの段階からである。平野部では旧練兵場遺跡で本格的な集落形成が始まり、拠点集落としての展開がはじまる(狭川2001)。後期になると、再び平野部の遺跡が増加し始める。旧練兵場遺跡の拠点集落としての拡大はピークに達し、周辺にも稲木遺跡や九頭神遺跡などで集落が確認される。下川津遺跡では集落が再開し、また、郡家原・三朱黒島・三条番ノ原などでも集落が新たに確認され、この段階で成立した集落は基本的に古墳時代初頭まで継続する傾向が指摘されている(宮崎1996)。

【参考文献】

- 東原勇1996 『平成7年度丸亀市内遺跡発掘調査概要報告書』丸亀市教育委員会
 東原勇1999 『平成10年度丸亀市内遺跡発掘調査概要報告書』丸亀市教育委員会
 片桐孝浩1992 『三条番ノ原遺跡』因国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第11冊 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
 木下晴一1995 『平池南遺跡』陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 平成6年度 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
 狭川真一2001 『旧練兵場遺跡』市営河軌道町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 普通寺市・(財)元興寺文化財研究所
 西岡道哉1989 『稲木遺跡』因国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第6冊 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
 藤好史郎・西村孝文1990 『下川津遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VII 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州因国運輸株式会社
 宮崎哲治1996 『龍川五条遺跡』因国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第23冊 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
 森下英治1998 『龍川五条遺跡II・般若東分山崎南遺跡』因国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第29冊 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団



1. 中の池遺跡 2. 平池東遺跡 3. 平池西遺跡 4. 平池南遺跡 5. 道下遺跡 6. 下川津遺跡 7. 川津下樋遺跡 8. 川津一ノ又遺跡 9. 柳池遺跡 10. 藤高池遺跡 11. 土器町B遺跡 12. 飯野山山頂遺跡 13. 飯野山西麓遺跡 14. 川西北・鯉治屋遺跡 15. 川西北・七条I遺跡 16. 郡家田代遺跡 17. 田村池遺跡 18. 郡家原遺跡 19. 三条黒島遺跡 20. 三条番ノ原遺跡 21. 龍川四条遺跡 22. 五条遺跡 23. 龍川五条遺跡 24. 金蔵寺下所遺跡 25. 稲木遺跡 26. 永井遺跡 27. 広坪樹池遺跡 28. 九頭神遺跡 29. 旧練兵場遺跡 30. 陣山遺跡

Fig.1 中の池遺跡の位置と周辺の弥生時代遺跡 (1:50000)

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

調査区は、江戸時代に造られた溜池である平池の北側に位置し、昭和51年度と56年度の調査により、丸亀市金倉町字中の池993、994-1番地で確認された弥生時代前期の環濠集落である「中の池遺跡」の範囲内に位置する。平成5年度に平池の南側で県立丸亀陸上競技場の建設が決定し、市において平池周辺に総合運動公園の整備を行うこととなった。総合運動公園整備事業（以下「整備事業」という。）に際しての遺構保護については、関係機関の事前協議により、耕作土より下層は掘削せず、盛土造成を行うことで遺構の保護を図り、全体発掘調査を行わないこととした。

平成12年度整備事業の一環である水路整備及び遊水池建設に伴い、平成12年6月29日から7月3日にかけて試掘調査を実施した。調査の結果、土器を多量に包含する層が確認され、本格的な埋蔵文化財発掘調査の必要性が認識された。整備事業を所管する丸亀市都市経済部都市計画課と、丸亀市教育委員会文化課（以下「文化課」という。）との協議により、香川県緊急地域雇用特別基金事業の一環として発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、財団法人元興寺文化財研究所に業務を委託し、平成12年10月30日から平成13年1月12日まで行った。調査地は丸亀市金倉町字中の池974-1、977-2、980-1、981、992-1、993番地で調査対象面積は946㎡である。

平成13年度調査は、昨年度に引き続き、総合運動公園建設予定地内において、緊急地域雇用特別基金事業実施要領に基づく中の池遺跡発掘調査業務として実施した。事業は平成13年6月27日から平成14年3月15日まで、財団法人元興寺文化財研究所に業務を委託し、発掘調査を平成13年7月16日から平成14年2月15日まで行った。調査地は丸亀市金倉町字中の池980-1、981、982-2、984、985-1、986-1、987-1、987-2、987-5、987-6、988-1、989-1、992-1、993番地で調査対象面積は3500㎡である。

第2節 調査の経過（調査日誌（抄））

2001年

7月17日（火）

現地にて調査前打ち合わせ。

7月18日（水）

北区重機掘削開始。

7月19日（木）

北区南半遺構精査開始。

7月30日（月）

SD002掘削開始。財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター（以下香川県埋蔵文化財センターとする）信里芳紀氏・松本和彦氏来訪。

7月31日（火）

SD002黒色粘土掘削、SD059タチワリ。

8月2日（木）

SD059セクションA土層断面図作成。香川県埋蔵文化センター片桐孝治氏来訪。

8月9日（木）

SD002完掘。SD059B・C・F・H区完掘。大谷女子大学齋沢典彦氏来訪。

8月11日（土）～8月19日（日）

お盆休み。

8月20日（月）

台風対策。

8月21日（火）

台風のため作業中止。

8月22日（水）

台風の後始末。香川県埋蔵文化センター蔵本晋司氏、信里氏来訪。

8月28日（火）

SD083タチワリ、セクションA土層断面図作成。

8月29日（水）

現場検討会。愛媛大学田崎博之氏、吉田広氏、愛媛県埋蔵文化センター梅木謙一氏、柴田昌晃氏、徳島県教育委員会中村豊氏、徳島文理大学久保徹也氏、芦屋市教育委員会森岡秀人氏、香川県埋蔵文化センター信里氏、蔵本氏、栗松真也氏来訪。

8月30日（木）

SD082・84・85掘削。古墳時代の溝であることが確定。

9月4日（火）

SD059完掘。

9月11日（火）

SD081掘削終了。SD083掘削開始。

9月27日（木）

SD002・059ベルト除去。南区南半全体発掘開始。

- 10月1日(月)
北区南半1/20全体図作成。
- 10月2日(火)
北区南半1/20全体図作成、SD083完掘。全体掃除。
- 10月4日(木)
全体写真。北区北半重機掘削開始。
- 10月9日(火)
北区南半各溝タチワリ。
- 10月11日(木)
北区北半遺構精査開始。
- 10月17日(水)
小学生現場見学会開催。
- 10月18日(木)
重機掘削終了。この前後雨天が相次ぐ。
- 10月26日(金)
SD082・131・134完掘。
- 10月27日(土)
フレッシュ丸亀秋祭りにおいて現場見学会。
- 11月2日(金)
SD167掘削開始。
- 11月3日(土)
市民現場体験会開催。
- 11月9日(金)
南区重機掘削開始。
- 11月10日(土)
市民現場体験会開催。
- 11月13日(火)
南区最下層にて少数の溝検出(後にSD204・205と認定)。
- 11月14日(水)
SD167C区にて橋検出。
- 11月26日(月)
南区耕作痕?検出状況写真。
- 11月28日(水)
調査区西側で工事開始。遺構の存在を確認し、緊急に調査を行う(第10次調査)。
- 11月29日(木)
ST203検出。
- 12月2日(日)
市民現場体験会開催。
- 12月9日(日)
愛媛大学田崎氏調査指導、香川県埋文センター信里氏、森下氏来訪、水田遺構調査指導をいただく。
- 12月11日(火)
北区全体掃除。高松市教育委員会大嶋和則氏、中西克也氏来訪。12月15日(土)
現地説明会開催。約80人参加。
- 12月20日(木)
北区全体写真。
- 12月27日(木)
南区各セクション除去、水田面精査。愛知県教育サービスセンター石黒立人氏、丸亀市文化財審議委員遠藤亮氏、香川県埋文センター信里氏、森下氏来訪。
- 12月31日(月)～2002年1月4日(金)
正月休み。
- 2002年
- 1月5日(土)
図面訂正および現場点検。
- 1月6日(日)
現場点検。石川県教育委員会林大智氏、香川県埋文センター信里氏、森下氏、乗松氏来訪。
- 1月14日(月)
上層水田面完掘。大阪府文化財調査研究センター江浦洋氏、鹿野聖氏来訪。
- 1月15日(火)
SD209完掘。北区埋め戻し開始。
- 1月22日(火)
南区完掘。全体掃除および1/20全体図作成開始。
- 1月25日(金)
南区全体写真。深掘開始。
- 1月28日(月)
南区埋め戻し開始。
- 1月31日(木)
作業員雇用終了。北区・南区填圧開始。
- 2月1日(金)
埋め戻し終了、終了の確認。
- 2月4日(月)
作業完了、現地撤収。

第3章 中の池遺跡における既往の調査と調査区の位置 (Fig.2)

中の池遺跡の発見は1947年、水田地下げの際に、地元の方によって多量の土器片が採取されたことを発端とする。しかし本格的な発掘調査は1976年、香川県教育委員会による第1次調査を待たねばならなかった。第1次調査は90㎡の小規模なトレンチ調査であったが、複数の溝が確認され、出土遺物から弥生時代前期の遺構であることが確認された。

1981年、丸亀市教育委員会によって行われた第2次調査は、調査面積が700㎡と、比較的に広い範囲の調査が行われた。調査の結果、弧を描いて並走する4条の溝が確認され、香川県で初確認の環濠集落であることが判明した。続いて第2次調査の東側付近で行われた第3次調査は、幅約2m、長さ20m程度のトレンチ3本が設定された。その結果第2次調査で見つかった環濠の延長と考えられる2本もしくは3本の溝が見つかり、環濠集落の形態を推測する資料となった。また、第2区では環濠の外側と考えられる位置からも多数の柱穴等が見つかり、環濠の外側に居住地が存在した可能性が指摘された。

続いて1998年には、丸亀市総合運動公園整備事業に伴い、丸亀市教育委員会、松本考古学研究所によって第4次・第5次調査が行われた。第4次調査はこれまでの調査区とはやや離れた、現集落の南側で行われた。推定される集落域から大きく離れているにもかかわらず、弥生時代前期の溝が検出され、第3次調査で指摘された環濠外における集落域の存在が確実なものとなった。第5次調査では、第3次調査での調査区の西・南側に多くの溝が見つかり、環濠西側の状況について検討課題を与えた。

1999年、丸亀市教育委員会によって行われた第6次調査は、第3次調査における調査区の東側で行われた調査である。範囲確認調査のため詳細は不明であるが、複数の溝が複雑に切り合っており検出されている。さらに同年、それまでの調査の及んでいなかった南側地区で行われた第7次調査では、南へと続く溝と、暗褐色の粘土を埋土とする落ち込みが見つまっている。

2000年に丸亀市教育委員会と財団法人興興文化財研究所によって実施された第8次調査は、それまでの調査の結果から、環濠内部の居住域と推定されていた地点の調査である。居住域の中心部と目される区域において、断面「V」字形を呈する環濠が櫛列を伴って検出され、また、松葉型住居の存在も確認されるなど、環濠集落内部の居住空間の様相について多くの所見が得られた。

これら既往の調査から得られる中の池遺跡の調査課題として、

- ① 環濠内側の土地利用状況の解明
- ② 環濠の詳細な年代
- ③ 環濠の形状の確認
- ④ 環濠西側の情報
- ⑤ 環濠内外の利用形態における差異の抽出

などが考えられる。今回の調査では②③⑤に重点を置いて調査を行った。

今回の調査	第2次調査	第8次調査
SD002・134		SD001
SD059・167	SD8102	SD003
SD081	SD8101	SD005
SD083	SD8105	SD006

Tab.1 今回の調査と既往の調査検出溝の対応関係

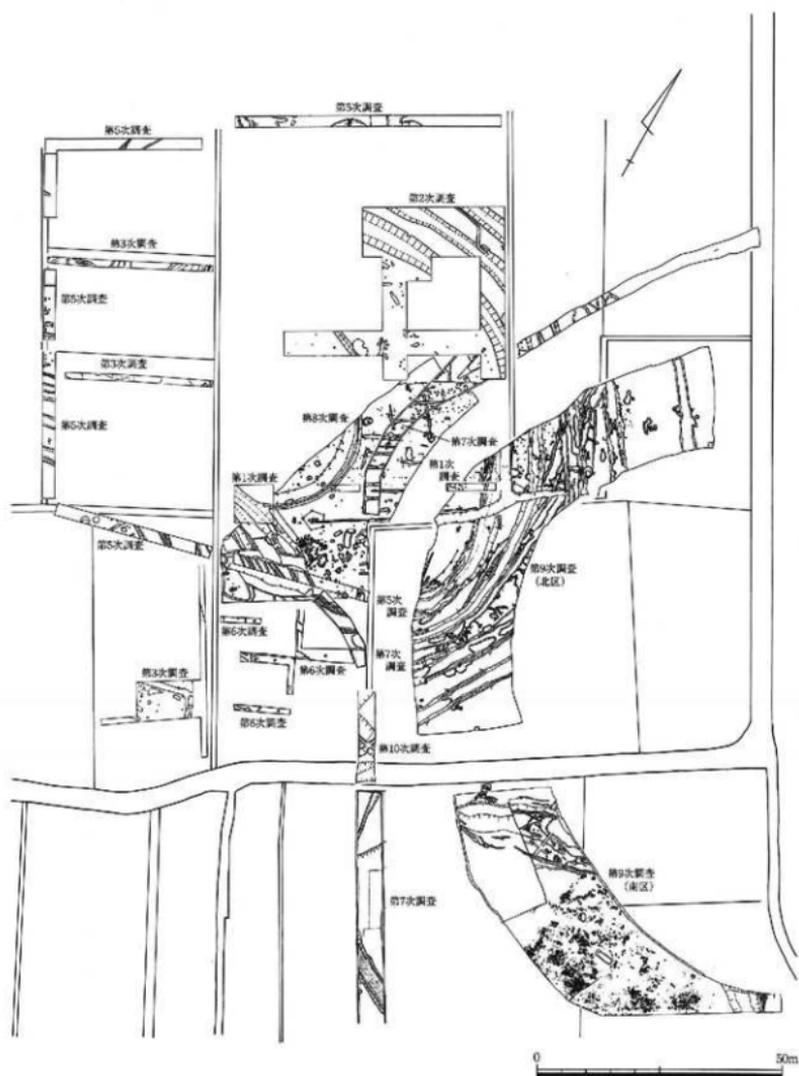


Fig.2 中の池遺跡における既往の調査と今回の調査区位置図 (S=1/1000)

第4章 基本土層 (Fig.3)

調査区一帯は全体的に1.5m程度の盛土が行われており、調査はこの盛土の除去から始まった。盛土を除去すると、造成以前の水田耕作土と考えられる暗灰色粘土が出現する。水田耕土上向は旧水田面の高低差を残しており、造成以前の計画地図に見られる畦畔の位置に一致する形で段差が形成されている。この耕土内も詳細に観察すれば複数の土層で成り立っていると考えられるが細分しなかった。

旧耕土直下には明褐色粘質土が存在する。この層は比較的均質で、層厚の厚い部分では部分的に酸化やラミナが見られることから近世以降現代以前の洪水砂層であると考えられる。ただし大部分は上層の水田に起因する擾乱を受けており、当初の堆積構造を持つ部分はわずかである。出土遺物には18世紀の染付碗がある。

明褐色粘質土の直下には暗灰色砂質土が存在する。この層は直接的に遺構面を被覆する層で、ラミナや粒子の酸化現象が見られず層中均質に礫を含むことから、著しく擾乱を受けた層であることがわかる。第8次調査で条里と同一方向の溝がみつかり、その埋土がこの層と同一であったことなどから、中世以降の耕作土であったと考えられる。出土遺物にはMT15並行期の須恵器杯身が出土しているが、混入と考えられる。この層は調査区全面に広がるものではなく、主に北区中央の旧用水路より南側に分布する。

暗灰色砂質土直下は遺構検出面であり、黄灰色細砂のベースである。ベース面の標高は北区南端で10.5m、中央付近で10.3m、北東隅で10.2mを測る。北東隅は暗灰色の細砂がベースとなり、締りが密く湧水が著しい。

黄灰色細砂以下のベースは2箇所において深掘りを行ったところ、遺構面より-50cm程度で旧河道と考えられる礫層にあたる。礫層は礫径を違えた物が調査区全域に存在したが、これは複数の流路が何時期にもわたり交錯して存在したほか、これらが供給した扇状地堆積物が複雑に堆積した結果と考える。



Fig.3 基本土層柱状模式図

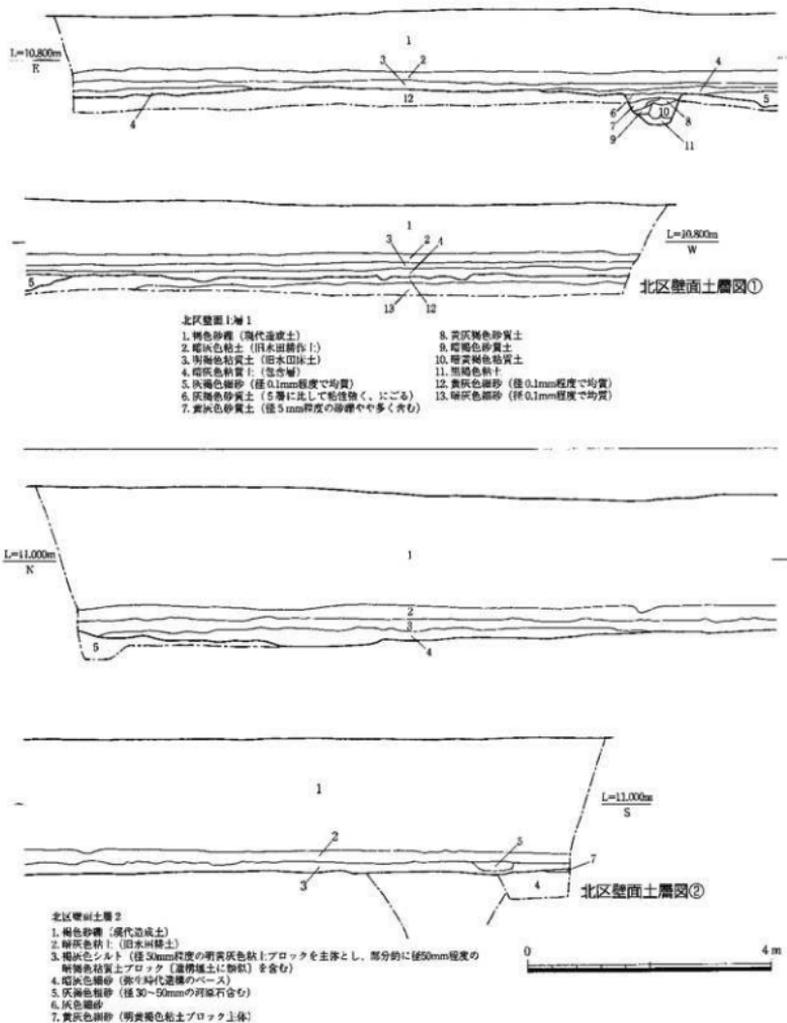


Fig.4 調査区壁面土層図 (1) (S=1/80)

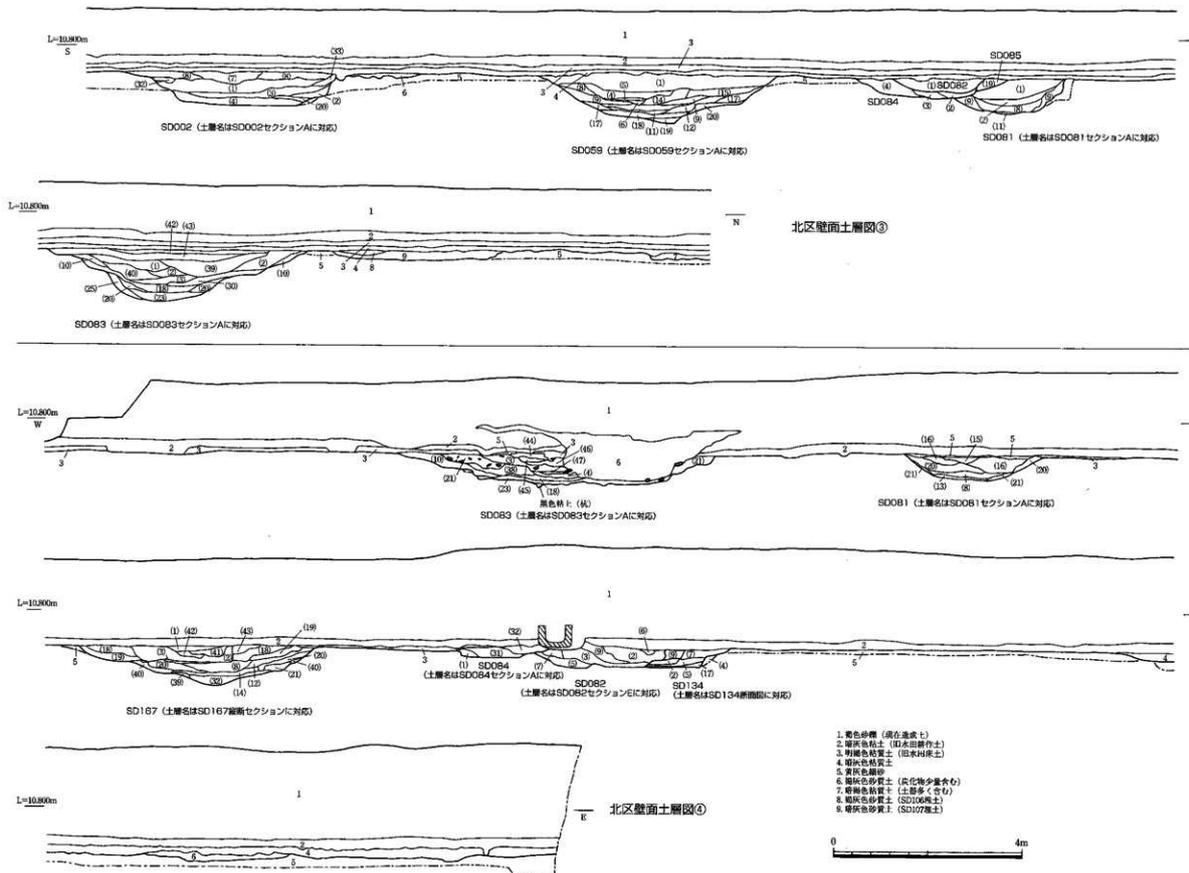


Fig.5 調査区壁面土層図 (2) (S=1/80)

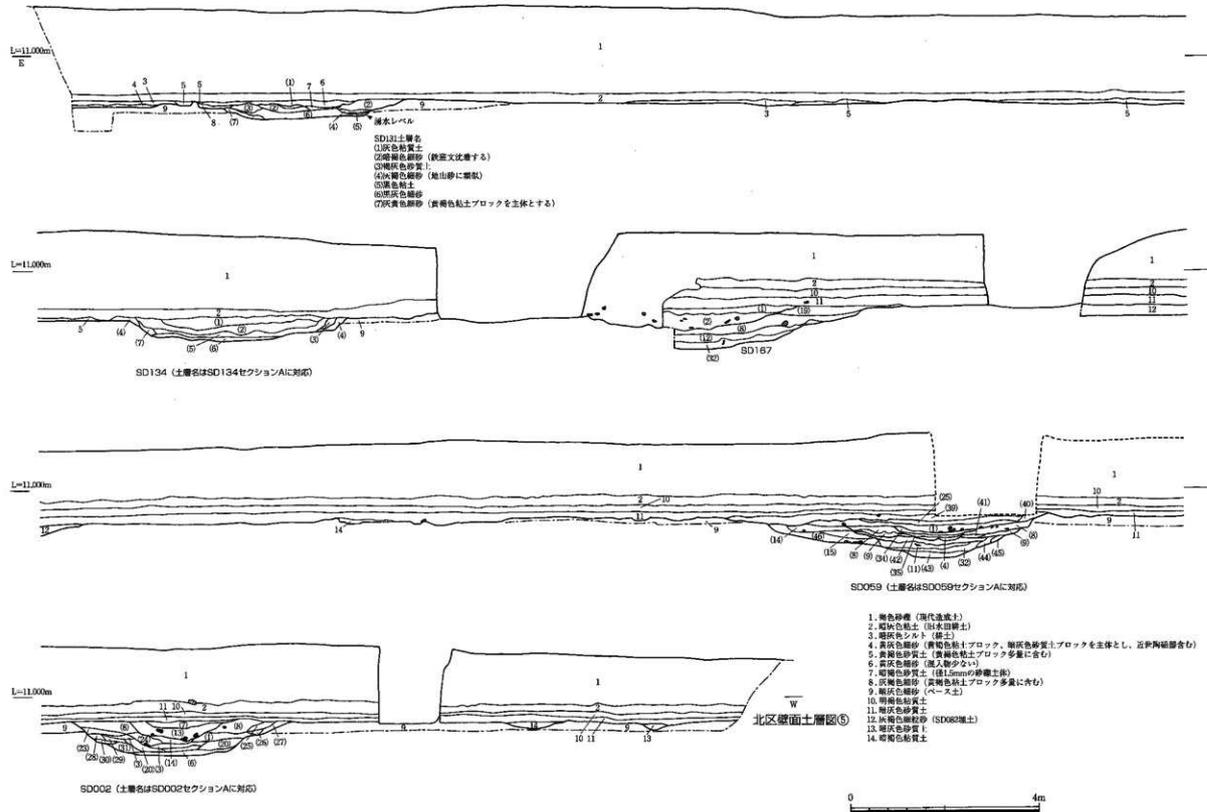


Fig.6 調査区壁面土層図 (3) (S=1/80)

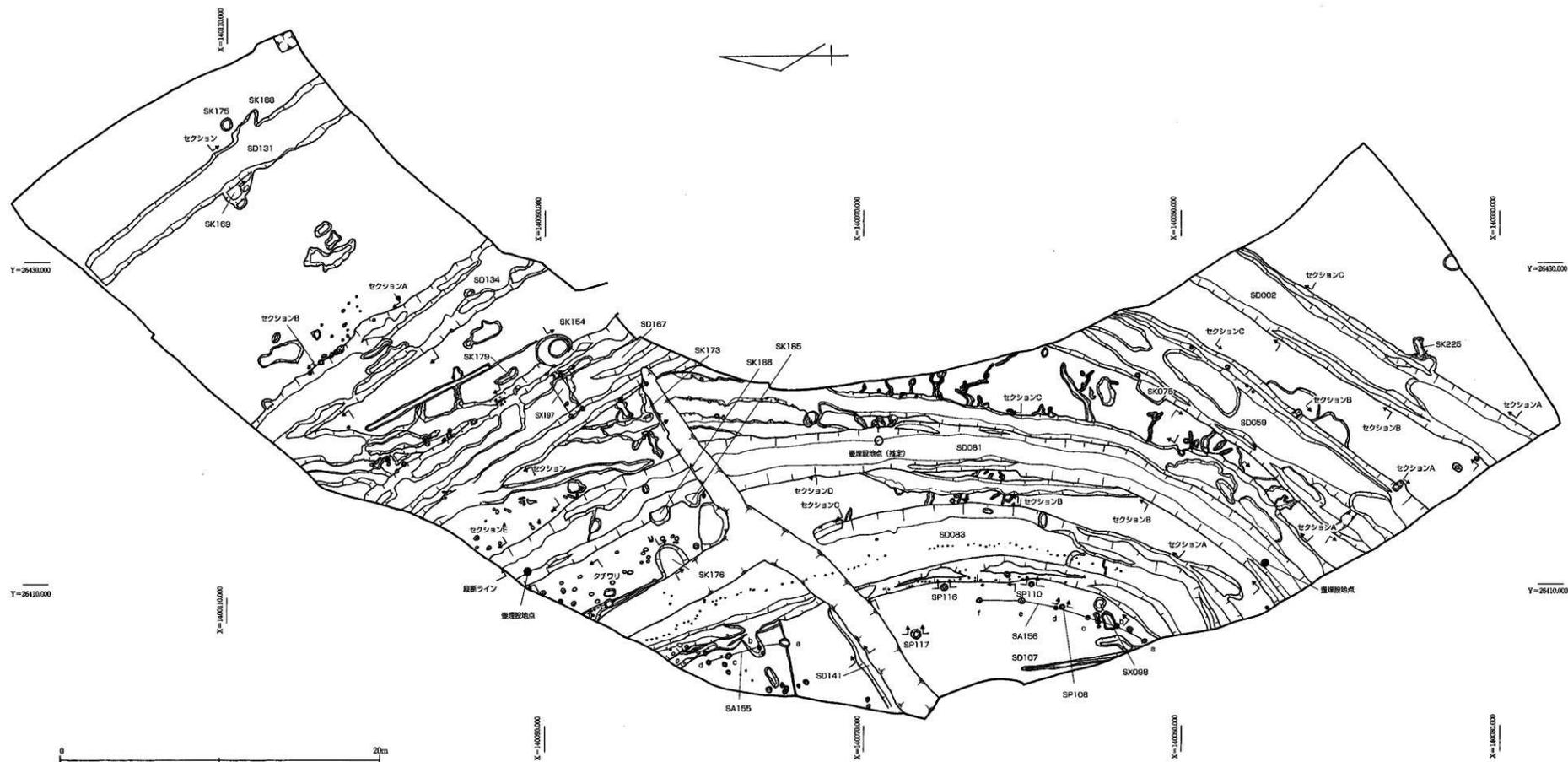


Fig.7 中の池遺跡第9次調査北区全体平面図 (S=1/200)



Fig.8 中の池遺跡第9次調査南区全体平面図 (S=1/160)

第5章 検出遺構

第1節 北区の調査

溝

検出した溝は主にこれまでの調査との関係から環濠と考えることができる溝と、それ以外の溝に分けられる。

環濠

環濠と考えられる溝はSD002、SD059、SD081、SD083、SD134、SD167がある。いずれも緩やかに弧を描いて存在し、SD059とSD167が、SD002とSD134がそれぞれ同一の溝と考えられる。各溝の間隔は2.5m～5.5mとばらつきはあるものの、切り合い関係を持たず、ほぼ並行して存在している。溝間の空閑地には少数の土坑の他に顕著な遺構は存在しないが、SD059・167とSD081の間には後述する不定形小溝群が見られる。各溝と既往の調査で判明して

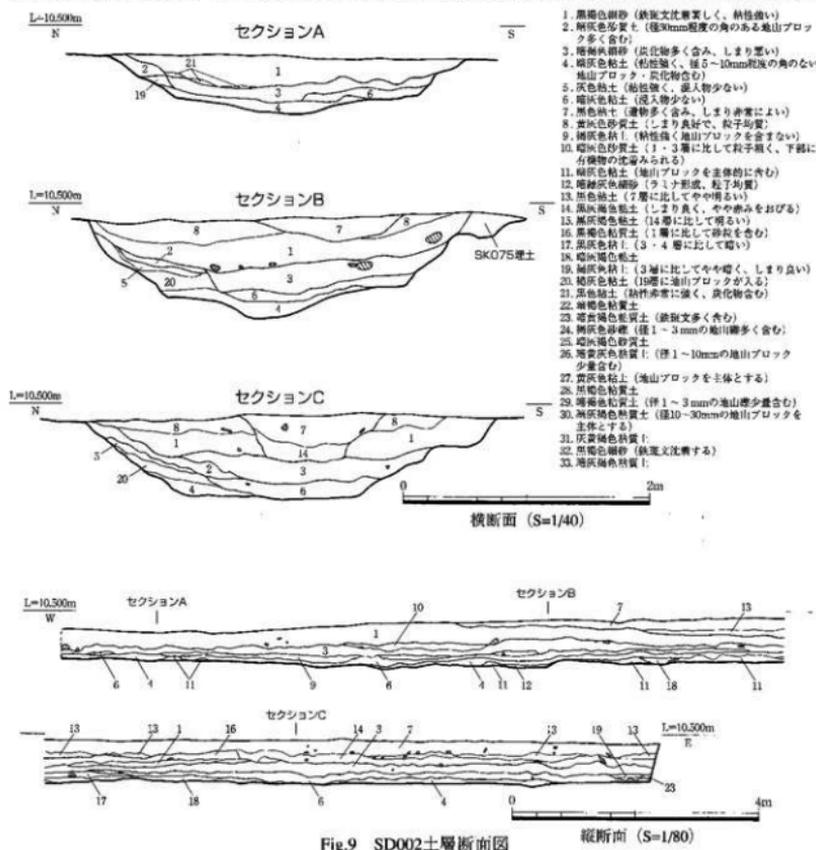


Fig.9 SD002土層断面図

いる溝との対応関係はTab.1の通りである。以下各溝について詳述する。

SD002

調査区南端Aj-N9区からAg-N2区にかけて直線的に存在する溝である。SD134と同一の溝と考えられ、SK225を切る。溝幅は250～460cmとややばらつきがあるが、幅の狭い西端部分は重機掘削で15cm程度下げすぎた部分であり、本来はほぼ450cm程度の溝幅を持っていたものと考えられる。深さは48～70cmを測り、底部レベルは東壁で9.76m、セクションCで9.72m、セクションBで9.54m、セクションAで9.78mとほぼフラットである。セクションB付近には高低差5センチ前後の段を有し、断面形態はセクションB-C間で若下二段摺り状を呈するがおおよそ緩やかな「U」字形である。

断面観察からは最低1度の掘り直しが確認でき、微細な観察からは波濼が行われていたものと考えられる。埋土は最下層（土層図中の4層）に粘性の強い暗灰色粘土が存在する。この粘土内には径5mm前後の地山ブロックが少量存在する。ブロックの形態は球状もしくは塊状を呈し、土層そのものも粒子の粗密によるグラデーション構造を持つため、滲水もしくは非常に緩やかな流水性の環境下で生成されたものと考えられる。また、部分的に微細なラミナを形成する部分もある。

4層直上にはやや地山ブロック含量の多い20層が存在するが、それらを切り込むように6層が存在する。この層はやや構成粒子が粗く、土塊構造が擾乱を受ける。その上に角礫状の地山ブロックを主体的に含む2層が堆積する。2層は調査区西端からセクションC付近まで存在し、いずれも溝北側から投棄されたような状況である。その後3・1・8層が堆積するが、これらの層は下層に比してやや粒子が粗く、著しく擾乱を受け堆積構造が不明確である。しかし部分的に砂礫の薄層が存在し、自然状況下で堆積したのと考えられる。そしてこれら3層以上を切り込む形で7・14層が形成される。この層は大量の遺物を含み、薄層やラミナを含まず、構造は亜角礫状のブロックを形成している。縦断面の観察からは下層との境界面が起伏を有し、微細な観察からはいくつかの単位に分割できるものと考えられる。また、下層との境界付近に遺物が多い。包含される遺物の方向は非常にランダムであり、これらの状況を考え合わせるとおそらく人為的に埋められた土と考えられる。

SD059

調査区南半、Ai-N12～Af-N14区にかけて、緩やかに湾曲して存在する溝である。検出面ではS-071を除くすべての遺構を切っている。溝幅は最も狭い部分で450cm、最も広い部分で590cmを測り、傾向としては西へ行くほど若干狭くなる。深さは60～90cmを測り、底部レベルは東壁で9.45m、セクションCで9.56m、セクションBで9.7m、セクションAで9.46m、西壁で9.2mを測る。底部はおおよそフラットであるが、東端Ai-N10区、セクションC付近、西端Ae-N15区付近にそれぞれ深さ5～10cmの窪みを有する。特に西端のものは深さ20cmを測りやや深い。これらのうち規模のわかるセクションC付近のものは長軸720cm、短軸250cm、深さ10cmを測る。溝のベースは湧水の少ないよく締まった青灰色のシルトであるが、これらの窪みはこのシルトを抜いて下層の砂礫に達しており、窪みからの湧水が著しい。また、断面の観察からもこの窪みを埋め戻した痕跡は見られず、意図的に掘削した可能性が高い。セクションC付近の肩部には上留めかと思われる杭痕跡が見られた。溝そのものの断面形態は肩部に若干の段を有する緩やかな「U」字形を呈する。

断面観察からは数回の波濼や掘り直しが考えられる。埋土は主に開口部を中心に径10～30mmの亜角礫状地山ブロックを大量に含む層が存在し、それを切る形で18・19層といった黒色の泥を主体とする層が存在する。この層はSD002の最下層同様球状もしくは塊状を呈する径5mm前後の地山ブロックが少量存在し、土層そのものも粒子の粗密によるグラデーション構造を持つため、滲水もしくは非常に緩やかな流水性の環境下で生成されたものと考えられる。19層の上位には14・15・33層が存在する。14・15層は砂礫を多く含む泥で、植物もしくは動物による擾乱が著しい。常時滲水した状態で形成されたものとは考えられない。33層は堆積構造が見えず、ブロックによって構成されることから人為的に堆積した土と考えられ、肩部に貼り付けたものと考えられる。これらの層を切って10・11・12・13層といった土が堆積する。これらの土は暗灰色の泥を主体とし、下層に比してやや砂礫が多い。層中にはラミナを少量含むグラデーション状の構造も存在するが、擾乱が著しく細かな構造は不明である。これら8・9・10・11層を切り込んで3・4・5・6・27層が存在する。これらの層は下層に比してやや粒子が粗く、著しく擾乱を受け堆積構造が不明確であるが、部分的に砂礫や粘土・シルトの薄層が存在し、自然状況下で堆積したものと考

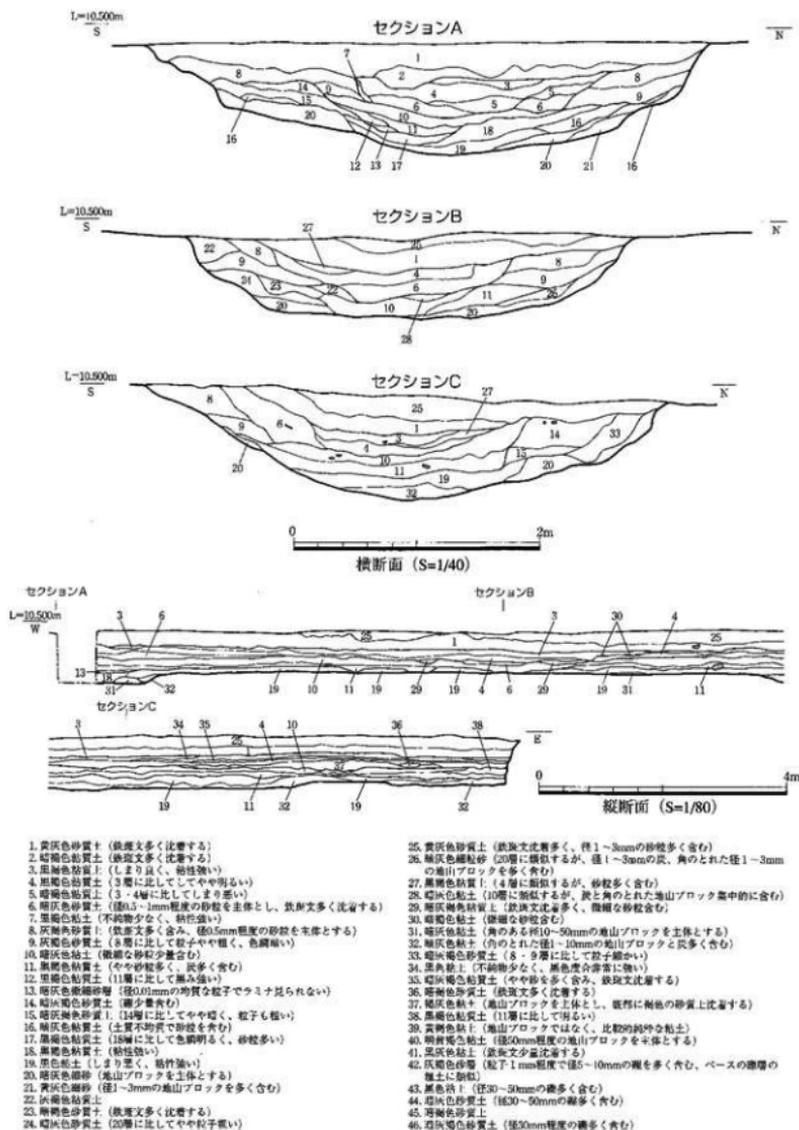


Fig.10 SD059土層断面図

えられる。堆積物の観察からは滲水直跡を明確に見出せず、常時滲水状況ではなく、比較的乾燥した状況下で堆積した物と考えられる。6層は33層同様垂角礫状のブロック構造を有し、人為的に貼り付けた土と考えられる。注したいのはセクションCのすぐ東側の10層直上に存在する37層である。この層は垂角礫状の径5~10cmの地山ブロックを主体とし、従断面の観察からはSK075を中心に放射状に存在する。SK075は掘削後すぐに埋め戻したものであるが、埋土内に地山のブロックは存在しない。これらのことからSD059の埋没段階は、10層を切り込む浸漬もしくは掘り直しが行われた直後にSK075が掘られ、その排土が溝に投棄されたものと考えられる。

最上層1・2・25層はいずれも薄層・ラミナを含まず、土壌も垂角礫状のブロックを呈し、破砕された遺物を大量に含む。特に下層との境界付近に遺物が多く、遺物の方向性はランダムで規則性を示さない。これらのことより最上層についても人為的に埋められたものと考えられる。

SD081

調査区中央付近を大きく弧を描きながら縦断する溝である。SD082・084・085に切られ、SK185・186を切る。溝幅は最も広い部分で440cm、最も狭い部分で230cmを測る。狭い部分はSD082・084・085に切られる部分であり、正確な数字とは言いがたい。深さは46~68cmを測り、底部レベルは北端で9.48m、セクションDで9.58m、セクションBで9.54m、セクションAで9.72mを測る。溝の断面形態は比較的にきれいな「U」字形だが、N20ラインより北側は若干乱れ、二段掘り状を呈する部分などが見られる。底部の形態もこれに呼応するようにN20ライン以南は比較的フラットであるが、N20ライン以北にはSD059で指摘したような窪みが複数存在する。窪み周辺の土層はSD059とほぼ同じで、やはりよく締まった青灰色のシルトを抜いて湧水の激しい砂層を露出させている。埋土は他の溝とやや異なる。最下層には接合性の強い角礫状の地山ブロックを含む掘削当初の排土の痕跡があり、その直上には他の溝と同様径1~5mmの球状・垂角礫状の地山ブロックを含み、ラミナとグラデーション状の級化構造を持つ暗灰色の泥が存在する。他の溝と大きく異なるのは、この層の直上に地山のブロックで構成される層が存在することである。この層は径10~15cmを測る接合性の高い角礫状の地山ブロックで構成され、詳細に観察すると黒褐色のシルト混じり細砂のブロックで構成される層と互層を成していることがわかる。縦断面の観察からはおそらく細かくいくつもの単位に分割することが可能と考えられ、全域に渡って人為的な埋没が行われている。この層は溝全域に存在するものではなく、セクションE付近で途切れることは注意を要す。さらに特筆すべきは、この人為的な埋め戻しの土の最下部からは、ほぼ完形に近い壺が比較的等間隔で埋まれていることである。壺はセクションB-C間出土の物の出土位置が不明確であるが、ほぼ30m間隔で存在し、いずれも正位置を保ち、投棄された状態で出土した。いずれも一部が8層にめりこむような状況であり、溝埋め戻しの最初の段階で意図的に投棄されたものと考えられる。いずれの土層も口縁部を一部打ち欠いていることはこの想定を補強する。ただ、セクションE付近で出土した壺は埋め土による被覆を受けておらず、必ずしも埋める部分に対し壺の投棄を行ったわけでなく、溝の機能停止に伴い壺の投棄が行われたものと考えられる。

埋め戻しの後調査区北端付近は浅い窪みとして残っていたようで、16・17・18層が堆積する。これらの層は砂混じり泥を主体とし、部分的に砂礫の薄層が存在する。擾乱が著しく地積構造は不明な点が多いが、開口した状態で自然に堆積したものと考えられる。さらにその上層の15層は垂角礫状の地山ブロックを少量含む。一部砂礫の薄層も存在し、人為的な埋め土かどうかの判断は難しい。

SD083

調査区西側に弧を描きながら縦断する溝である。北端は現代の用水路により著しく破壊される。溝幅は最も広い部分で680cm、最も狭い部分で460cmを測り、北端付近はやや開口が乱れる。西端付近にも浅く広がる部分がある。深さは70~82cmを測る。底部レベルは北壁で9.46m、セクションCで9.56m、セクションBで9.52m、セクションAで9.48m、西壁で9.26mを測る。西壁付近は丁度窪みに当たっており若干深くなっている。溝の断面形態は基本的には緩やかな「U」字状であるが、二段掘り状を呈する部分が多い。

底部の形状はおおよそフラットであるが、西端部分やAd-N11区には深さ10~15cmの窪みが存在している。窪みの性格や規模は他の溝と同様、青灰色のシルトを抜いている。また、最も特徴的なのは溝底部に径5~10cmの杭跡が1列に並んでいることである。杭跡は開口に存在したものも含めて全部で140個近く検出している。大半が溝底部中央付近に、溝北端からセクションA付近まで続いている。大半が1列配置であるが、北端19ライン付近から北側は幅

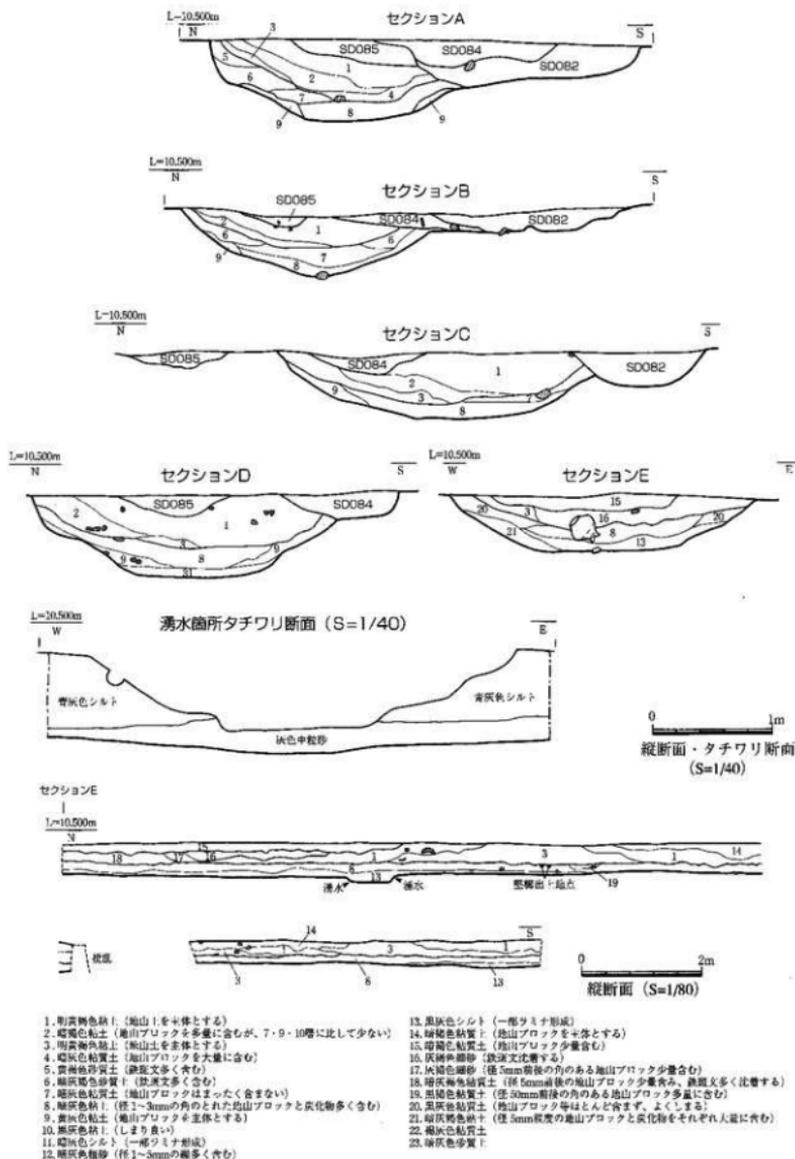
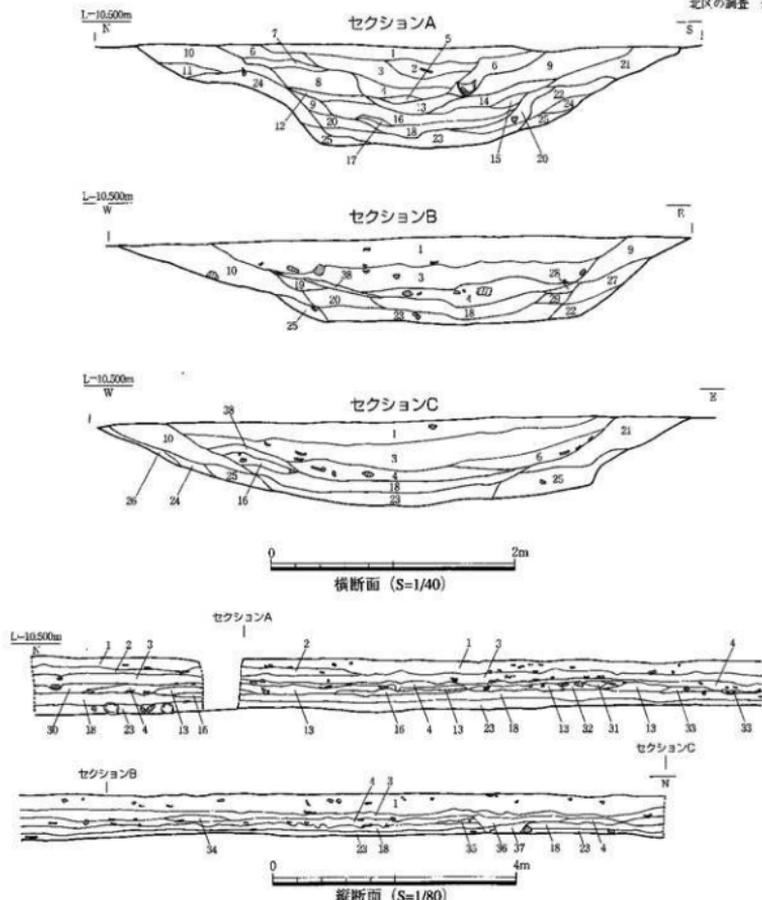


Fig.11 SD081土層断面図



1. 照褐色砂質土 (鉄質文土多量多く、砂子やや粗い)
2. 黒色粘土 (粘性强く、炭化物少量含む)
3. 暗褐色粘質土 (鉄質文土多量多く、砂2mm程度の砂粒多く含む)
4. 暗褐色粘質土 (10層に類似するが、やや砂粗い)
5. 暗褐色粘土 (しまり悪く、径1mm程度の砂粒少量含む)
6. 暗褐色粘土
7. 黒色粘土 (不純物少ない)
8. 暗褐色砂質土 (径1~5mmの砂粒、炭化物少量含む)
9. 暗褐色粘土 (鉄質文土多量多く、下部に土芯多い)
10. 暗褐色粘土 (9層に類似するが、やや砂粗い)
11. 暗褐色粘質土 (10層に類似するが、やや粗い)
12. 暗褐色砂質土 (径0.1~3mmの砂粒多く含む)
13. 暗褐色粘土 (細く、炭化物多く含む)
14. 暗褐色粘土 (13層に比してやや明るい)
15. 暗褐色粘土 (16層のプロック少量含む)
16. 暗褐色粘質土 (やや砂粒含む)
17. 暗褐色粘土
18. 暗褐色粘土 (炭化物多く含む)
19. 暗褐色粘質土 (粘性强い)
20. 暗褐色粘質土 (しまり悪く、炭化物多く含む)
21. 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土をブロック状に含む)
22. 暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土をブロック状に含む)
23. 暗褐色粘土 (径5mmの角のとれた地山ブロック多量、炭化物少量含む、ラミナ形成部多量、見られる)
24. 暗褐色砂質土 (径5mm前後の角のとれた地山ブロック少量含む)
25. 暗褐色粘質土 (地山ブロックを主体とする)
26. 暗褐色粘土 (径5mmの角のとれた地山ブロックを主体とする)
27. 明褐色粘土 (地山ブロックを主体とする)
28. 灰色粘土 (泥入部少ない)
29. 暗褐色粘土
30. 暗褐色粘土 (4層に比してやや砂粗い)
31. 暗褐色粘土 (炭化物多く含む)
32. 暗褐色粘質土 (炭化物多く含む)
33. 暗褐色粘土 (径5mmの角のとれた地山ブロックを主体とする)
34. 暗褐色粘質土 (やや砂粗い)
35. 暗褐色粘土 (炭化物多く含む)
36. 暗褐色粘土 (白色炭化物の塊も多く含む)
37. 暗褐色粘土 (白色炭化物の塊も多く含む)
38. 暗褐色粘土 (鉄質文土多量に混入する)
39. 暗褐色粘土 (鉄質文土多量に混入する)
40. 暗褐色粘土 (11層に類似する)
41. 暗褐色粘土 (40層に比してしまり悪く、やや粗い)
42. 暗褐色粘土
43. 暗褐色粘土
44. 暗褐色粘土
45. 暗褐色粘土
46. 暗褐色粘土
47. 暗褐色粘土 (炭化物少量含む)

Fig.12 SD083土層断面図

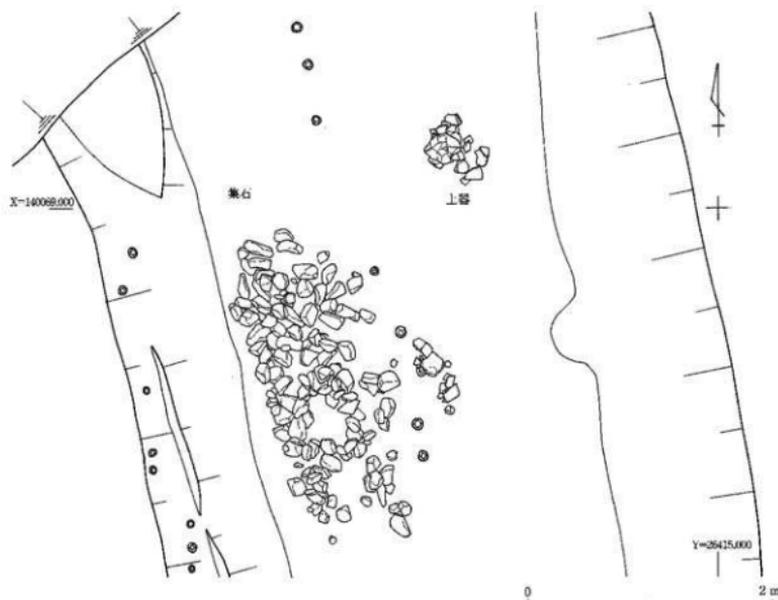


Fig.13 SD083遺物出土状況図 (S=1/40)

1m前後で2列の配置となる。各杭の間隔は40~110cmとばらつきがあり不規則であるが、平均50cm程度と考えることができる。杭そのものは出土していない。北東での確認では杭は溝掘削当初に設置され、短期間で廃絶したものと考えられる。このほかにもN11~N16ライン付近には肩部にも杭列が見られる。杭の規模・間隔などは溝底部のものとは大きくは変わらない。

これら杭列の他に溝底部にはAd-N15区付近において集石を検出している (Fig.13)。これは溝底部より5cm程度浮いた位置に、径10~20cm程度の河原石を140個以上配したもので、南北280cm、東西160cmの範囲を占める。石の配置は特に規則性を持たないが、3箇所ほど石組み炉のような空閑地を有する。ただし石などに被熱の痕跡はなく、炉としての機能は考えられない。

溝内の埋土は最下層及び肩部に掘削当初の上と考えられる径5~15cm大の接合性の高い亜角礫状地山ブロックが存在し、その上層に黒灰色の泥を主体とする層が存在する。この層は他の溝群の最下層同様球状もしくは亜角礫状の微細な地山ブロックとラミナ、グラーション状の級化構造を持つ。この上には同様の水性堆積の痕跡を有する暗灰色砂混じり泥が堆積し、これらを切って6~9・12・14~18層が堆積する。これらの層は18層に水性堆積の痕跡が見られるほかはいずれも擾乱が著しく、堆積構造は不明である。しかし所々に砂の薄層が存在することから自然状況下での堆積と考えられる。そしてこれらを切って1~5層が存在するが、この層は他の溝の最上層と同様堆積構造が見えず、ブロックを形成するなど人為的な埋没過程が想定できる。また、膨大な遺物を包含し、その配置も規則性を欠く。

SD134

調査区北側Ak-N23~Ag-N28区に位置する溝で、SD002と同一遺構と考えられる。SD084・085に切られる。溝幅は最も広い部分で490cm、最も狭い部分で390cmを測る。溝の平面形状は中央部付近でやや乱れる。深さ46~55cm

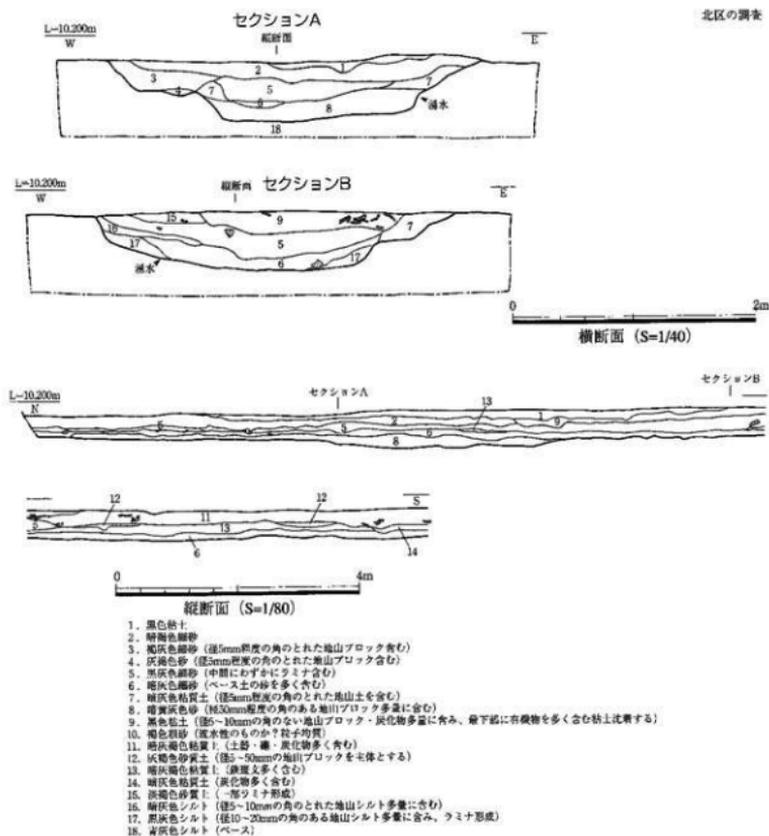


Fig.14 SDI34土層断面図

を測り、底部のレベルは北壁で9.62m、セクションAで9.48m、セクションBで9.53m、南壁で9.52mを測る。溝底部にはやはり複数の窪みが存在するが、窪みの形状は幅40cm、深さ7cm前後の畝溝状を呈する。特にセクションA付近に顕著に見られる。窪みの性格については他の溝と同じと考えられる。溝の断面形態は緩やかな「U」字形を基本とするが、他の溝に比べ層部の2段階割りが顕著である。

埋土は基本的にSD002に類似し、最下層層部には角礫もしくは亜角礫状の接合性の強い地山ブロックが、最下層には球状もしくは亜角礫状の微細な地山ブロックとラミナ、グラデーショ状の級化構造を持つ暗灰色細砂が存在する。SD002に比べ砂が多いのは砂がベースとなる地山の違いに起因すると考えられる。ただ、セクションAから南へ4mの範囲に存在する窪みの埋土は角礫もしくは亜角礫状の接合性の強い地山ブロックを多く含み、一旦掘った窪みを埋め戻した痕跡が見られる。これらの層を切り込んで褐色色の細砂(3層)が切り込み、最終的には著しく擾乱を受けブロック状の構造を持つ黒色粘土・暗褐色細砂で埋められる。遺物の出土状況はSD002と同様黒色粘土・暗褐色細砂からの出土が多く、遺物の配置はランダムで接合率も低い。

SD167

調査区東側Ai-N21区～Ae-N25区にかけて位置し、SD059と同一の遺構と考えられる。SD082・084・085、SK154に切られる。溝幅は最も広い部分で620cm、最も狭い部分で540cmを測り、南半の肩部は比較的にきれいな直線、北半は肩部が乱れる。特にAf-N24区付近は小規模な小孔が大量に存在し、やや煩雑な状況を呈するが、この小穴はSD085を切って存在しており、SD167には直接関係の無い遺構と考えられる。溝の規模は深さ72cm前後を測り、底部レベルは北壁で9.68m、セクション付近で9.50m、南壁で9.52mを測る。底部には窪みとともに検出長12.8m、幅1.4m、深さ5～10cmの溝が存在する。いずれも効率的な湧水を狙ったものと考えられる。

埋土は基本的にSD059と同じである。最下層層部には角礫及び亜角礫状の接合性の強い地山ブロックが、最下層には亜角礫状で接合性のほとんどない地山ブロックを含む泥が存在する。SD059最下層に比して含まれる地山ブロックの形状が大きく、量が多いが、ラミナやグラデーショ状の緻化構造を持つことからやはり水成堆積と考えられる。最下層の上には19・20層が存在するが、これらの層は亜角礫状の地山ブロックを含み、全体的にブロック状の構造を有することから貼り土と考えられる。あるいはSD059の掘り直しに対応する時期に、掘り直しと改修が行

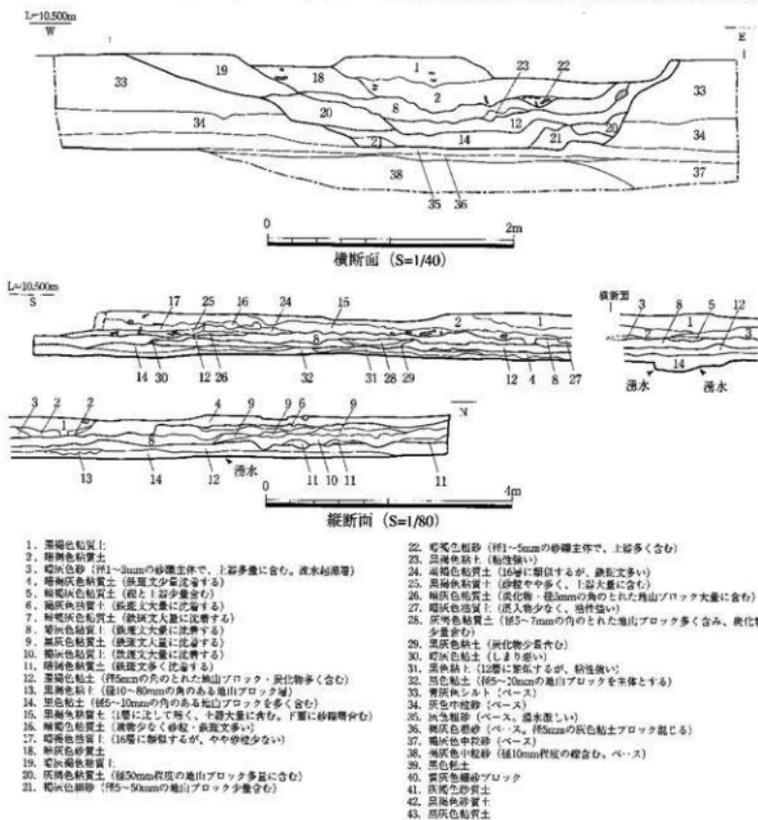


Fig.15 SD167土層断面図

われたとも考えられる。これらを切って12・8層が堆積する。いずれも著しく擾乱を受けるため、堆積構造が見えにくい。部分的に砂礫の薄層が存在し、自然に風化したものと考えられる。これらの上層に1・2層が堆積するが、2層直下に存在する15層と8層の境界には大量の土器が投棄され、また砂礫の薄層が顕著に存在する。8層以上はブロック状の構造を持つ黒め土であるが、15層はラミナや薄層を持つ。土器をまとめて捨てた後若干の時間差を置いて溝が掘られたものと考えられる。なお、この溝には後述する掘SX197が架けられていた。

その他の溝

弥生時代の溝

SD131

調査区東端An-N27区～Aj-N32区にかけて、直線的に位置し、SK168・169を切る。削平が著しく特に北側では深さ数センチしか遺存しない。対応する溝は北区では見られず、また検出した範囲では直線的に存在していることから環濠にならずに南北に走る溝とも考えられる。その場合南区へ延長した位置にSD209があるが、両者の間には水田のある浅い谷状地形が貫入するため、同一の溝と見ることは困難である。谷状地形(水田域)に南北から溝が取り付くと考えた。

溝幅は最も広い部分で370cm、最も狭い部分で230cmを測り、深さ5～30cmを測る。底部のレベルは北端で9.78m、中央付近で9.62cm、南端で9.60mを測る。溝のベースとなっている細砂層自体が非常に湧水の激しい上層のためか、溝底部に窪み等は見られない。礫土は最下層に単角礫状の微細な地山ブロックとラミナ、グラデーショ状の級化構造を持つ暗灰色の粘土が存在し、やはり水成の堆積環境にあったことがわかる。この層の上には黒灰色の細砂が堆積するが、その性格は最下層に類似する。上層には暗褐色の細砂が堆積するが、この層は擾乱が激しい。しかし層中にはラミナや薄層が存在し、自然状態で堆積したと考えられる。

不定形小溝群

SD059・167とSD083の間には不定形な溝状遺構が存在する。この遺構の性格については非常に不定形であること、各溝同士がトンネル状につながっている場合がある事などから樹根であると思われるが、切り株等の痕跡が見られず、多くはSD081に切られていることから本来SD081が存在した部分に防風林状に生えていたものと考えられる。ただ、埋土内から須恵器が出土するものもあり、全てが弥生時代のものとは考えられない。性格については今後類例を検討する中で解釈してゆきたい。

古墳時代の溝

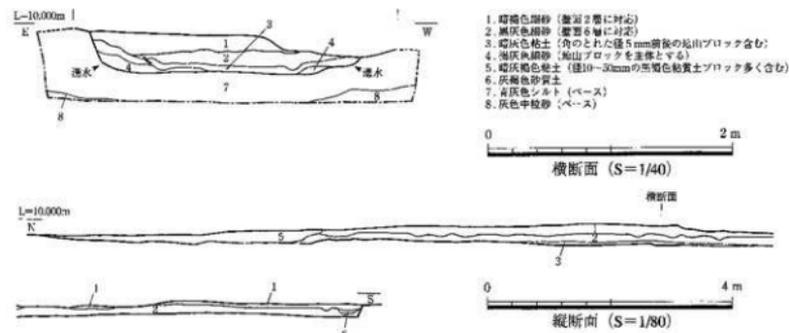


Fig.16 SD131上層断面図

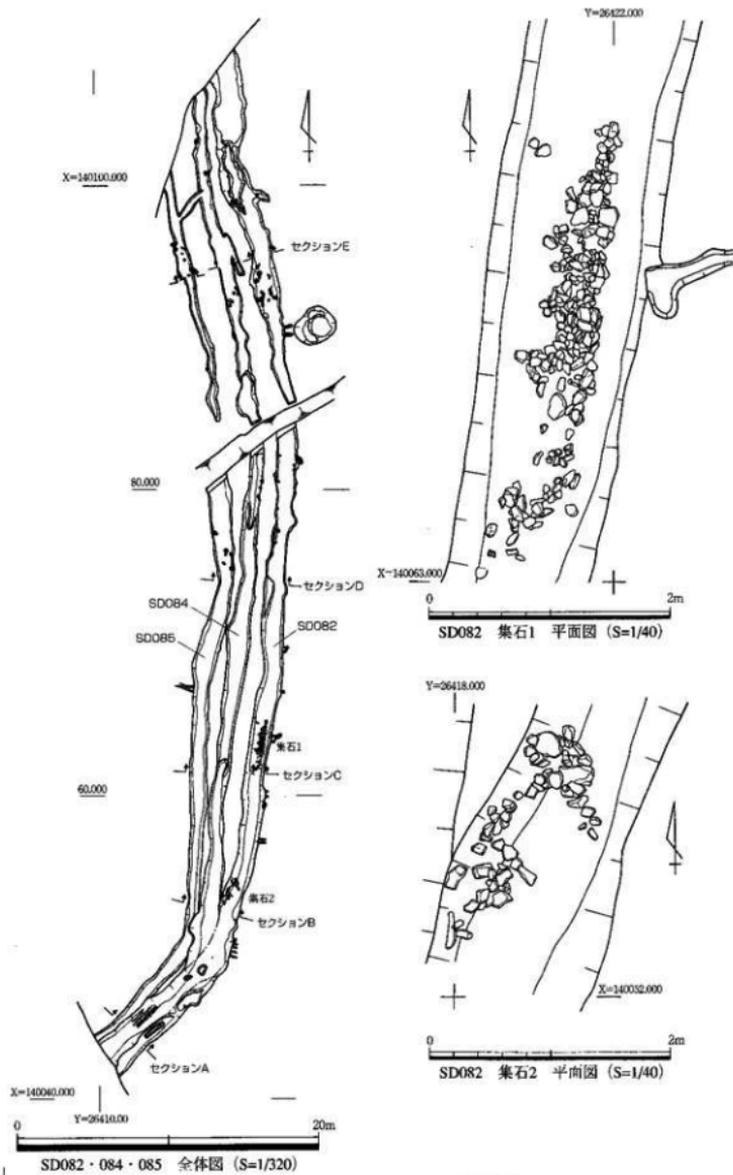


Fig.17 SD082・084・085平面図

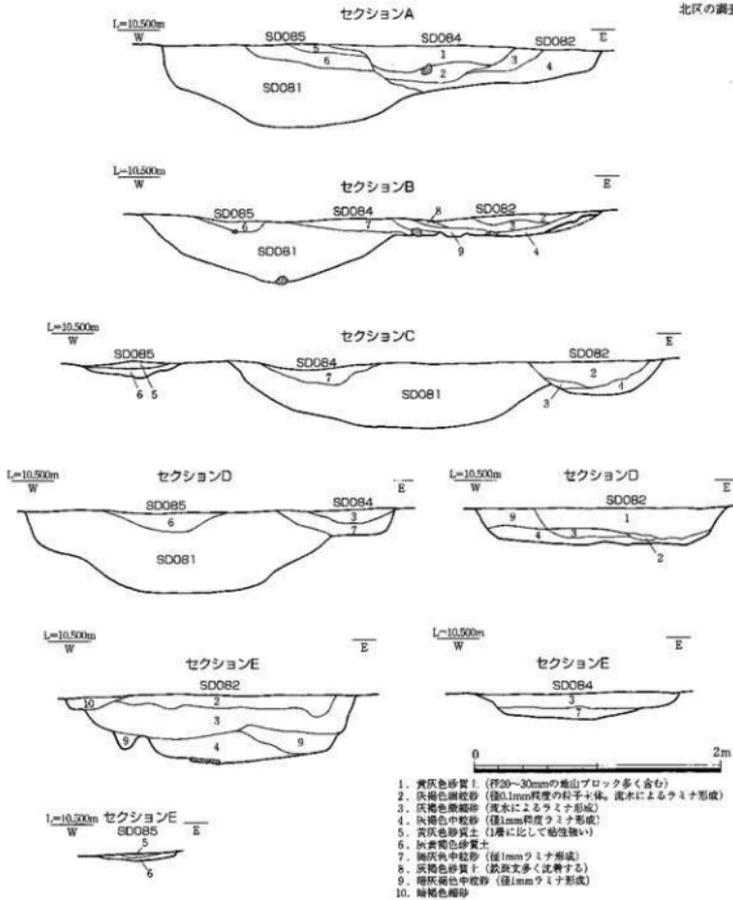


Fig.18 SD082・084・085土層断面図 (S=1/40)

古墳時代の溝はSD082・084・085がある。いずれも弥生時代の環濠SD081の位置を踏襲するように並行して存在している。3本には切り合い関係があり、古い順からSD085→084→082となる。時期についてはいずれの溝からも須恵器が出土していることから、古墳時代以降であると考えられ、SD082・085から出土している須恵器杯の年代から7世紀前半の年代が想定できる。以下各溝について詳述する。

SD082

SD084・085を切って存在する溝。最も広い部分で幅227cm、最も狭い部分で幅105cmを測り、特に北半で肩部が入り組む。底部のレベルはセクションAで10.08m、セクションBで10.02m、セクションCで10.05m、セクションDで9.96m、セクションEで9.49mを測り、堀上の観察からも南から北への流水があったものと考えられる。断面形態はセクションD付近で若干逆台形を呈する他はほぼ緩やかな「U」字状を呈する。堀土は下層がラミナの発達する灰褐色細粒砂、上層は亜角礫状で接合性の弱い地山ブロックの混じる黄灰色の細砂が堆積する。堀没の最終段階で意

図的に埋め戻されたと考えられる。埋土内より7世紀第2/4半期に相当する須恵器が出土した。

SD084

SD085を切り、082に切られる溝。最も広い部分で幅175cm、最も狭い部分で幅87cmを測り、底部に若干の起伏を有する。底部のレベルはセクションAで10.07m、セクションBで10.02m、セクションCで10.08m、セクションDで10.03m、セクションEで9.85mを測り、埋土の観察からも南から北への流水があったものと考えられる。埋土は上層下層ともにラミナを形成する褐色の中粒砂を主体とする。セクションB及びC付近にはそれぞれ集石が存在する。北から集石1、2として概観する。

集石1はセクションCのすぐ北側に存在する。SD084底部に沿って長軸380cm、短軸80cmの範囲に、華人の川原石を配する。石の配置に規則性等は見られない。集石2はセクションBのすぐ北側に存在し、溝西側から溝底にかけて長軸200cm、短軸100cmの範囲に華人の川原石を配する。石には若干大きさにばらつきがあり、その配置に規則性は見られない。

SD085

SD082・084に切られる溝。若くは削平され、中央付近で一旦途切れる。セクションD付近では若干迂行するが、溝幅はそれほど入り組まない。溝幅は最も広い部分で幅157cm、最も狭い部分で幅70cmを測り、断面形態は緩やかな「U」字形を呈する。底部のレベルはセクションAで10.18m、セクションBで10.05m、セクションCで10.14m、セクションDで10.08m、セクションEで10.18mを測り、あまり統一性がない。しかし下層にはラミナを有する灰褐色細粒砂が存在し、流水があったことは疑いない。もともとは規模の大きな溝で、少々起伏はクリアできていたものと考えられる。

古代以降の溝

古墳時代以降の溝は、耕作関連のものがほとんどである。時期は近現代のものまで複数あるが、ここでは近世以前のものについて解説する。

SD141

調査区中央を横切る攪乱に沿って存在する溝。深さ10cm程度を測り、底部は起伏に富むが、大半を現代の用水路に切られ溝幅等は不明である。埋土は黄灰色細砂でラミナ等は見られない。第8次調査SD056の延長上に位置し、里境推定地の道から50m前後の距離を持つことなどから坪内を2分割する溝であると思われる。第8次調査の段階では中世の可能性を考えていたが、今回の調査で埋土内より近世磁器が出土し、近世の遺構であることが判明した。

SD107

調査区西端Ac-N10～Ab-N13にかけて直線的にのびる溝。最も広い部分で溝幅40cmを測る。断面ならかな「U」字形を呈し、埋土にラミナ等は見られない。方位は現在の地割りに合わせて、弥生時代の遺構とも埋土が異なる事、出土遺物もない事などから時期等に関しても不明である。

Fig.19 SD141土層断面図 (S=1/20)

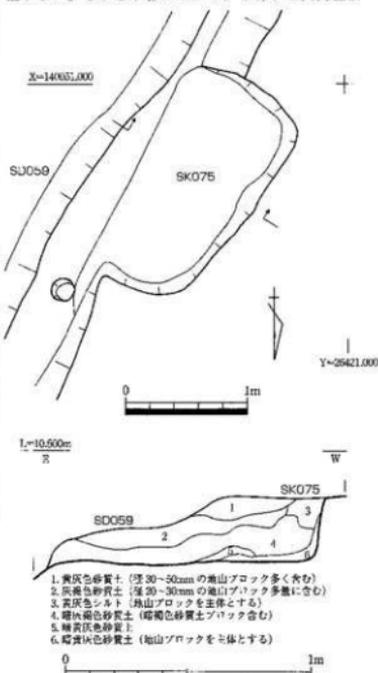
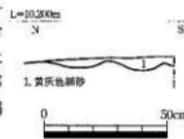


Fig.20 SK075平面図、土層断面図 (平面S=1/40、断面S=1/20)

1. 黄灰色砂質土 (厚30～50mmの黒山ブロック多く含む)
2. 黒山砂質土 (厚30～50mmの黒山ブロック多数に含む)
3. 黄灰色シルト (黒山ブロックを主体とする)
4. 暗褐色細粒砂土 (暗褐色砂質土ブロック含む)
5. 暗黄灰色砂質土
6. 暗黄灰色砂質土 (黒山ブロックを主体とする)

土坑

複数の土坑を検出した。時期・規模・性格それぞればらばらで、関連しあうようなものは見つかっていない。

SK075

調査区南半Ah-N10区に位置する土坑。検出面ではSD059に切られる。長軸200cm、残存短軸100cm、深さ22cmの隅丸長方形を測る。底部の形態はフラットで、壁は直に立ち上がる。理上は各層20～30mm前後の直角礫状の接合性の悪い地山ブロックを含み、人為的に埋められたと考えられる。SD059の項で述べたとおり、SD059の埋土内にはこの溝が半ば埋まった段階で、SK075に起因すると考えられる地山ブロックを大量に含む層がSK075を中心として放射状に存在することから、SD059が半ば埋没した段階でSK075が掘られたものと考えられる。弥生土器の碎片とサヌカイトの小剥片が出土しているのみである。

SK168

調査区東端Am-N29区に位置する土坑。SD131に切られる。検出長軸220cm、短軸125cmの不整形な長楕円を呈し、埋土は暗灰色シルトのブロックを主体的に含む暗灰色粘土である。ブロックは直角礫状で接合性がやや強いもので、人為的に埋められたものと考えられる。底部の形状は起伏に富み、壁の立ち上がりも明瞭でない。あるいは何らか

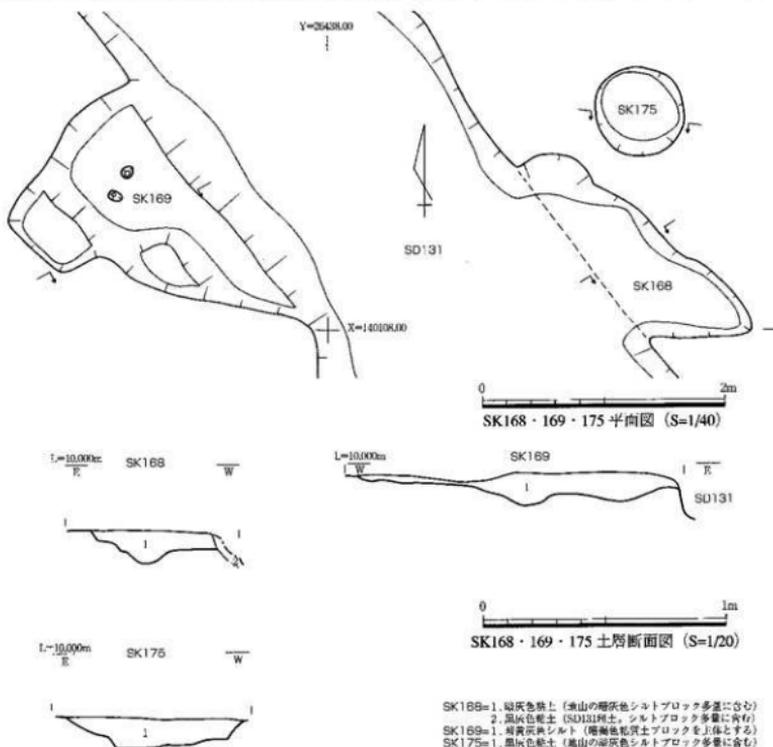


Fig.21 SK168・169・175平面、土層断面図

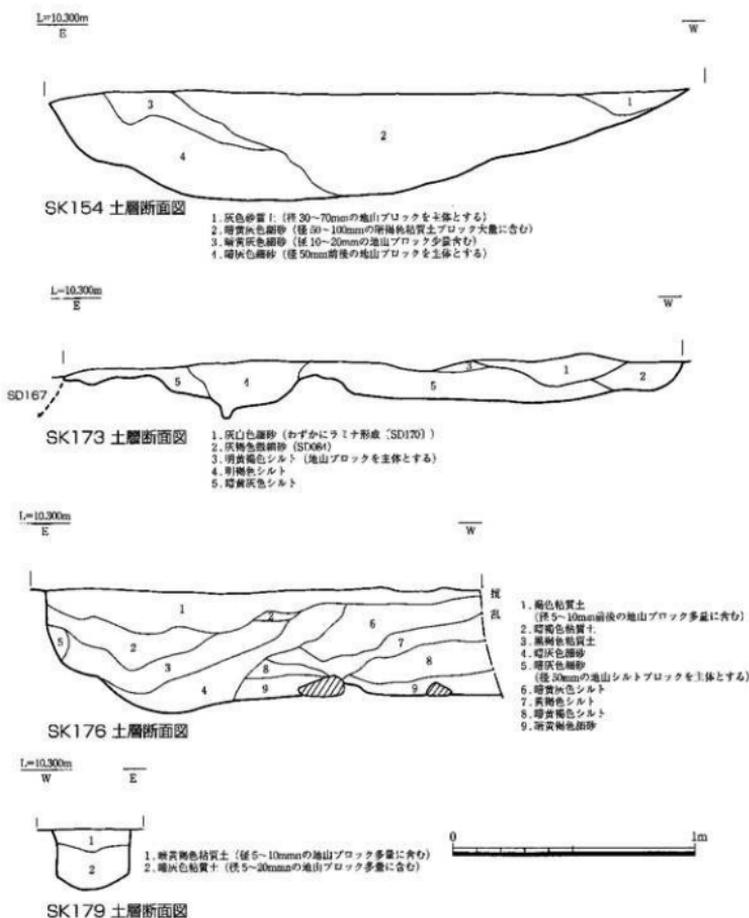


Fig.22 SK154・173・176・179土層断面図 (S=1/20)

の整地に伴うものとも考えられるが遺構面の削平が著しく、断定はできない。出土遺物には弥生土器製の碎片がある。

SK154

調査区北半Ai-N22区に位置する土坑。SD167を切り、長軸290cm、短軸162cm、深さ44cmの円形を対する。埋土は暗黄灰色の細砂を主体とし、下層には径50mm前後の垂角礫状地山ブロックが、上層にはSD167に起因すると考えられる垂角礫状の接合性のやや悪い暗褐色粘質土ブロックをまんべんなく含む。断面形態は緩やかな「U」字状を呈し、東壁側に若干の起伏や段を有する。出土遺物は弥生土器の碎片やサヌカイトのみであるが、埋土そのものは

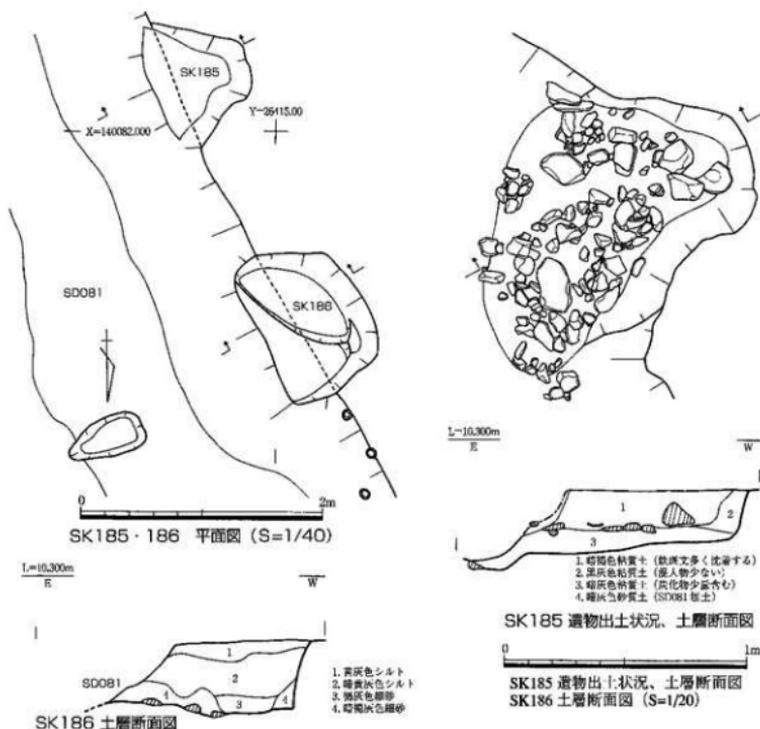


Fig.23 SK185・186平面図、土層断面図

山耕土直下の砂層に類似しており、近世以降の遺構と考えられる。

SK169

調査区東端A1-N29区に位置する土坑。SD131に切られ、SK175・168と一連の遺構と考えられる。長軸230cm、短軸134cmが残存し、平面形態は非常に不整形である。西側肩部と底面には段差や小ピットなどがあり、断面形態も不整形である。土上は暗黄灰色のシルトを主体とし、亜角礫状の暗褐色粘質土ブロックを主体的に含む。出土遺物は弥生土器の碎片のみである。

SK173

調査区中央を横切る現代の用水路沿い、Ah-N20区に位置する土坑。SD084・167に切られる。大半を現代の用水路に切れ形態等は不明瞭であるが、長軸230cm、短軸60cm程度が残存する。平面形態は非常に不整形で、断面も起伏が激しい。周辺に多量に存在する樹根の類とも考えられる。埋土は暗灰色のシルトが主体であるが、擾乱が著しく堆積構造・土壌構造を読み取ることはできなかった。遺物は出土していない。

SK175

調査区東端Am-N29区に位置する土坑。他の遺構と切りあい関係は持たない。径74cm前後のほぼ真円形を呈し、断面形態は中央付近に浅い窪みを持つ緩やかな「U」字状である。深さは13cmを測る。東側及び北西側の壁の立ち上がりはやや急である。埋土は黒灰色粘土を主体とし、歪角礫状の地山ブロックを大量に含む。出土遺物はみられず、SK168・169とは埋土も異なることから、新しい遺構である可能性もある。遺物は出土していない。

SK176

調査区西側Ad-N20区に位置し、調査区を南北に横切る現代の用水路に切られる。SD083と切り合いを有していたと考えられるが、現代の用水路による攪乱のため不明である。残存長軸180cm、短軸225cm、深さ48cmを測り本来長楕円を呈していたものと考えられる。断面形態「U」字形を呈し、壁は比較的直に立ち上がる。底部は大形の石が存在し、やや起伏に富む。埋土は暗褐色の細砂・シルトを主体とし、最上層には5~10mmの歪角礫状の地山ブロックを含む。最上層以下は擾乱を受けるが、ブロック状の構造はなく、開放状態で堆積し、最上層は人為的に埋められたものと考えられる。

SK179

調査区北半Ab-N23区に位置する土坑。長軸190cm、短軸32cm、深さ25cmを測る長楕円を呈する。他の遺構と切り合いを持たない。断面形態は「U」字形を呈し、壁の立ち上がりは急である。埋土は下層に暗灰色粘質土、上層は暗黄褐色粘質土であり、ともに径5~20mmの歪角礫状の地山ブロックを多量に含む。薄層やラミナの存在は認められず、人為的な埋没が行われたと考えられる。

SK185

調査区中央付近Af-N19区付近に位置する土坑。SD081に切られる。残存長軸125cm、短軸100cm、深さ33cmを測り不整形な形態を呈する。断面形態は不明瞭であるが壁の立ち上がりは急で、底部は起伏に富む。埋土は下層に炭化物を少量含む暗灰色粘質土、上層は暗褐色粘質土が堆積する。下層と上層の境界付近には多量の礫が配置される。礫は地山中に含まれる堆積物を起源とし、その配置に規則性はみられない。

SK186

調査区中央付近Af-N20区付近に位置する土坑。SK185と並列して存在し、SD081に切られる。残存長軸135cm、短軸82cm、深さ31cmを測り不整形な円形を有する。断面形態は逆台形を呈し、壁の立ち上がりは急で、底部は起伏に富む。埋土は下層に褐色細砂、上層は黄灰色のシルトが堆積する。擾乱が著しく土壌・堆積構造は見えない。底部には地山中に含まれる礫が少量存在する。

SK225

調査区中央付近Ab-N4区付近に位置し、SD002に切られる土坑。大半がSD002によって失われているため本来の観

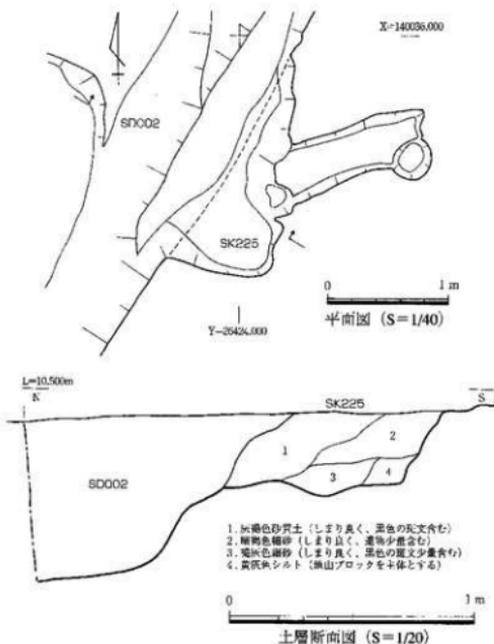


Fig.24 SK225平面図、土層断面図

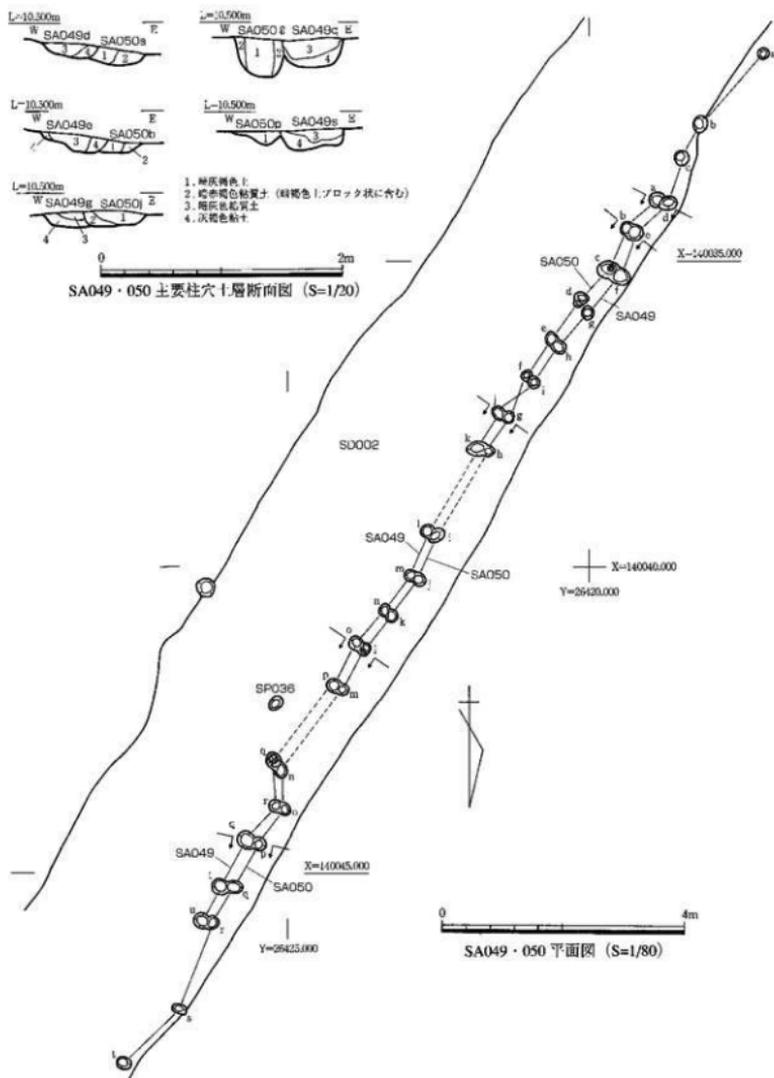


Fig.25 SA049・050平面図、土層断面図

横等は不明であるが、全体的に不整形な形態を呈する。断面形態は逆台形を呈していたものと考えられ、深さ35cmを測る。壁の立ち上がりはやや急で、底部は起伏に富む。埋土は肩部に地山ブロックを多く包含する土があるほかは、褐色細砂、灰褐色細砂で構成され、擾乱が著しく土壌・堆積構造は不明である。

欄列

SD002廃絶後の時期不明の欄列、SD083の内側に巡る2基の欄列を検出した。

SA049・SA050

調査区南端Aj-N9区からAg-N2区にかけて、SD002埋没後にその位置を踏襲して設置される欄列。SA049・050ともにピットの位置もほぼ同じで、切り合い関係から049が先行するが、その後時間を置かず050が設置されたものと考えられる。049はa～uの21基のピットから、050はa～tの20基のピットからなる。049は西端から始まり050rの位置で途切れ、050は049dから始まり東端へ抜けるという風に若干その配置にずれがある。両者共にピット間85cm程度を測るが、049a-b間、050r-s間、050s-t間は140～160cmとやや広くなる。また、049h-i間(050k-l間)、049m-n間(050p-q間)には柱1基分の空閑地が存在する。ピットの規模はいずれも径25cm、深さ5～15cm程度で、柱痕跡から推定される柱の規模は径12cm程度が考えられる。埋土は灰色の砂混じりシルトを主体とし、他の弥生時代遺構の埋土とは明確に異なる。しかし明確にSD002の位置を踏襲すること、埋土内から弥生時代前期の土器のみが出土することなどから、SD002廃絶後それほど間を置かず設置されたものと考えられる。

SA155

調査区北端Ac-N17～Ab-N19にかけて位置する欄列である。SD083の西岸、70cmの空閑地を置いて存在し、a～dの4基のピットからなる。各ピット間の距離はc-d間が150cmであるのに対し、b-c間は50cmを測るなどややばらつきがある。各ピットの規模は径30cm、深さ13～20cm程度を測り、埋土は黒褐色や暗灰色の砂混じりシルトを主体とする。柱痕跡から推定される柱規模は12cm程度が考えられる。

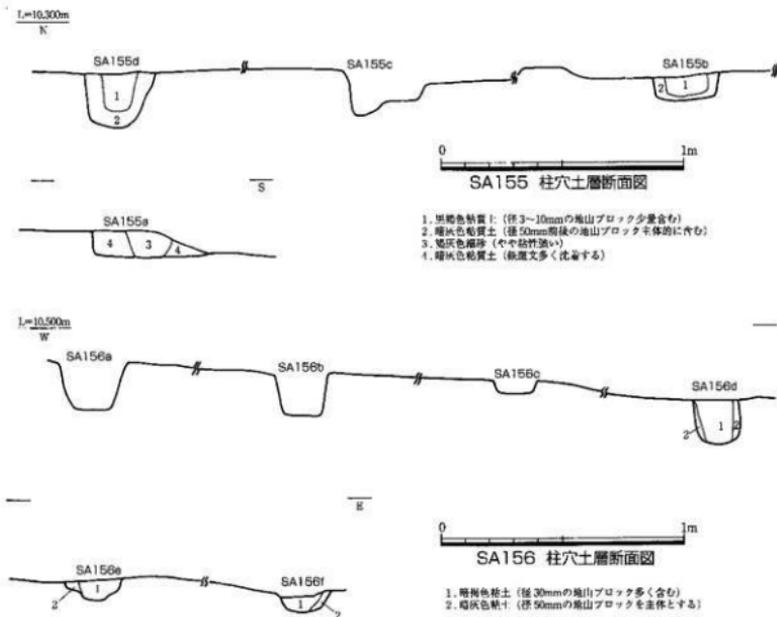


Fig.26 SA155・156柱穴土層断面図 (S=1/20)

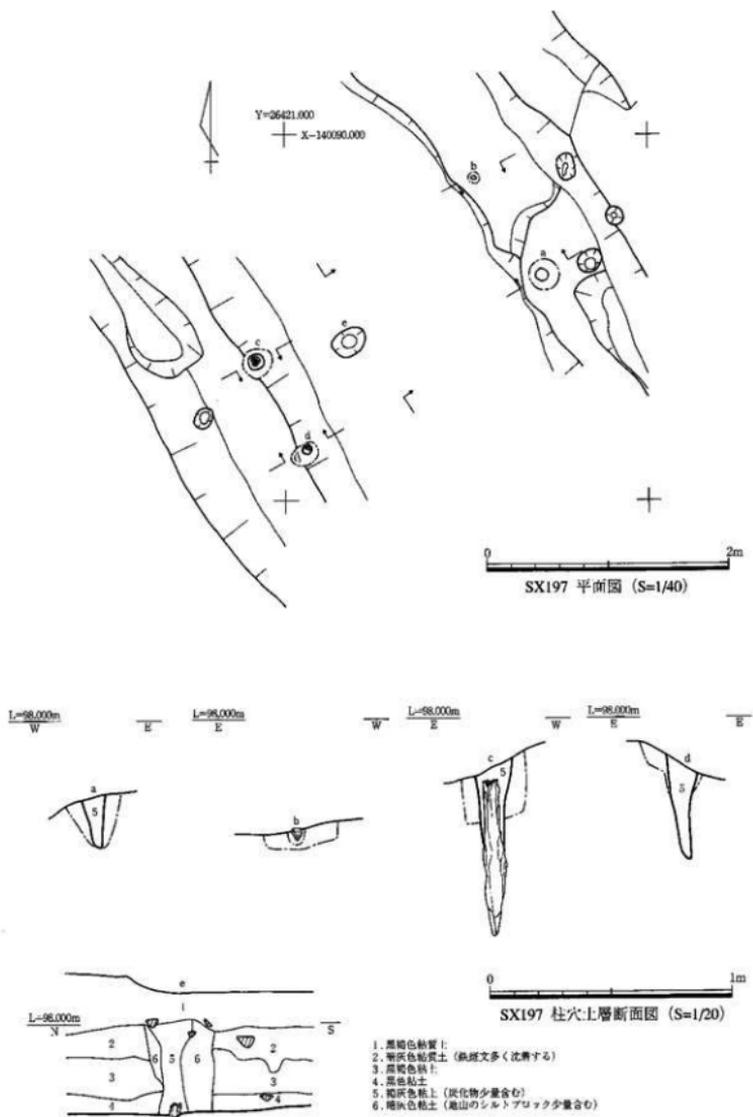


Fig.27 SX197平面図、柱穴上層断面図

SA156

調査区西側Ab-N10～Ad-N13区に位置する横列である。SD083の西岸に150cm程度の空地をもつて位置し、SA115と一連の遺構であると考えられる。SD083からの距離はd付近では200cm程度であるのに対し、a付近では70cm程度と距離にばらつきがある。各ピット間の距離についてもa-b間が230cmであるのに対し、e-f間が330cmとばらつきが大きい。ピットの規模は径30cm、深さ10～20cm程度を測り、埋土は暗褐色や灰褐色の砂混じりシルトを主体とする。柱痕跡から推定される柱規模は12cm程度が考えられる。

その他の遺構

橋

SD167にかけられた1基の橋を検出した。

SX197

調査区北側Ae-N23区、SD167内に位置する遺構。a～cの4基の杭と、中央付近の1基の柱から成る遺構である。その形状と位置関係から橋であると推測した。a-b間95cm、c-d間84cm、a-d間240cm、b-c間245cmを測る。中央の柱穴は位置関係から橋に関連したものと考えているが、具体的な機能が不明で、あるいは別遺構の可能性もある。当初四隅の杭も掘り方を持つと推測したが、掘り方が非常に接合性の強い地山ブロックであること、cで検出した木材の形状が杭状であったことなどから、打ち込み式の杭であり、掘り方に見えたものは打ち込みの際の振動によって生じた亀裂に水と粘土が貫入した結果であると考えられる。おそらく梁材に横板をかけた簡易な構造のものであったと考えられる。最も遺存の良好であったcの杭痕跡からは径11cm前後の杭の存在が考えられる。SD167縦断面での観察からは、柱穴cがSD167崖絶直前に設置されたことが読み取れ、柱穴cが橋に関連すると仮定すると溝埋没直前の窪地にかけられた橋であったと考えられる。

ピット

ピットは主にSD083内側で検出した。大半が弥生時代のものであるが、調査区北側では近現代のものが大半である。ここでは弥生時代のものを中心に解説する。

SP108

調査区西端Ad-N12区に位置するピットである。SA156dに隣接して存在するが、関連性は不明である。径30cm、深さ24cmを測る円形を呈する。埋土は暗褐色・暗灰色の砂混じりシルトを主体とする。掘立柱の柱穴と考えられ、柱痕跡からは径12cm程度の柱材の存在が考えられる。柱痕跡は上部で乱れが生じ、抜き取りが行われたものと考えられる。

SP110

調査区西端Ad-N12区に位置するピットである。SA156とSD083の間に位置し、削平の事も考え合わせると本来SD083と切りあいを有していたものと考えられる。長軸35cm、短軸30cmの楕円形を呈し、深さ8cmを測る。埋土はSP108とほぼ同じで、断面観察からは柱の抜き取りが行われたと考えられる。

SP116

調査区西端Ad-N14区に位置するピットである。SP110と類似する位置関係にあり、本来SD083と切りあいを有していたと考えられる。径40cmの円形を呈し、深さ16cmを測る。埋土はSP110とほぼ同じで、断面観察からは柱の抜き取りが行われたと考えられる。

SP117

調査区西端Ac-N15区に位置するピットである。他のピット等から離れた位置関係にある。径45cm、深さ32cmの

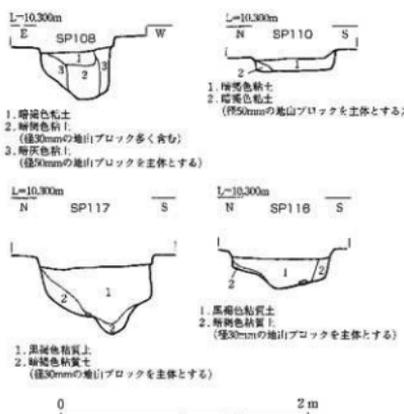


Fig.28 各ピット土層断面図 (S=1/20)

ほぼ円形を呈し、底部はやや起伏を有する。埋土は黒褐色粘土を主体とし、層部には地山ブロックを含む暗褐色土が存在する。柱抜き取り後の柱穴に形状が似ているが、関連する柱穴が見当たらない事などから断定はできない。

不明遺構

SX098

調査区西端A4-N11区に位置する遺構である。径80cm、深さ30cm程度の不整形な遺構である。底部は起伏に富み、埋土の観察からも柱等の痕跡が見られない。風倒木等の痕跡と考えられる。

第2節 南区の調査

溝

溝には弥生時代のものと同近世以降のものがある。遺構数が少ないため一括して報告する。

SD209

調査区南東端Bk-S6区からBk-S4区にかけて直線的に存在する溝である。溝幅は750cm前後、深さ80cm前後を測る。検出域が狭く全容は不明であるが、溝肩は乱れが少なく直線的である。断面形態は底の広い皿型を呈しており、底部には比高差25cm前後の段を持つ。溝底は平坦で、底部幅320cmを測る。埋土最下層は単角礫状の地山ブロックを多量に含む粘土が存在する。当初この層を切って存在する4層は掘り直しの痕跡と考えたが、全面的に地山ブロックを包含すること、他の溝の調査事例等から張り土と考えた。これらの上に灰褐色細砂が堆積する。この層中には多くの微細なラミナやグラデーショナル状の級化構造など水成堆積の痕跡が残る。その後2・3層が堆積するが、この2層は本来同一の層と考えられる。層全体が著しく擾乱を受け、特に下面は起伏が激しい。起伏の形態や埋土内の構造からこの起伏の成因は植物もしくは小型の生物による擾乱と考える。沼地状になって浸漬等が行われなかった結果であろう。最上層には暗灰色の締りのいい粘土が堆積する。埋土内最上層からは須恵器の破片が出土したが、中・下層からは弥生時代前期後半の土器のみが出土している。最上層には耕作痕が多く貫入し、須恵器はこれからの混入と考えられる。なお他の環壕などと比較すると出土遺物の数は少ない。

SD210

調査区南東端Bk-S5区付近に直線的に存在する溝である。SD209を切り、溝幅120～140cm前後、深さ20cm前後を測る。検出域が狭く全容は不明であるが、溝肩は乱れが著しい。断面形態は浅い皿型を呈しており、底部も起伏が著しい。溝底には準大の川原石が集中する部分もあるが規則性は見られない。埋土は黄灰色の細砂を主体とし、ラミナが発達する。埋土は現代耕作土直下の黄灰色の細砂に類似し、近世以降の条里関係の水路と考える。

水田および関連溝

南区北半で水田遺構を検出した。水田はおおよそ2時期あるものと考えられるが、下層水田は上層水田耕土に被覆され本来の畦畔を保っていない。上層水田についても主要な畦畔は検出できたものの、小区画の畦畔は下層水田耕土に残された上層水田畦畔の痕跡（いわゆる擬似畦畔B）で確認できたのみである。調査時の認識不足から西半分を掘削により破壊してしまった。調査員の不明を恥じるとともに深く反省する次第である。

南区の基本層位はFig.29のとおりである。扇状地堆積物と考えられる礫層の上に堆積した、弥生時代遺構面のベースとなっている黄灰色シルトを切り込む形で旧河道がまず存在する。河道の埋土内には起伏に富んだ黒色層が複数存在する（52・57層）。この層は分解があまり進んでいない植物遺体を多く含む層で、これとグライ化した粘土が互層に存在する。52・57層の起伏はブロック状に崩れた土が食い違いうようにずれて起伏を形成しているなど地震に起因する構造を有しており、下層水田耕土にもその擾乱が及んでいることから弥生時代前期の段階で起こった地震に起因する構造であると思われる（註1）。その後存在した浅谷微地形下に39・40・41・43・45・46・87・88・97層が存在する。この層は暗灰褐色の粘土を主体とし、灰色や褐色の5～10mm程度の球状ブロックを少量含む。ラミナはほとんど存在せず、下層に見られるようなグラデーショナル状の級化構造も見られないことから耕作土であると考えられる。これらの上に22・23・37・38・43・47・75・76・77・81・84層が存在する。この層も暗灰褐色の粘土

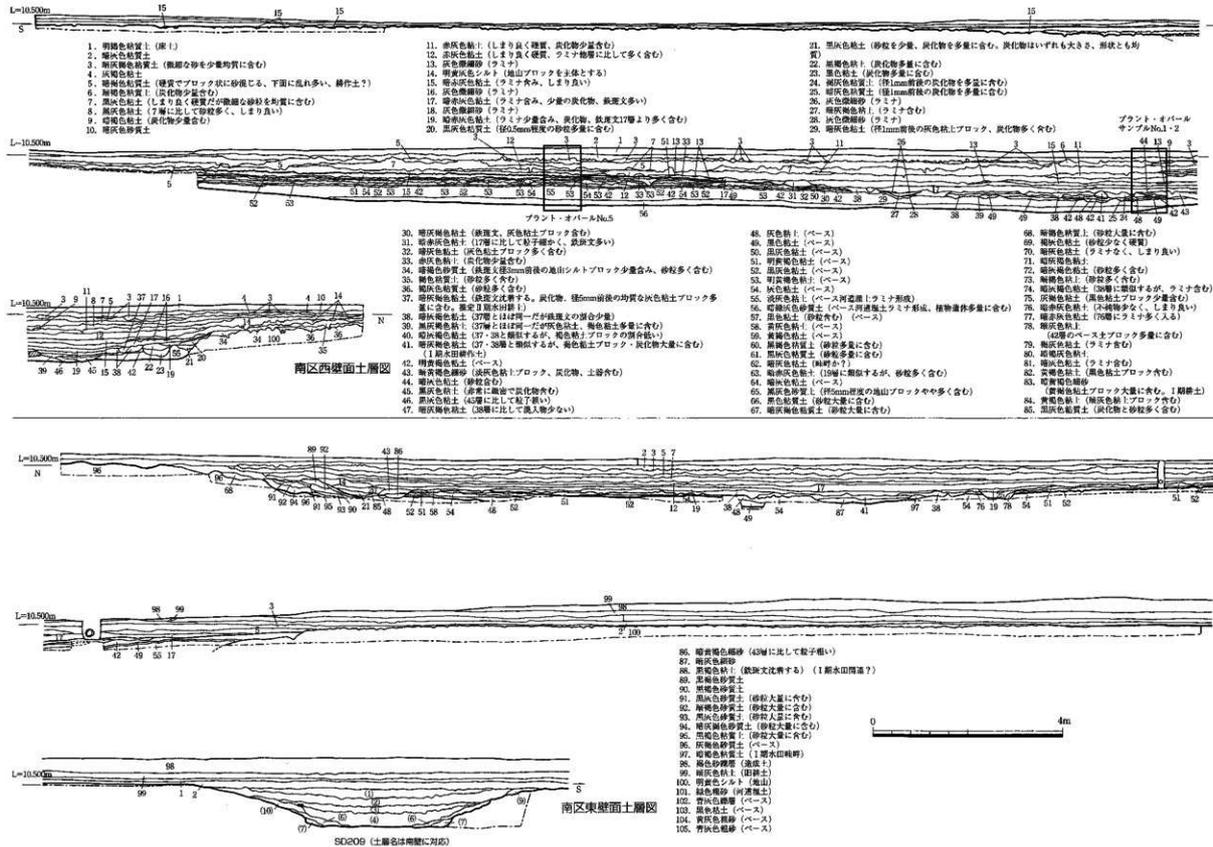


Fig.29 南区壁面土層図 (S=1/80)

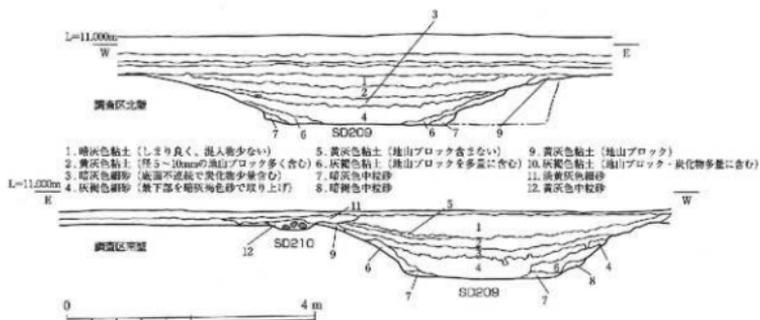


Fig.30 SD209・210土層断面図 (S=1/80)

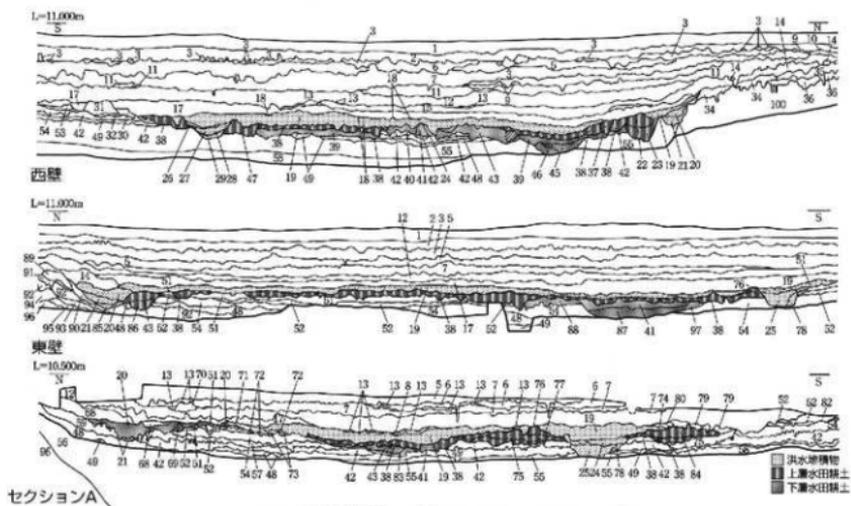


Fig.31 水田土層図 (タテS=1/40, ヨコS=1/80)

を主体とし、灰色や褐色の5~10mm程度の球状ブロックを多量に含む。ブロックの含有量は下層の耕作土に比して少ない。ラミナはほとんど存在せず、下層に見られるようなグラデーション状の級化構造も見られないことからこの層も耕作土であると考えられる。その上に19・20・21・24・25・81・78層が存在する。この層は暗赤灰色の粘土で、微細なラミナを多く含む。若干擾乱を受けるが、洪水堆積物と考えられる。ただ、上層水田との区別が難しく、ブロック土の含有を基準としてこの面で畦畔をおこなったがうまく検出できなかった。その後現代耕作土まで各層が堆積するが、各層ともに砂礫を均質に含み、ラミナ・薄層が見られない、粒団の発達が見られるなど耕作土であることをうかがわせる。

このような堆積環境から推定するとまず河道埋没後の浅谷微地形を元に初期の水田が形成される(下層水田)。ただ、SD204などはこの耕作土直下に存在する可能性があることから、下層水田も継続的に耕作されたものであ

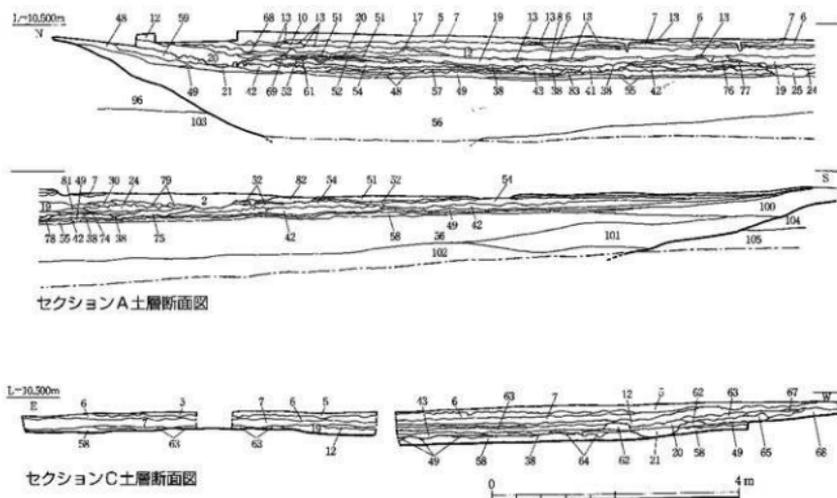


Fig.32 水田断面 (S=1/80 土層名は全て南区西壁土層名に対応する)

た可能性もある。その後この耕土とは粒径・色調の異なる土で上層水田が形成される。この水田の耕土は下層水田の耕土と異なり、むしろ水田を覆う洪水起源の堆積物と類似するため、下層水田と上層水田の間にやはり洪水があり、その堆積物を母材として上層水田が営まれた可能性がある。

各水田の規模であるが、下層水田は本来の形状を保っていないため検討が困難である。しかし、その耕土の分布がほぼ微細な窪地に限定されていること、下層水田と一致する埋土の水路が存在しないこと、水田中央部に埋め戻した水路状の窪みが存在することなどから、田越しの灌漑を行う小規模な水田であったことが伺える。水田耕土は5～10mmの地山ブロックと中粒砂を多く含む泥土であり、耕土の分布はFig.33の網掛けの部分に集中する。

上層の水田には水田南北端に灌漑用水路が存在し、耕土で埋め戻された水路も存在する。畦畔は幅50～70cm程度のものがそれぞれの水路の内側に存在した。この畦畔は被覆層内で検出することができたが、内部の小型の畦畔は下層水田の耕土に残された痕跡で認識した。それぞれ10m²ほどの小区画で非常に不定形である。耕土上面ではないためレベル差等に意味はないが、東から西方向へと傾斜している。

SD204

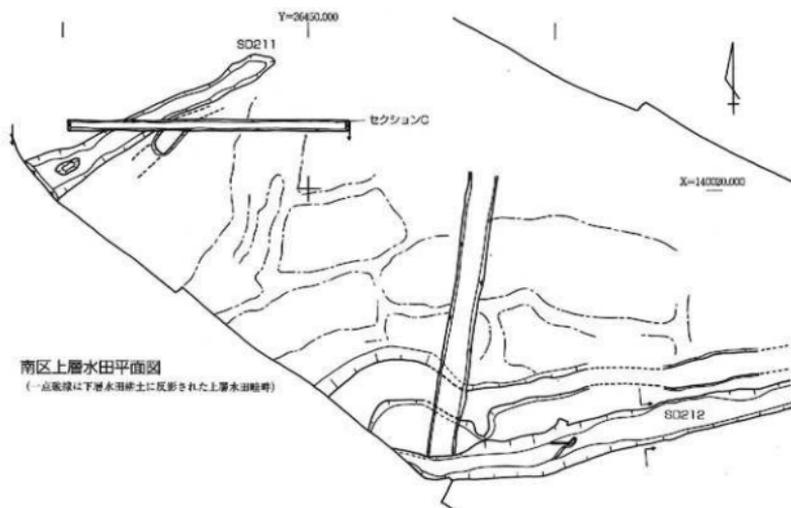
調査区北西部Ap-S4区～Am-S4区に位置する溝。幅10～170cm、深さ3～15cm前後を測る。埋土は黒色の非常に強い粘土である。SD212の延長上に位置するが、埋土が大きく異なる。肩部が複雑に入り組み、底部も起伏が著しい。埋土内から弥生時代前期の土器が出土した。

SD205

調査区北西部Ao・Ap-S3・4区に位置する溝。検出長460cm、幅20～40cm、深さ5cm前後を測る。埋土は黒色の非常に粘りの強い粘土である。SD218の延長上に位置し、本来同じ溝であった可能性もあるが、埋土が大きく異なる。SD218の前身の溝であった可能性が大きい。埋土内から弥生時代前期の土器が出土した。

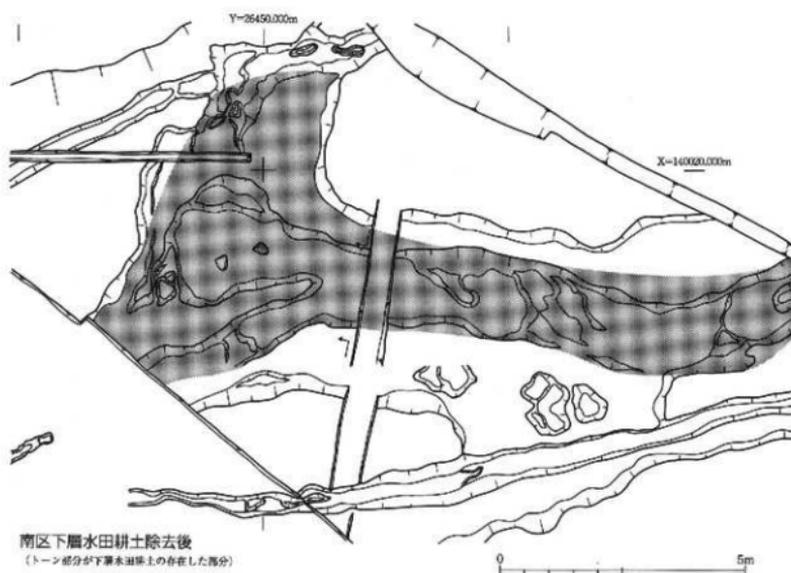
SD211

水田域北側Aq-S1区～Ao-S2区に位置する溝。幅35～90cm、深さ25cm前後を測る。断面やや起伏のある「U」字形を呈し、埋土はラミナを含む黒灰色粘土を主体とする。底部レベルは5m間で3cm程度の緩やかな勾配をもって西へと傾斜する。上層水田に伴う水路であると考えられるが、具体的な水利施設はみられない。



南区上層水田平面図

(一点範線以下層水田耕土に反映された上層水田輪郭)



南区下層水田耕土除去後

(トーン部分が下層水田耕土の存在した部分)

Fig.33 水田面及び耕土除去後平面図 (S=1/100)

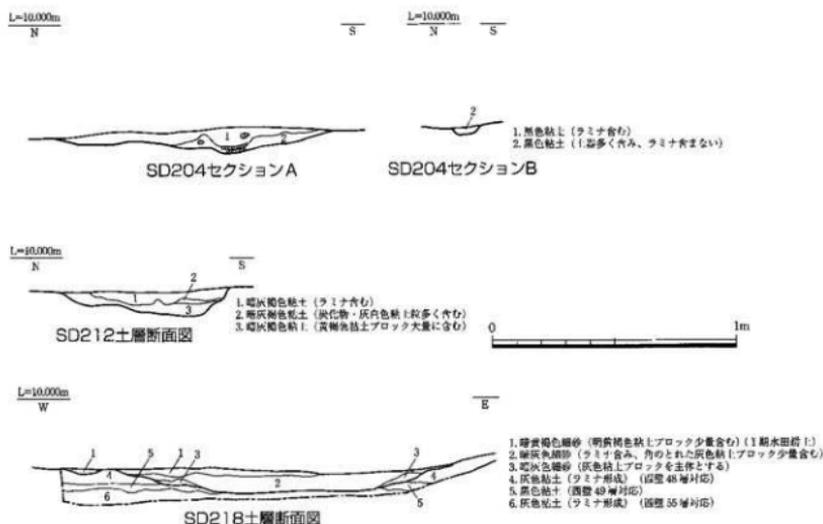


Fig.34 水田間連溝土層断面図 (S=1/20)

SD212

水田城南側Aw-S3区～Aq-S4区に位置する溝。幅70～110cm、深さ25cm前後を測る。断面やや起伏のある「U」字形を呈し、埋土はラミナを含む黒灰色粘土を主体とする。底部レベルは東壁西壁間で20cmの差をもって西へと傾斜する。上層水田に伴う水路であると考えられる。セクション西側に3cm程度の段差を有し、肩が入り込む部分が存在する。おそらく水Liと考えられるが畦畔の切れ目や枕・堰などは確認できず詳細は不明である。

SD218

水田城中央部Aw-S3区～Aq-S4区に位置する溝。幅140～160cm、深さ10m前後を測る。断面やや起伏のある皿形を呈し、埋土はラミナを含む暗灰色粘土を主体とするが、下層水田耕土と同一の球状地山ブロックを多く含む。溝というより浅谷地形の一部で底部レベルは起伏が著しく一定ではない。水田城中央付近で北側から流れ込む窪みと合流するが、この北側の窪みからは砂が流入する。

墓

調査区北端において2基の墓を検出した。ともに長軸を東西に設定し、並列して存在する。

S T 203

調査区北端Am-S2区で検出した墓。断面の観察から木棺墓と考えられる。長軸172cm、短軸75cm、深さ17cmを測る。断面箱形を呈し、壁の立ち上がりは急である。壁付近には腐板の痕跡が見られ、断面でも確認できる。埋土は2・5・4・6層内に地山ブロックが多く含まれ、それぞれ裏込め崩壊土、棺上に被せられた土と裏込め土と考えられる。5層には薄層が存在し、棺崩壊後徐々に被覆土が崩落したものと考えられる。断面の観察からは埋葬後あまり時期を隔てずには棺が崩壊し、南北腐板はその後しばらくしてから腐朽したものと考えられる。埋土内より石鉄が1点出土しているが、これは4層内より出土しており、棺上もしくは棺土の被覆土に包含されていたものと考えられる。底部に多数の小ピットが存在するが、これはこの付近に集中して見られる樹根痕と考えられる。

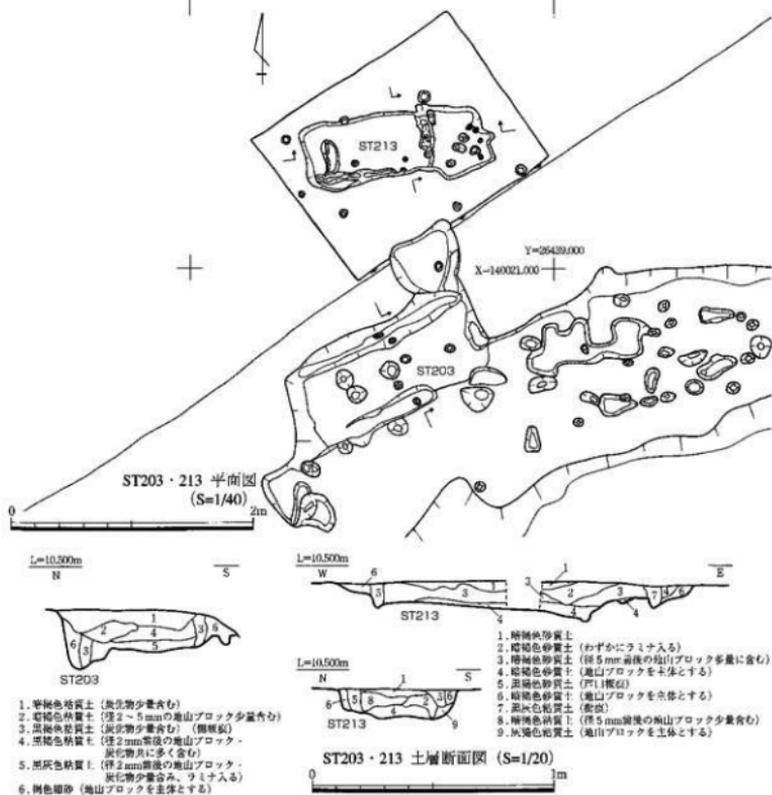


Fig.35 ST203・213平面図、土層断面図

ST213

調査区北端拡張部に位置する墓。断面の観察から木棺墓と考えられる。長軸150cm、短軸48cm、深さ13cmを測る。断面箱形を呈し、壁の立ち上がりは急である。鞆付近には側板の痕跡が見られ、断面でも確認できる。埋土は4・6・9層内に地山ブロックが大量に含まれ、裏込めおよび墓坑内の彰地土と考えられる。3層には地山ブロックを多く含む、棺上の被覆土と考えられる。1・2層には薄層が存在し、棺崩壊後徐々に被覆土が崩落したものと考えられるが、北側側板付近には2層上面に地山ブロックを多く含む8層が堆積しており、天井板の崩壊にも時間差があったと考えられる。また、側板の痕跡は1層を切っており、側板は比較的長く腐朽しなかったと考えられる。

小ピット群

調査区全域で大量の小ピット群を検出した。いずれも非常に不定形で、それぞれがつながったり切り合ったり非常に複雑な形状を呈している。埋土は一様ではないがおおよそ現代耕土直下の黄灰色砂の直下に存在する黒灰色土

と灰色細砂を主体としている。埋土内より弥生土器、須恵器が出土しているが詳細な年代を決定することは困難である。調査段階では耕作痕と考えていたが、埋土内にひどく攪拌されたラミナ状の構造や、亀裂状に地上上へともぐり込む部分があり、あるいは地災に伴う変形構造の可能性がある。

註1
12次調査における東大阪市教育委員会松田照一郎氏の御教示による。

第3節 第10次調査検出遺構

第1項 調査の経緯

第9次調査南区調査中の2001年11月28日、調査地内側の旧水田境界部付近において、暗渠水路の工事が行われた。旧水田水路や現状道路の直下であったこともあり、調査の対象となっていなかったが、機械掘削の最終段階で遺構が残存していたことが判明したため、急遽工事を中断し、調査を行った。調査期間は11月28日のみである。

第2項 調査の成果 (Fig.36)

他調査区との関係は (Fig.2) に示したとおりである。

遺構の大半が機械掘削により削平されており、僅かに底部付近が残存した2条の溝と、断面の観察から復元できた2条の溝を確認した。非常に限定された調査であり、遺構の復元には推定によった部分が多いが、以下の点が明らかになった。

- ・第9次調査SD002の延長と考えられる推定溝1は直線的に南西方向へ延びる事。
- ・第9次調査SD059の延長についても、その延長と考えられる推定溝3が第6次調査地点方向へ延びていると考えられる。
- ・これまでに確認されていない南東方向から北西方向へ抜ける推定溝2が存在する事。
- ・現状道路直下に東西方向へ抜ける推定溝4が存在するが、これは条里の溝である可能性が大きい。

出土遺物については弥生土器の底部が数点出土したのみである。

第3項 調査のまとめ

今回の調査はあまりに限定されたものであったため、溝の方向や時期を決定付けることはできなかった。しかし第6次調査や2003年度の第12次調査の成果を合わせて考えてゆくことにより、今後中の池遺跡の実態が明確になってゆくことと思われる。

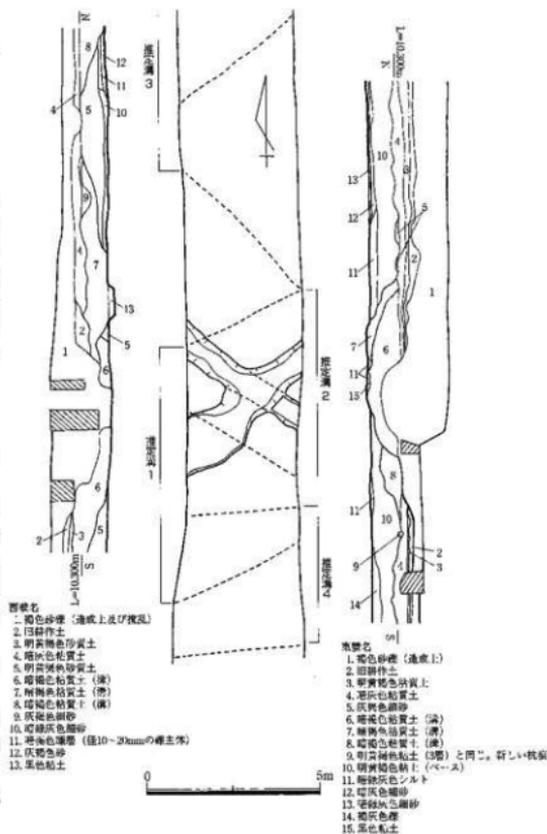


Fig.36 第10次調査全体図、断面上層図 (S=1/140)

第6章 出土遺物

第1節 北区の調査

第1項 表土および包含層出土の遺物

表土出土土器・土製品 (Fig.37)

弥生土器壺 (1)、染付け碗 (2)、土鍾 (3) が出土した。

弥生土器壺

復元口径17.7cm、残存高7.4cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部に面を持つ。内外面密な横方向のヘラミガキを施す。胎土は暗褐色を呈し、砂粒は少ない。

染付け碗

復元口径9.8cm、器高5.2cm、復元高台形3.8cmを測る。外面二重網目、内面一重網目、見込み部に菊花の文様をそれぞれ描く。見込み付近の器壁は厚く、畳付は露胎である。18世紀中頃の波佐見地域で生産されたものと考えられる。

土鍾

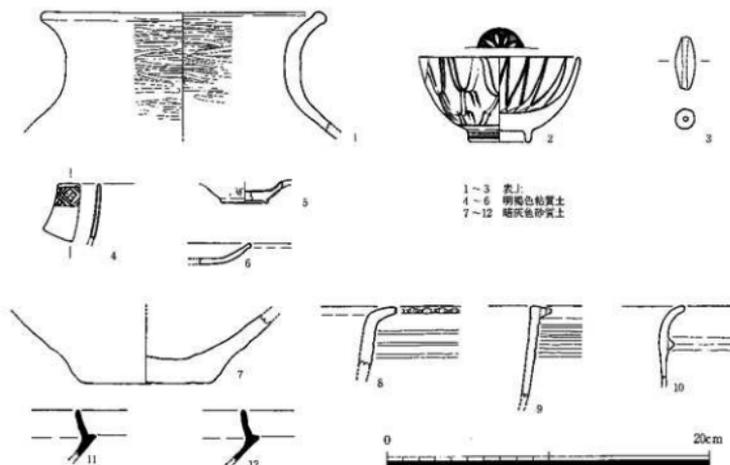
長さ3.2cm、幅1.2cm、重量4.2gを測り、径2.5mmの円孔が貫通する。胎土は橙褐色を呈し非常に精良である。

明褐色粘質土出土土器・陶磁器 (Fig.37)

染付け碗 (4)、青磁小坏 (5)、陶器皿 (6) が出土した。

染付け碗

残存高3.4cmを測り、器壁は薄い。比較的直に立ち上がる体部を有し、口縁部内面に四方装姿模様を描く。外面にも何らかの文様が見られるが欠損部が大きく不明である。18世紀中頃の肥前産であると考えられる。



1~3 表土
4~6 明褐色粘質土
7~12 暗褐色砂質土

Fig.37 表土・包含層出土土器・陶磁器・土製品 (S=1/3)

青磁小坏

復元底径2.8cm、残存高1.4cmを測る。やや反り気味の体部を有し、陽刻の蓮弁文を施す。18世紀代の肥前産のものと考えられる。

陶器皿

器高1.3cmを測り、内外面ヨコナデ調整の後回転ヘラケズリを行う。硬質の精良な胎土である。時期等は不明である。

暗灰色砂質土出土土器 (Fig.37)

弥生土器壺 (7)、弥生土器甕 (8~10)、須恵器坏身 (11・12) が出土した。

弥生土器壺

復元底径7.9cm、残存高4.3cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は不明瞭である。劣化のため調整等は不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

弥生土器甕

8は、残存高4.8cmを測る如意状口縁のもので、口縁部は比較的長く伸びる。器厚は8mm前後とやや厚手で、口唇部には幅広のキザミを持つ。口縁直下には二条の沈線。表面劣化のため調整等不明である。9は残存高5.5cmを測る逆「L」字状口縁のものであるが、口縁部が剥離し、詳細は不明である。口縁貼り付け前の削付線が見られる。口縁部直下には6条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を施す。10は、残存高4.4cmを測る如意状口縁のもので、口縁部は緩やかに湾曲する。口唇部のキザミや口縁部直下の沈線は見られないが、口縁直下には1条の貼り付け突帯を施す。

須恵器坏身

11は残存高2.8cmを測り、比較的長く引き出す口縁部を有す。内外面ヨコナデ調整を施し、胎土は砂粒少なく精良である。12は残存高3.1cmを測り、比較的長く引き出す口縁部を有す。内外面ヨコナデ調整を施し、胎土は砂粒少なく精良である。MT15並行期のもと思われる。

第2項 環濠出土の遺物

SD002出土遺物

土器 (Fig.38~40)

黒色粘土出土土器 (Fig.38)

壺 (1~6)、甕 (7~11) が出土した。

壺

1は復元口径19.5cm、残存高5.8cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部に面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には5条のヘラ描き沈線を施す。2は復元口径14.6cm、残存高3.8cmを測る。口縁部は湾曲しながら広く開き、端部は丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には最低1条のヘラ描き沈線を施す。3は口縁部の破片である。残存高2.7cmを測る。広く開き端部に面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、内面には3条の貼り付け突帯を施す。4は底径7.4cm、残存高6.5cmを測り、緩やかに開く体部を有する。表面劣化が著しく調整等は不明である。5は底径9.2cm、残存高8.1cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内底面には指頭圧痕を残し、内外面ヘラミガキを行う。6は底径10.2cm、残存高5.1cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭で、外底面ドーナツ状にやや窪む。内底面には指頭圧痕を残すが表面の劣化が著しく、調整等は不明である。胎土はいずれも径5mm程度の長石粒を多量に含み橙褐色を呈するものが大半であるが、4は砂粒の径が3mm程度とやや小さく、赤色酸化土粒を多く含み淡褐色を呈する。

甕

7は残存高4.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする三角形の口縁を有する。キザミについては劣化のため不明であるが、沈線は施さない。外面ナデ調整を行うが、内面は劣化のため調整等不明である。8は残存高9.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする小さな三角形の口縁を有する。キザミや沈線は施さない。劣化のため調整等は不明である。9は残存高4.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上

面を水平にする三角形の貼り付けI線を有する。キザミについては劣化のため不明である。沈線は5条程度が推測できるが劣化が著しく正確な本数を確定できない。劣化のため調整等は不明である。10は小型の甕の底部である。底径3.9cm、残存高4.5cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。劣化のため調整等は不明である。11は底径6.6cm、残存高11.5cmを測る。底部付近は直立気味に立ち上がった後、緩やかに湾曲する体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。劣化のため調整等は不明である。胎土はいずれも径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、8・10・11はやや粒子が小さく、9は淡褐色を、10は暗褐色を呈する。

黒褐色細砂出土土器・土製品 (Fig.38・39)

壺 (12~21)、甕 (22~29)、土製門板 (30・31) が出土した。

壺

12は復元口径16.6cm、残存高4.0cmを測る。I線部は湾曲して開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には削り出し突帯を有する。13は復元口径17.0cm、残存高7.0cmを測る。I線部は比較的急に開き、端部に面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には5条のヘラ描き沈線を施すが、沈線の周囲を掻き取る事により削り出し突帯状に成形する。黒色粘土出土遺物と同一個体の可能性もある。14は底径7.6cm、残存高4.7cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は不明瞭である。内底面にナデの痕跡を残すが表面の劣化が著しく、その他の調整等は不明である。15は復元底径7.3cm、残存高7.0cmを測り、広く開いて胴部最大径が下半にくる体部を有する。底部の稜は明瞭である。胎土内の長石粒の入り方には粗密があり、底部付近は特に密である。成形時の粘土中に起四すると考えられる。内底面には指頭圧痕を残し、内底面及び外面に僅かにヘラミガキの痕跡が残る。16は口縁部直下から体部中央付近までが残存する。復元口径は10.5cmを測る。体部の屈曲は強くソパン玉状を呈すると考えられる。突帯は貼り付けで、胴部中央付近の突帯剥離部分には貼り付け前の割付線の痕跡が残る。胎土内に雲母を少量含む。17は復元底径7.6cm、残存高5.8cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は不明瞭で、外底面はやや窪む。表面の劣化が著しく、調整等は不明である。18は底径9.1cm、残存高7.3cmを測り、緩やかに湾曲して開く体部を有する。底部の稜は明瞭で、外底面はやや上げ底になる。劣化が著しく、調整等は不明である。19は口縁部のみ破片である。残存高4.1cmを測る。水平近くまで広く広がり、端部に面を持つ。端部には1条のヘラ描き沈線とキザミを有したと考えられるが劣化のため不明瞭である。内面には最低1条の貼り付け突帯が存在する。突帯が剥離した部分には突帯貼り付け時の割付線の痕跡が残る。劣化のため調整等は不明瞭であるが、内面にはヘラミガキの痕跡が残る。20は復元底径5.9cm、残存高6.0cmを測り、球形の体部を有する。内底面には指頭圧痕を残し、内面下半及び外面にはヘラミガキが残る。21は口縁部のみ破片である。残存高5.3cmを測る。やや直立気味に湾曲し、端部を丸く納める口縁部を持つ。頸部には3条のヘラ描き沈線を有する。劣化のため内面調整は不明瞭であるが、外面にはヘラミガキの痕跡が残る。胎土はいずれも径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、12・14・17・19・21はやや粒子が小さく、17・19は含有量も少ない。9・16は淡褐色を、10・15・20は暗褐色を呈する。12は赤色酸化土粒を多く含む。

甕

22は復元口径21.1cm、残存高9.1cmを測る如意状I線のもので、短く強く外反する口縁部とやや強く張る体部を有する。キザミ及び沈線を持たない。表面劣化のため調整等不明である。23は復元口径19.6cm、残存高9.5cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部とやや直線的な体部を有する。I唇部にはキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を持つ。表面劣化のため調整等不明である。24は復元口径36.5cm、残存高20.0cmを測り、「く」字状に外反するI線部とやや強く張る体部を有する。キザミは持たないが口縁部直下に5条のヘラ描き沈線を有す。内面劣化のため調整不明だが、外面には板状工具によるナデの痕跡が見られる。25は復元底径6.2cm、残存高9.0cmを測る。直立気味に立ち上がる体部を有す。劣化のため外面調整は不明であるが、内面には指頭圧痕及びナデの痕跡が残る。26は底径9.6cm、残存高8.6cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は不明瞭である。底部には径1.4cmの焼成後穿孔が見られる。劣化のため調整等は不明である。27は残存高4.8cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする肉厚の貼り付けI線を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。内面は劣化のため調整等不明であるが、外面にはナデの痕跡を有する。28は残存

高5.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする肉厚の口縁を有する。口唇部にはキザミを持つが、沈線は持たない。内面調整については劣化のため不明であるが、外面はハケ調整を施す。29は残存高4.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部は短く成形する。劣化のためキザミの有無は不明であるが、沈線は持たない。内外面調整についても劣化のため不明である。胎土はいずれも径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、22・25・26・27・28はやや粒子が小さく、22は含有量が少ない。23は淡褐色を、27は暗褐色を、29は暗赤褐色を呈する。

土製円板

30は直径4.4cm、厚さ0.8cm、重量15.7gを測る。土器の転用品で、周囲を打ち欠いて成形する。表面劣化のため調整等は不明であるが、打ち欠き後研磨の痕跡はみられない。31は直径4.4cm、厚さ1.6cm、重量31.6gを測り、専用品として焼成されたものと考えられ、中央からややずれた位置に棒状工具による焼成前片面穿孔が行われる。表面劣化が著しいが、全面ナデ調整を施している。

黒灰色細砂出土土器・土製品 (Fig.39・40)

壺 (32・34~38)、鉢 (33・43)、壺 (39~42・44)、土製円板 (45・46) が出土した。

壺

32は推定口径6.5cm、残存高11.1cm、胴部最大径9.5cm、底径4.9cmを測る小型の壺である。口縁部はやや短く、胴部最大径は下半に位置する。胴部2箇所穿孔を穿つが、いずれも貫通せず器壁途中で止まる。表面の劣化が著しいが、外面全域に縦方向のヘラミガキの痕跡が残る。34は壺肩部の破片である。残存高4.3cmを測る。2条のヘラ描き沈線に区画された間に刺突文を配し、その上に連文を配する。35は底径9.2cm、残存高8.1cmを測り、緩やかに湾曲して開く体部を有する。底部の稜は明瞭で、外底面には植物圧痕が残る。劣化が著しいが、外面にはヘラミガキが残る。36は底径7.2cm、残存高11.0cm、胴部最大径18.3cmを測り、胴部中央がソロバン玉形に張る体部を有する。胴部中央には1条の突帯を貼り付ける。突帯が剥離した部分には突帯貼り付け前の割付線が存在する。頸部より上位は打ち欠いたように欠損し、体部には被熱痕がみられる。内底面には頸頭直痕を残し、肩部内面には掌圧板を有する。外面には横方向のヘラミガキが残る。37は底径8.7cm、残存高4.8cmを測り直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。劣化が著しく調整等は不明である。38は底径9.6cm、残存高7.3cmを測り直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。劣化が著しく内面調整は不明であるが、外面にはヘラミガキの痕跡が残る。胎土はいずれも径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、34・36はやや粒子が小さい。34は灰褐色を、36・38は暗褐色を呈する。

鉢

33は口縁部の破片である。残存高2.9cmを測る。比較的直立気味に開き、端部を丸く納める。口唇部には1条のヘラ描き沈線が巡る。胎土は径2mm程度の長石粒を少量含み橙褐色を呈する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。43は残存高4.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部を短く引き出す断面三角形の貼り付け口縁を有する。キザミ、沈線等は持たない。劣化のため調整等は不明である。

壺

39は底径6.5cm、残存高5.5cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。底部はやや上げ底状を呈する。内外面板状工具によるナデ調整を施す。40は底径7.4cm、残存高4.6cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。劣化のため内面調整は不明であるが外面板状工具によるナデ調整を施す。41は底径7.2cm、残存高4.5cmを測る。やや湾曲して開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は不明瞭である。底部には径1.5cmの焼成後穿孔が見られる。劣化のため調整等は不明である。42は残存高3.5cmを測る如意状口縁を有し、口唇部にはキザミを持つ。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有する。内面ナデ調整、外面ハケ調整を施す。44は残存高6.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする三角形の口縁を有すると思われる。口唇部を欠損しキザミについては不明である。口縁部直下には7条のヘラ描き沈線が存在する。劣化のため調整等は不明である。胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、39・40・41・42・43はやや粒子が小さく、40・42は褐色を、43は淡褐色を呈する。

土製円板

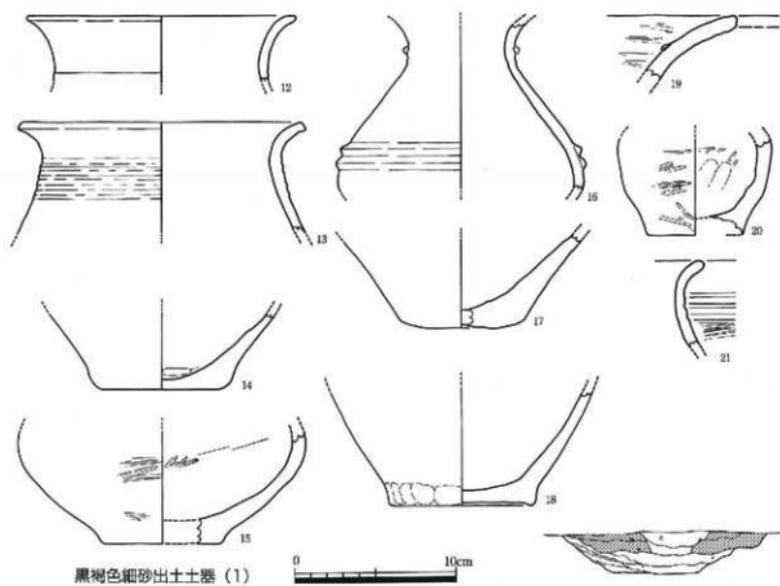
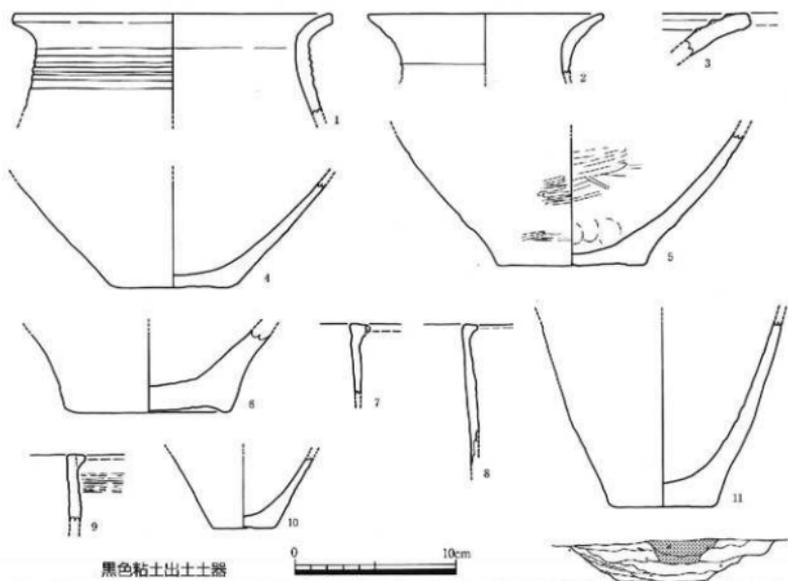
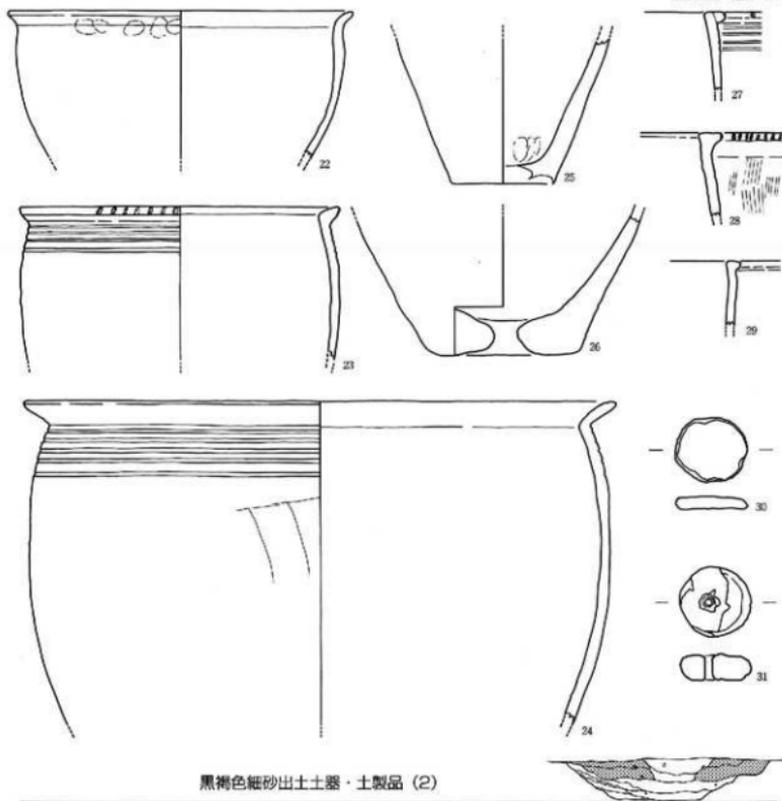
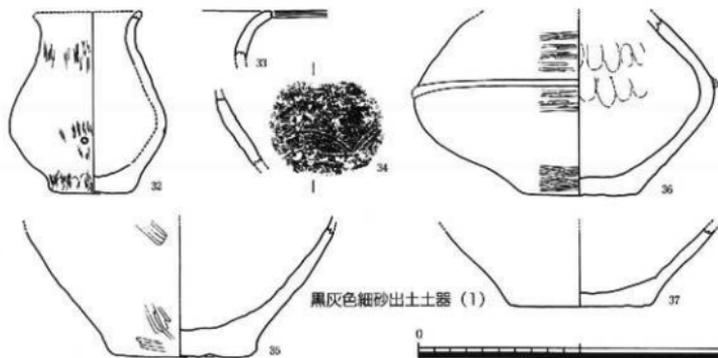


Fig.38 SD002出土土器 (1) (S=1/3)



黒褐色細砂出土土器・土製品 (2)



黒灰色細砂出土土器 (1)

Fig.39 SD002出土土器・土製品 (2) (S=1/3)

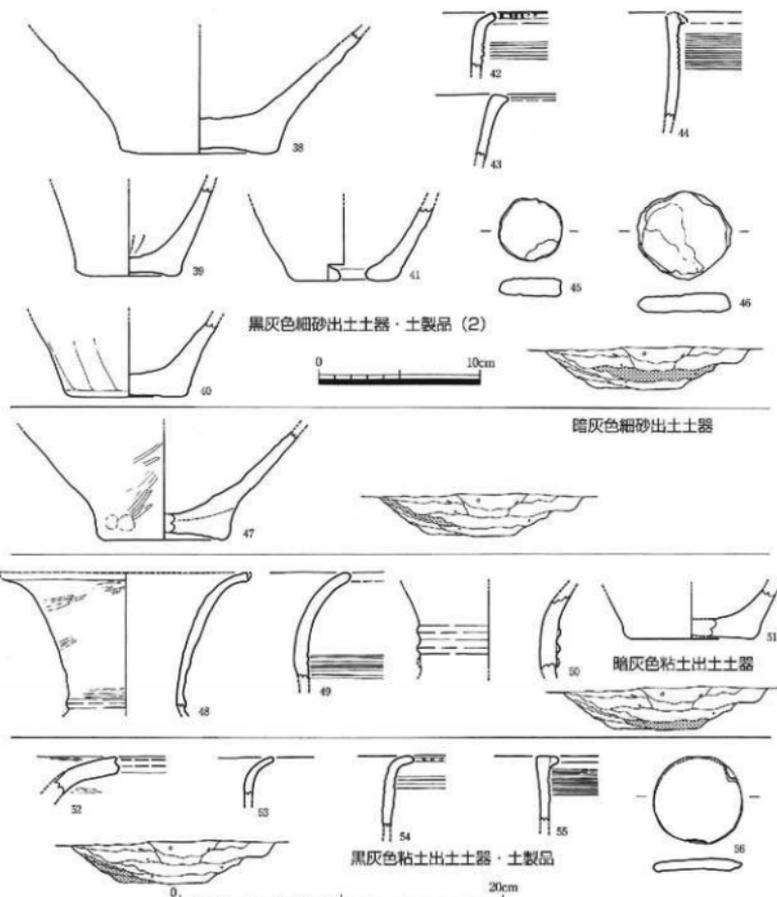


Fig.40 SD002出土土器・土製品 (3) (S=1/3)

45は土器転用の円板である。直径3.9cm、厚さ1.1cm、重量17.9gを測り、周囲を打ち欠きした後一部を研削する。胎土は径2mmの長石粒を少量含み、暗褐色を呈する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。46も土器転用の円板である。直径5.8cm、厚さ1.2cm、重量41.4gを測り、周囲を打ち欠きで仕上げる。胎土は径3mmの長石粒をやや多く含み、暗褐色を呈する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。

暗灰色細砂出土土器 (Fig.40)

壺 (47) が出土した。復元底径8.2cm、器高6.7cmを測り、直線的に開く体部とやや上げ底状の底部を有する。底部と体部の境界の線は明瞭である。胎土は2mm程度程度の長石粒をやや多く含み、褐色を呈する。劣化のため内面調整は不明であるが外面ヘラミガキが残る。

暗灰色粘土出土石器 (Fig.40)

壺 (48~50)、甕 (51) が出土した。

壺

48は復元口径15.5cm、残存高8.4cmを測り、口縁部は直線的に広がった後屈曲して開く。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には削り出し突帯を有する。49は残存高6.7cmを測る。口縁部は緩やかに湾曲して開き、頸部を丸く納める。頸部には3条以上のヘラ掻き沈線が残る。沈線跡を掻き取る事により削り出し突帯状に成形する。表面の劣化が著しいが、内外面にヘラミガキの痕跡が残る。50は頸部だけの破片である。復元頸部径8.9cm、残存高4.9cmを測る。緩やかに湾曲し3条の貼り付け突帯を有する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。胎土はいずれも径3mm程度の長石粒を少量含み、48が暗灰褐色、49が橙褐色を呈する。

甕

51は復元底径8.4cm残存高3.0cmを測る。直線的に開く体部とやや上げ底状の底部を有する。底部と体部の境界の

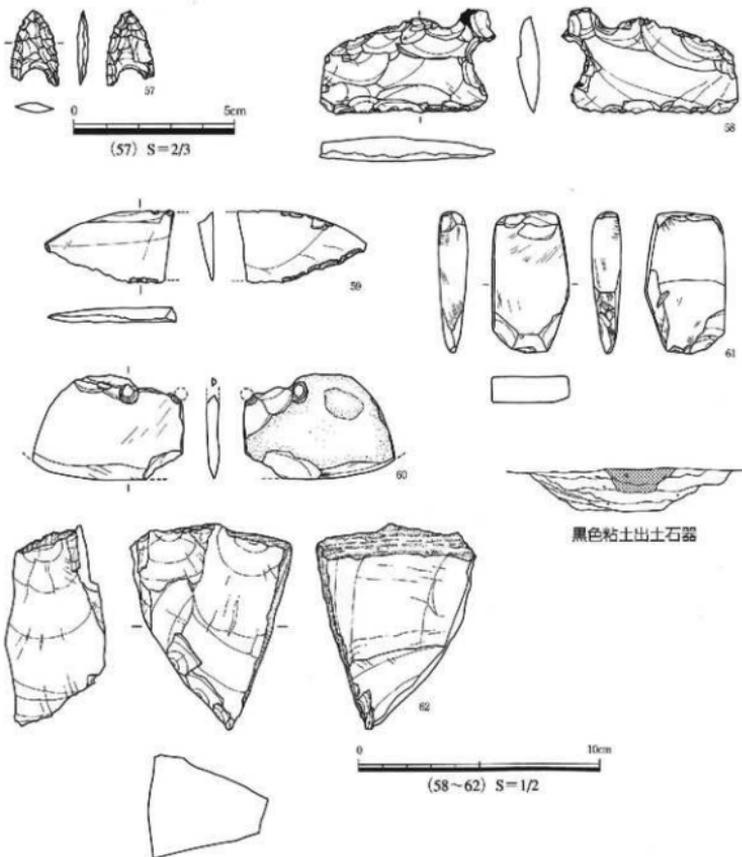


Fig.41 SD002出土石器 (1)

稜は明瞭である。胎土は3mm程度の長石粒をやや多く含み、褐色を呈する。劣化のため内面調整は不明であるが外面ナデの痕跡が残る

黒灰色粘土出土土器・土製品 (Fig.40)

壺 (52)、甕 (53~55)、土製円板 (56) が出土した。

壺

52は口縁部みの破片である。残存高2.3cmを測る。水平に近い角度で開き、端部に面を持つ。口唇部には1条の

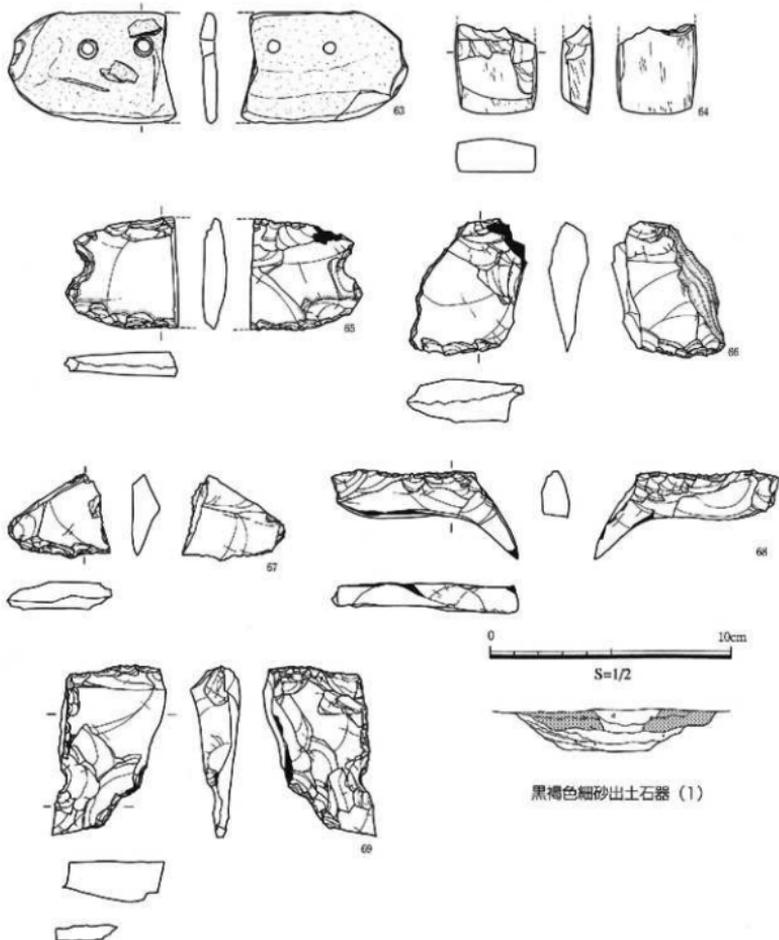


Fig.42 SD002出土石器 (2)

沈線を有する。胎土は3mm程度の長石粒をやや多く含む暗褐色を呈する。内外面ヘラミガキを行う。

蓋

53は残存高2.3cmを測り、緩やかに湾曲する薄手の如意状口縁を持つ。キザミ、沈線等は劣化のため不明である。調整等も劣化のため不明である。54は残存高4.4cmを測り、強く湾曲するやや厚手の如意状口縁を持つ。口唇部にはキザミを、口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を有する。劣化のため内面調整は不明であるが、外面にはナデ調整が見られる。55は残存高4.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にした断面三角形を呈する貼り付け口縁を有する。キザミは見られないが、口縁部直下に沈線の痕跡が残る。劣化のため調整等は不明である。胎土はいずれも径1~3mm程度の長石粒を含み、53・54は淡褐色、55は赤色酸化土粒を少量含む橙褐色を呈する。

土製円板

56は土器転用の円板である。直径5.5cm、厚さ0.8cm、重量25.6gを測り、周囲を打ち欠きした後一部を研磨する。胎土は径2mmの長石粒を少量含む、橙褐色を呈する。表面の劣化が著しく凸面側調整は不明であるが、凹面側はナデ調整を行う。

石器 (Fig.41~45)

黒色粘土出土石器 (Fig.41)

石鏃 (57)、石匙 (58)、スクレイパー (59)、磨製石包丁 (60)、扁平片刃石斧 (61)、石核 (62) が出土した。

石鏃

57は凹基式の石鏃である。両面を調整し、素材面を残さない。最大長2.3cm、最大幅1.5cm、最大厚0.3cm、重量0.8gで、石材はサヌカイトである。

石匙

58は横長剥片素材で、刃部に簡単な両面調整が施されている。完形で最大長4.3cm、最大幅7.2cm、最大厚1.0cm、重量27.1g。石材はサヌカイトである。

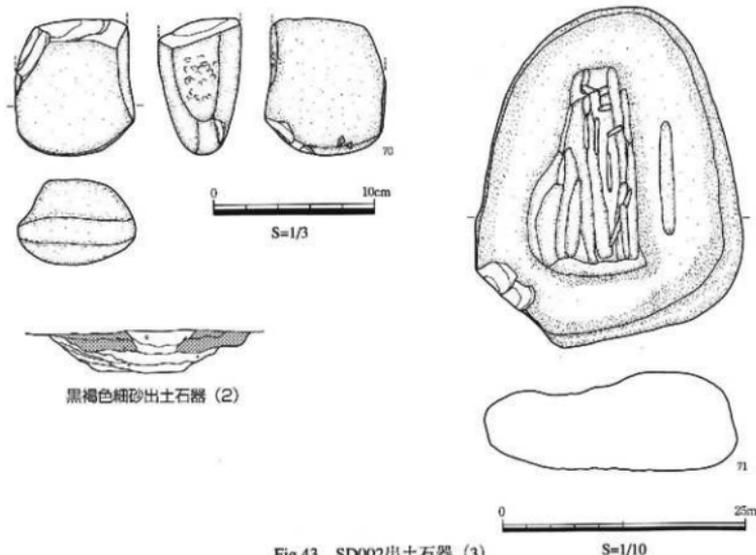


Fig.43 SD002出土石器 (3)

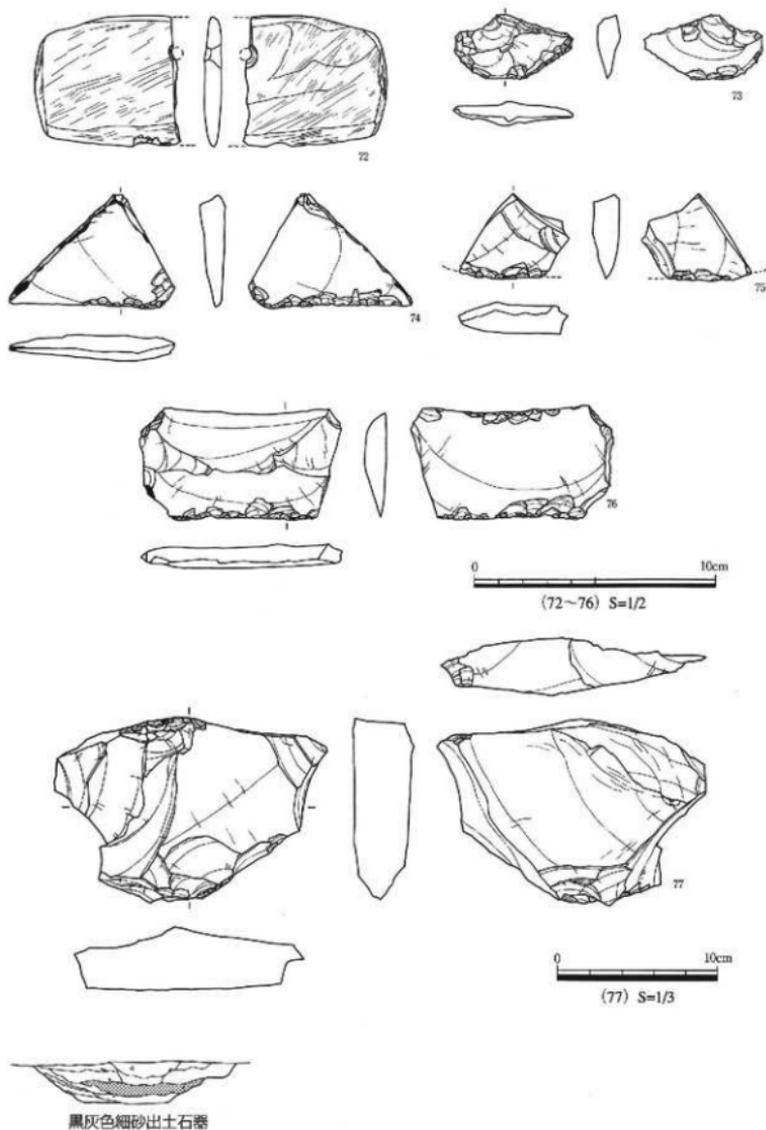


Fig.44 SD002出土石器 (4)

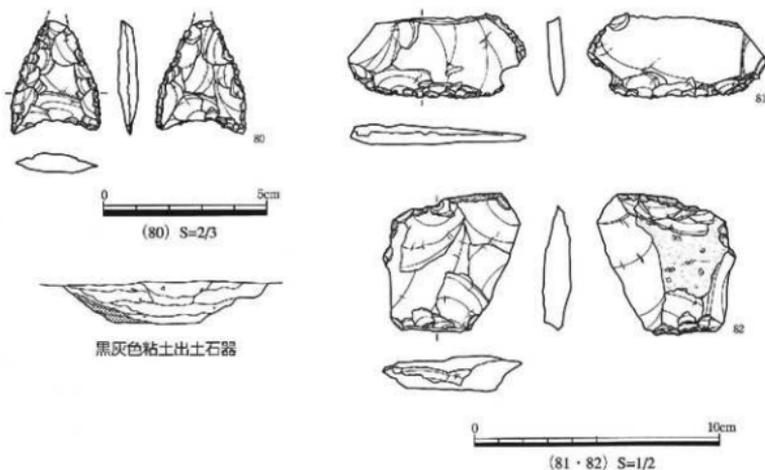
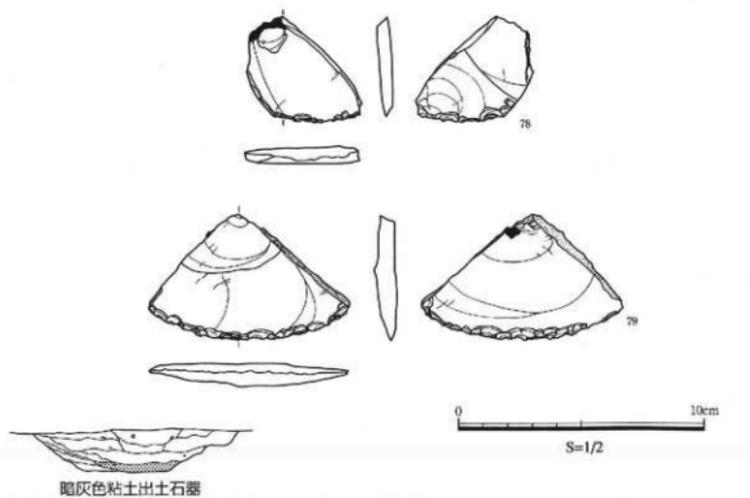


Fig.45 SD002出土石器 (5)

スクレイパー

59は折損した剥片を素材とするスクレイパーである。刃部は背面から片面調整を施し、一部に腹面からの片面調整を施している。最大長3.0cm、最大幅5.3cm、最大厚0.6cm、重量8.8gで、石材はサヌカイトである。

磨製石包丁

60は欠損しているため全体の形状はわからない。刃部は両刃で縦斜め方向の擦痕がみられる。最大長(6.2cm)、最大幅(4.3cm)、最大厚(0.5cm)、重量(16.9g)を測り、石材は安山岩あるいは流紋岩であると考えられる。

扁平片刃石斧

61は小型の扁平片刃石斧である。全面に丁寧な研磨を施している。側面はそれぞれ直線と屈曲をもつ形状である。刃縁の状態は剥離しているため不明である。最大長5.8cm、最大幅3.3cm、最大厚1.1cm、重量40.0gを測る。石材は凝灰岩と考えられる。

石核

62は石材を分割した後、自然面を打面として縦長の剥片を剥離している。分割面はポジティブな剥離面である。最大長8.4cm、最大幅6.7cm、最大厚4.2cm、重量214.0gで、石材はサヌカイトである。

黒褐色細砂出土石器 (Fig.42~43)

磨製石包丁(63)、柱状片刃石斧(64)、打製石包丁(65)、スクレイパー(66・67)、楔形石器(68・69)、磨製石斧(70)、砥石(71)が出土した。

磨製石包丁

63は背部・刃部ともに直線的で、全体が長方形を呈する磨製石包丁である。剥離しており、調整痕が残るのは背部だけである。最大長(6.9cm)、最大幅4.6cm、最大厚(0.7cm)、重量(32.6g)を測り、石材は安山岩である。

柱状片刃石斧

64は柱状片刃石斧の刃部である。刃部の刃角は約60度である。基部を欠損しているため、全体の形態は不明である。最大長(3.6cm)、最大幅(3.3cm)、最大厚(1.4cm)、重量(38.8g)で、緑白色の結晶片岩である。

打製石包丁

65は挟みのある打製石包丁である。背部に刃潰し加工が、刃部は両面調整を施しているが、著しく摩滅している。刃部付近に光沢面が確認できる。折損しており、最大長(4.6cm)、最大幅4.5cm、最大厚(1.0cm)、重量(25.9g)である。石材はサヌカイトである。

スクレイパー

石材はすべてサヌカイトである。66は側面に自然面を有し、背部には刃潰し加工が、刃部には両面調整が施されている。折損しており、最大長5.6cm、最大幅(4.8cm)、最大厚(1.8cm)、重量(39.7g)を測る。67の刃部は腹面からの片面調整によって形成されている。両折れ面からの調整が認められることから、完形であるといえる。最大長3.5cm、最大幅4.2cm、最大厚1.2cm、重量13.5gである。

楔形石器

68は楔形石器の分割素材である。楔形石器が石核素材として用いられた後、分割されたものと考えられる。背面体部からの加撃による明瞭な打点か折れ面に認められる。石材はサヌカイトで、著しく白色に風化している。最大長3.6cm、最大幅7.7cm、最大厚1.2cm、重量25.2gを測る。69は頂部に階段状剥離がみられるほか、側面にも相対する階段状剥離がみられる。最大長7.0cm、最大幅4.7cm、最大厚2.0cm、重量54.4gで、石材はサヌカイトである。

磨製石斧

70は刃部のみを残して欠損しているため、全体の形態はわからない。刃端は著しく摩滅している。最大長(8.5cm)、最大幅7.4cm、最大厚5.2cm、重量(473.0g)を測り、石材は安山岩である。

砥石

71は砥面に多数の溝が確認できる。最大長34.8cm、最大幅(27.5cm)、最大厚10.1cm、重量(14000.0g)を測る。石材は軟質の砂岩である。

黒灰色細砂出土石器 (Fig.44)

磨製石包丁(72)、スクレイパー(73~76)、石核(77)が出土した。

磨製石包丁

72は背部・刃部ともに直線的で、全体が長方形を呈する形態である。体部には多数の研磨痕がみられる。刃部は両刃で明瞭に作り出されており、横方向の擦痕がみられる。根部で欠損している。最大長(6.0cm)、最大幅5.4cm、最大厚0.7cm、重量(32.0g)で、石材は安山岩である。

スクレイパー

石材はすべてサヌカイトである。73は小型の横長剥片を素材としたスクレイパーである。背部に自然面を有し、刃部中央部は背面からの加撃による片面調整が、その他は腹面からの加撃による片面調整が施されている。最大長2.6cm、最大幅4.9cm、最大厚1.0cm、重量9.2gで完形。74は背部は自然面からなり、刃部は両縁調整と一部に片面調整が施されている。不純物による折れ面が背部に見られ、刃部の剥離面を切っている。折れ面には背部から調整が施されている。完形で最大長4.7cm、最大幅6.8cm、最大厚1.1cm、重量24.8gを測る。75は分割板材を素材としている。刃部は両面調整が施されており、刃縁は摩滅している。最大長(3.5cm)、最大幅(4.6cm)、最大厚1.3cm、重量(18.6g)である。76は横長剥片を素材としたスクレイパーである。背部の折れ面に調整を施し、刃部は両面調整されている。両側面の折れ面には打点を残す。折れ面が調整を切っており、刃部の調整の後、適当な大きさに分割されたことがうかがえる。完形で最大長4.6cm、最大幅8.3cm、最大厚1.0cm、重量51.6gである。

石核

77は板状剥片素材の石核である。折れ面を打面とし、相対する縁辺に階段状の剥離痕を有する。最大長11.6cm、最大幅17.1cm、最大厚3.9cm、重量845.0gで、石材はサヌカイトである。

暗灰色粘土出土石器 (Fig.45)

スクレイパー(78・79)が出土した。

スクレイパー

石材はすべてサヌカイトである。78は剥片の末端に両面調整が施されている。側面を折損し、一部欠損する。最大長(4.3cm)、最大幅4.7cm、最大厚0.7cm、重量(14.7g)である。79は両面がポジティブな横長剥片を素材としたスクレイパーである。両側面に自然面を有し、刃部は両面調整されている。完形で、最大長5.1cm、最大幅8.2cm、最大厚0.9cm、重量33.9gを測る。

黒灰色粘土出土石器 (Fig.45)

石鏃(80)、スクレイパー(81)、石核(82)が出土した。

石鏃

80は大型の平基式の石鏃である。両面を調整し素材面を残さない。切先を欠損する。最大長(3.5cm)、最大幅2.7cm、最大厚0.6cm、重量(4.8g)で、石材はサヌカイトである。

スクレイパー

81は刃部に雑な両面調整を施す。最大長3.5cm、最大幅7.2cm、最大厚0.8cm、重量20.5gを測り、石材はサヌカイトである。

石核

82は折れ面と自然面を打面として不定形な剥片を剥離したことが伺える。最大長5.7cm、最大幅5.6cm、最大厚1.1cm、重量40.9gを測る。石材はサヌカイトである。

SD059出土遺物

土器 (Fig.46~51)

黄褐色砂質土出土土器 (Fig.46)

釜(6)、甕(1~5)が出土した。

甕

6は残存高4.7cmを測る肩部の破片である。4条のヘラ描き沈線を中心に、上下に連弧文を配する。胎土は2mm程度の長石粒と赤色酸化土粒を少量含み、灰褐色を呈する。

壺

1は復元口径23.1cm、残存高12.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。やや強く張る体部を有する。I唇部にはキザミを持たず、口縁部直下には9条の沈線を有する。表面劣化のため調整等不明である。2は復元口径28.0cm、残存高4.6cmを測る逆「L」字状I縁のもので、口縁部上面をやや傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。I唇部のキザミや口縁直下の沈線は見られない。表面劣化のため調整等不明である。3は残存高8.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面をやや傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。体部は直線的である。口唇部のキザミやI縁部直下の沈線は見られない。表面劣化のため調整等不明である。4は残存高7.5cmを測る逆「L」字状I縁のもので、口縁部上面をやや傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。体部は直線的で、口唇部のキザミや口縁部直下の沈線などは見られない。外面に板状工具によるナデ痕と、内面にはヘラミガキの痕跡が残る。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、1・2・3・4はやや粒子が小さく、3は暗橙褐色を呈する。1・2は赤色酸化土粒を多く含む。

黒褐色粘質土土器 (Fig.46・47)

壺 (15)、甕 (7~14)、釜 (16)、高坏 (17) が出土した。レイアウトの都合上壺より記述を行う。

壺

7は復元口径17.0cm、残存高11.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする肉厚の口縁を有する。口唇部にはキザミを有するが、口縁直下の沈線は見られない。内面板状工具によるナデ、外面板状工具によるナデの後粗いヘラミガキを施す。8は復元口径20.6cm、残存高14.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや口縁直下の沈線は見られない。外面縦方向のハケ調整、内面板状工具によるナデを行う。内外面粗いヘラミガキの痕跡がかすかに残るが明瞭でない。9は復元口径22.0cm、残存高16.3cmを測る逆「L」字状I縁のもので、口縁部上面をやや傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミやI縁直下の沈線は見られない。表面劣化のため調整等不明である。10は復元口径13.8cm、残存高7.2cmを測る如意状口縁のもので、口縁部は比較的長く伸びる。器唇は3mm前後と薄手で、I唇部にはキザミを持つが、口縁直下の沈線は見られない。表面劣化のため調整等不明である。11は底径7.1cm、残存高7.0cmを測る。底部外縁は強いエピソードにより突出し、直線的に立ち上がる。内面ナデ調整の痕跡が残るが、外面は劣化のため不明である。12は底径7.7cm、残存高13.9cmを測る。底部から直線的に立ち上がる体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。外面縦方向の板状工具によるナデを施すが、内面劣化のため調整不明である。13は残存高3.8cmを測る。やや内湾する体部と、外面口縁部直下に1条の突帯を有する。突帯直下にはヘラ描き沈線を有するが、破片のため条数は不明である。内外面調整等は不明である。14は底径4.9cm、残存高9.0cmを測る。底部から直線的に立ち上がる体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。内面にはナデ調整の痕跡が残るが、外面劣化のため調整不明である。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、7・8・10・11・14はやや粒子が小さく、7・10・14は暗褐色、8・9は淡褐色を呈する。13は二次焼成を受け赤変する。

甕

15は復元底径9.4cm、残存高2.4cmを測り、直線的に開く体部を有する。胎土は径3mm程度の長石粒を少量含む暗褐色を呈する。表面劣化が著しく調整等は不明である。

釜

16はミニチュアの突蓋である。天井部径2.4cm、残存高3.4cmを測り、天井部外面は浅く窪む。胎土は径5mm程度の長石粒を少量含む、調整等は不明である。

高坏

17は坏部残存高4.0cm、脚部残存高2.4cmを測る。全面的に2次焼成を受け、調整等は不明である。胎土は3mm程度の長石粒を多く含む、赤褐色を呈する。

暗灰色砂質土出土土器 (Fig.47・48)

壺 (18~24)、甕 (25~35、37・38)、甕蓋 (36) が出土した。

壺

18は口縁部の破片である。残存高3.3cmを測る。広く開き端部を丸く納める。胎土は径5mm程度の長石粒と赤色酸化土粒を多量に含み橙褐色を呈する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。19は口縁部の破片である。残存高4.7cmを測る。広く開き端部に面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、内面には4条の貼り付け突帯を施す。20は口縁部の破片である。復元口径14.8cm、残存高3.7cmを測る。口縁部付近で屈曲して開き、口縁端部に面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明である。21は口縁部の破片である。復元口径14.0cm、残存高7.1cmを測る。頸部は緩やかに湾曲し、口縁部付近で開きが強くなる。口縁端部はわずかにつまみあげる。内外面ヘラミガキが残る。22は底径11.6cm、残存高5.0cmを測り、直線的に開く体部を有する。表面劣化が著しく調整等は不明である。23は底径9.0cm、残存高7.5cmを測り、緩やかに湾曲して開く体部を有する。胎土は径3mm程度の長石粒を少量含み橙褐色を呈する。表面劣化が著しく調整等は不明であるが、底部外面にはヘラミガキが残る。24は底径11.0cm、残存高8.8cmを測り、緩やかに開く体部を有する。表面劣化が著しく調整等は不明である。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、18・20・21・24はやや粒径が小さく、21は量も少ない。20は淡褐色、24は赤褐色を呈する。22は赤色酸化土粒を多く含む。

甕

25は復元口径24.3cm、残存高7.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁直下には8条の沈線が存在する。表面劣化のため外面調整は不明であるが、内面には板状工具によるナデが施される。26は復元口径24.5cm、残存高4.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面をほぼ水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや口縁直下の沈線は見られない。表面劣化のため外面調整は不明であるが、内面にはユビオサエの痕跡が残る。27は復元口径26.9cm、残存高7.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を若干傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを施すが、口縁直下に沈線は見られない。内面ナデ調整、外向縦方向のハケ調整を施す。28は復元口径14.9cm、残存高4.8cmを測る如意状口縁のもので、口頸部の屈曲はならからである。器厚は3mm前後と薄手で、口唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。表面劣化のため調整等不明である。29は残存高5.8cmを測る如意状口縁のもので、口縁部は肉厚で短い。口唇部のキザミは見られず、口縁直下には7条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。30は復元口径18.6cm、残存高9.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面をほぼ水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内外面板状工具によるナデを施す。31は復元口径19.4cm、残存高9.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面をほぼ水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや口縁直下の沈線は見られない。表面劣化のため外面調整は不明であるが、内面にはユビオサエの痕跡が残る。32は残存高6.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、短い断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや口縁直下の沈線は見られない。表面劣化のため外面調整は不明である。33は残存高4.5cmを測る。口縁部を欠損するが口縁直下に突帯を持つものと考えられる。口縁直下には上段5条・下段5条のヘラ描き沈線と竹管文が見られる。胎土は砂粒をあまり含まず、暗褐色を呈する。内外面ナデ調整を施す。34は復元口径28.8cm、残存高10.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部は断面楕円形で肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや口縁直下の沈線は見られない。表面劣化のため外面調整は不明である。35は推定口径23.8cm、残存高12.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面をほぼ水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミは不明であるが、口縁直下には10条のヘラ描き沈線を施す。内外面板状工具によるナデ調整を施す。37は底径7.4cm、残存高7.4cmを測る。底部付近は直立気味に立ち上がった後、緩やかに広がる体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。劣化のため調整等は不明である。38は底径6.4cm、残存高15.0cmを測る。底部付近は直立気味に立ち上がった後、緩やかに湾曲する体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。内底面にはユビオサエ、体部内面にはナデの痕跡が残存するが、外面調整は劣化のため不明である。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒

を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、26・27・28はやや粒子が小さく、27・28・30は暗褐色、25・26・31・32・34は淡褐色を呈する。28・31・34は赤色酸化土粒を多く含む。

壺蓋

36は復元天井部径5.6cm、残存高5.0cmを測り、天井部外面は広く窪む。内外面表面劣化のため調整等不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する

暗灰色粘土出土土器 (Fig. 48・49)

壺 (39～42、45～48)、壺蓋 (43・44・49～57)、壺蓋 (58・59)、器種不明 (60) が出土した。

壺

39はI線部の破片である。残存高3.5cmを測る。広く開き端部に面を持ち、内面に1条の貼り付け突帯を有する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。40は口縁部の破片である。残存高4.9cmを測る。直立気味に開き端部に面を持つ。端部には2条の沈線を有する。あるいは2次焼成を受けている可能性もある。表面の劣化が著しく調整等は不明である。41は口縁部の破片である。残存高2.4cmを測る。水平近くまで広く開き端部に面を持つ。I線端部には1条の沈線を有する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。42はI線部の破片である。残存高2.9cmを測る。水平近くまで広く開き端部に面を持つ。内面には2条の貼り付け突帯を施す。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、外面にはわずかにヘラミガキの痕跡が残る。45は底径8.4cm、残存高4.0cmを測り、底部と体部の境界の稜は明瞭である。表面劣化が著しく調整等は不明である。46は底径9.2cm、残存高5.7cmを測り、底部と体部の境界の稜は明瞭である。表面劣化が著しく内面調整は不明であるが、外面にはわずかにヘラミガキの痕跡が残る。47は底部から体部中央付近まで残存する。復元底径8.2cm、残存高15.4cm、復元胴部最大径26.1cmを測り、底部と体部の境界の稜は不明瞭である。胴部中央付近には8条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化が著しく調整は不明瞭だが、内外向ヘラミガキの痕跡が見られる。48は小型甕である。復元底径3.2cm、残存高3.0cmを測り、底部はやや丸底気味である。表面劣化が著しく調整等は不明である。いずれも胎土は図化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、39・42はやや粒子が小さく、40・42は含有量が少ない。45は淡褐色、46・47は暗褐色を呈する。48は赤色酸化土粒を多く含む。

壺

43は体部の破片である。残存高8.0cmを測る。口縁部直下であると考えられ、4条1単位の半篋竹管による沈線に挟まれて山形文を施す。内外面板状工具によるナデを施す。44は復元底径7.6cm、残存高7.3cmを測る。底部から直線的に立ち上がる体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。表面劣化のため調整等は不明である。49は残存高5.4cmを測る如意状口縁のもので、口頸部は短く屈曲する。I唇部にはキザミを、口縁直下には6条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため調整等不明である。50は残存高3.2cmを測る如意状口縁のもので、口頸部は短く屈曲する。器厚はやや厚手で、口唇部にはキザミを、I線直下には5条以上のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため調整等不明である。51は残存高4.7cmを測る逆「L」字状口縁を有するもので、口縁部上面が傾斜する断面三角形の貼り付け口縁を有する。口縁端部は内側に丸く入り込む。口唇部にキザミを、I線直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内外面板状工具によるナデを施すが、外面は劣化のため調整不明である。52は残存高8.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面が若干傾斜する断面三角形のI線を有する。口唇部のキザミや、口縁直下の沈線はみられない。内面板状工具によるナデを施し、外面表面劣化のため調整不明である。53は残存高7.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の口縁を有する。口唇部のキザミや、I線直下の沈線は見られない。内面ナデ調整を施すが、外面は表面劣化のため調整等不明である。54は残存高6.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の口縁を有する。I唇部にはキザミを持たず、口縁直下には7条のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等不明である。55は推定口径19.4cm、残存高12.8cmを測る如意状口縁のもので、I線部を欠損する。樽形の体部を有し、I線直下には7条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。56は復元I径22.0cm、残存高12.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面が傾斜する断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを有するが、口縁直下に沈線は見られない。内面ナデ調整、外面板状工具によるナデの後左上がりのヘラミガキを施す。57は復元口径23.7cm、残存高12.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面がやや傾斜する断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミは見られない

が、口縁直下には11条のヘラ描き沈線と竹管文を施す。表面劣化が著しく調整等は不明である。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、51はやや粒子が小さく、43・49・50は暗褐色、51は褐色を呈する。50は赤色酸化土粒を多く含む。

壺

58は推定天井部径6.8cm、残存高5.7cmを測り、天井部外面は広く窪む。頂部直下には横方向に3条のヘラ描き沈線が、体部には縦方向に4条1単位のヘラ描き沈線が見られる。縦方向のものは器面を5分測するように存在する。胎土は径3mm程度の長石粒をやや多く含み、淡褐色を呈する。内外面ヘラミガキが残る。59は天井部径5.2cm、残存高4.9cmを測り、天井部外面中心が窪む。体部の開きは狭い。胎土は径3mm程度の長石粒を少量含み、橙褐色を呈する。表面劣化のため調整等は不明である。

器種不明

60は器種不明のものである。壺の可能性が大きい現状では保留しておく。残存高2.1cmを測る。沈線と押圧による鋸歯文を施す。胎土は3mm程度の長石粒をやや多く含み淡褐色を呈する。表面劣化のため調整等は不明である。暗灰褐色砂質土出土器・土製品 (Fig.49・50)

壺 (61~64)、甕 (65~73)、焼土塊 (74)、鉢 (75) が出土した。

壺

61は復元口径18.0cm、残存高5.0cmを測る。やや直立気味の頸部と緩やかに開く口縁部を有する。表面の劣化が著しく内面の調整は不明であるが、外面にはヘラミガキが残る。62は復元口径20.5cm、残存高7.6cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部をやや尖り気味に納める。表面の劣化が著しく調整等は不明である。63は底径7.5cm、残存高4.7cmを測り、直線的に広く開く体部を有する。底部の稜は不明瞭である。内底面には板状工具によるナデ痕跡と指頭圧痕を残し、外面はヘラミガキを施す。64は口縁部の破片である。残存高3.2cmを測る。広く開き端部を短く揃い上げる。内外面共にヘラミガキを施す。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、64はやや粒子が小さく、63は含有量が少ない。62は灰褐色、63は淡褐色を呈する。

壺

65は残存高5.0cmを測る如意状口縁のもので、口頸部はやや長く屈曲する。口唇部にはキザミを、口縁直下には4条以上のヘラ描き沈線を有する。内外面ナデ調整を施す。66は残存高5.3cmを測る逆「L」字状口縁を有するもので、口縁部上面が傾斜する断面三角形の貼り付け口縁を有する。口縁端部は内側に丸く入り込む。口唇部が欠損するためキザミの有無は不明であるが、口縁直下に沈線は見られない。内面ユビオサエの後ナデ調整を施すが、外面は劣化のため調整不明である。67は復元口径20.7cm、残存高6.8cmを測る如意状口縁のもので、強く屈曲する口縁部を有する。口唇部にキザミを持たず、口縁直下には5条のヘラ描き沈線を施す。内面ユビオサエの後ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を施す。68は復元口径27.5cm、残存高7.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面が水平になる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを持たず、口縁直下には14条のヘラ描き沈線と列点文を施す。内外面ナデ調整を施す。69は残存高5.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面が若干傾斜する断面三角形の口縁を有する。口唇部にはキザミを持たず、口縁直下には7条のヘラ描き沈線を施す。内面上端部にはヘラミガキが残り、外面ナデ調整を施す。70は底径6.6cm、残存高7.0cmを測り、強く立ち上がった後緩やかに開く体部を有する。底部と体部の境界の稜は明瞭である。底部には中央からやや離れた位置に焼成後の穿孔を施す。表面劣化が著しく調整等は不明である。71は底径6.7cm、残存高6.5cmを測り、強く立ち上がった後緩やかに開く体部を有する。底部と体部の境界の稜は明瞭である。内面には指頭圧痕が残るが、表面劣化のため内外面調整等は不明である。72は底径4.9cm、残存高11.5cmを測り、丸みをもって立ち上がる体部を有する。底部と体部の境界の稜は不明瞭である。胎土内の砂塵は特に底部付近に多い。表面劣化が著しく調整等は不明である。73は復元底径7.8cm、残存高8.2cmを測り、直線的に立ち上がる体部を有する。底部と体部の境界の稜は明瞭である。内面ナデ調整が見られるが、表面劣化が著しく外面調整は不明である。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、68・69はやや粒子が小さく、65は暗灰褐色、67・69は灰褐色、68は淡褐色、70・71は暗灰褐色、72は暗褐色73は暗赤褐色を呈する。69~73は赤色酸化土粒を多

く含む。

焼土塊

74は長軸4.0cm、短軸4.1cmの不定形を呈する。胎土は砂礫をほとんど含まず非常に精良であり、焼成も良好である。

鉢

75は残存高8.0cmを測る逆「L」字状の口縁を持つものである。幅広の断面三角形を呈する口縁部を貼り付け、口縁部上面には3条の沈線をめぐらす。口縁部外面直下には把手状の突起を貼り付ける。内外面劣化のため調整等は不明である。

黒色粘土出土土器・土製品 (Fig.50・51)

壺 (76~80・82)、鉢 (81)、甕 (83~85)、土製円板 (86) が出土した。

壺

76は口縁部の破片である。復元口径14.8cm、残存高4.8cmを測る。直立気味に立ち上がった後広く開き、肩部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明である。77は口縁部の破片である。復元口径16.0cm、残存高4.9cmを測る。76同様直線的に立ち上がった後広く開き、肩部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明である。78は壺の破片と考えられるが、外面が剥離している可能性もある。残存高2.8cmを測る。胎土は砂粒をほとんど含まず、他のものとは異質であり、搬入品の可能性もある。79は口縁部から肩部までが残存する。復元口径16.4cm、残存高13.4cmを測る。口縁部は直立した後比較的急に開き、肩部やや肥厚して面を持つ。口頸部には4条の沈線と1条の突帯を貼り付け、肩部には3条の沈線と刺突文を施す。内外面横方向のヘラミガキを密に施す。80は底径7.6cm、残存高6.3cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部と体部の境界の稜は明瞭である。外面劣化のため調整不明だが、内面にはヘラミガキの痕跡が密に残る。82は底部から頸部まで残存し、残存高25.5cmを測る。底部は底径8.7cmを測る平底で、胴部は最大径24.4cmを測る球形形を呈する。頸部は比較的直線的に立ち上がり、体部との境界は明瞭である。内外面板状工具によるナデの後密にヘラミガキを施し、ヘラミガキは底部外面まで達する。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、77はやや粒子が小さく、76は淡褐色、79・80・82は灰褐色を呈する。80は赤色酸化土粒を多く含む。

壺

83は底径7.6cm、残存高16.5cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部と体部の境界の稜は不明瞭である。底部には中心から若干ずれた位置に焼成後の穿孔を有する。表面劣化が著しく調整等は不明瞭であるが、内面には板状工具によるナデ痕跡、外面下半にはハケ調整の痕跡が残る。84は残存高4.3cmを測る如意状口縁のもので、口頸部はゆるやかにやや長く屈曲する。口頸部にキザミは見られず、口縁直下には数条のヘラ描き沈線を有すると思われるが、不明瞭である。内外面ナデ調整を施す。85は残存高2.6cmを測る逆「L」字状の口縁を持つものである。体部は著しく張り出し、胴張りの差になると考えられる。幅広の断面三角形を呈する口縁部を貼り付ける。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、83は暗褐色、84は暗灰褐色、85は黒灰褐色を呈する。

鉢

81は復元口径32.6cm、器高18.5cm、復元底径9.2cmを測る。若干湾曲しつつ広く開く体部と、屈曲の弱い貼り付け口縁を有する。胎土は5mm程度の砂粒を多く含むが、特に底部付近に顕著である。内外面オサエの後板状工具によるナデ調整、その後縦方向のヘラミガキを施す。

土製円板

86は直径5.3cm、厚さ1.1cm、重量34.3gを測り、専用品として焼成されたものと考えられる。中央からややずれた位置に棒状工具による焼成前片向穿孔が行われる。表面劣化が著しいが、全面ナデ調整を施すと考えられる。

暗灰色地山ブロック出土土器 (Fig.51)

壺 (87~88)、甕 (89~96) が出土した。

壺

87は底径8.4cm、残存高4.0cmを測り、直線的に立ち上がった後広く開く体部を有する。底部と体部の境界の稜は

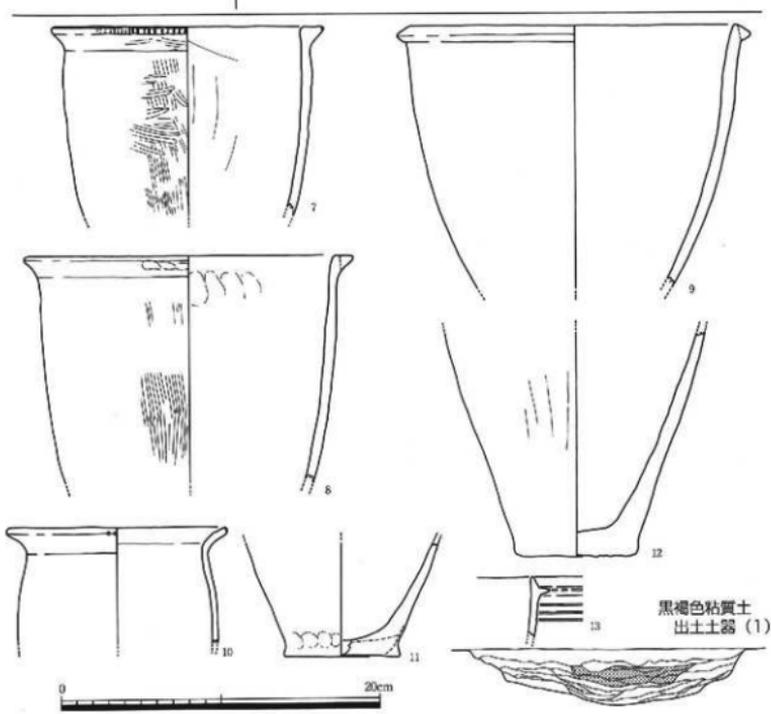
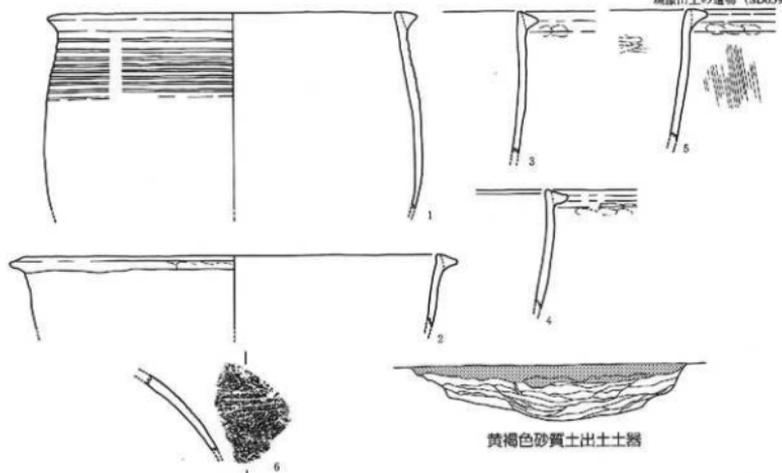


Fig.46 SD059出土土器 (1) (S=1/3)

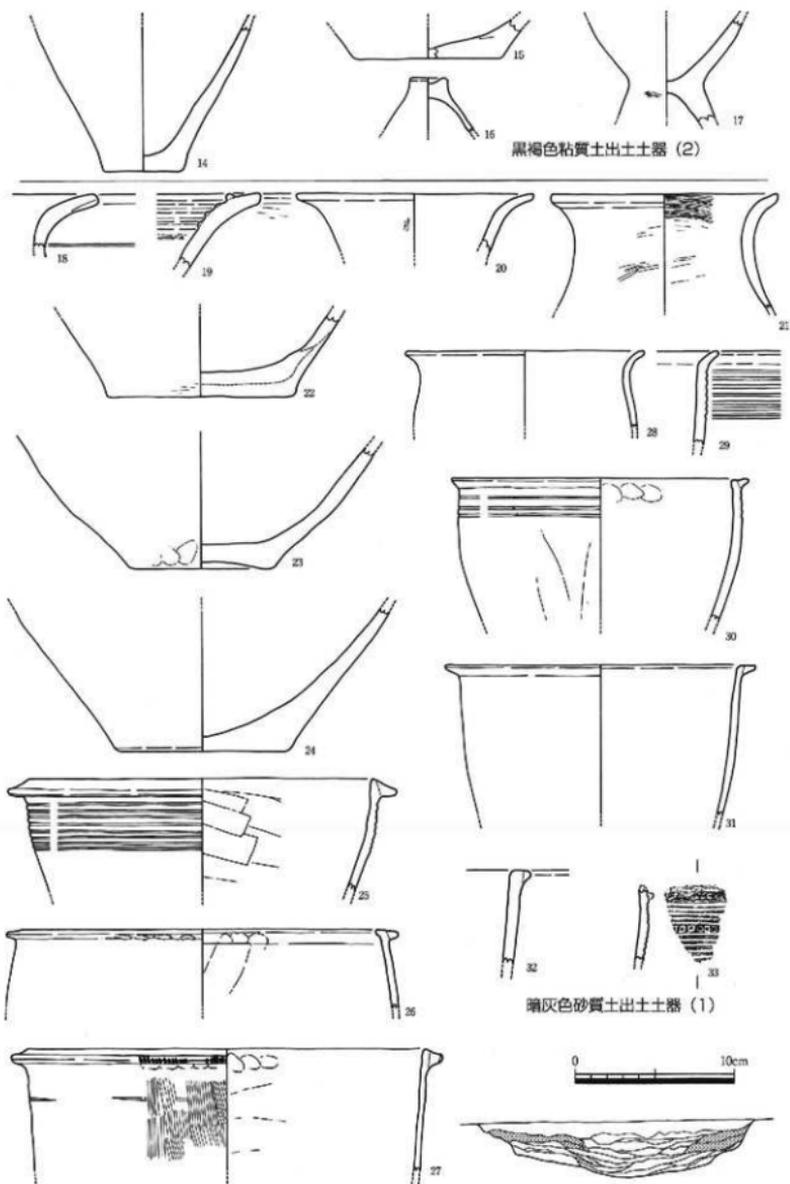
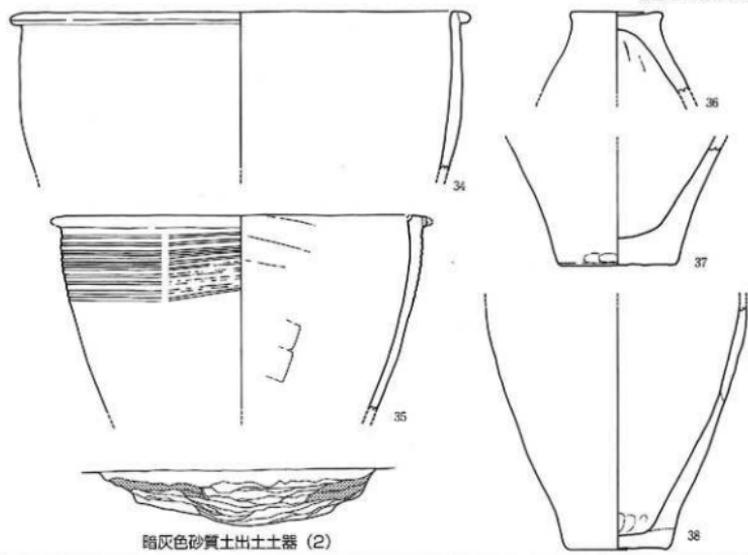
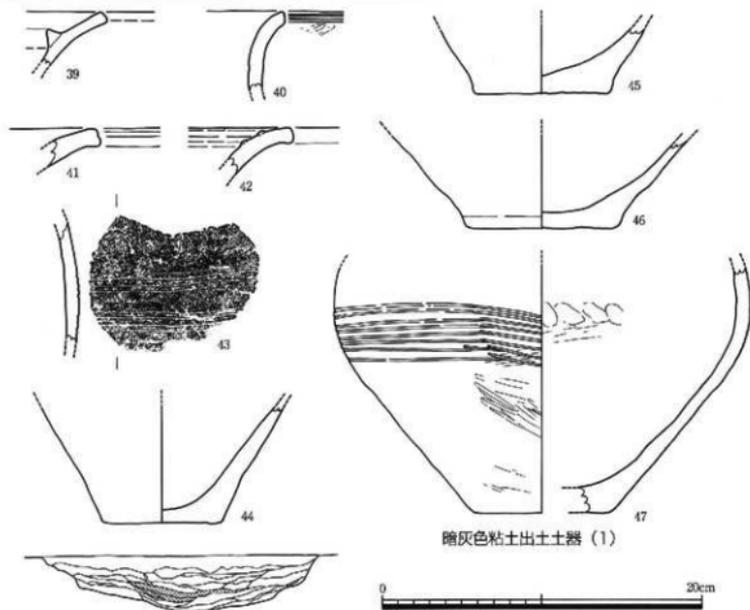


Fig.47 SD059出土土器 (2) (S=1/3)



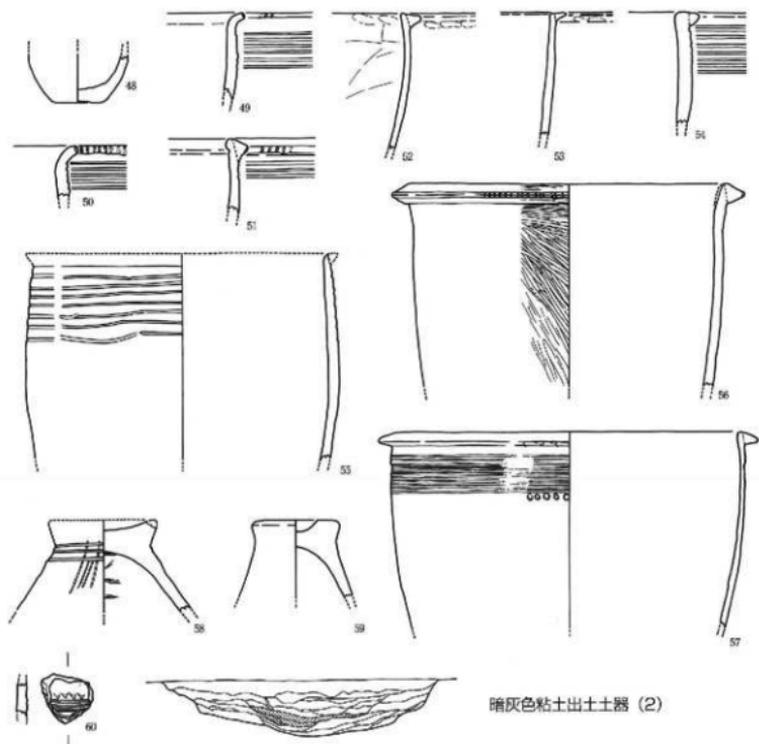
暗灰色砂質土出土土器 (2)



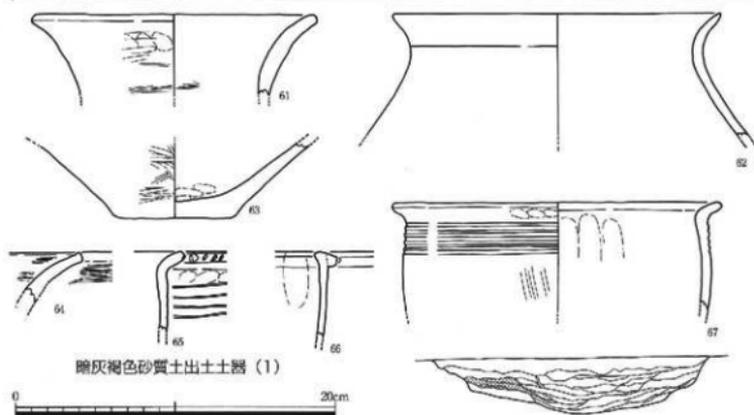
暗灰色粘土出土土器 (1)



Fig.48 SD059出土土器 (3) (S=1/3)

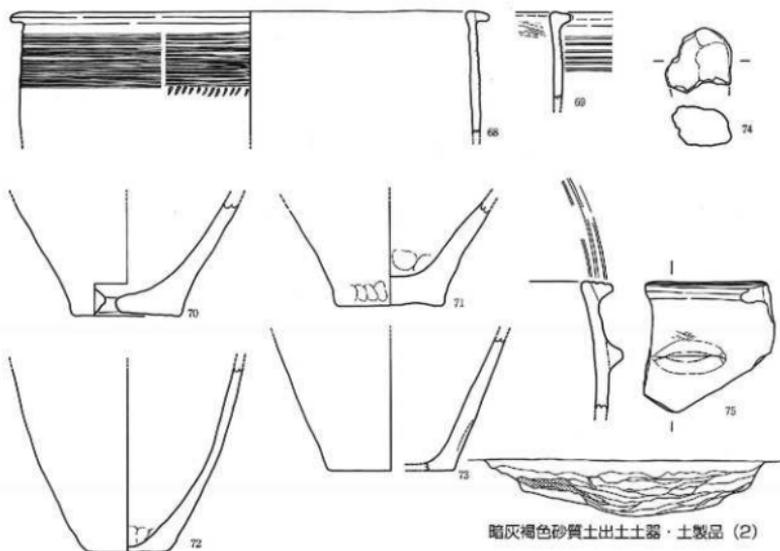


暗灰色粘土出土土器 (2)

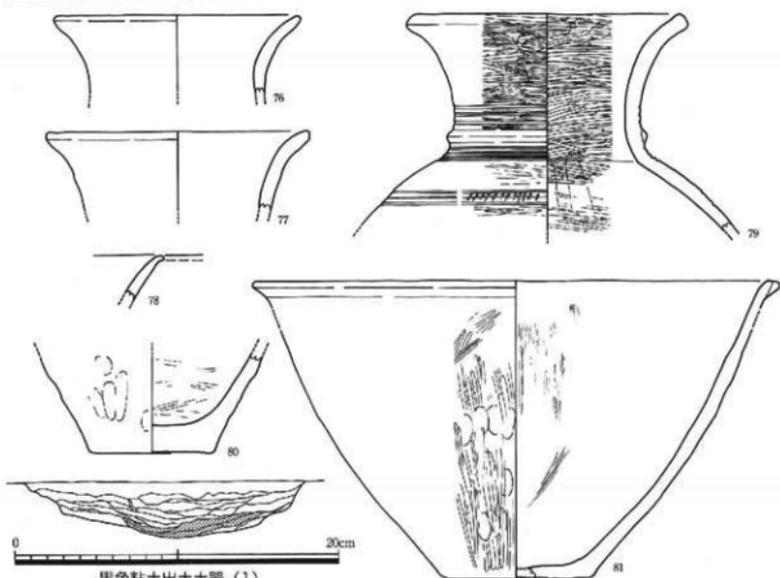


暗灰褐色砂質出土土器 (1)

Fig.49 SD059出土土器 (4) (S=1/3)

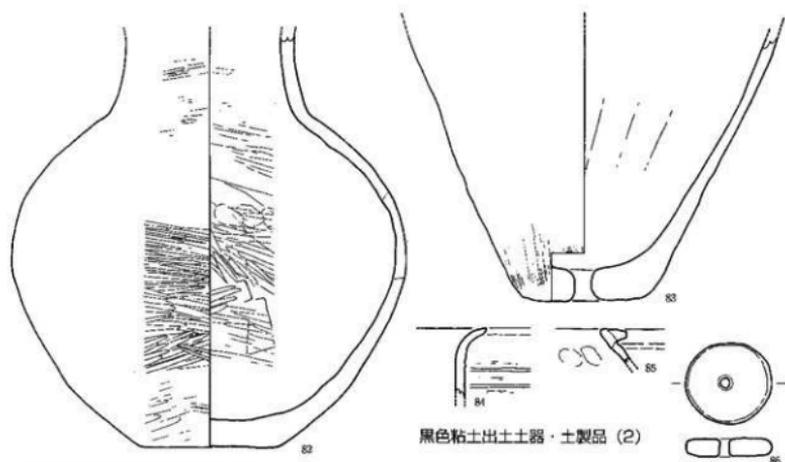


暗灰褐色砂質土出土土器・土製品 (2)

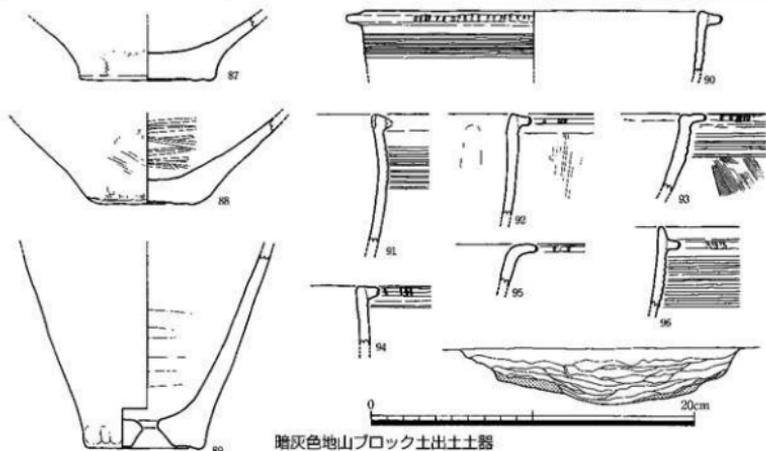


黒色粘土出土土器 (1)

Fig.50 SD059出土土器・土製品 (5) (S=1/3)



黒色粘土出土土器・土製品 (2)



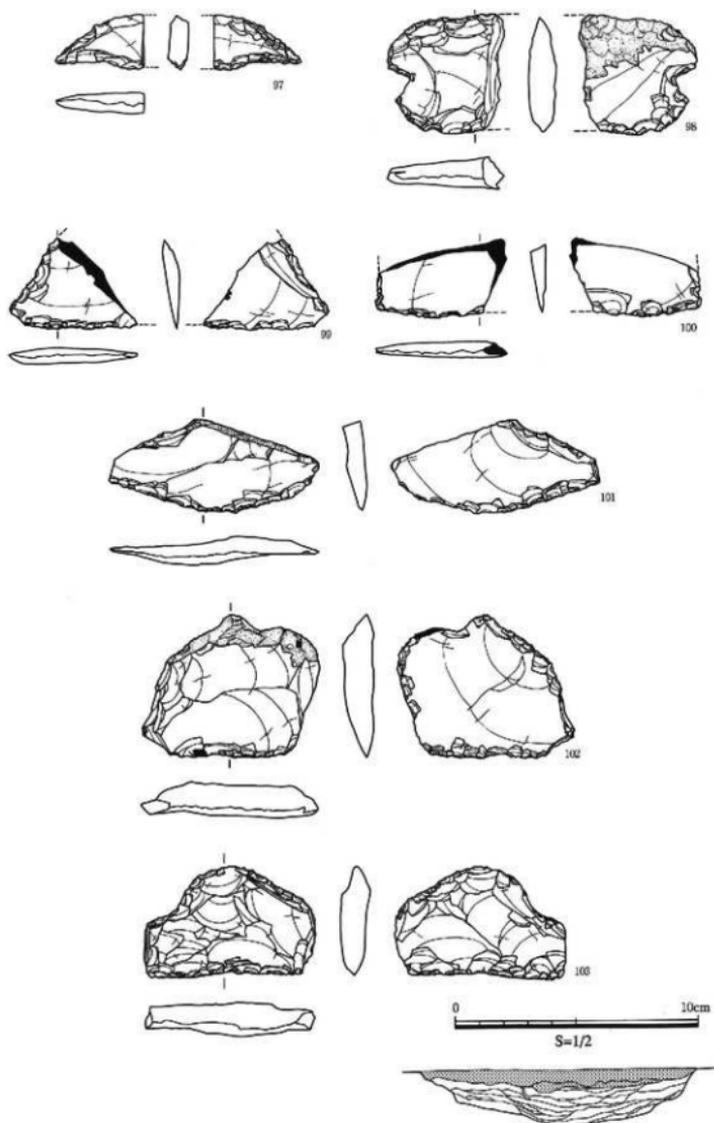
暗灰色地山ブロック土出土土器

Fig.51 SD059出土土器・土製品 (6) (S=1/3)

明瞭である。外面ハケ調整の後ヘラミガキを施し、内面調整は劣化のため不明である。88は復元底径6.2cm、残存高5.3cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部と体部の境界の稜は不明瞭である。外面ハケ調整の後ヘラミガキ、内面は比較的密なヘラミガキを施す。胎土はともに砂粒の少ない褐色のものである。

裏

89は底径7.3cm、残存高12.1cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部と体部の境界の稜は明瞭である。底部にはほぼ中心に焼成後の穿孔を有する。内面には板状工具によるナデ痕跡、外面下半にはナデ調整の痕跡が残る。90は復元口径23.2cm、残存高3.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面がやや傾斜する断面三角形の貼り



黄褐色砂質土出土石器

Fig.52 SD059出土石器 (1)

付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には6条のヘラ掻き沈線を施す。内外面劣化のため調整不明である。91は残存高8.0cmを測る逆「L」字状口縁のものである。口縁部を欠損し、詳細は不明である。口縁直下には8条のヘラ掻き沈線を施す。内外面ナデ調整を施すが、内面は不明瞭である。92は残存高6.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面が傾斜する断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを持つが、口縁直下には沈線等を施さない。内面ナデ調整を、外面ハケ調整を施す。93は残存高4.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、やや厚手である。口縁部上面が水平になる断面三角形の口縁を有し、体部は開きが強い。口唇部にはキザミを、口縁直下には4条のヘラ掻き沈線を施す。内面調整は不明であるが、外面ハケ調整を施す。94は残存高3.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面が水平になる断面四角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを持ち、



Fig.53 SD059出土石器 (2)

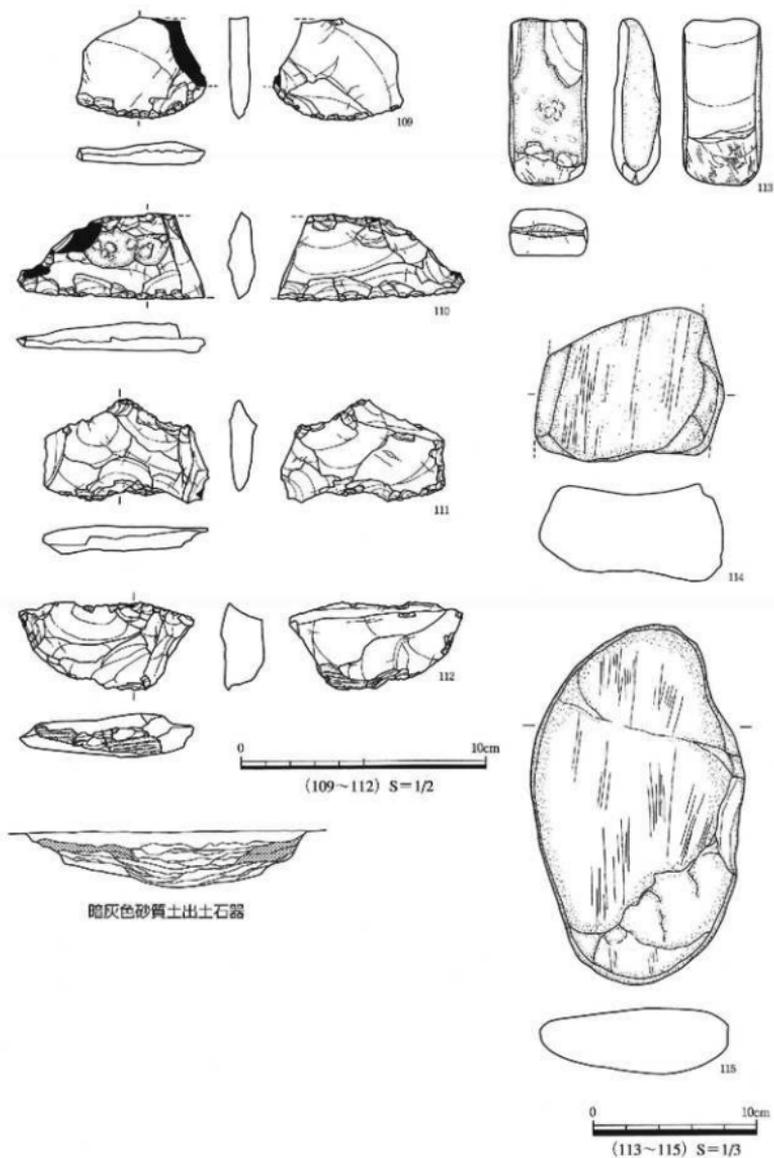


Fig.54 SD059出土石器 (3)

口縁直下には1条のヘラ描き沈線を施す。内面ナデ調整を施すが、外面は劣化のため不明瞭である。95は残存高2.7cmを測る如意状口縁のもので、口頸部の屈曲は強い。口唇部にはキザミを持つが、口縁直下には沈線等を施さない。胎土は径3mm程度の長石粒を少量含み、褐色を呈する。内外面劣化のための調整等は不明である。96は残存高5.0cmを測るもので、口縁部直下に1条の貼り付け突帯を有する。突帯端部にはキザミを施し、口縁直下には9条以上のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を施す。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、91～94はやや粒子が小さく、90・92・93は淡褐色、91・94は褐色を呈する。

石器 (Fig.52～59)

黄褐色砂質土出土石器 (Fig.52)

石小刀 (97)、打製石包丁 (98)、スクレイパー (99～103) が出土した。

石小刀

97は刃部に両面調整によって外湾する外側の刃部と直線形の内側の刃部を作り出している。石小刀の形態分類IIIc類に相当する。基部を折損する。最大長 (3.7cm)、最大幅2.2cm、最大厚0.9cm、重量 (7.0g) を測り、石材はサヌカイトである。

打製石包丁

98は挟りをもつ打製石包丁である。背部に刃潰し加工が、刃部には両面調整が施されている。自然面が腹面体部に残る。折損しており、最大長 (4.8cm)、最大幅4.9cm、最大厚 (1.2cm)、重量 (31.8g) で、石材はサヌカイトである。

スクレイパー

石材はすべてサヌカイトである。99・100は欠損しているため全体の形状は不明である。刃部は二側面に両面調整によって作り出されている。99は最大長 (3.7cm)、最大幅 (5.3cm)、最大厚0.7cm、重量 (9.6g)。100は最大長 (3.2cm)、最大幅 (5.4cm)、最大厚 (0.7cm)、重量 (11.7g)。101は横長剥片を素材としたスクレイパーである。背部に自然面を残し、刃部は両面調整されている。背面体部の剥離面により風化の進んだ二重パテナ面がみられる。完形で、最大長3.8cm、最大幅3.7cm、最大厚1.1cm、重量27.6gを測る。102の背部は自然面と折れ面からなり、刃部には両面調整が施されている。完形で最大長5.9cm、最大幅7.4cm、最大厚1.5cm、重量62.0gである。103は全面を調整し、背部には刃潰し加工が、刃部は両面調整が施されている。刃部は著しく摩滅している。刃部先端を折損する。最大長4.6cm、最大幅 (7.1cm)、最大厚1.5cm、重量 (43.7g) である。

黒褐色粘質土出土石器 (Fig.53)

石鏃 (104)、スクレイパー (105)、石核 (106・107)、石皿 (108) が出土した。

石鏃

104は凹基式の石鏃である。腹面に素材面を残し、逆刺は弱く作り出されている。完形で最大長1.9cm、最大幅1.3cm、最大厚0.3cm、重量0.6gを測る。石材はサヌカイトである。

スクレイパー

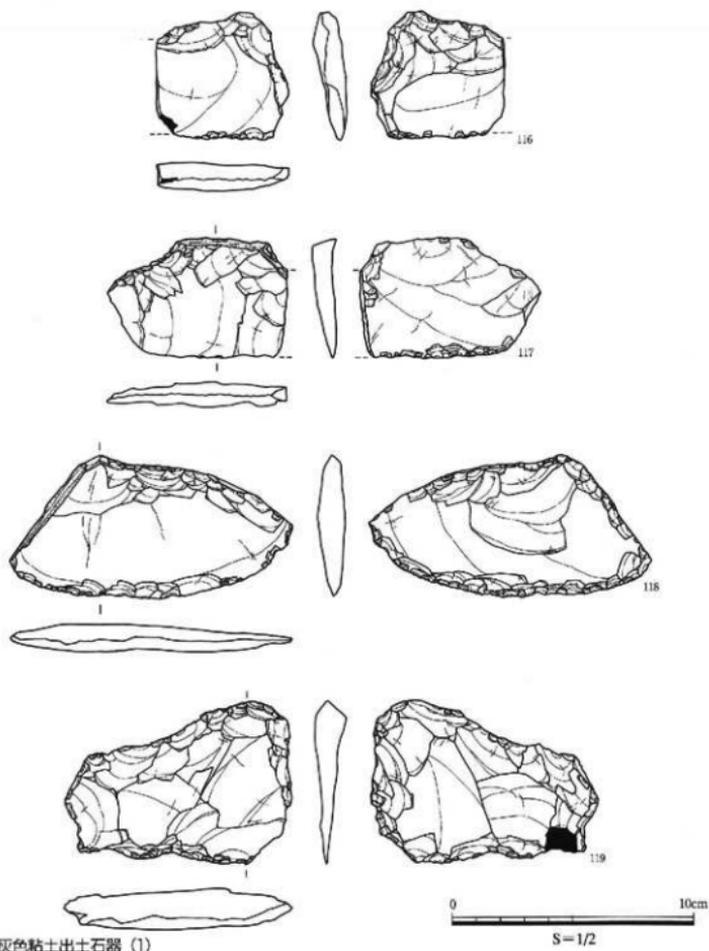
105の背部は折れ面で構成され、刃部は剥片の端部と側面に両面調整によって作り出されている。最大長4.9cm、最大幅7.2cm、最大厚1.3cm、重量45.4gで完形。石材はサヌカイトである。

石核

石材はすべてサヌカイトである。106は自然面を打面として背面側の剥片を剥離した後、同じ自然面を打面として剥片を剥離する。剥離した剥片を石核素材として分割、さらに分割折れ面を打面として剥片剥離を試みているが、剥片の剥離には至っていない。最大長3.3cm、最大幅6.5cm、最大厚0.9cm、重量21.9gである。107は両面がポジティブな剥片を素材として剥片を剥離している。最大長6.1cm、最大幅3.6cm、最大厚1.3cm、重量32.2gを測る。

石皿

108は皿部に窪みと線状痕が確認できる。最大長20.0cm、最大幅12.3cm、最大厚4.7cm、重量1640.0gで、石材は硬質の砂岩である。



暗灰色粘土出土石器 (1)

Fig.55 SD059出土石器 (4)

暗灰色砂質土出土石器 (Fig.54)

スクレイパー (109・110)、石核 (111・112)、磨製石斧 (113)、砥石 (114)、石皿 (115) が出土した。

スクレイパー

石材はすべてサヌカイトである。109は欠損しているため全体の形状はわからないが、刃部は両面調整で外湾する。最大長 (4.1cm)、最大幅 (5.2cm)、最大厚 (1.0cm)、重量 (23.9g) を測る。110は背面体部に自然面を残し、背部には刃潰し加工が施され、刃部は両面調整によって直線状に形成されている。折損しており、最大長3.6cm、最大幅 (7.7cm)、最大厚1.2cm、重量 (29.5g) である。

石核

石材はすべてサヌカイトである。111は折れ面を打面に剥片を剥離している。上端と下端には階段状の剥離痕がみられる。最大長4.1cm、最大幅6.7cm、最大厚1.2cm、重量29.2gを測る。112は折れ面を打面に横長の剥片を剥離している。下端に自然面を残し、階段状の剥離痕がみられる。最大長3.6cm、最大幅7.1cm、最大厚1.8cm、重量45.3gである。

磨製石斧

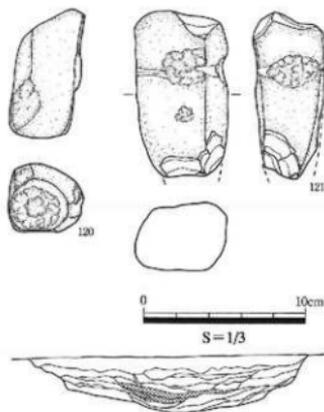
113は刃部に丁寧な研磨を施し、体部は敲打によって仕上げている。刃縁は著しく摩滅している。表面体部を欠損している。最大長10.3cm、最大幅4.9cm、最大厚(2.9cm)、重量(249.0g)で、石材は凝灰岩である。

砥石

114は軟質の砂岩を素材とした砥石である。縦方向の擦痕と窪みが確認できる。欠損しており、最大長(9.7cm)、最大幅(11.7cm)、最大厚6.0cm、重量(994.0g)を測る。

石皿

115は縦方向と縦斜め方向の擦痕が確認できる。最大長22.3cm、最大幅13.3cm、最大厚4.1cm、重量1540.0gで、石材は硬質の砂岩である。



暗灰色粘土出土石器 (2)

Fig.56 SD059出土石器 (5)

暗灰色粘土出土石器 (Fig.55・56)

スクレイパー (116・117)、打製石包丁 (118)、楔形石器 (119)、敲き石 (120・121) が出土した。

スクレイパー

石材はすべてサヌカイトである。116は背部は刃潰し加工が、刃部には簡単な両面調整が施されている。側面を折損し、最大長5.2cm、最大幅(5.5cm)、最大厚1.3cm、重量(35.8g)を測る。117は横長剥片を素材としたスクレイパーである。背部に自然面を残し、刃部は背面からの片面調整である。側面を折損する。最大長4.9cm、最大幅(7.5cm)、最大厚1.0cm、重量39.0gを測る。

打製石包丁

118は挟りのない打製石包丁である。背部は自然面と刃潰し加工、刃部は両面調整が施されている。両側面に自然面を残す。完形で最大長11.7cm、最大幅5.9cm、最大厚1.1cm、重量79.5gを測る。石材はサヌカイトである。

楔形石器

119は上下端に階段状の剥離痕とつぶれ痕がみられる。最大長6.6cm、最大幅9.4cm、最大厚1.7cm、重量90.0gで、石材はサヌカイトである。

敲き石

120は硬質の砂岩製で、最大長8.0cm、最大幅4.7cm、最大厚4.3cm、重量181.6gを測る。121は軟質の砂岩製であばた状の敲打痕と溝状の敲打痕がみられる。最大長(10.3cm)、最大幅5.8cm、最大厚4.4cm、重量(392.0g)を測る。

暗灰褐色砂質土出土石器 (Fig.57)

石匙 (122)、スクレイパー (123~125)、くぼみ石 (126) が出土した。

石匙

122は背腹両面に大きな素材面を残す。背部は自然面と刃潰し加工が、つまみは折れ面と敲打によって形成されている。刃部は簡単な腹面からの片面調整が施されている。完形で最大長5.8cm、最大幅7.8cm、最大厚1.3cm、重量49.0gを測る。石材はサヌカイトである。

スクレイパー

石材はすべてサヌカイトである。123は背部と側面は折れ面によって形成され、刃部の調整が折れ面を切っ

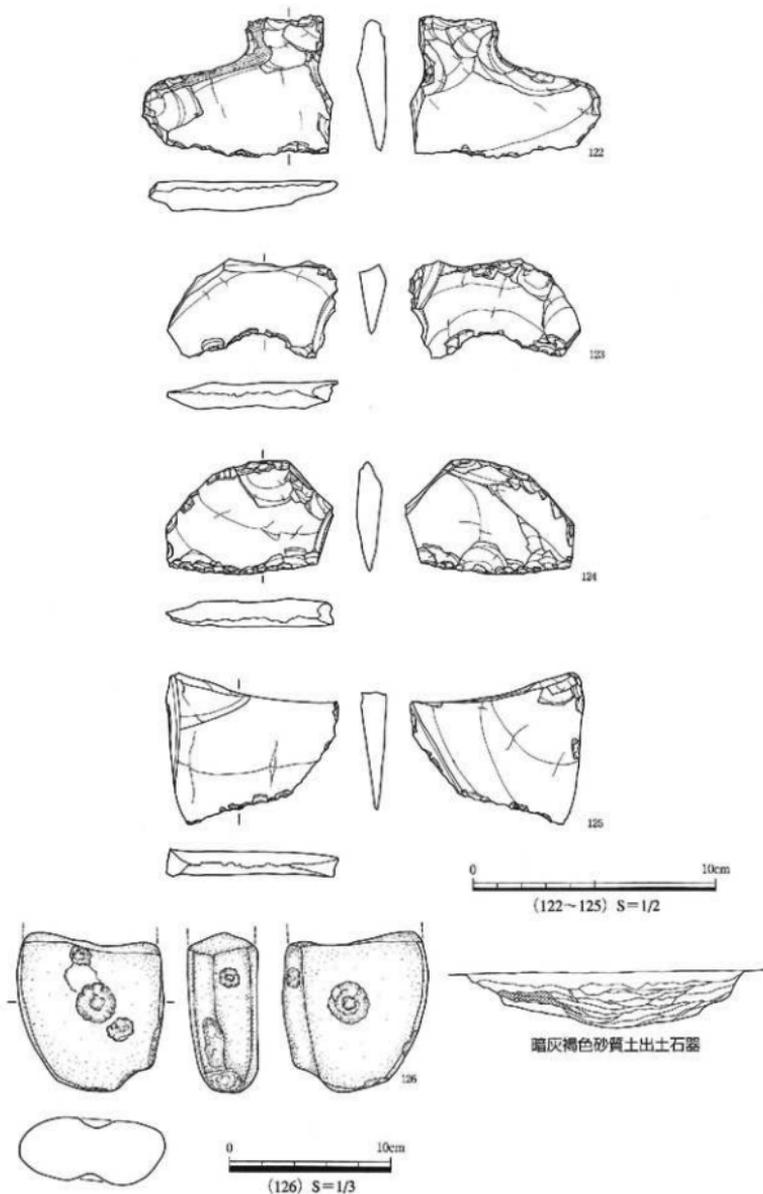


Fig.57 SD059出土石器 (6)

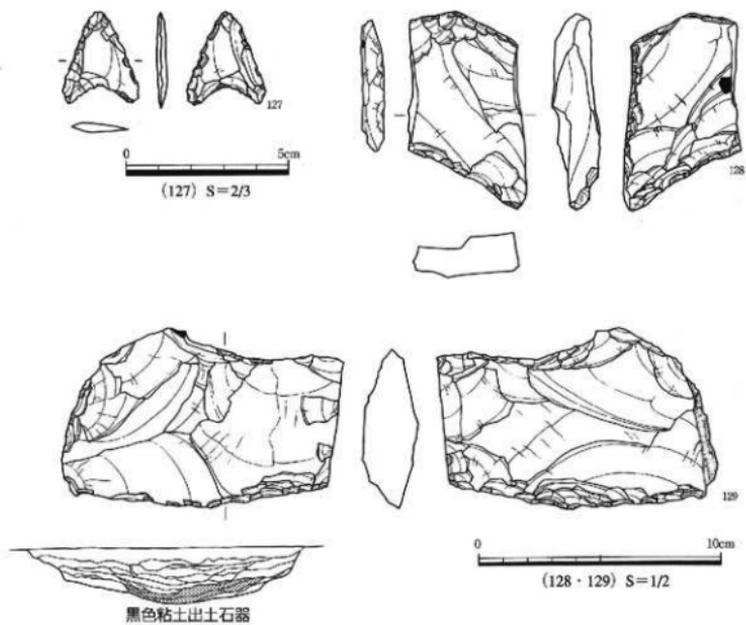


Fig.58 SD059出土石器 (7)

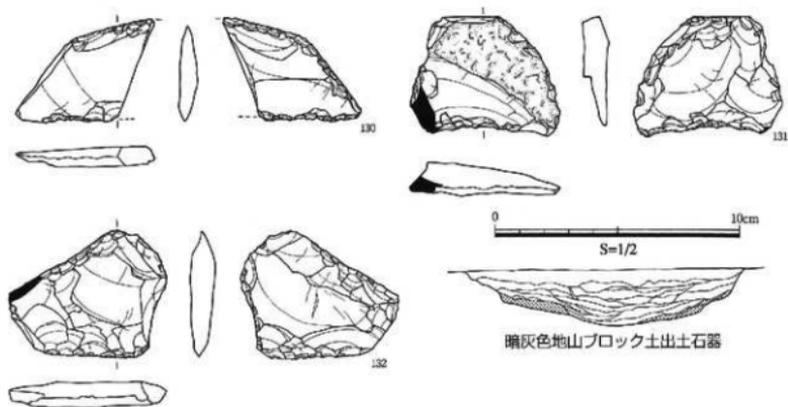


Fig.59 SD059出土石器 (8)

る。刃部は簡単な両面調整によって素材剥片の中央部に湾曲するように作り出されている。完形で最大長4.0cm、最大幅6.9cm、最大厚1.1cm、重量28.8gである。124は横長剥片を素材としたスクレイパーである。背部に刃潰し加工が、刃部には両面調整が施されている。刃部は著しく摩滅している。最大長4.7cm、最大幅6.9cm、最大厚1.2cm、重量43.9gで、完形。125は板状剥片の分幅板材を素材としたスクレイパーである。背部は明瞭な打点のある折れ面である。側面の折れ面には二次加工が、刃部は剥片の端部に極度の細部調整を両面から施されている。完形で最大長6.2cm、最大幅7.1cm、最大厚1.6cm、重量49.0gを測る。

くぼみ石

126は両面に窪み部をもち、表面には弱い敲打痕がみられる。欠損しており、最大長(9.9cm)、最大幅9.1cm、最大厚4.4cm、重量(540.0g)で、石材は軟質の砂岩である。

黒色粘土出土石器 (Fig.58)

石鏃 (127)、楔形石器 (128・129) が出土した。

石鏃

127は凹基式の石鏃である。両面に素材面を残し、側縁部に両面調整を施す。最大長2.8cm、最大幅2.5cm、最大厚0.3cm、重量1.9gで、石材はサヌカイトである。

楔形石器

石材はすべてサヌカイトである。128は分割板材を素材とし、折れ面からも加撃を加えている。上下端部に自然面を残すことから、素材となった石材はそれほど大きくなかったと考えられる。最大長8.0cm、最大幅4.9cm、最大厚1.9cm、重量72.7g。129は上端部に階段状の剥離痕がみられ、下端にはつぶれ痕がみられる。最大長11.5cm、最大幅7.3cm、最大厚2.3cm、重量193.6gを測る。

暗灰色地山ブロック出土石器 (Fig.59)

スクレイパー (130~132) が出土した。

スクレイパー

石材はすべてサヌカイトである。130の背部に刃潰し加工が、刃部は両面調整が施されている。折損しているため全体の形状はわからない。全体に摩滅している。最大長(4.2cm)、最大幅(5.7cm)、最大厚0.9cm、重量(16.8g)を測る。131は背面体部に自然面を残し、背部は折れ面で構成され、刃部は両面調整でやや内湾する。最大長4.9cm、最大幅(6.1cm)、最大厚1.4cm、重量(36.1g)である。132は背部に刃潰し加工が、刃部は両面調整で直線状に形成されている。ほぼ完形で最大長5.2cm、最大幅6.5cm、最大厚1.1cm、重量36.9gを測る。

SD081出土遺物

土器 (Fig.60~71)

暗褐色粘質土出土土器・土製品 (Fig.60・61)

壺 (1~9)、鉢 (10)、甕 (11~21)、甕蓋 (22・23)、高坏 (24)、土製円板 (25) が出土した。

壺

1は口縁部から体部中央付近まで残存する。復元口径11.2cm、残存高13.5cm、復元胴部最大径19.2cmを測り、屈曲のやや強い口縁部を有し、胴部中央下半寄りに最大径が来るものと考えられる。11頸部と胴部上半には3条のヘラ描き沈線が施す。表面劣化が著しく調整は不明である。2は復元口径19.6cm、残存高5.7cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部に面を持つ。口唇部には1条の沈線が走り、口頸部には削り出し突帯を有する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。3は復元口径19.0cm、残存高6.9cmを測る。11頸部は比較的急に開き、端部に面を持つ。口唇部には1条の沈線が走り、11頸部には削り出し突帯を有する。内外面密に横方向のヘラミガキを施すが、外面は表面の劣化が著しく不明瞭である。4は底径10.4cm、残存高7.6cmを測り、直立気味に立ち上がった後広く開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内底面にはナデ調整を、外面ヘラミガキを施す。5は復元底径7.4cm、残存高10.5cmを測り、緩やかに湾曲しながら開く体部を有する。底部の稜は不明瞭である。内底面には指頭圧痕を残し、内外面密にヘラミガキを施す。6は底部から肩部まで残存し、残存高13.6cmを測る。底部は底径5.5cmを測る平底で、胴部は最大径13.5cmを測るラグビーボール形を呈する。体部と底部の境界は明瞭である。胴部にはわずかに沈線が

残る。内外面幅広のヘラミガキを施す。7は底部から口縁部直下まで残存し、残存高26.1cmを測る。底部は底径7.0cmを測る平底で、復元胴部最大径19.6cmを測るラグビーボール形を呈する。体部と底部の境界は明瞭である。肩部に沈線等は見られない。表面劣化のため調整等は不明である。8は復元底径7.8cm、残存高10.4cmを測り、円板状の底部と緩やかに湾曲しながら開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内底面には指頭圧痕を残す。表面劣化のため調整等は不明である。9は復元口径40.4cm、残存高9.7cmを測る大型の壺である。口頸部の屈曲は強く、肩部に若干面を持つ。口頸部には3条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化が著しく、調整等は不明である。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、5はやや粒子が小さく、2は淡紫褐色、4・5は褐色、6・7は灰褐色、8は淡褐色を呈する。

鉢

10は残存高12.8cmを測る如意状口縁のもので、口縁部は緩やかに屈曲する。口唇部のキザミや、口縁部直下の沈線は見られない。胎土は径3mm程度の長石粒と赤色酸化土粒を多量に含み橙褐色を呈する。表面劣化のため調整等は不明である。

甕

11は残存高9.2cmを測る如意状口縁のもので、口縁部は緩やかに屈曲し、口唇部から体部にかけて「S」字状に屈曲する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線と、斜行するキザミ状の線刻を施す。内外面ナデ調整を施す。12は残存高6.9cmを測る如意状口縁のもので、口縁部の屈曲はやや強い。口唇部にキザミを、口縁部直下に4条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。13は残存高5.0cmを測る如意状口縁のもので、口縁部はやや強く屈曲する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。14は残存高4.6cmを測る如意状口縁のもので、口縁部は強く屈曲する。口唇部にキザミを、口縁部直下に4条のヘラ描き沈線を施す。内面劣化のため調整等不明であるが、外面は板状工具によるナデを施す。15は復元口径22.2cm、残存高10.5cmを測る如意状口縁のもので、口縁部は緩やかに屈曲する。口唇部にキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。内面ナデ調整を、外面横方向の細かいハケ調整を施す。16は復元口径22.2cm、残存高14.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面四角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下には6条のヘラ描き沈線を施す。内面ナデ調整を、外面縦方向の細かいハケ調整を施す。17は残存高7.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を若干傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。体部は外側にやや強く張り出す。口唇部にキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等は不明である。18は底径7.0cm、残存高8.6cmを測る。緩やかに屈曲して開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。底部には径1.0cmの焼成後穿孔が見られる。劣化のため調整等は不明である。19は復元口径24.6cm残存高7.0cmを測る如意状口縁のもので、口縁部は短く屈曲する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には5条のヘラ描き沈線と1条の貼り付け尖帯を施す。内外面ナデ調整を施す。20は残存高6.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミは見られず、口縁部直下には数条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等は不明である。21は底径7.3cm、残存高6.6cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。底部には径9mmの焼成後穿孔が見られる。内外面板状工具によるナデ調整を施す。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、11・13・19はやや粒子が小さく、11・12・19・21は暗褐色、13・15は淡褐色、16・17・20は褐色を呈する。14は赤色酸化土粒を多く含む。

甕壺

22は天井部径7.0cm、残存高5.4cmを測り、天井部外面全体的に窪む。体部の開きは狭い。表面劣化のため調整等は不明である。23は口径30.4cm、残存高5.3cmを測り、広く広がる体部を有する。表面劣化のため外面調整は不明であるが、内面にはヘラミガキの痕跡が残る。胎土はいずれも砂粒の多い淡褐色のものである。

高坏 24は脚部底径7.0cm、坏部残存高4.0cm、脚部残存高2.6cmを測る。表面劣化が著しく調整等は不明である。胎土は3mm程度の長石粒を多く含み、淡褐色を呈する。

土製円板

25は直径5.2cm、厚さ1.0cm、重量30.1gを測り、土器転用品と考えられる。打ち欠きの後研磨を行う。中央には棒

状工具による焼成後の両面穿孔が行われる。表面劣化が著しいが、両面ナダ調整を施していると考えられる。

灰褐色細砂出土土器 (Fig.61・62)

壺 (26)、甕 (27~33) が出土した。

壺

26は復元口径13.8cm、残存高8.5cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。肩部上半に削り出し突帯を有すると思われるが、欠損のため詳細は不明である。胎上は径2mm程度の長石粒と赤色酸化土粒を少量含み、橙褐色を呈する。内外面横方向の密なヘラミガキを行う。

甕

27は復元口径32.2cm残存高7.5cmを測る如意状口縁のもので、口縁部は緩やかにやや長く屈曲する。口唇部のキザミは見られないが、I口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等は不明である。28は残存高5.3cmを測る如意状口縁のもので、口縁部はごく短く屈曲する。I口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等は不明である。29は残存高3.8cmを測る如意状口縁のもので、I口縁部は強く水平に屈曲する。I口唇部にキザミを、I口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等は不明である。30は残存高5.4cmを測る如意状口縁のもので、口縁部はごく短く屈曲する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には1条の貼り付け突帯と4条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナダ調整を行う。31は残存高7.5cmを測る逆「L」字状I口縁のもので、I口縁部上面に弱く傾斜する断面三角形の貼り付けI口縁を有する。I口唇部にキザミは見られず、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等は不明である。32は底径7.2cm、残存高8.1cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は不明瞭である。底部には径1.2cmの焼成後穿孔が見られる。砂粒は特に底部付近に集中する。表面劣化が著しく内外面調整等は不明である。33は復元口径16.9cm残存高12.8cmを測るもので、直立する口縁部と、樽形に張る体部を有し、I口縁部直下には断面三角形の貼り付け突帯を有する。口唇部のキザミは見られないが、突帯直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内面ユビオサエとナダ調整、外面板状工具によるナダ調整を施す。いずれも胎上は図化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、28はやや粒子が小さく、28は淡褐色、32・33は暗褐色を呈する。27・33は赤色酸化土粒を多く含む。

明黄褐色粘土出土土器・土製品 (Fig.62~67)

壺 (34~76)、甕 (77~108)、鉢 (109~113)、甕蓋 (114~119)、壺蓋 (120~122)、焼土塊 (123・124)、土製円板 (125) が出土した。

壺

34は復元口径12.2cm、残存高4.8cmを測る。口縁部は緩やかに湾曲して開き、端部には面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、僅かにタテハケの痕跡が見られる。頸部には1条の突帯を有す。35は復元口径16.2cm、残存高5.7cmを測る。I口縁部は比較的急に開き、端部を僅かにつまみ上げる面を持つ。内外面横方向のヘラミガキを施し、頸部には2条の削り出し突帯を有す。36は復元口径16.2cm、残存高6.9cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部に僅かな面を持つ。頸部付近に横方向のヘラミガキが見られる。37は復元口径14.4cm、残存高11.8cmを測る。口縁部は緩やかに屈曲して開き、端部はやや尖り気味に納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には沈線に区画された竹管文を施す。38は復元口径17.6cm、残存高8.6cmを測る。口縁部は水平近くまで短く折り返し、端部は肥厚して納める。表面の劣化が著しく調整等は不明瞭であるが、内外面にヘラミガキの痕跡がわずかに残る。頸部には2条の沈線で縁取られた1条の削り出し突帯を有する。39は復元口径14.0cm、残存高5.0cmを測る。口縁部は「く」字状に開き、端部は丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には削り出しによる段を有す。40は復元口径15.5cm、残存高5.8cmを測る。口縁部はやや緩やかに湾曲して開き、端部はやや肥厚する。表面の劣化が著しく調整等は不明瞭であるが、内面には横方向のヘラミガキを施す。41は復元口径17.5cm、残存高7.0cmを測る。I口縁部は比較的緩やかに開き、端部は丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には1条のキザミを持つ突帯を有す。42は復元口径18.2cm、残存高9.2cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。タテハケの後割部外面に縦方向の、口縁部内外面には横方向のヘラミガキを行う。頸部には3条のヘラ描き沈線を施す。43は復元口径18.8cm、残存高10.6cmを測る。口縁部は比較的直線的に

聞き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等是不明であるが、頸部には2条の削り出し突帯、肩部にも2条の削り出し突帯を有す。口縁部には径5mm前後の焼成前に穿たれた円孔が貫通する。44は復元口径12.7cm、残存高13.8cm、胴部最大径17.5cmを測る。口縁部は比較的直線的に開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等是不明であるが、頸部に2条の削り出し突帯、肩部に4条の沈線を施す。肩部沈線は掻き取りによって削り出し突帯状を呈している。45は復元口径14.6cm、器高23.5cm、底径6.6cmを測る。口縁部は比較的直線的に開き、端部に若干面を持つ。表面の劣化が著しく調整等是不明であるが、内面にはヘラミガキが残る。頸部に3条のヘラ描き沈線、肩部にも3条の沈線を施すが、それぞれの沈線際を掻き取ることにより削り出し突帯状を呈している。明黄褐色粘土堆積の初期に人為的に置かれた土器の一つである。46は復元口径18.9cm、残存高10.4cmを測る。口縁部は比較的直線的に開き、端部に若干面を持つ。表面の劣化が著しく調整等是不明である。頸部に2条の沈線を施すが、それぞれの沈線際を掻き取ることにより削り出し突帯状を呈している。内面に1条の貼り付け突帯を有す。47は口縁部から肩部のみが残存し、口縁部を欠損する。残存高10.6cmを測る。外面に縦方向のヘラミガキが残り、頸部には断面三角形の貼り付け突帯を有す。48は大型壺の破片である。残存高8.5cmを測る。口縁部は緩やかに屈曲して開き、端部に若干面を持つ。口唇部には1条の沈線とキザミを施す。表面の劣化が著しく調整等是不明であるが、頸部に3条の沈線を有す。49は口縁部の破片である。残存高6.6cmを測る。比較的直線的に開いた後強く屈曲させ、端部を丸く納める。内外面横方向のヘラミガキを行い、頸部に2条の沈線を施す。50は肩部の破片と考えられる。残存高4.0cmを測る。2条沈線に画された区画に多数の竹管文を施す。51は残存高4.4cmを測る。「く」字状に強く外反する口縁部を有し、端部に面を持つ。口唇部には1条のヘラ描き沈線を有する。口縁部直下にも1条の沈線を施す。表面の劣化が著しく調整等是不明である。52も肩部の破片と考えられる。残存高4.5cmを測る。外面に2つの上頭状の突起を貼り付ける。複数の沈線に区画されている可能性があるが、表面劣化のため詳細は不明である。53は復元口径38.4cm、残存高11.9cmを測る。直立する頸部と比較的に開く口縁部を有し、端部には面を持つ。口唇部には1条の沈線を施す。内面僅かにヘラミガキの痕跡残るが、外面は表面の劣化が著しく調整等是不明である。頸部には4条のヘラ描き沈線を施し、沈線際を掻き取ることにより削り出し突帯状に仕上げる。また、内面にはキザミメを持つ1条の貼り付け突帯を有す。54は底径6.7cm、残存高11.1cm、胴部復元最大径23.2cmを測り、緩やかに開く扁平な体部を有する。底部の縁は明瞭である。内外面劣化が著しく、調整等是不明であるが、外面には横方向のヘラミガキが僅かに残る。55は復元底径7.8cm、残存高11.2cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の縁は不明瞭で、外底面ドーナツ状にやや窪む。内面には板状工具によるナダと横方向のヘラミガキを施すが、外面は表面の劣化が著しく調整等是不明である。56~70はいずれも底部の破片である。56は復元底径5.9cm、残存高4.0cmを測り、破損が著しい。表面の劣化が著しく、調整等是不明である。57は復元底径7.8cm、残存高4.9cmを測り、立ち上りの強い直線的な体部を有する。底部の縁は明瞭で内外面ヘラミガキを行う。ヘラミガキは外底面に及ぶ。58は底径6.8cm、残存高4.8cmを測り、直線的な体部を有する。底部の縁は明瞭で外面ヘラミガキ、外面板状工具によるナダを施す。59は底径7.2cm、残存高4.6cmを測り、広く開く体部を有する。底部の縁は明瞭で、表面劣化のため調整等是不明である。60は復元底径7.6cm、残存高8.8cmを測り、立ち上りの強い直線的な体部を有する。底部の縁は明瞭で内底面には指頭圧痕が多く残る。61は底径9.0cm、残存高6.8cmを測り、立ち上りの強い直線的な体部を有する。底部の縁は不明瞭である。62は復元底径8.5cm、残存高7.3cmを測り、緩やかに湾曲する体部を有する。底部の縁は明瞭で内底面には指頭圧痕を残す。63は底径7.4cm、残存高8.3cmを測り、直に立ち上がった後直線的に広がる体部を有する。底部の縁は明瞭で、表面劣化のため調整等是不明である。64は底径8.4cm、残存高5.9cmを測り、立ち上りの強いやや外湾する体部を有する。底部の縁は不明瞭で内外面ヘラミガキを行う。65は底径8.9cm、残存高4.5cmを測り、広く開く体部を有する。底部の縁は明瞭で内外面ヘラミガキを施す。66は底径9.5cm、残存高6.7cmを測り、広く開く直線的な体部を有する。内外面表面劣化のため調整等是不明である。67は底径12.6cm、残存高6.7cmを測り、広く開く直線的な体部を有する。底部の縁は明瞭でやや上げ底状に窪む。外面ヘラミガキを施し、内面は表面劣化のため調整不明である。68は復元底径8.4cm、残存高7.2cmを測り、広くひろがった後若干湾曲する体部を有する。底部の縁は明瞭で内外面ヘラミガキを施す。69は底径14.5cm、残存高7.4cmを測り、直に立ち上がった後直線的に広く開く。底部の縁は明瞭で表面劣化のため内外面調整等是不明である。70は復元底径12.4cm、残存高8.4cmを測り、立ち上りの強い直線的な体部を有する。底部の縁は明瞭で外面縦方向のハケ調整を施す。71

~76は小型の壺である。71は底径4.8cm、残存高4.3cmを測り、立ち上がりの強い直線的な体部を有する。内外面ナデ調整を施す。72は復元底径3.7cm、残存高5.9cm、胴部復元最大径7.2cmを測り、やや下膨れのプロポジションを呈す。表面劣化のため内外面調整等は不明である。73は底径5.2cm、残存高6.2cmを測り、やや湾曲する体部を有する。内面ユビオサエと板状工具によるナデ調整、外面縦方向のハケ調整を施す。74は底径3.7cm、残存高2.4cmを測り、円板状に厚化する底部を有する。底部の横は明瞭で内外面ナデ調整を施す。75は底径2.6cm、残存高4.3cm、胴部復元最大径7.5cmを測り、胴部中央で「く」字状に屈曲するソロバン形（？）の体部を有する。胴部上半には縦方向のヘラ描き沈線と2条・単位として6もしくは7分割に施す。76は復元底径5.2cm、残存高2.8cmを測り、内外面ヘラミガキを施す。いずれも胎土は酸化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、40・53・64はやや粒了が小さく、42・48・57は砂粒が少ない。34・37・38・41・48・67・67・74は淡褐色、42・44・46・48・52・57・58・72は暗褐色、55・68は灰褐色、75は黒褐色を呈する。37は赤色酸化土粒を多く含む。

壺

77は残存高13.2cmを測る如意状口縁のもので、口縁部から体部中央付近にかけて緩やかに「S」字状を呈する。口唇部にキザミは持たないが、口縁部直下に2もしくは3条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。あるいは鉢の可能性も考えられる。78は残存高4.5cmを測る如意状口縁のもので、緩やかに長く外反する口縁部を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線と沈線間に刺突文を有する。表面劣化のため調整等不明である。79は残存高5.5cmを測る如意状口縁のもので、短く緩やかに外反する口縁部を有する。口唇部のキザミは持たないが、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線とそれに切られる斜行線刻を施す。80は残存高5.4cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部を有する。口唇部にキザミを持ち、口縁部直下に3条のヘラ描き沈線とそれに割られる山形文を施す。内外面ナデ調整を施す。81は残存高8.5cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。82は復元口径24.0cm、残存高16.3cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部と若干張る体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内面ユビオサエの後ナデ調整を、外面は板状工具によるナデ調整を施す。83は復元口径25.8cm、残存高6.1cmを測る如意状口縁のもので、緩やかに長く外反する口縁部を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線（半袋竹管か？）と沈線間に竹管文を施す。表面劣化のため調整等不明である。84は復元口径21.8cm、残存高6.0cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有する。外面ナデ調整を行い、内面口縁部に横方向のヘラミガキを施す。85は復元口径20.6cm、残存高9.9cmを測る如意状口縁のもので、非常に弱く長く外反する口縁部と、わずかに屈曲する体部を有する。口唇部にキザミは持たないが、口縁部直下には1条の沈線を有する。表面劣化のため調整等不明である。86は復元口径20.5cm、残存高4.0cmを測る如意状口縁のもので、やや長く強く外反する口縁部を有する。口唇部にキザミは持たず、沈線の有無については不明である。表面劣化のため調整等不明である。87は復元口径19.6cm、残存高9.2cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部と、直線的な体部を有する。口唇部にキザミは持たないが、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を施す。88は復元口径20.4cm、残存高7.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、短く強く外反する口縁部とやや強く張る体部を有する。口縁部折り曲げにより成形したと考えられ、如意状口縁との中間的な面も見られる。口唇部にキザミは持たないが、口縁部直下に5条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。89は復元口径20.1cm、残存高7.3cmを測る如意状口縁のもので、強く外反する口縁部とやや強く張る体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内面ユビオサエの後ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を施す。90は残存高4.8cmを測るもので、短く直立する口縁部と、口縁部直下に1条の貼り付け突帯を有する。突帯にはキザミを施す。表面劣化のため調整等については不明である。91は残存高8.3cmを測る如意状口縁のもので、短く外反する口縁部とやや直線的な体部を有する。口縁部直下には1条の貼り付け突帯を有し、突帯にはキザミを施す。表面劣化のため内面調整不明であるが、外面には僅かに横方向のヘラミガキが残る。92は復元口径33.6cm、残存高12.9cmを測る如意状口縁のもので、外反する口縁部とやや強く張る体部を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には3~4条のヘラ描き沈線を施す。内外面劣化が著しいが、外面には僅かにヘラミガキが見ら

れる。93は復元口径36.0cm、残存高14.3cmを測る如意状口縁のもので、緩やかに長く外反する口縁部とやや強く張る体部を有する。I口唇部のキザミや口縁部直下の沈線は見られない。内外面劣化のため調整不明である。94は復元口径36.2cm、残存高14.2cmを測る如意状I縁のもので、やや強く外反する口縁部と緩やかに屈曲する体部を有する。口唇部のキザミや、I縁部直下の沈線は見られない。表面劣化が著しいが、体部外面には横方向のヘラミガキが僅かに残る。95は残存高6.2cmを測る逆「L」字状I縁のもので、口縁部上面を水平にする肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、I縁部直下には5～6条のヘラ描き沈線を施す。内外面劣化のため調整等不明である。96は残存高8.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線、その間に刺突文を施す。内面は劣化のため調整等不明であるが、外面にはナデの痕跡を有する。97は残存高14.0cmを測る逆「L」字状I縁のもので、口縁部上面をやや外傾させる貼り付けI縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を施す。98は残存高5.3cmを測る逆「L」字状I縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや、I縁部直下の沈線は見られない。内外面ナデ調整を施す。99は残存高6.0cmを測る逆「L」字状I縁のもので、口縁部上面を傾斜させる貼り付けI縁を有する。口唇部にはキザミを、I縁部直下には2条のヘラ描き沈線と斜行する線刻を施す。内外面ナデ調整を施す。100は復元口径20.0cm、残存高5.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする肉厚の貼り付けI縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。内面板状工具によるナデ調整、外面左上がりのハケ調整を施す。101は復元口径22.3cm、残存高6.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜する肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、I縁部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を施す。102は復元口径26.8cm残存高3.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、I縁部上面をやや傾斜させる肉厚の貼り付けI縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には6条のヘラ描き沈線を施す。内面にはユビオサエの痕跡が残る。103～108は底部の破片である。103は復元底径6.0cm、残存高5.0cmを測る。直立した後緩やかに湾曲して開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。内外面ナデ調整を行う。104復元底径5.4cm、残存高4.6cmを測る。円板状の底部と直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。内面ナデ調整を施すが、外面は劣化のため調整等は不明である。105は底径6.6cm、残存高4.8cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は不明瞭である。内外面ナデ調整を行う。106は底径7.0cm、残存高6.4cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。外面板状工具によるナデ調整を行うが、内面は劣化のため調整等は不明である。107は復元底径8.4cm、残存高4.9cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。劣化のため調整等は不明である。底部には復元径2.6cmの焼成後の穿孔が存在する。108は底径7.3cm、残存高7.3cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。劣化のため調整等は不明である。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、81・82・84・100はやや粒子が小さく、97は粒子が少ない。77・81・86・88・92・93・103・107は淡褐色、79・82・84・97・99・101は暗褐色、87・100は灰褐色を呈する。

鉢

109は復元口径12.4cm、器高7.8cm、底径5.7cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、口縁部から緩やかに「S」字状に湾曲する体部を有する。内外面劣化のため調整等は不明である。110は復元口径12.3cm、残存高6.6cmを測る。直立気味の口縁部と、緩やかに湾曲する体部を有する。外向劣化のため調整不明だが、内面には横方向のヘラミガキを施す。111は復元口径13.9cm、残存高6.4cmを測る。直線的な体部と丸く納めるI縁部を有し、内面板状工具によるナデ調整、外面横方向のヘラミガキを行う。112は残存高5.5cmを測り、緩やかに屈曲した後に端部を丸く納める口縁部を有する。内面劣化のため調整不明、外面横方向のヘラミガキを行う。113は残存高5.6cmを測り、直線的な体部と円柱状の突起を有する。把手付の鉢になるかと思われるが類例に乏しく、全体像は不明である。いずれも胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものである。

甕蓋

114は天井部径7.2cm、残存高7.3cmを測り、緩やかに湾曲して開く体部を有する。表面劣化のため調整等は不明であるが、天井部内面にはユビオサエを施す。115は天井部径5.8cm、器高8.7cm、復元口径23.8cmを測り、直線的に

広く開く体部を有する。内外面横方向のヘラミガキを施し、天井部内面にはユビオサエを施す。116は復元口径31.1cm、残存高2.6cmを測り、湾曲して開く口縁部を有する。内外面ヘラミガキを施す。117は天井部径5.8cm、残存高4.4cmを測り、緩やかに湾曲して開く体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である118は天井部径5.8cm、残存高7.0cmを測り、緩やかに湾曲して開く体部を有する。内外面ヘラミガキを施し、天井部内面にはユビオサエを施す。119は天井部径3.6cm、器高3.3cm、復元口径5.6cmを測り、直線的に開く体部を有する。表面劣化のため調整等は不明であるが、天井部内面にはユビオサエを施す。胎土はいずれも3~5mmの砂粒を多く含み、114・117・119は橙褐色、115は淡褐色、116が暗褐色を呈し、115・118は赤色酸化土粒を多く含む。

壺蓋

120は復元口径9.7cm、残存高1.6cmを測る。外面には貼り付けによる突起を2箇所残す。口縁部には2つの焼成前穿孔が存在する。中央付近は欠損し、つまみの有無・形状は不明である。外面表面劣化のため調整不明であるが、内面は密なヘラミガキを施す。121は口径10.8cm、残存高3.6cmを測り、つまみの一部を欠損する。内外面にヘラミガキを施す。天井部中央には焼成前の穿孔を1つ有する。122は壺蓋のつまみ部分と考えられるが、あるいは土製円板に転用されている可能性がある。中央部には焼成前の穿孔を1つ有する。胎土は120が3mm程度の長石を多く含み暗褐色、121が2mm程度の長石を多く含み暗褐色、122が2mm程度の長石を多く含み橙褐色をそれぞれ呈する。

焼土塊

123は一辺4cm前後の断面三角形を呈し、重量44.3gを測る。片手で粘土を握りつぶしたような形状を呈する。124はいびつな楕円形を呈し、半分以上欠損すると考えられる。胎土はいずれも淡等褐色を呈し砂粒もスサもほとんど含まない。

土製円板

125は直径8.0cmの円形を呈し、土製転用のものである。周囲を打ち欠きした後研磨等は行わない。重量83.0gを測る。外面表面劣化のため調整不明、内面ヘラミガキ調整を施す。胎土は砂粒の少ない淡褐色のものである。

暗灰色粘土出土土器 (Fig.68~71)

壺 (126~151)、甕 (152~167)、鉢 (169)、壺蓋 (168~171)、壺蓋 (172)、高坏 (173・174) が出土した。

壺

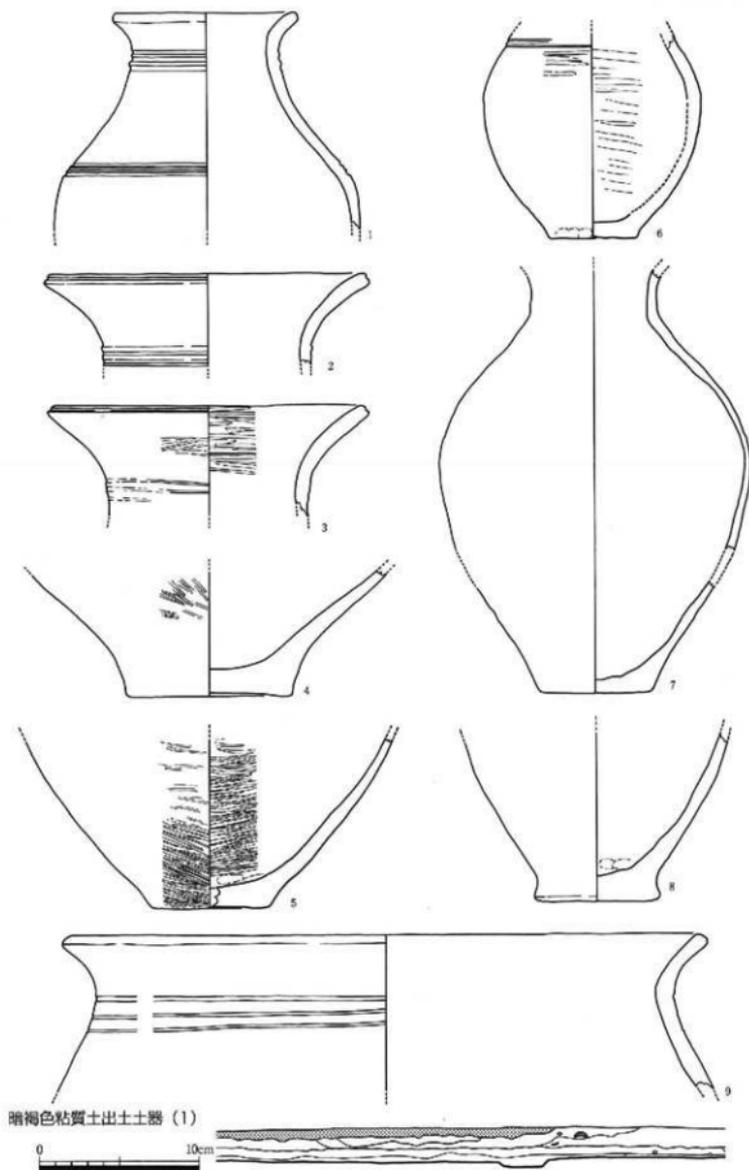
多くの壺が出土しているが、特にほぼ完形で出土した135・136は暗灰色粘土敷面上で出土しており、暗灰色粘土堆積最終段階、黄褐色粘土堆積開始の時期に該当するものである。

126は復元口径14.0cm、残存高5.7cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には貼り付けによる乳頭状突起を有する。127は復元口径12.6cm、残存高7.9cmを測る。直線的に立ち上がる頸部と比較的急に開く口縁部を有し、端部わずかに面を持つ。内外面横方向のヘラミガキを有する。128は口径15.7cm、残存高6.5cmを測る。口縁部は緩やかに開き、端部に弱い面を持つ。頸部外面に縦方向のハケ調整、口縁部内外面に横方向のヘラミガキを施す。頸部には3条のヘラ抜き沈線を施す。129は復元口径16.8cm、残存高9.1cmを測る。直立気味の頸部と緩やかに開く口縁部を有し、口縁端部は肥厚して納める。内外面ナデ調整の後横方向のヘラミガキを施す。頸部には3条のヘラ抜き沈線を施し、その後周辺を掻き取ることにより削り出し突起状を形成する。130は復元口径17.3cm、残存高8.7cmを測る。緩やかな肩部に、口縁部は比較的急に開き、端部は弱い面を持つ。外面頸部に3条のヘラ抜き沈線を施し、周辺を削り出して突起状を呈する。調整等は劣化のため不明である。131は復元口径15.8cm、残存高10.9cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。内外面横方向のヘラミガキを施す。頸部及び肩部に2条のヘラ抜き沈線を施す。132は口径17.9cm、残存高9.4cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。内外面横方向のヘラミガキを施すが、内面は残存状態が悪い。口頸部境界付近には1条の貼り付け突起を有する。133は復元口径16.6cm、残存高5.5cmを測る。口縁部は広く開き、端部を丸く納める。内面表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、外面には横方向のヘラミガキが残る。頸部には4条以上のヘラ抜き沈線を施し、周辺を掻き取ることによって削り出し突起状に成形する。口縁部内面には1条の貼り付け突起を有する。134は頸部みの破片である。残存高は5.4cmを測る。口頸部境界の屈曲はやや強く、2条のヘラ抜き沈線を有する。135は復元口径6.3cm、残存高16.5cm、胴部最大径14.3cm、を測る。口縁部は比較的急に開き、端部に面を持つ。外面横方向のヘラミガキが多く残る。頸部には3条のヘラ抜き沈線、肩部には4条のヘラ抜き

沈線を有する。136は口径11.3cm、底径6.6cm、器高23.3cm、胴部最大径20.8cmを測る。I線部は比較的急に開く。外面横方向のヘラミガキを施し、頸部には3条のヘラ描き沈線と竹管文を、肩部には3条のヘラ描き沈線を施す。137は復元口径19.2cm、残存高8.9cmを測る。直線的な頸部と、上半で急激に開く口縁部を有し、I線端部は丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には単位の粗い刻みを施す1条の貼り付け帯を有す。138は残存高7.9cmを測る。口縁部は肩部付近のみ軽く湾曲し、口縁部直下に削り出しによる段を有す。内面表面の劣化が著しく調整不明であるが、外面には横方向のヘラミガキを施す。139は残存高6.1cmを測る。口縁部は「く」字状に外反し、端部に向を持つ。口唇部には1条の沈線を有する。口頸部境界付近には段を有する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。140は肩部の破片である。残存高6.2cmを測る。沈線に区画された範囲にヘラ描きにより斜格子文を施す。表面劣化のため調整等は不明である。141は体部の破片である。残存高3.5cmを測る。2条の半截竹管文周に竹管文を施す。内外面ナデ調整を行う。142は体部の破片である。残存高4.6cmを測る。2条のヘラ描き沈線間にヘラ描きによる斜格子文を施す。143は底径4.2cm、残存高4.0cmを測り、円柱状の底部と緩やかに湾曲して開く体部を有する。内底面には指頭汗痕を残すが、表面の劣化が著しく、調整等は不明である。144は復元底径7.0cm、残存高2.0cmを測る。底部の稜は不明瞭で、外底面ドーナツ状にやや窪む。表面の劣化が著しく、調整等は不明である。145は底径3.1cm、残存高1.8cmを測る小型のものである。緩やかに開く体部を有する。表面の劣化が著しく、調整等は不明である。146は復元底径7.2cm、残存高6.4cmを測り、直立気味に立ち上がった後緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内面板状工具によるナデ痕跡が残るが、外面は表面の劣化が著しく、調整等不明である。147は復元底径9.2cm、残存高4.7cmを測り、緩やかに開く体部を有する。内外面ナデ調整を施し、内面には炭化物が付着する。148は底径6.4cm、残存高8.5cmを測り、緩やかに開く球形の体部を有する。内面粗いヘラミガキ、外面密な横方向のヘラミガキを施す。149は底径7.8cm、残存高9.0cmを測り、緩やかに湾曲しながら開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内底面には指頭汗痕を残すが内面表面の劣化が著しく、調整は不明、外面にはわずかに横方向のヘラミガキを有する。150は復元底径7.8cm、残存高13.4cm、胴部復元最大径25.0cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は不明瞭である。表面の劣化が著しく、調整等は不明である。151は底径7.5cm、残存高12.8cmを測り、緩やかに湾曲しながら開く体部を有する。底部の稜は不明瞭である。内面横方向の粗いヘラミガキ、外面縦方向のヘラミガキを行う。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、130・150はやや粒子が小さく、128・138は粒子が少ない。128・136・139は淡褐色、138は暗褐色、132・133・140・144は灰褐色を呈する。

堊

152は復元口径17.6cm、残存高7.1cmを測る如意状I線のもので、短く強く外反するI線部と緩やかに湾曲する体部を有する。口唇部にキザミ及び口縁部直下の沈線を持たない。表面劣化のため調整等不明である。153は残存高7.7cmを測る如意状I線のもので、緩やかに外反する口縁部と直線的な体部を有する。口唇部のキザミは見られず、I線部直下には2条のヘラ描き沈線を有す。表面劣化のため調整等不明である。154は残存高6.2cmを測る如意状I線のもので、やや強く外反する口縁部とやや強く張る体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線と刺突文を施す。外面ナデ調整を施すが、内面表面劣化のため調整等不明である。155は残存高4.1cmを測る如意状I線のもので、「く」字状に強く外反するI線部を有する。I唇部にキザミを、I線部直下に2条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。156は口径19.7cm、残存高14.4cmを測る如意状I線のもので、短く強く外反する口縁部とやや強く張る体部を有する。口唇部にキザミ、口縁部直下に3条の沈線を有し、内外面ナデ調整を施す。157は復元I径21.0cm、残存高13.0cmを測る如意状I線のもので、やや長く外反する口縁部と弱く張る体部を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため調整等不明である。158は復元口径22.4cm、残存高7.7cmを測る如意状I線のもので、短く外反する口縁部と緩やかに湾曲する体部を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下に3条のヘラ描き沈線を有する。内面ユビオサエ、外面板状工具によるナデ調整を行う。159は復元口径24.6cm、残存高12.6cmを測る如意状I線のもので、短く強く外反する口縁部と直線的な体部を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下に4条のヘラ描き沈線を有し、外面体部上半に横方向のヘラミガキを有する。160は残存高11.5cmを測る如意状I線のもので、強く外反するI線部と直線的な体部を有する。口唇部にキザミは持たないが、口縁部直下には7条のヘラ描き沈線を有する。内面板状工具によるナデを、



暗褐色粘質土出土土器 (1)

Fig.60 SD081出土土器 (1) (S=1/3)

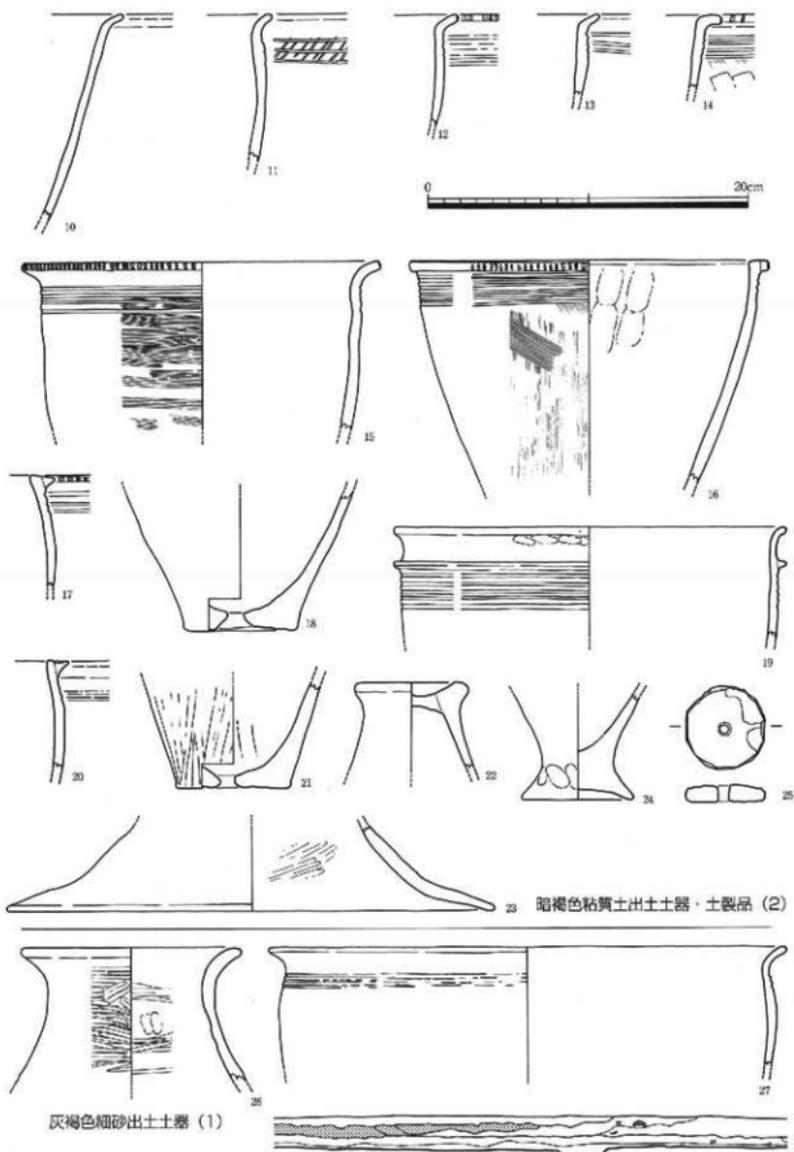


Fig.61 SD081出土土器・土製品 (2) (S=1/3)

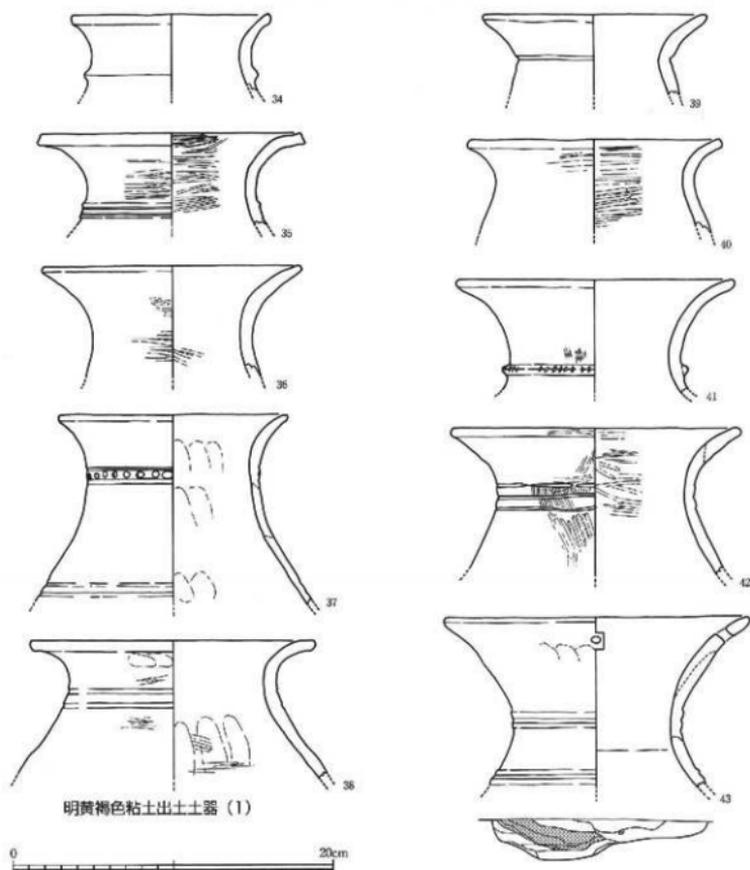
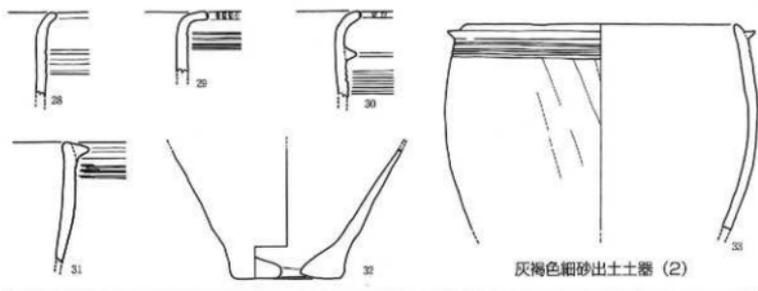
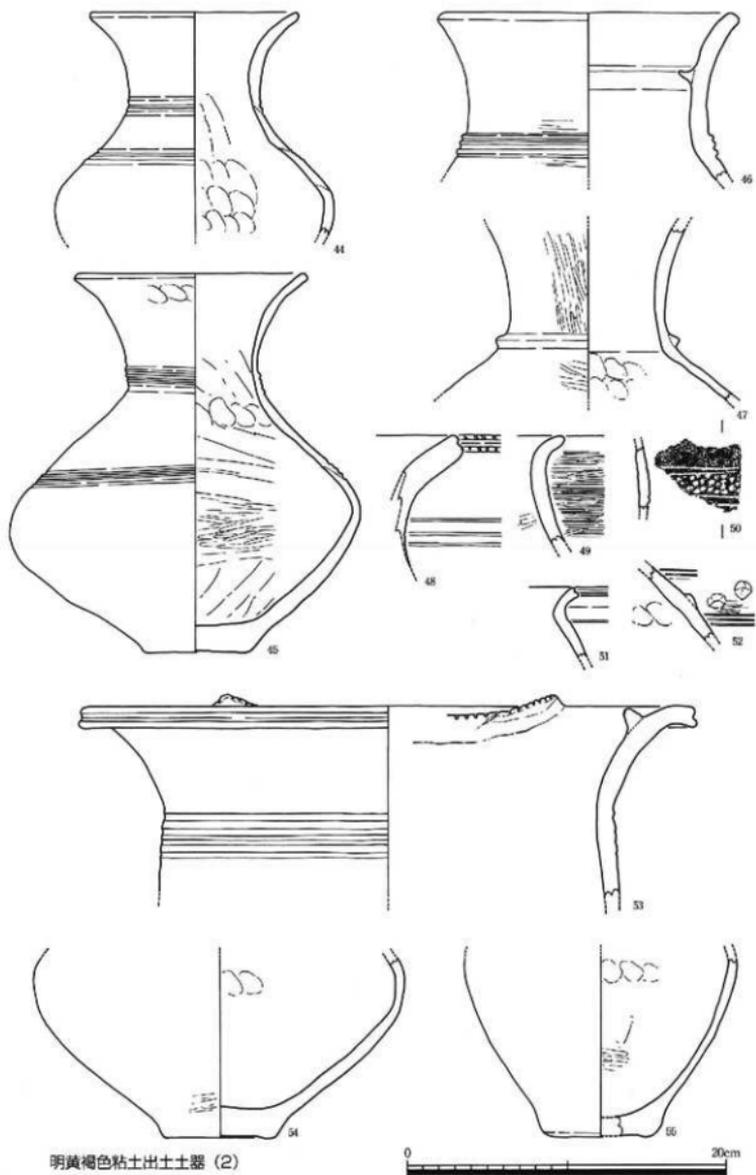
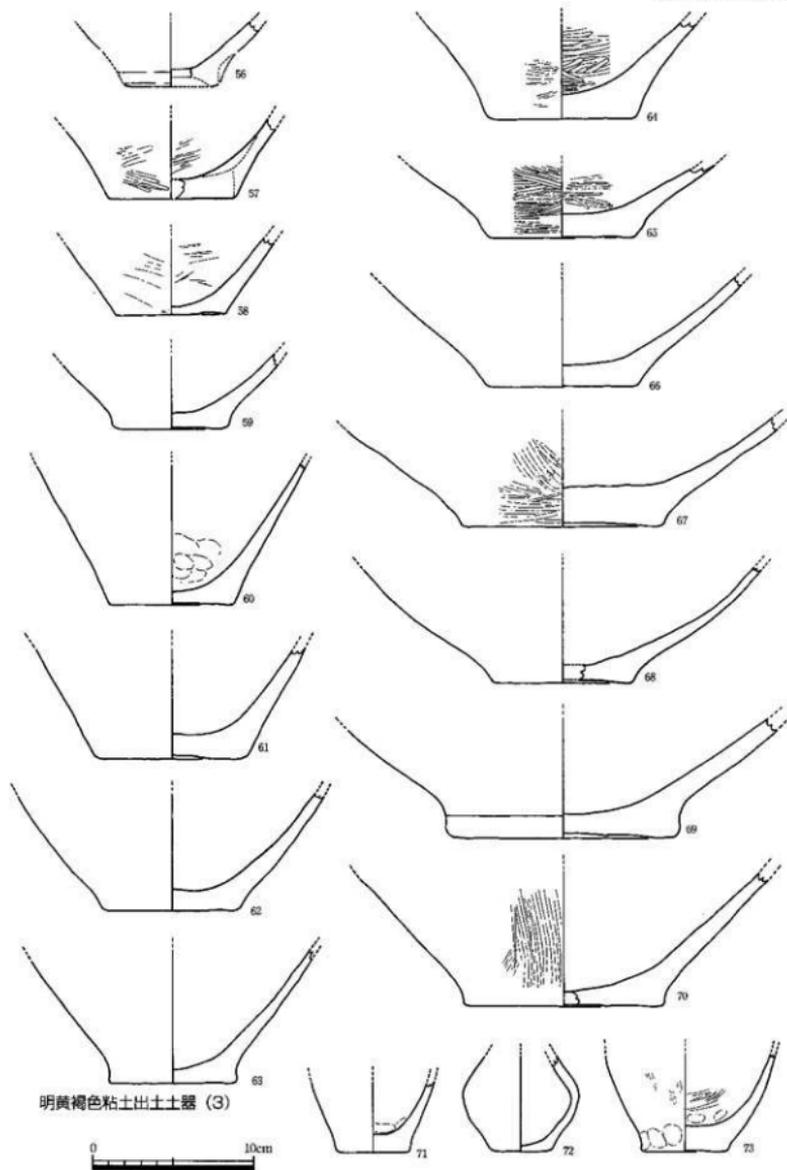


Fig.62 SD081出土土器 (3) (S=1/3)



明黄褐色粘土出土器 (2)

Fig.63 SD081出土器 (4) (S=1/3)



明黄褐色粘土出土器 (3)

0 10cm

Fig.64 SD081出土土器 (5) (S=1/3)

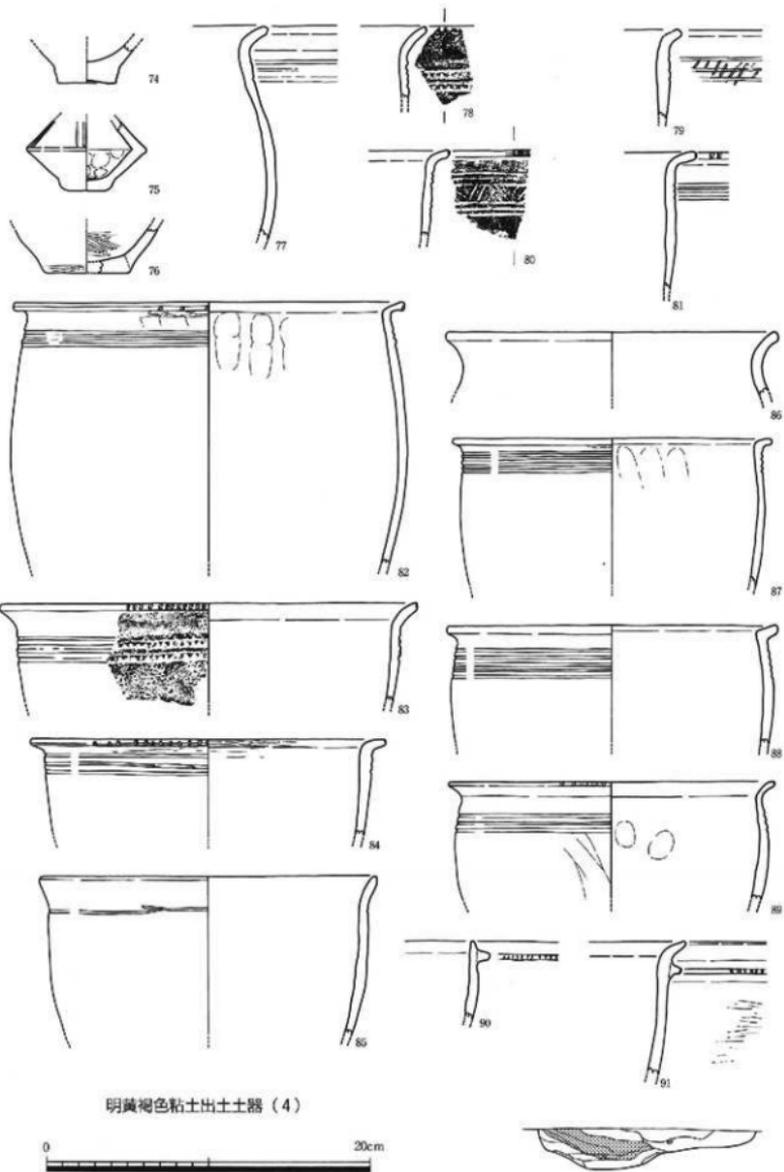


Fig.65 SD081出土土器 (6) (S=1/3)

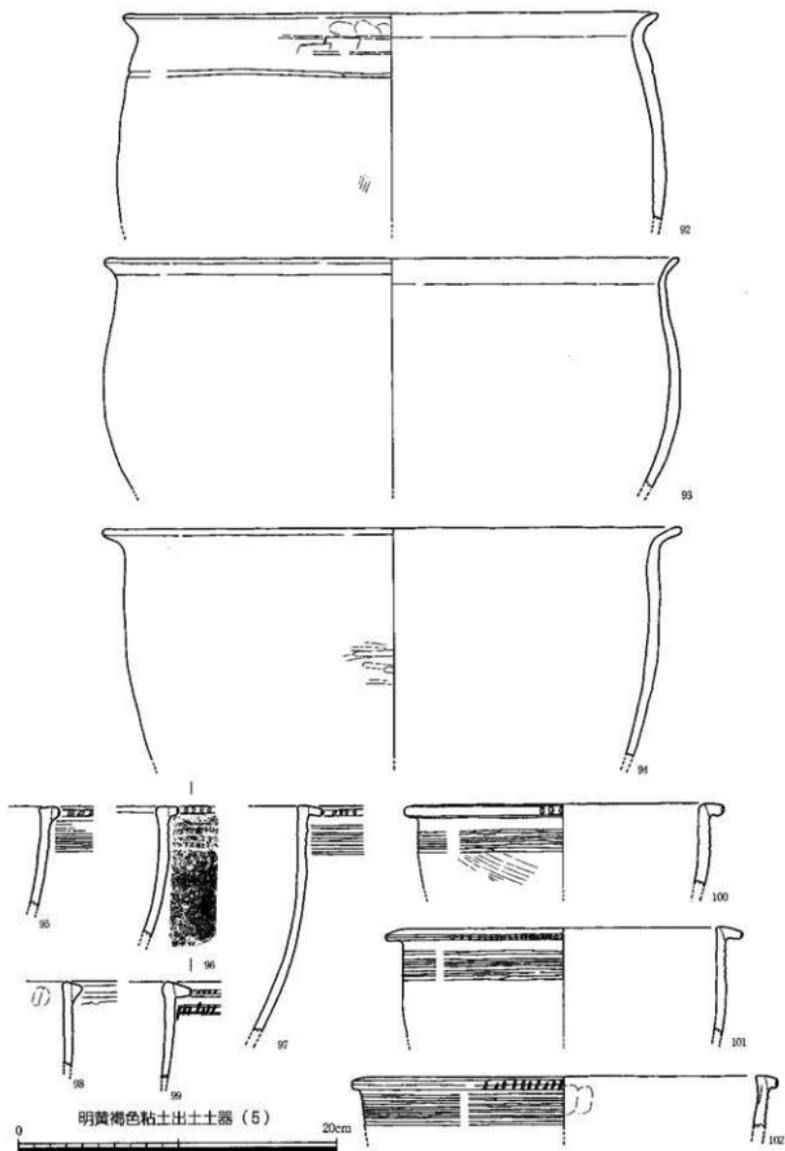
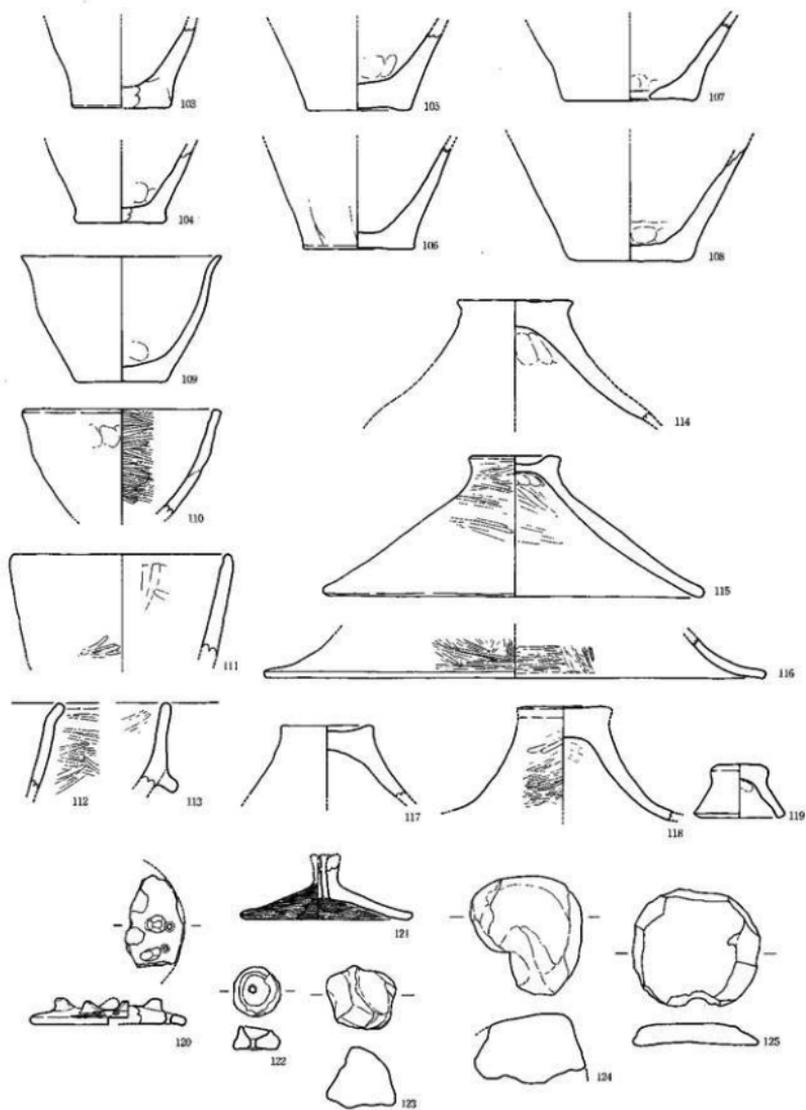


Fig.66 SD081出土土器 (7) (S=1/3)



明黄褐色粘土出土土器・土製品 (6)

Fig.67 SD081出土土器・土製品 (8) (S=1/3)

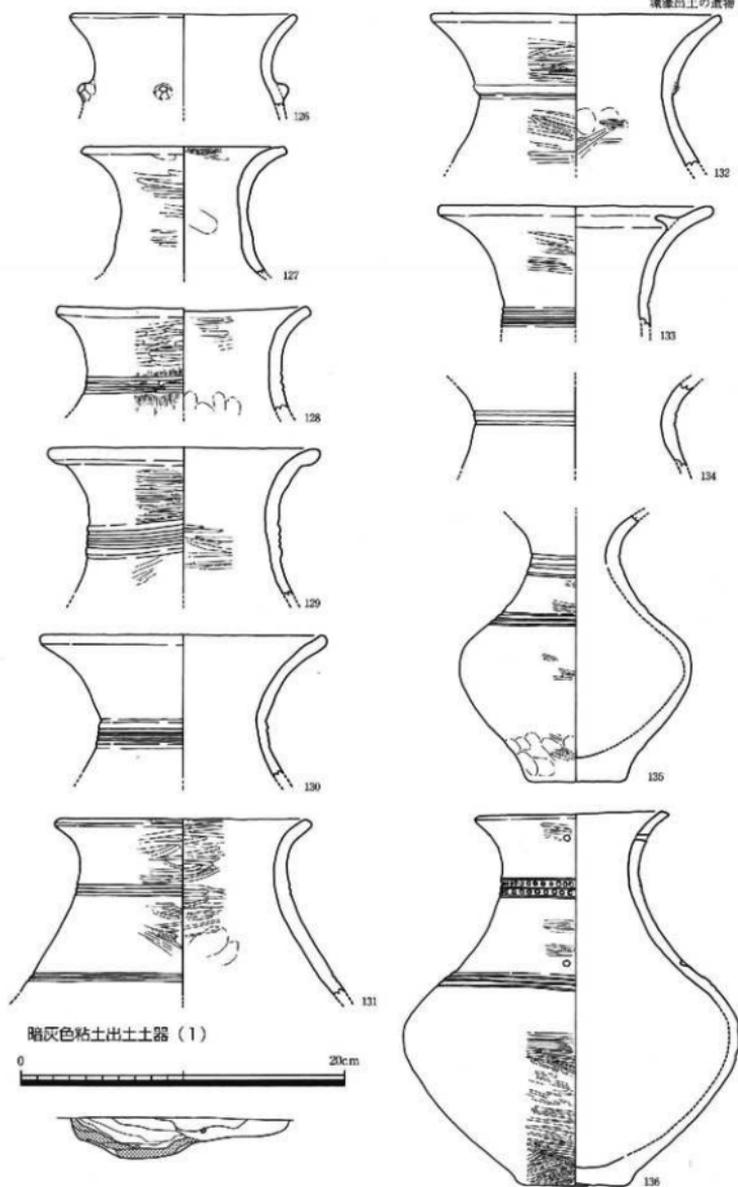


Fig.68 SD081出土土器 (9) (S=1/3)

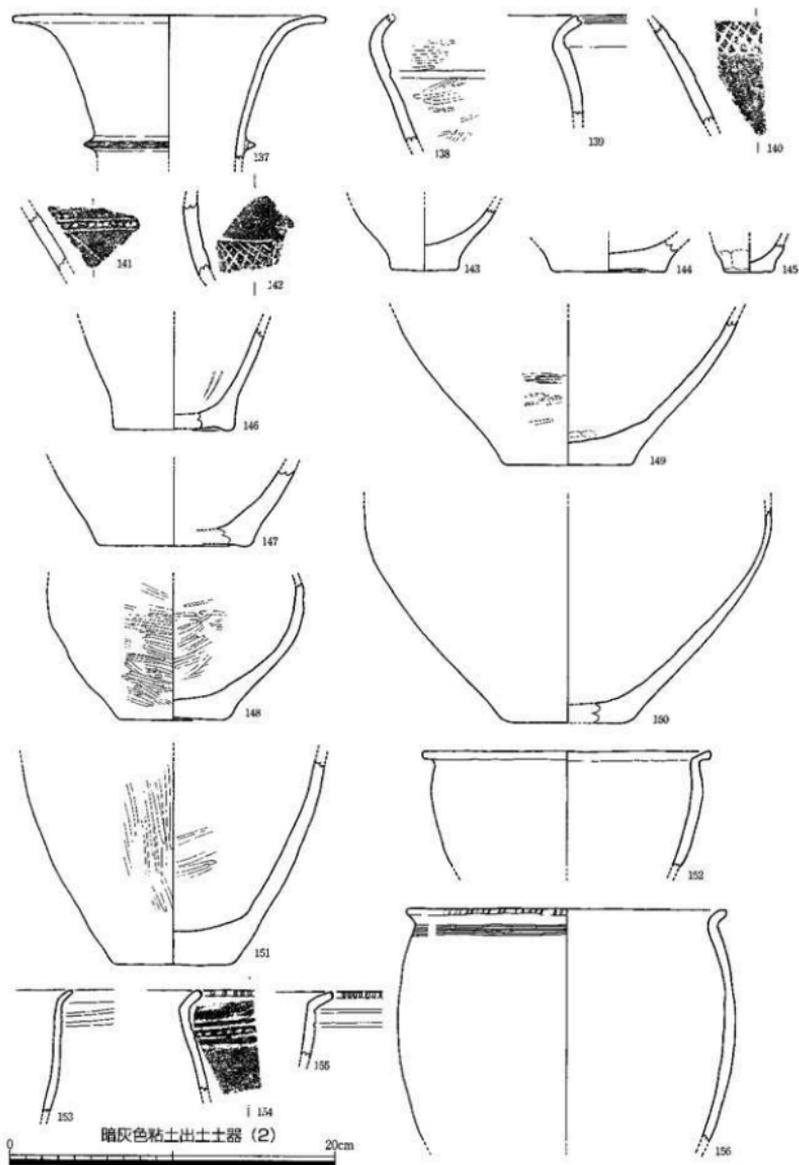


Fig.69 SD081出土土器 (10) (S=1/3)

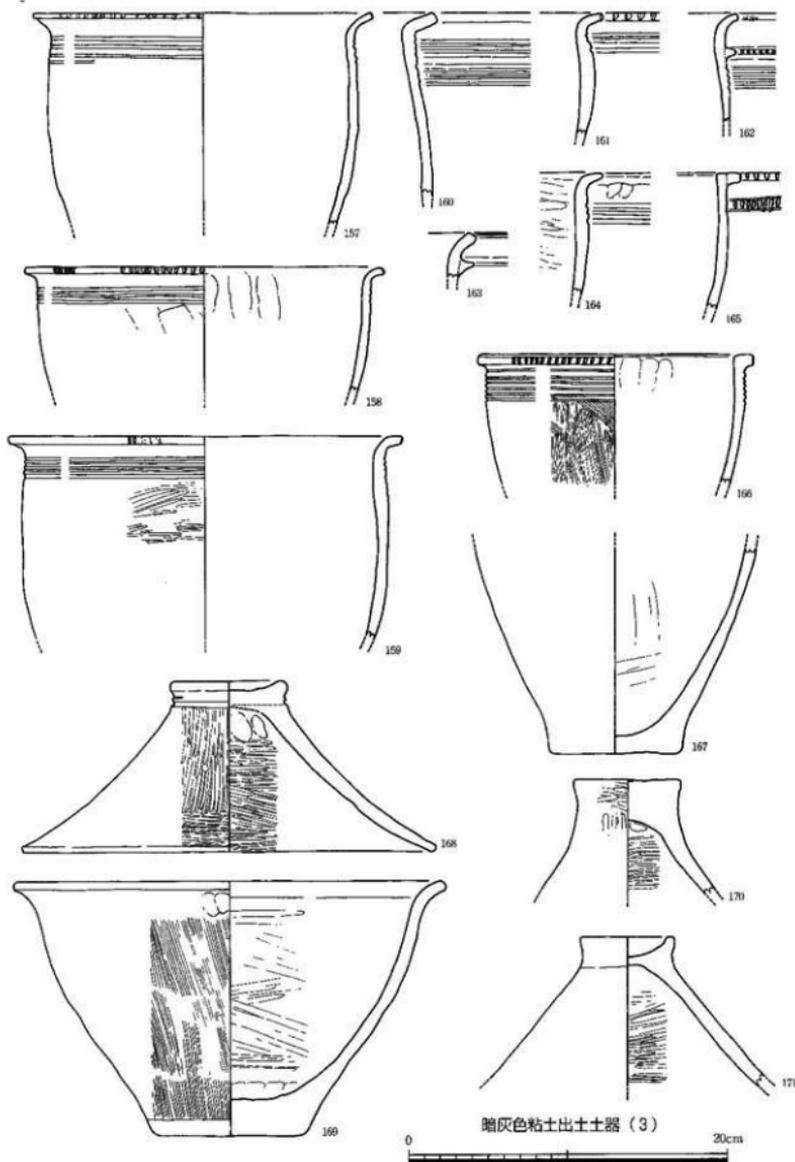


Fig.70 SD081出土土器 (11) (S=1/3)

外面ナデ調整を施す。161は残存高7.5cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部と口縁部直下でやや肥厚する体部を有す。口唇部にはキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有す。内面表面劣化のため調整不明、外面ナデ調整を施す。162は残存高6.9cmを測る如意状口縁のもので、やや強く湾曲する口縁部を有し、口縁部直下に貼り付け突帯を有す。口唇部および突帯にはキザミを有し、突帯直下には4条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。163は残存高2.7cmを測る如意状口縁のもので、短く緩やかに湾曲する口縁部を有し、口唇部には1条の沈線を施す。口縁部直下には1条の貼り付け突帯を有する。表面劣化のため調整等不明である。164は残存高7.6cmを測る如意状口縁のもので、短く湾曲する口縁部を有する。口唇部のキザミ

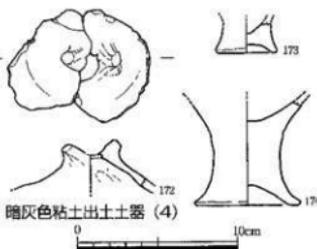


Fig.71 SD081出土土器 (12) (S=1/3)

は見られず、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有する。外面劣化のため調整不明であるが、内面には横方向のヘラミガキを施す。鉢の可能性もあるが断定することはできず、壺として扱う。165は残存高8.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面四角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下には2条のヘラ描き沈線に画された刺突文を有す。外面表面劣化のため不明である。166は復元口径17.0cm残存高8.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面四角形の口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には6条のヘラ描き沈線を施す。内面ナデ調整、外面縦方向のハケ調整を行う。167は底径8.2cm、残存高12.8cmを測る。底部付近は直立気味に立ち上がった後、緩やかに湾曲する体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。内面板状工具によるナデ調整を施すが、外面は劣化のため調整不明である。いずれも胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、161はやや粒子が小さく、158・166は粒子が少ない。158・161・167は暗褐色を呈する。

鉢

169は復元口径26.4cm、器高15.8cm、底径9.6cmを測り、口縁部から底部にかけて緩やかに「S」字状に湾曲する。口唇部のキザミや口縁部直下の沈線はみられず、外面縦方向のハケ調整、内面横方向の幅広のヘラミガキを施す。胎土は径3～5mm程度の長石粒を多量に含み橙褐色を呈する。

壺蓋

168は天井部径6.8cm、器高10.6cm、復元口径25.9cmを測り、直線的に広く開く体部を有する。内面横方向・外面縦方向のヘラミガキを施し、口縁部は内外面横方向のヘラミガキを施す。天井部内面にはユビオサエを施す。170は天井部径6.6cm、残存高7.1cmを測り、直線的に広がる体部を有する。内面横方向、外面天井部横方向・体部縦方向のヘラミガキを施す。天井部内面にはユビオサエを施す。171は天井部径5.8cm、残存高9.3cmを測り、直線的に広く開く体部を有する。内面横方向のヘラミガキを施し、天井部内面にはユビオサエを施す。胎土は168が粒子が少なく、168・171は暗褐色を、170は橙褐色を呈する。

壺蓋

172は残存高3.0cmを測る。天井部外面に一對の突起を有す。破損が著しく中央部の穿孔や調整等詳細は不明である。胎土は淡褐色を呈し、径3mm程度の長石粒を多量に含む。

高坏

173は脚部復元径3.8cm、残存高1.9cmを測るミニチュアのものと考えられる。表面劣化のため調整等は不明である。174は底径6cm、残存高6.5cmを測り、円柱状の脚部と短くひろがる脚底部を有する。二次焼成を受けていると考えられ、全体的に劣化が著しく調整等は不明である。胎土はいずれも3mm程度の長石粒を多量に含み、173は褐色、174は橙褐色を呈する。

石器 (Fig.72～79)

暗褐色粘質土出土石器 (Fig.72)

石鏃 (175)、石鏃未製品 (176)、石鏃 (177・178)、石匙未製品 (179)、磨製石包丁未製品 (180)、二次加工ある剥片 (181)、小形円柱状石斧 (182) が出土した。

石鏃

175は凹基式の石鏃である。両面に素材面を残し、逆刺先端を丸く作り出している。逆刺の片方を欠損し、最大長3.3cm、最大幅(2.1cm)、最大厚0.6cm、重量(2.9g)を測る。石材はサヌカイトである。

石鏃未製品

176は石鏃の未製品と考えられる。基部と側縁を調整によって作り出すが、先端と側刃を折損している。最大長

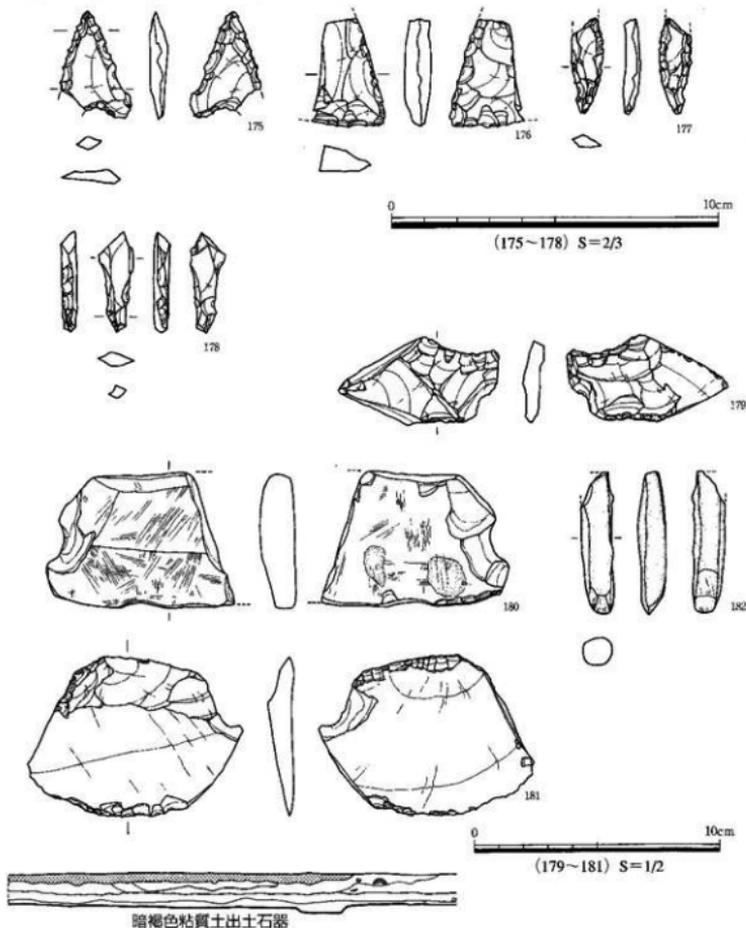


Fig.72 SD081出土石器 (1)

3.3cm、最大幅2.3cm、最大厚0.8cm、重量6.1gで、石材はサヌカイトである。

石錐

石材はすべてサヌカイトである。177は素材面を残し、側縁は両面調整されている。先端は磨滅しており、基部は折損する。最大長(2.9cm)、最大幅1.0cm、最大厚0.5cm、重量(1.5g)である。178は素材面を残し両側面に急角度の調整を加えている。最大長3.1cm、最大幅1.1cm、最大厚0.5cm、重量1.6gを測る。

石匙未製品

179はつまみを作り出し、刃部は折れ面を打面として調整を加えているが、明瞭な刃部とはなっていない。最大長3.6cm、最大幅6.6cm、最大厚8.5cm、重量20.9gで、石材はサヌカイトである。

磨製石包丁未製品

180は磨製石包丁の未製品と考えられる。側辺に抉りをもつが、刃部を研磨によって作り出しておらず、また本来刃部となるべきところに抉りをもつことから、転用の可能性が考えられる。欠損しており、最大長(7.7cm)、最大幅5.6cm、最大厚1.5cm、重量(91.0g)、石材は安山岩である。

二次加工ある剥片

181は側縁部に一同の大きな剥離で抉りを作り出し、剥片端部に両面調整を施すが、途中で折損している。最大長6.6cm、最大幅8.7cm、最大厚1.1cm、重量59.8gで、石材はサヌカイトである。

小型円柱状石斧

182は体部に擦痕はみられず、刃部のみを研磨している。最大長5.8cm、最大幅1.5cm、最大厚1.1cm、重量11.5gで、石材は安山岩系の岩石であると考えられる。

灰褐色細砂出土石器 (Fig.73)

スクレイパー (183)、楔形石器 (184) が出土した。

スクレイパー

183の刃部は両刃で、両面調整されている。折損しており、最大長5.0cm、最大幅(7.3cm)、最大厚0.8cm、重量(28.3g)を測る。石材はサヌカイトである。

楔形石器

184は板状剥片を素材に上下端から加撃を加えており、下端の階段状剥離が顕著である。最大長6.0cm、最大幅7.9cm、最大厚1.8cm、重量92.2gで、石材はサヌカイトである。

明黄褐色粘土出土石器 (Fig.74~77)

石鏃 (185・186)、石鏃未製品 (187~189)、石錐 (190)、打製石包丁 (191)、スクレイパー (192~201)、ノッチ (202)、楔形石器 (203・204)、石核 (205~208)、磨製石包丁 (209)、扁平片刃石斧 (210)、不明石製品 (211)、砥石 (212・215)、くぼみ石 (213)、敲き石 (214) が出土した。

石鏃

石材はすべてサヌカイトである。185は平基式の石鏃である。全面を調整し、切先の一部を欠損する。最大長

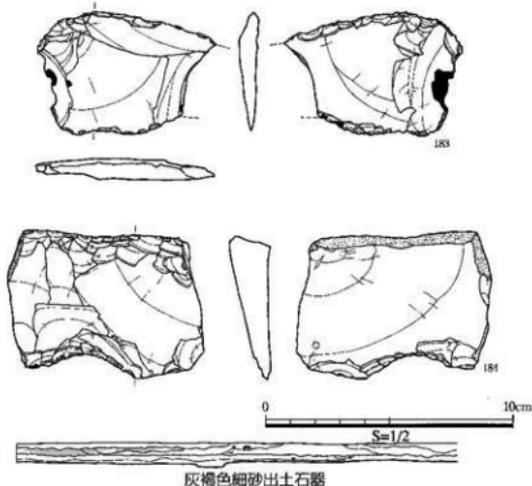
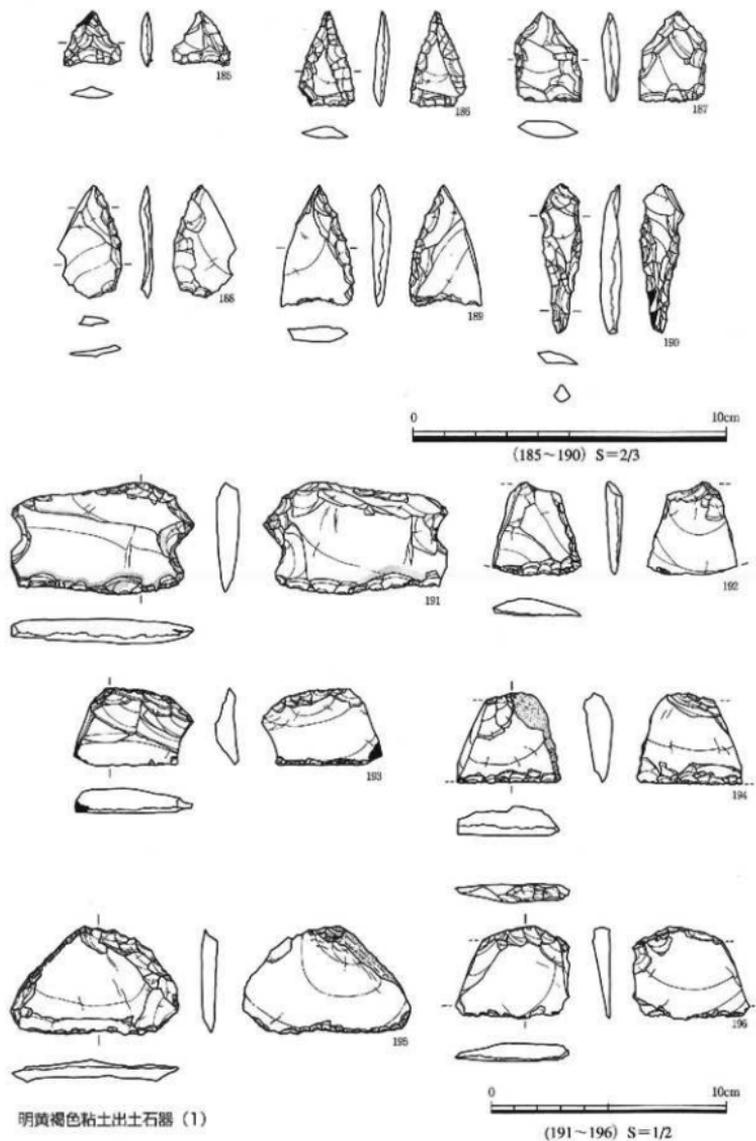
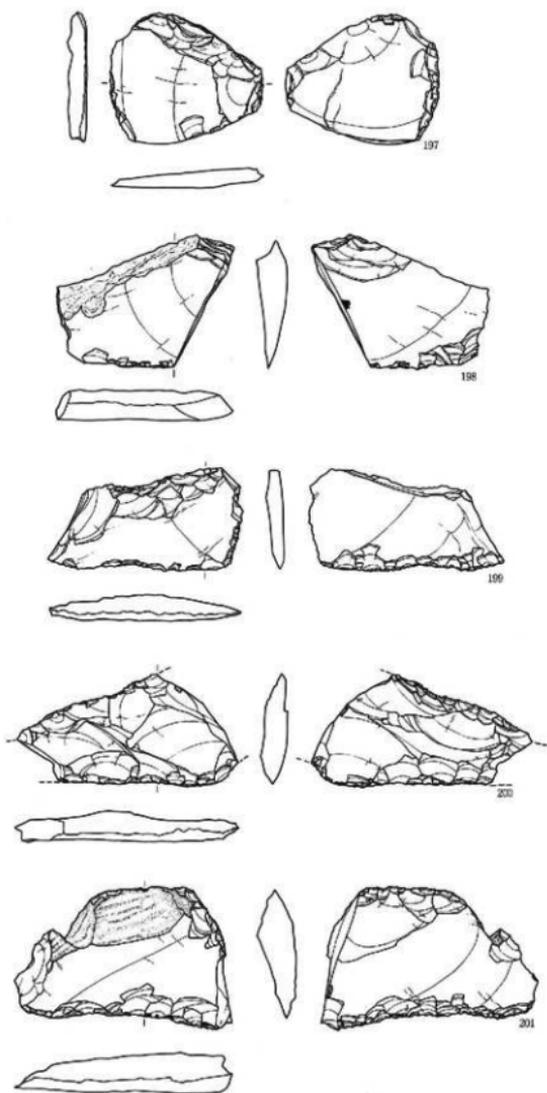


Fig.73 SD081出土石器 (2)



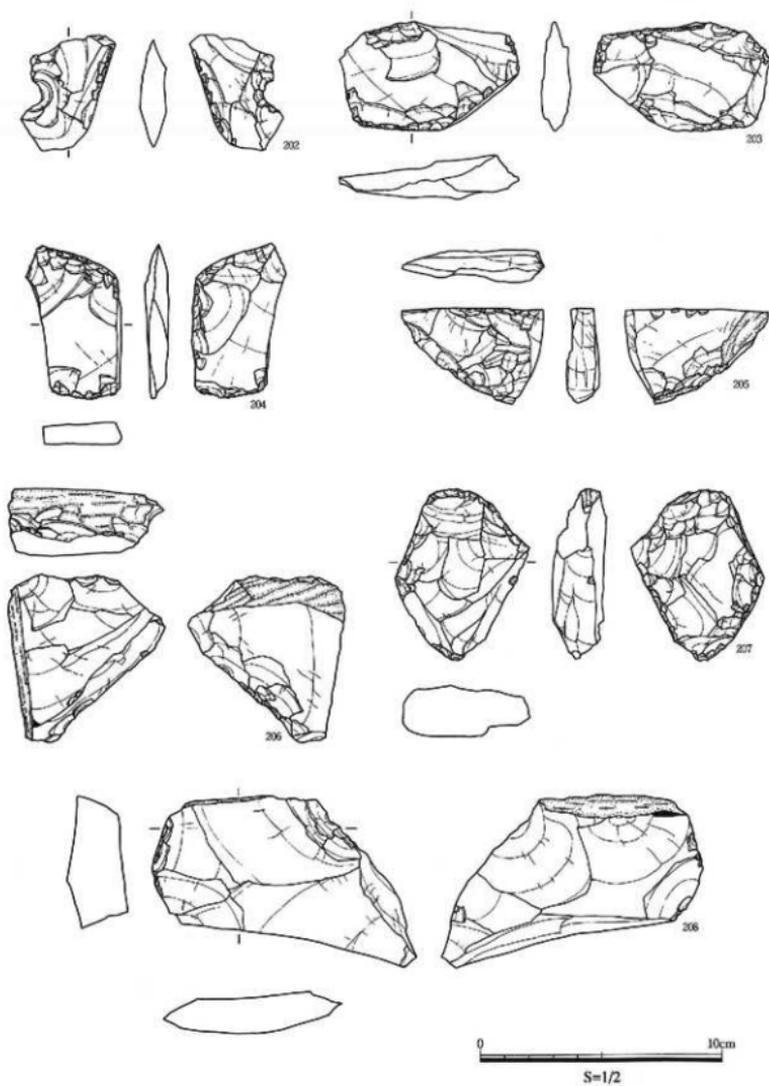
明黄褐色粘土出土石器 (1)

Fig.74 SD081出土石器 (3)



明黄褐色粘土出土石器 (2)

Fig.75 SD081出土石器 (4)



明黄褐色粘土出土石器 (3)

Fig.76 SD081出土石器 (5)

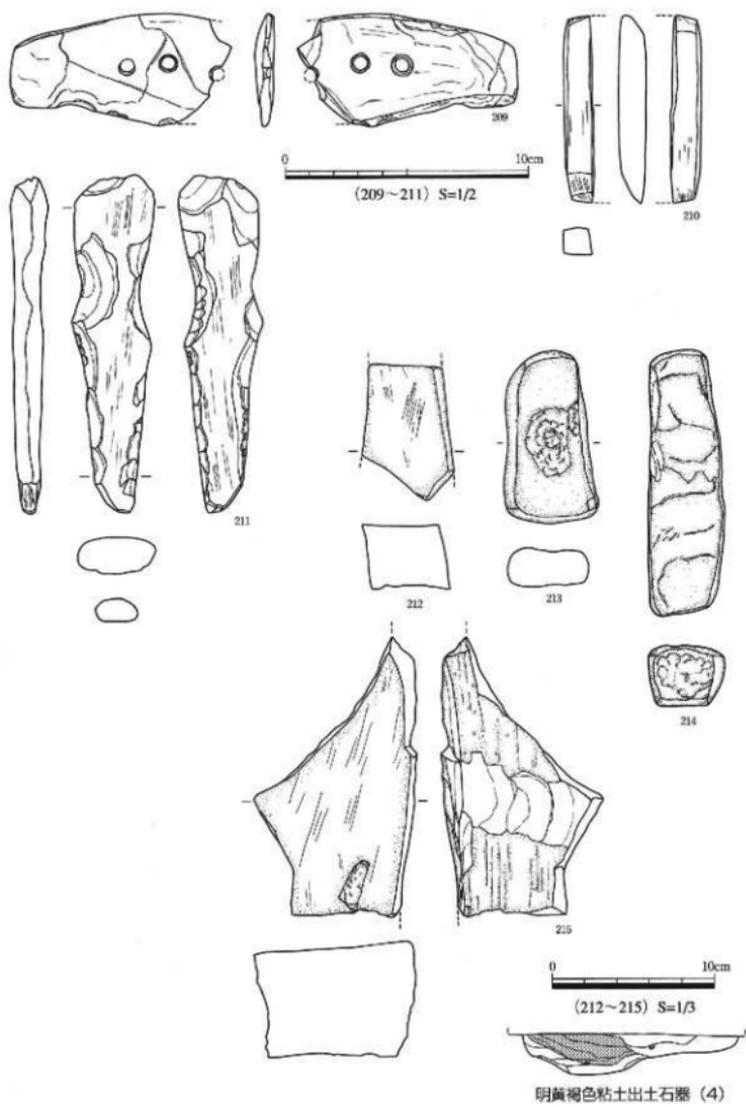


Fig.77 SD081出土石器 (6)

1.7cm、最大幅1.9cm、最大厚0.4cm、重量(0.9g)を測る。186は平基式の石鎌である。両面に素材面を残し、切先を丁寧に調整する。基部の一部を欠損し、最大長3.0cm、最大幅(1.8cm)、最大厚0.5cm、重量(1.6g)である。

石鎌未製品

石材はすべてサヌカイトである。187は素材に粗い調整を施しているが、細部の整形は施されていない。最大長2.8cm、最大幅2.2cm、最大厚0.7cm、重量4.1gを測る。188は側縁に調整を加えるが、切先と基部は作り出されていない。最大長3.6cm、最大幅2.0cm、最大厚0.4cm、重量2.0gである。189は側縁と基部に調整を施すが、側縁を折損する。最大長3.9cm、最大幅2.4cm、最大厚0.7cm、重量4.4gを測る。

石鎌

190は頭部と鎌部の境がなく、ほぼ一定の幅をもつ棒状の形態の石鎌である。両面に素材面を残す。先端は折損している。最大長(4.7cm)、最大幅1.4cm、最大厚0.7cm、重量(3.4g)で、石材はサヌカイトである。

打製石包丁

191は両側面に挟りをもつ小型の打製石包丁である。背部の一部には刃渡し加工が、刃部は両面調整されている。刃部には光沢面がみられ、摩滅している。完形で最大長7.8cm、最大幅4.7cm、最大厚1.0cm、重量44.8gを測る。石材はサヌカイトである。

スクレイパー

石材はすべてサヌカイトである。192は剥片端部と側面に主要剥離面からの片側調整によってやや外湾する刃部を作り出している。折損しており、最大長3.9cm、最大幅(3.8cm)、最大厚0.8cm、重量(9.3g)を測る。193の刃部は背面からの片側調整によって直線状に作り出されている。完形で最大長3.2cm、最大幅5.0cm、最大厚1.0cm、重量16.5gである。194は側面から基部にかけて自然面が残し、刃部は両面調整によって直線状に仕上げられている。片側の側縁を折損し、最大長3.7cm、最大幅(4.4cm)、最大厚1.3cm、重量(22.6g)を測る。195は横長剥片を素材とし、一部に自然面を残す。刃部は丁寧な両面調整が施されている。完形で最大長4.6cm、最大幅7.2cm、最大厚0.8cm、重量23.0g。196は背部を急角度の加撃によって作り出し、刃部には直線状に簡単な両面調整が施されている。最大長3.9cm、最大幅(4.9cm)、最大厚0.7cm、重量(14.8g)である。197の素材剥片にはツインバルブがみられる。一部に自然面がみられ、刃部は剥片側面に両面調整が施されている。完形で最大長5.5cm、最大幅6.4cm、最大厚0.8cm、重量32.5gを測る。198は背部に自然面を残し、刃部は両面調整により直線状に作り出されている。折損しており、最大長5.6cm、最大幅(7.6cm)、最大厚1.3cm、重量(49.4g)である。199は横長剥片を素材としたスクレイパーである。背部は折れ面を打面に調整を加え、刃部は両面調整により直線状に作り出されている。折損しており、最大長(4.4cm)、最大幅8.2cm、最大厚1.1cm、重量(38.1g)を測る。200の刃部は両面調整により直線状に作り出されている。折損しており、最大長(4.7cm)、最大幅(9.5cm)、最大厚1.3cm、重量(45.3g)である。201は形状と主要剥離面から横長の大型剥片を素材としたと考えられる。側縁には折れ面を打面に調整が施されている。刃部は両面調整が施され、やや摩滅している。体部に自然面が残る。完形で最大長6.0cm、最大幅9.3cm、最大厚1.7cm、重量81.6gである。

ノッチ

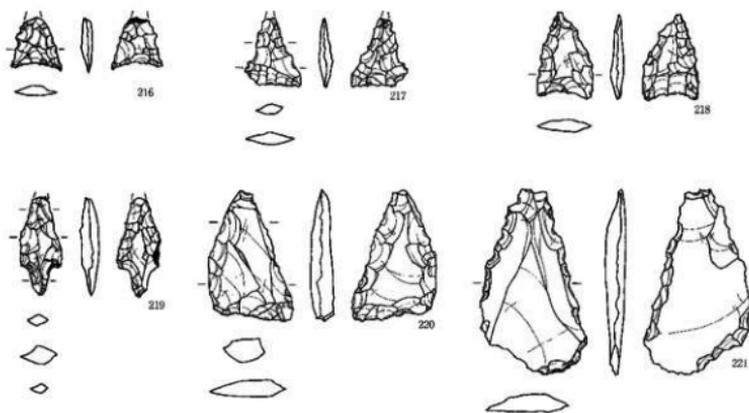
202は両面調整を施し、挟りは腹面からの一回の大きな剥離の後、背面から複数回の剥離によって構成されている。完形で最大長4.7cm、最大幅3.9cm、最大厚1.2cm、重量16.1gで、石材はサヌカイトである。

楔形石器

石材はすべてサヌカイトである。203は剥片の上下端に階段状の剥離面がみられる。最大長4.4cm、最大幅(7.4cm)、最大厚1.2cm、重量(56.3g)を測る。204は板状剥片を素材とした楔形石器である。上下端および折れ面を打面に加撃が加えられている。最大長6.3cm、最大幅3.9cm、最大厚1.1cm、重量26.3gを測る。

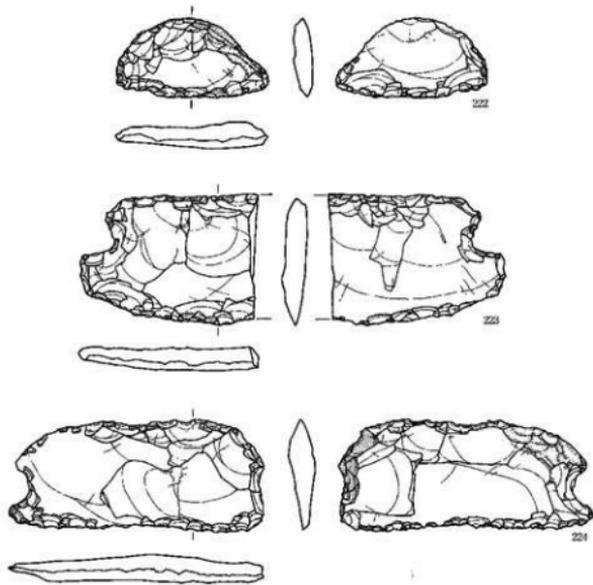
石核

石材はすべてサヌカイトである。205は板状剥片を素材とした石核である。折れ面を打面として剥片を剥離している。側面部の折れ面には打点がみられ、分割したことがうかがえる。最大長3.9cm、最大幅5.8cm、最大厚1.4cm、重量31.2gを測る。206は板状剥片を素材とした石核である。自然面と折れ面を打面として剥片を剥離している。最大長6.3cm、最大幅6.4cm、最大厚2.8cm、重量129.7gを測る。207は自然面と折れ面を打面として、打面を転位しな



0 10cm

(216~221) S=2/3



0 10cm

(222~224) S=1/2

暗灰色粘土出土石器 (1)

Fig.78 SD081出土石器 (7)

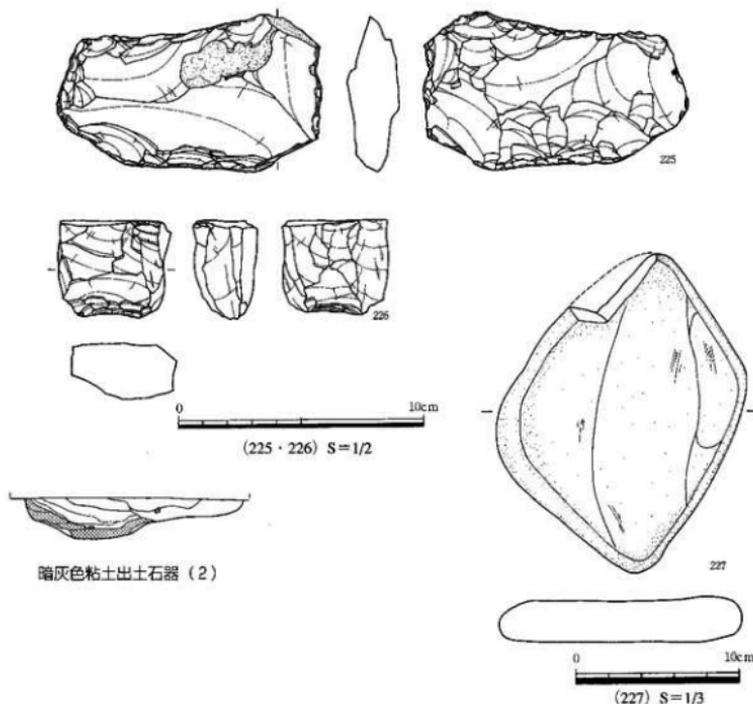


Fig.79 SD081出土石器 (8)

がら小型の剥片を剥離している。最大長7.0cm、最大幅5.5cm、最大厚2.2cm、重量81.4gを測る。208は板状剥片を素材とした石核である。折れ面に打点を確認でき、分割していることがうかがえる。最大長7.1cm、最大幅10.9cm、最大厚1.7cm、重量175.5gである。

磨製石包丁

209は紐部が3箇所あり、形態は長方形を呈すると考えられるが、再研磨を繰り返すことにより、刃部の形態は変化していると考えられる。刃部は片刃である。紐部で欠損しており、最大長(9.1cm)、最大幅4.6cm、最大厚0.8cm、重量(32.5g)を測る。石材は粘板岩である。

扁平片刃石斧

210は全面を研磨し、刃部の角度は約50度である。欠損しており、最大長7.7cm、最大幅(1.3cm)、最大厚(1.2cm)、重量(21.0g)で、石材は緑白色の結晶片岩である。

不明石製品

211は点紋黒色片岩を素材とした器種不明の石製品である。側辺部に抉りをもつが、一方を欠損しているため対になるかは不明である。体部と先端に研磨痕が確認できる。最大長(13.8cm)、最大幅3.5cm、最大厚1.5cm、重量(84.9g)を測る。

砥石

212は安山岩系の石材を素材とした砥石である。砥面を3面もつ。欠損しており最大長(8.4cm)、最大幅(5.7cm)、最大厚4.0cm、重量(322.0g)を測る。215は安山岩の角礫を素材とした砥石である。欠損しており最大長(17.3cm)、最大幅(10.1cm)、最大厚(7.2cm)、重量(1640.0g)を測る。

くほみ石

213はあばたの窪み部が体部にみられる。石材はやや軟質の砂岩である。最大長10.7cm、最大幅6.0cm、最大厚2.4cm、重量241.0gを測る。

敲き石

214は敲き石である。柱状の石材の先端部に敲打痕がみられる。最大長17.4cm、最大幅4.7cm、最大厚4.8cm、重量515.0gを測る。石材は硬質の砂岩である。

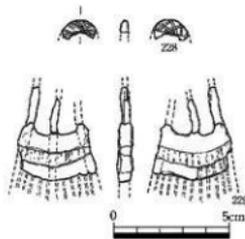


Fig.80 SD081暗灰色粘土出土
堅槌 (S=1/2)

暗灰色粘土出土石器 (Fig.78・79)

石鏃(216~219)、石鏃未製品(220・221)、スクレイパー(222)、打製石包丁(223・224)、楔形石器(225)、石核(226)、石皿(227)が出土した。

石鏃

石材はすべてサヌカイトである。216は平基式の石鏃である。両面を調整し、刃部を3~4mmの鋸歯状に調整する。先端を欠損しており、最大長(1.7cm)、最大幅1.6cm、最大厚0.4cm、重量(0.7g)を測る。217は平基式の石鏃である。両面を調整し、基部に近い側縁に屈曲をもつ。先端を欠損、基部の一部を折損する。最大長(2.2cm)、最大幅(1.8cm)、最大厚0.5cm、重量(1.2g)である。218は平基式の石鏃である。両面に素材面を残す。完形で最大長2.8cm、最大幅1.8cm、最大厚0.4cm、重量1.6gを測る。219は有茎式の石鏃である。腹面に素材面を残している。基部は最初大きい剥離を1回加え、さらに方向を変化させて加撃を加えることで基部を作り出している。先端を折損する。最大長(3.2cm)、最大幅(1.4cm)、最大厚0.6cm、重量(1.9g)を測る。

石鏃未製品

石材はすべてサヌカイトである。220は基部と側縁の一部を両面調整によって作り出すが、先端から側縁中央にかけて折損している。最大長4.2cm、最大幅2.6cm、最大厚0.8cm、重量7.1gを測る。221は石鏃の未製品と考えられる。縦長剥片を素材として側縁部に調整を施しているが、明瞭な基部や側縁、切先の作り出しはみられない。最大長5.9cm、最大幅3.8cm、最大厚6.5cm、重量11.3gを測る。

スクレイパー

222は横長剥片を素材としたスクレイパーである。背部は刃潰し加工が施され、一部に自然面が残る。刃部は両面調整されている。完形で最大長3.4cm、最大幅6.5cm、最大厚1.2cm、重量21.7g、石材はサヌカイトである。

打製石包丁

石材はすべてサヌカイトである。223は挟りのある打製石包丁である。背部はやや弱い刃潰し加工が、刃部は両面調整が施されている。折損しており最大長(7.6cm)、最大幅5.7cm、最大厚1.1cm、重量(55.8g)を測る。224は両端に挟りを持つ打製石包丁である。自然面を一部に残し、背部に刃潰し加工が、刃部は極浅の両面調整が丁寧に施されている。光沢面が背面側に確認できる。完形で最大長10.8cm、最大幅4.8cm、最大厚1.2cm、重量65.1gを測る。

楔形石器

225は自然面を一部に残し、上下端に階段状の剥離痕が確認できる。最大長6.5cm、最大幅10.8cm、最大厚4.2cm、重量153.6gで、石材はサヌカイトである。

石核

226は折れ面を打面に不定形な剥片を剥離している。下端には階段状の剥離痕がみられる。最大長4.0cm、最大幅4.6cm、最大厚2.6cm、重量62.7gを測り、石材はサヌカイトである。

石皿

227は両面に縦方向の使用痕が確認できる。欠損しており、最大長14.7cm、最大幅15.5cm、最大厚2.8cm、重量(1150.0g)を測る。石材は硬質の砂岩である。

木製品

暗灰色粘土出土木製品 (Fig.80)

壺 (228・229) が出土した。

壺は2つの破片が出土したが、本来は同一の個体であったと考える。228は229の頂部に接合することが想定できる。アーチ状の形態を呈し、幅1mm程度の粗状の植物繊維を緊縛し、朱漆でコーティングする。229は残存高4.1cm、残存幅3.4cmを測り、3本の芯材と9本の歯を緊縛して漆によりコーティングする結筒式のものである。中央部分は黒漆を、それ以外の部分は朱漆を塗布する。劣化が著しく、漆膜のみが残存する状況であった。

SD083出土遺物

土器・土製品 (Fig.81~98)

暗褐色粘質土出土土器・土製品 (Fig.81~85)

壺 (1~19)、甕 (20~44、46~52)、鉢 (45・64・65)、甕蓋 (55・56)、壺蓋 (57・58)、小型鉢 (59・60)、土製円板 (61・62)、高坏 (63) が出土した。

壺

1は復元口径12.4cm、残存高5.7cmを測る。頸部から口縁部への屈曲は強く、口縁端部は丸く納める。内外面横方向の密なヘラミガキを施し、頸部には2条のヘラ描き沈線を施す。沈線の周辺を掻き取る事により削り出し突帯状に成形する。2は復元口径15.0cm、残存高7.7cmを測る。薄手で口縁部は広く湾曲して開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には14条以上のヘラ描き沈線を施す。3は口径14.6cm、残存高8.1cmを測る。口縁部は緩やかに開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、口唇部に刻みを、内面にはキザミを施す貼り付け突帯を有する。頸部には4条程度のヘラ描き沈線を施すが、表面劣化のため詳細は不明である。4は復元口径15.3cm、残存高9.1cmを測る。口縁部は直線的に伸びた後水平方向へ急激に開く。口縁部内面に1条、頸部外面に1条の貼り付け突帯を施す。表面の劣化が著しく調整等は不明である。5は復元口径11.4cm、残存高5.1cmを測る短頸甕である。口縁部は短く「く」字状に開き、端部を丸く納める。内外面ユビオサエで成形し、口縁端部にナデ調整を施す。6は復元口径16.4cm、残存高6.2cmを測る。頸部から口縁部にかけて短く急に開き、端部を丸く納める。外面横方向のヘラミガキを施すが、表面劣化のため詳細は不明である。頸部には比較的幅の広いキザミを有する貼り付け突帯を施す。7は復元底径8.6cm、残存高4.1cmを測り、直立した後緩やかに開く体部を有する。表面劣化が著しく調整等は不明である。底部外面には弧状の線刻を複数有する。8は復元口径14.5cm、残存高9.4cmを測る。直線的に伸びた後強く開く口縁部を有し、口縁端部は丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部にはキザミを有する1条の突帯を貼り付ける。9は復元口径15.6cm、残存高4.5cmを測る短頸甕である。口縁部は短く折り返すもので、端部に面を持ち、キザミを施す。表面の劣化が著しく調整等は不明である。10は復元口径17.5cm、残存高6.7cmを測る。口縁部は直立した後弱く開き、端部に面を持つ。口唇部にはキザミを施す。外面縦方向のヘラミガキを施し、内面は表面の劣化が著しく調整等不明である。11は復元口径18.1cm、残存高5.2cmを測る。口縁部は短く開き、端部に面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には7条のヘラ描き沈線を施す。12は復元口径22.4cm、残存高7.5cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部に面を持つ。口縁部内面には1条の貼り付け突帯を施す。内外面細い横方向のヘラミガキを施す。13は底径8.6cm、残存高12.4cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部と体部の境界の接は明瞭で、外底面僅かに窪む。外面表面劣化が著しく調整等不明であるが、一部にヘラミガキの痕跡が見られる。内面にはヘラミガキを施す。14は残存高3.4cmを測る無頸甕である。全体の形状は不明であるが、口縁部を僅かに上方へ引き上げる。内外面ナデ調整を行うが、口縁部内面にはわずかにヘラミガキの痕跡が残る。15は復元口径32.4cm、残存高5.4cmを測る。口縁部は広く開き、端部にキザミを有した面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、口縁部内面には4条のキザミを有した貼り付け突帯を施し、最上段は端部を溝状に仕上げる。また、口縁部を縦断する突帯も見られる。表面劣化のため内外面調整等は不明である。16は残存高12.3cm、復元胴部最大径15.0cmを測る。下膨れで頸部の長い壺と考えられ、体部外面には5条の貼り付け突帯を有し、突帯間には竹管文を施す。内面ユビオサエで成形し、外面には僅かに横方向のヘラミガキが残る。17は底径4.0cm、胴部最大径8.0cm、残存高7.7cmを測る小型甕である。胴部最大径は中央付

近に位置し、底部は円板状を呈する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。18は底径4.2cm、残存高6.7cm、胴部最大径8.0cmを測る小型壺である。胴部最大径は中央付近に位置し、底部はやや窪む。てづくねで成形し、ユビオサエの痕跡を多く残す。19は残存高23.6cm、復元胴部最大径26.6cmを測る。胴部最大径は中央付近に位置し、若干長胴化する。表面の劣化が著しいが、内面板状工具によるナデ、外面横方向のヘラミガキを行い、頸部には2条以上の沈線を施す。いずれも胎上は径5mm程度の長石粒を多量に含み褐色を呈するものが大半であるが、6・14は含有量が少ない。5・6・12・14は褐色を、17・18は淡褐色を呈する。3は赤色酸化土粒を多く含む。

壺

20は復元口径21.2cm、残存高11.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。内面劣化の調整等不明で、外面には左上がりのヘラミガキを施す。21は復元口径19.9cm、残存高18.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には8条のヘラ描き沈線と山形文、5条のヘラ描き沈線を順に施す。表面劣化のため外面調整は不明である。22は復元口径25.4cm、残存高15.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを施すが、口縁直下の沈線は見られない。外面体部下に縦方向のヘラミガキを施した後、後半を横方向にヘラミガキする。内面には横方向のヘラミガキを施すが、表面劣化のため詳細は不明である。23は復元口径27.0cm、残存高13.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや口縁直下の沈線は見られない。内面ナデ調整、外面下半に縦方向のヘラミガキ、口縁部付近に横方向のヘラミガキを施す。24は復元口径23.3cm、残存高13.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には9条のヘラ描き沈線と刺突文が存在する。内面にヘラミガキを、外面に縦方向のハケ調整を施す。25は復元口径22.1cm、残存高9.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面四角形の薄い貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には10条のヘラ描き沈線と刺突文が存在する。内面表面劣化のため調整不明であるが、外面には縦方向のヘラミガキを施す。26は復元口径19.2cm、残存高8.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には8条の沈線が存在する。表面劣化のため内面調整は不明であるが、外面には縦方向のヘラミガキを施す。27は復元口径19.3cm、残存高6.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平に折り返す。口唇部にはキザミを、口縁部直下には4条1単位とする12条の巻掛き沈線を施す。表面劣化のため外面調整は不明である。28は復元口径23.6cm、残存高7.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させ長く伸ばす貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には6条のヘラ描き沈線が存在する。内面ナデ調整を施すが、外面表面劣化のため調整等不明である。29は復元口径24.2cm、残存高6.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面四角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には2条1単位の半裁竹管による沈線に画された刺突文が存在する。表面劣化のため調整等は不明である。30は復元口径23.7cm、残存高11.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁直下には6条1単位のヘラ描き沈線に画された山形文が存在する。表面劣化のため調整等は不明である。31は復元口径27.1cm、残存高7.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや口縁直下の沈線は見られない。内面下半をユビオサエ、上半をヘラミガキし、外面縦方向のヘラミガキを施す。32は復元口径27.2cm、残存高7.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面四角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下の沈線は見られない。表面劣化のため調整等は不明であるが、外面下半にはわずかにヘラミガキの痕跡が見られる。33は復元口径33.2cm、残存高14.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部には肉厚の断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。内外面板状工具によるナデの後ヘラミガキを施す。34は残存高7.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、肉厚の断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを施し、口縁直下には6条のヘラ描き沈線と山形文、7条の沈線、刺突文を施す。内外面ヘラミガキを施す。35は残存高5.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。表面劣化のため外面調整は不明であるが、口縁部上面には3条

の沈線を描す。36は残存高2.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面四角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁直下には複数の沈線が存在する。口縁部上面には竹管文を施す。内外面ナデ調整を行う。37は残存高4.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部を欠損するため詳細については不明である。口縁直下には4条1単位の櫛描き沈線16条以上が存在する。表面劣化のため調整等は不明である。38は残存高5.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、断面三角形の貼り付け口縁と、口縁部直下に貼り付け突帯を有する。口唇部及び突帯ともにキザミを施し、口縁直下には5条のヘラ描き沈線を描す。表面劣化のため外面調整は不明であるが、内面にはナデ調整を施す。39は残存高2.7cmを測る直立する口縁を持つもので、波状口縁を呈する。口縁部直下には1条の貼り付け突帯を有する。突帯にはキザミを、突帯直下にはヘラ描き沈線を描す。表面劣化のため調整等は不明である。40は残存高2.9cmを測る薄手の如意状口縁のもので、口縁部直下には貼り付け突帯を有する。口唇部や突帯にキザミは施さない。劣化が著しく、沈線の有無や調整等は不明である。41は残存高5.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には4条1単位の櫛描き沈線が存在する。表面劣化のため調整等は不明である。42は残存高3.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上向を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁と、口縁直下に1条の貼り付け突帯を有する。口唇部と突帯両者にキザミを施すが、突帯のものは幅が広い。口縁直下には7条のヘラ描き沈線が存在する。表面劣化のため調整等は不明である。43は残存高6.4cmを測る直立する口縁を有するもので、口縁直下に1条の貼り付け突帯を有する。突帯にはキザミを、突帯直下には6条のヘラ描き沈線を描す。内外面ナデ調整を施す。44は復元口径16.8cm、残存高5.9cmを測る直立する口縁部を有するもので、口縁部直下には1条の貼り付け突帯を有する。突帯にはキザミを、突帯直下には7条のヘラ描き沈線と竹管文が存在する。表面劣化のため調整等は不明である。46は復元口径13.1cm、残存高6.2cmを測る如意状口縁のもので、緩やかに屈曲する口縁部を有し、口唇部にはキザミを施す。口縁直下には2条1単位の沈線に画されて9個1単位の竹管文を施す。表面劣化のため外面調整は不明であるが、口縁部内面にはナデ調整を施す。47は復元口径28.6cm、残存高7.6cmを測る如意状口縁のもので、短く折り返す口縁部を有する。口唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。内面ナデ調整、外面横方向のヘラミガキを行う。48は底径6.4cm、残存高10.1cmを測る。直立気味に立ち上がる体部を有する。劣化のため内面調整は不明であるが、外面には縦方向のハケ調整を施す。49は底径6.2cm、残存高10.7cmを測る。直立気味に立ち上がる体部を有する。劣化のため内外面調整は不明である。50は底径7.0cm、残存高8.5cmを測る。直線的に開く体部を有する。劣化のため外面調整は不明であるが、内面には指頭圧痕及びナデの痕跡が残る。51は底径7.8cm、残存高12.8cmを測る。直立気味に立ち上がる体部を有する。劣化のため内面調整は不明であるが、外面には縦方向のハケ調整を施す。52は底径6.2cm、残存高11.0cmを測る。直立気味に立ち上がる体部を有する。劣化のため外面調整は不明であるが、内面には板状工具によるナデの痕跡が残る。底部には径0.9cmの焼成後穿孔を有する。53は復元底径7.0cm、残存高17.6cmを測る。直立気味に立ち上がる体部を有する。劣化のため外面調整は不明であるが、内面には板状工具によるナデの痕跡が残る。54は底径6.7cm、残存高13.3cmを測る。直立気味に立ち上がる体部を有する。いずれも胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、34はやや粒子が小さく、22・34・36・34は暗褐色を、27・43・47は淡褐色を呈する。25・28・35・38は赤色酸化土粒を多く含む。

鉢

45は体部から口縁部にかけて直線的に伸びる。復元口径18.4cm、残存高9.2cmを測る。口縁部を丸く納め、口縁部直下に17条のヘラ描き沈線を描す。内外面ナデ調整を施す。64は残存高6.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁と、口縁直下に把手状の隆起がみられる。内面横方向のヘラミガキ、外面板状工具によるナデ調整を行う。65は復元底径7.4cm、残存高3.1cmを測り、やや窪んだ円板状の底部を有する。表面劣化が著しいが、内外面丁寧にヘラミガキを施していたものと考えられる。あるいは壺の底部の可能性もあるが、丁寧な調整等から鉢と判断した。胎土はいずれも径3mm程度の長石粒を多く含み、45は橙褐色、32・65は淡褐色を呈する。

甕蓋

55は天井部径5.8cm、口径23.2cm、器高13.2cmを測り、なだらかに開く体部を有する。表面劣化のため調整等は不明であるが、外面にはかすかにヘラミガキの痕跡が残存する。56は復元天井部径6.0cm、復元口径21.2cm、器高10.5cmを

測る。直線的に開いた後、口縁部付近で強く開く。内外面縦方向のヘラミガキを施し、口縁部付近には横方向のヘラミガキを施す。胎土はいずれも径3mm程度の長石粒をやや多く含み、暗褐色を呈する。

壺蓋

57は口径7.2cm、器高2.2cmを測る。突起部の天井部を有し、口縁部はやや反り返る。中央付近には径2mm程度の貫通する円孔を有する。58はつまみ部分の破片である。残存高2.7を測る。57と同様の形態を呈するものと考えられるが詳細は不明である。中央付近には径5mm程度の貫通する円孔を有する。胎土はいずれも径3mm程度の長石粒をやや多く含み、暗褐色を呈する。

小型鉢

59は底径4.7cm、残存高7.0cmを測り、円柱状の底部とガラス形の体部を有する。小型の甕の可能性もある。内外面板状工具によるナデ調整を施す。60は鉢としたが、正確な器種は不明である。復元口径7.4cm、残存高6.1cmを測る。厚手で直立する体部を持ち、口縁部はヘラ状工具による面取りを施している。口縁部2箇所は棒状工具によるキザミを持ち、内面には絞目を有する。胎土はいずれも2mm程度の長石粒を少量含み、59が暗褐色、60が暗褐色を呈する。

土製円板

61は直径6.3cm、厚さ0.8cm、重量35.8gを測る。土器の転用品で、周囲を打ち欠いて成形する。表面劣化のため調整等は不明であるが、打ち欠き後研磨の痕跡はみられない。62は直径5.2cm、厚さ1.1cm、重量32.6gを測る。専用品で、中央よりややずれた位置に径5mmの焼成前穿孔を行う。表面ナデ調整を行う。胎土は61が3mm程度の長石粒を多量に含み淡褐色を呈する。62は砂粒の径が小さく、暗褐色を呈する。

高杯

63は復元脚部径6.2cm、残存高9.0cm、脚部高3.0cmを測り、低い高台状の脚部と直線的な杯部を有する。内外面ナデ調整を行う。胎土は3mm程度の長石粒を多量に含み暗褐色を呈する。

黒褐色粘土出土土器・土製品 (Fig.85~90)

壺 (66~83)、甕 (84~95)、壺蓋 (96~98)、鉢 (99~102)、土製円板 (103)、ミニチュア土器 (104・105) が出土した。

壺

66は復元口径11.3cm、残存高18.8cm、復元胴部最大径15.8cmを測る。直立する頸部と比較的に急に開く口縁部を有し、やや長調気味である。口縁部はやや肥厚して丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部に6条、胴部中央付近に4条のヘラ描き沈線を施す。67は復元口径14.7cm、残存高11.7cmを測る。口縁部は比較的に急に開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明である。68は復元口径14.8cm、残存高8.1cmを測る。口縁部はなだらかに広く開き、端部を丸く納める。内面表面の劣化が著しく調整等不明であるが、外面には横方向の細いヘラミガキを施し、頸部にはキザミを持つ貼り付け突帯を有する。69は復元口径16.9cm、残存高10.5cmを測る。口縁部は直線的に開き、器厚にばらつきが大きい。端部には若干面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、外面わずかにヘラミガキが残る。70は復元口径16.8cm、残存高5.0cmを測る。口縁部は比較的に急に開き、端部に面を持つ。口唇部は沈線状に浅く窪む。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には7条のヘラ描き沈線を施す。71は復元口径18.3cm、残存高11.2cmを測る。口縁部は湾曲しつつ長く開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には4条のヘラ描き沈線を施す。72は復元口径19.1cm、残存高11.9cmを測る。口縁部は湾曲しつつ長く開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には6条のヘラ描き沈線を施す。73は復元口径22.0cm、残存高7.4cmを測る。口縁部は水平方向に広く開き、端部に面を持つ。口唇部には1条の沈線を持つ。内面ナデ調整、外面縦方向のハケ調整を施す。頸部には数条のヘラ描き沈線を施すが、表面劣化のため条数等詳細は不明である。74は復元口径21.6cm、残存高7.4cmを測る。口縁部は広く長く開き、端部に面を持つ。口唇部には沈線状の窪みと、わずかにキザミを有する。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、口縁部内面に貼り付け突帯、頸部外面に棒状浮文を有する。頸部外面突帯間にはヘラ描き沈線を施すが、表面劣化のため詳細不明である。75は復元口径20.6cm、残存高13.8cmを測る。口縁部は長く広く開き、

頸部を欠損する。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には1条のキザミを持つ貼り付け突帯を有す。76は復元口径24.5cm、残存高1.8cmを測る。口縁部は水平近くまで広く開き、端部若干垂下気味の面を持つ。表面の劣化が著しいが、内外面積方向のヘラミガキを施す。77は復元口径26.2cm、残存高10.4cmを測る。頸部直立気味に開いた後、口縁部は比較的急に開く。口縁端部に若干垂下気味の面を持つ。口縁部内面には2条のキザミを持つ貼り付け突帯を有し、口縁部上面にはヘラ描きの山形文を施す。劣化が著しく調整等は不明であるが、外面頸部には1条もしくは2条のキザミを有する貼り付け突帯を施す。78は残存高21.7cm、復元胴部最大径23.2cmを測る。底部および口縁部を欠損する。表面の劣化が著しく外面調整は不明であるが、内面エビオサエの後ナデ調整を施す。頸部に3条、胴部中央付近に5条のヘラ描き沈線を施す。79は残存高8.4cmを測る肩部の破片である。外面には3条1単位の貼り付け突帯を有し、外面丁寧な横方向のヘラミガキを施す。内面調整は劣化が著しく不明である。80は復元口径26.7cm、残存高25.0cmを測る。卵形の胴部と短く開く口縁部を有し、口縁端部にキザミを施す面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、口縁部内面には1条のキザミを施す貼り付け突帯を有す。81は復元口径13.0cm、残存高20.0cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明確で、外底面はやや窪む。内底面には指頭圧痕を残すが表面の劣化が著しく、調整等は不明である。82は底径5.2cm、残存高14.2cm、胴部最大径9.1cmを測る小型のものである。若干長卵形を呈し、細身である。外面体部に縦方向のヘラミガキを、口縁部内面に横方向のヘラミガキを施し、口縁部内面には横方向のヘラミガキを施す。頸部には3条のヘラ描き沈線を施す。83は底径8.2cm、残存高13.4cm、胴部最大径16.4cmを測り、胴部中央付近に最大径が位置する。底部付近の器厚が著しく厚い。内底面には指頭圧痕を残すが表面の劣化が著しく、調整等は不明である。無頸蓋の可能性も考えられたが、破断面は明確で、通常の広口壺であると判断した。胎土は固化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、70・71はやや粒子が小さく、70・79は暗褐色を、71・73・74は淡褐色を呈する。69・77・78は赤色酸化土粒を多く含む。

壺

84は復元口径22.4cm、残存高16.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。内面ナデ調整、外面横方向の密なヘラミガキを施す。85は復元口径22.4cm、残存高13.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。表面劣化のため調整等は不明である。86は復元口径25.0cm、残存高14.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや口縁直下の沈線は見られない。内面ナデ調整、外面ヘラミガキを行う。外面のヘラミガキは原則斜め方向のものを縦方向のものが切るが、比較的ランダムである。87は口径17.6cm、器高18.2cm、底径6.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部水平に長く伸ばす断面四角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを施すが、口縁直下の沈線は見られない。内面ナデ調整、外面縦方向の板状工具によるナデ調整を施す。88は復元口径23.0cm、残存高18.1cmを測る如意状口縁のもので、口縁部長く緩やかに屈曲させる。口唇部にはキザミを、口縁直下には5条のヘラ描き沈線を施す。内面表面劣化のため調整等不明であるが、外面には左上がりのハケ調整を施す。89は復元口径21.1cm、残存高17.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。内面表面劣化のため調整等不明であるが、外面には縦方向および斜め方向のヘラミガキが残る。90は復元口径19.3cm、残存高10.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。表面劣化のため調整等は不明である。91は復元口径20.0cm、残存高11.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを施すが、口縁直下の沈線は見られない。内面口縁部付近を横方向にヘラミガキした後体部に縦方向のヘラミガキを施す。外面は体部に縦方向のヘラミガキを施した後口縁部付近に横方向のヘラミガキを施す。92は復元口径27.5cm、残存高7.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部を水平にやや長く伸ばす断面四角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には6条のヘラ描き沈線に画された山形文を施す。表面劣化のため調整等は不明である。93は復元口径27.9cm、残存高20.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には10条のヘラ描き沈線を施す。表面劣

化のため調整等は不明である。94は復元口径31.4cm、残存高14.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には11条のヘラ描き沈線と、直下に刺突文を施す。内外面密なヘラミガキを施すが劣化のため不明瞭である。95は復元口径37.8cm、残存高21.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面をやや傾斜させる断面三角形の口縁を有する。口唇部にキザミを、上面部に波状文を有する。口縁直下には4条1単位の櫛描きで24条と波状文、16条沈線、刺突文を順に施す。表面劣化のため調整等は不明である。胎土は円化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、87・91はやや粒子が小さく、91は暗褐色を呈する。89・94は赤色酸化土粒を多く含む。

壺蓋

96は天井部径6.5cm、残存高8.6cmを測り、直線的に開く体部を有する。表面劣化の為調整等は不明である。97は復元天井部径6.3cm、復元口径22.3cm、器高12.4cmを測り、なだらかに開く体部を有する。内面表面劣化の為調整等不明であるが、外面上半には縦方向、口縁部付近に横方向のヘラミガキを施す。98はやや開きの小さいものである。天井部径6.5cm、残存高10.2cmを測る。天井部は広く窪み、内外面縦方向のヘラミガキを施す。外面天井部付近は横方向のヘラミガキを施す。胎土はいずれも径5mm程度の長石粒を多量に含み、96・97は橙褐色を、98は褐色を呈する。

鉢

99は底部径7.8cm、残存高12.1cmを測る高台状の底部を有するものである。脚部、体部ともに直線的に開く。内面わずかにヘラミガキの痕跡が残るが、表面劣化のため調整の詳細は不明である。100は口径13.4cm、器高8.4cm、底径6.1cmを測る。直線的な体部と如意状に緩やかに開く口縁部を有し、内外面ナデ調整を施す。101は復元口径12.8cm、器高8.3cm、底径4.9cmを測る。直線的な体部と逆「L」状に開く貼り付け口縁部を有し、口縁部上面にはナデによる沈線状の窪みを形成する。内外面劣化のため調整等は不明である。102は復元口径8.8cm、器高7.4cm、底径4.7cmを測り、直線的な体部を持つ。内外面ナデ調整を施す。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、100・101は橙褐色を、102は淡褐色を呈する。

土製円板

103は径4.0cm、厚さ0.8cm、重量13.1gを測る。土器の転用品で、周縁を打ち欠いて成形する。内外面ナデ調整を施し、外面には格子状の線刻を有する。打ち欠き後研磨の痕跡はみられない。胎土は暗褐色を呈し砂粒は少ない。

ミニチュア土器

104は鉢のミニチュアである。残存高4.2cmを測り、低い高台状の脚部と直線的に広がる体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。105は壺蓋のミニチュアである。残存高3.8cmを測る。天井部外面は広く窪み、直線的な体部を有する。表面劣化のため内外面調整等は不明である。胎土はいずれも径3mm程度の長石粒を多量に含み、褐色を呈する。

暗褐色砂質土土器 (Fig.90～92)

壺 (106～111)、甕 (112～124)、鉢 (125) が出土した。

壺

106は復元口径17.8cm、残存高3.7cmを測る。口縁部は緩やかに開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明である。107は残存高12.5cmを測る。口縁部は長く緩やかに開き、頸部に3条の貼り付け突帯を施す。表面の劣化が著しく調整等は不明である。108は残存高6.0cmを測る。口縁部は緩やかに湾曲して開き、端部に面を持つ。口唇部には1条のヘラ描き沈線を有する。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には5条以上のヘラ描き沈線を施す。109は胴部の破片である。残存高5.4cmを測る。表面にはヘラ描きの有輪木葉文を施す。110は復元口径15.6cm、残存高10.8cmを測る。口縁部は緩やかに長く開き、端部を積み上げる。内外面横方向のヘラミガキを施す。111は底径8.6cm、残存高7.2cmを測り、底部は広く窪む。体部は直線的に開く。表面の劣化が著しく調整等は不明である。胎土は円化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、108はやや粒子が小さく、108は淡褐色を呈する。111は赤色酸化土粒を多く含む。

甕

112は復元口径20.2cm、残存高16.9cmを測る如意状口縁のもので、長く水平に外反する口縁部と緩やかに湾曲す

る部を有する。I唇部にキザミを、口縁直下に6条のヘラ描き沈線、山形文、6条沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。113は復元口径22.4cm、残存高14.2cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部を有する。口唇部にキザミを、I縁直下に8条のヘラ描き沈線を施す。内面表面劣化のため調整等不明であるが、外面には左上がりのヘラミガキを施す。114は復元口径22.9cm、残存高15.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、短く強く外反する口縁部を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁直下には12条のヘラ描き沈線を施す。内面表面劣化のため調整等不明であるが、外面には縦方向のハケ調整を施す。115は残存高16.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、断面三角形の貼り付け口縁を有するが、I唇帯は不明瞭である。口唇部のキザミや口縁直下の沈線は見られない。外面縦方向のハケ調整、内面横方向のヘラミガキを施す。体部には焼成の際の破綻痕と思われる剝離が見られる。116は残存高5.8cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。I唇部のキザミについては表面劣化のため不明、口縁直下の沈線は見られない。内外面の調整についても、表面劣化のため不明である。117は残存高4.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には6条の沈線を施す。表面劣化のため調整等は不明である。118は残存高3.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には3条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等は不明である。119は復元口径20.2cm、残存高10.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を若干傾斜させる肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。内面右上がりのヘラミガキ、外面板状工具によるナアの縦方向のヘラミガキを施す。120は復元口径23.7cm、残存高10.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや、I縁直下の沈線は見られない。表面劣化のため調整等は不明である。121は復元口径24.0cm、残存高8.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を若干傾斜させる断面四角形の貼り付け口縁を有する。I唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。内面表面劣化のため調整等不明であるが、外面には板状工具によるナア調整を施す。122は復元口径23.9cm、残存高20.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。I唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。内外面板状工具によるナア調整を施す。123は復元口径25.8cm、残存高17.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。内面表面劣化のため調整等は不明であるが、外面はナア調整を施す。124は復元口径30.8cm、残存高21.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面四角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミは見られないが、I縁直下には11条のヘラ描き沈線と刺突文を施す。表面劣化のため調整等は不明である。胎土は同化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、115・119・122はやや粒子が小さく、112は暗褐色を、116・118は淡褐色、117・119・120・123は褐色を呈する。

鉢

125は残存高17.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、断面三角形の内厚の貼り付け口縁を有する。I唇部のキザミなどは見られず、口縁直下には隆起状の把手を有する。内外面縦方向のヘラミガキを施す。胎土は褐色で砂粒の径が小さく含有量も少ない。

暗灰色粘土出土土器・土製品 (Fig.92~94)

壺 (126~132・143)、甕 (133~138)、甕蓋 (139・145)、甕蓋 (140)、ミニチュア土器 (141・142)、鉢 (144)、土製丹板 (146~148) が出土した。

壺

126は復元口径27.9cm、残存高7.9cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部に面を持つ。I唇部にはキザミを有し、口縁部内面にはキザミを持つ貼り付け突帯を有する。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部外面にはわずかにヘラミガキが残る。127は復元口径13.6cm、残存高3.8cmを測る。頸部より短く強く開き、端部を丸く納める口縁部を有する。内外面ともに劣化のため調整等は不明であるが、外面頸部に1条のヘラ描き沈線が残存する。128は復元口径17.4cm、残存高4.9cmを測る。口縁部は比較的急に開き、口縁端部を丸く納める。内外面横方向のヘラミガキを施す。129は復元口径20.0cm、残存高9.5cmを測る。口縁部は長く緩やかに開き、端部を丸く納める。表

面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には6条のヘラ描き沈線を施す。130は復元口径11.0cm、残存高12.9cm、体部最大径14.3cmを測る。I口縁部は長く緩やかに開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、内面ユビオサエが顕著に見られる。131は底径7.8cm、残存高18.0cm、胴部最大径20.0cmを測る。胴部最大径は中央付近に位置し、若干長胴形を呈する。内面表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、外面には密なヘラミガキを施す。ヘラミガキは体部下半右上がり、中央付近はランダム、上半再び右上がりに施す。132は底径8.5cm、残存高11.7cmを測り、比較的直線的に開く体部を有する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。143は無須蓋である。復元口径10.4cm、残存高3.1cmを測る。強く内斜する体部を有し、口縁付近に1条の貼り付け突帯を施す。I口縁部には焼成前穿孔を施す。表面劣化のため調整等は不明である。胎土は図石化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、128は褐色を、127は暗褐色、130・131・132は淡褐色を呈する。128・129は赤色酸化土粒を多く含む。

壺

133は復元口径18.1cm、残存高14.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、玉縁状の貼り付け口縁を有する。I口唇部にはキザミを、口縁直下には8条のヘラ描き沈線を施す。内面表面劣化のため調整等不明であるが、外面には縦方向のハゲ調整を施す。134は復元口径26.0cm、残存高8.8cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。I口唇部のキザミは見られないが、口縁直下には4条のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等不明であるが、内面には比較的大きなオサエ痕跡を有する。135は復元口径23.4cm、残存高9.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、I口縁部上面を若干傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。I口唇部にはキザミを、口縁直下には10条のヘラ描き沈線を施す。内面表面劣化のため調整等不明であるが、外面には縦方向のハゲ調整を施す。136は復元口径21.2cm、残存高4.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を若干傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。I口唇部にはキザミを、口縁直下には6条以上のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等不明である。137は復元口径16.4cm、残存高7.3cmを測る如意状口縁のもので、口縁部を弱く屈曲させる口縁を有する。I口唇部にはキザミを、口縁直下には7条のヘラ描き沈線を施す。内面下半縦方向、上半横方向のヘラミガキを施す。外面には縦方向の板状工具によるナデ調整を施す。138は残存高8.8cmを測る逆「L」字状口縁のもので、短い断面三角形の貼り付け口縁を有する。I口唇部にはキザミを、口縁直下には15条のヘラ描き沈線を施す。沈線間にはキザミを有する1条の貼り付け突帯を施す。内外面表面劣化のため調整等不明である。胎土は図石化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、133はやや粒子が小さく、137・138は暗褐色を呈する。135は赤色酸化土粒を多く含む。

蓋

139は復元口径10.4cm、器高3.5cmを測る。突起状の犬井部を有し、中央付近には径4mm程度の貫通する円孔を有する。内外面表面劣化のため調整等不明である。145は口径11.2cm、器高3.5cmを測る。突起状のつまみを有し、径3mm程度の円孔が横方向に貫通する。穿孔に紐ずれ等の痕跡は見られない。内外面ナデ調整を施す。胎土はいずれも橙褐色を呈し、砂粒は少ない。

壺

140は復元口径22.5cm、器高8.0cm、天井部径7.2cmを測り、長く湾曲する体部を有する。内外面密なヘラミガキを施す。胎土は径5mm程度の長石を多量に含み、暗褐色を呈する。

ミニチュア土器

141は蓋である。復元口径7.1cm、器高4.0cm、天井部径2.8cmを測り、碗形に湾曲する体部を有する。表面劣化のため調整等は不明であるが、全体的にユビオサエ痕跡を有する。142も蓋である。復元口径7.6cm、器高3.0cm、天井部径2.2cmを測る。内外面ナデ調整を施し、天井部付近には板状工具によるナデを施す。胎土は共に径5mm程度の長石を多量に含み、橙褐色を呈する。

鉢

144は推定口径17.6cm、残存高10.3cm、底径7.0cmを測る如意状口縁のもので、緩やかに湾曲する体部となだらかに外反する口縁部を有する。口縁部直下に沈線等見られない。内外面ナデ調整を施し、底部内面にはユビオサエ痕跡を残す。胎土は径3mm程度の長石粒を多量に含み、暗褐色を呈する。

十製門板

146は径3.4cm、厚さ0.9cm、重量12.2gを測る。土器の転用品で、周囲を打ち欠いた後研磨を行う。表面劣化のため調整等は不明である。147は径3.7cm、厚さ0.8cm、重量11.0gを測る。土器の転用品で、周囲を打ち欠いた後研磨を行う。表面劣化のため調整等は不明である。148は径5.10cm、厚さ7~9mm、重量23.1gを測る。土器の転用品で、周囲を打ち欠いた後研磨を行う。内外面ナデ調整を施す。胎土はいずれも砂粒が少なく、146・147が淡褐色、148が橙褐色を呈し、148は赤色酸化土粒を多く含む。

暗灰色粘質土出土土器 (Fig.94)

壺 (149~151・153)、甕 (152・154~158)、鉢 (160)、甕蓋 (159) が出土した。

壺

149は復元口径21.2cm、残存高5.0cmを測る。頸部から口縁部への屈曲は強く、口縁端部に面を持つ。内外面表面劣化のため調整等は不明である。頸部には6条以上のヘラ描き沈線を施す。150は復元口径20.6cm、残存高11.6cmを測る。肩部から直立する頸部と、上半で強く屈曲する口縁部を有し、口縁端部に面を持つ。内面ナデ調整、外面縦方向の板状工具によるナデ調整を施し、肩部にはヘラミガキを施す。頸部には9条のヘラ描き沈線を施す。I口縁部内面には1条の貼り付け突帯を有すが、全周しない。II唇部および口縁部内面にはキザミを施す。151は底径8.5cm、残存高13.5cmを測る。縦やかに湾曲する体部を有し、内外面ナデ調整を行う。153は復元口径5.9cm、器高13.4cm、底径6.0cm、胴部最大径10.3cmを測る。若干長胴形を呈し、胴部最大径は若干下位にくる。内面ナデ調整、外面ヘラミガキを施し、口縁部内面には1条の貼り付け突帯を、頸部外面には2条の貼り付け突帯をそれぞれ有する。体部には焼成後の穿孔が見られる。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み橙褐色を呈するものが大半であるが、150・153は淡褐色を呈する。149は赤色酸化土粒を多く含む。

甕

152は復元口径26.8cm、残存高13.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、I口縁部上面を水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。II唇部のキザミや、口縁直下の沈線は見られない。内外面ナデ調整を行う。胎土に含まれる砂粒は体部上半と下半で含有率が大きく異なる。154は残存高4.3cmを測る如意状口縁のもので、I口縁部を緩やかに屈曲させる。I口縁部にキザミを、I口縁直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内面劣化の為調整等不明で、外面には板状工具によるナデ調整を施す。155は残存高8.0cmを測る如意状I口縁のもので、口縁部を強く屈曲させる。II唇部にキザミを、口縁直下には4条のヘラ描き沈線を施す。内外面劣化の為調整等不明である。156は残存高5.5cmを測る如意状口縁のもので、口縁部の屈曲は非常に弱い。I口縁部にキザミを、I口縁直下には1条のヘラ描き沈線を施す。内面劣化の為調整等不明であるが、外面には板状工具によるナデ調整を施す。157は残存高6.6cmを測る逆「L」字状I口縁のもので、口縁部上面をやや傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。II唇部のキザミは見られないが、口縁直下には6条のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等不明である。158は残存高3.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。I口縁部にキザミを、口縁直下には8条以上のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、152は暗褐色、155は淡褐色を呈する。156は赤色酸化土粒を多く含む。

甕蓋

159は天井部だけの破片である。天井部径6.2cm、残存高3.8cmを測り、二次焼成を受ける。

鉢

160は復元口径16.5cm、残存高9.2cmを測り直線的な体部と四角く納める口縁部を有する。内面縦方向の板状工具によるナデ調整を行うが、外面調整は表面劣化のため調整不明である。胎土は砂粒少なく、淡褐色を呈する。

黒灰色粘土出土土器・土製品 (Fig.95~97)

壺 (161~171・172・179)、甕 (173~185)、土錘 (186) が出土した。

壺

161は口径15.8cm、器高31.7cm、胴部最大径27.5cm、底径9.0cmを測る。最大径は胴部中央付近に位置し、頸部は短い。頸部から口縁部への屈曲は強く、口縁端部に面を持つ。底部の器壁は厚い。内面表面劣化のため調整等は不

明であるが、外面には左上がりのヘラミガキを施す。頸部には3条のヘラ描き沈線を施す。162は口径18.5cm、器高33.6cm、底径9.7cm、胴部最大径26.0cmを測る。胴部最大径は中央付近に位置し、頸部からI線部へは長く緩やかに湾曲する。I線端部は丸く納める。内面ナデ調整、外面縦方向のハケ調整の後横方向の密なヘラミガキを施し、頸部には3条のヘラ描き沈線を施す。163はI線径13.3cm、器高25.4cm、胴部最大径19.0cm、底径8.2cmを測る。胴部最大径はやや下に位置し、I線部は広く開く。I線端部は丸く納める。表面劣化のため調整等は不明である。164は口径12.7cm、器高27.5cm、胴部最大径20.6cm、底径7.2cmを測る。胴部最大径は中央付近に位置し、若干長胴形を呈している。頸部からI線部へは短く湾曲し、I線端部は丸く納める。内面表面劣化のため調整等不明であるが、外面には横方向の密なヘラミガキを施したものと考えられる。頸部には2条のヘラ描き沈線を施す。165は復元I線径14.3cm、残存高7.3cmを測る。頸部からI線部への屈曲は緩やかで、I線端部は丸く納める。内面表面劣化のため調整不明であるが、外面横方向のヘラミガキを施す。頸部には5条のヘラ描き沈線を施す。166は復元口径20.5cm、残存高10.3cmを測る。直線的な頸部とやや強く屈曲するI線部を有し、I線端部は丸く納める。内外表面劣化のため調整等は不明である。167は復元口径21.2cm、残存高16.5cmを測る。頸部からI線部へと長く湾曲し、I線端部は丸く納める。内外表面劣化のため調整等は不明である。頸部には8条のヘラ描き沈線を施す。168は残存高17.1cm、復元胴部最大径16.2cm、復元底径7.9cmを測る。胴部最大径は中央に位置し、若干長胴傾向を示す。外面表面劣化のため調整等は不明であるが、内面には横方向のヘラミガキが見られる。169は残存高8.2cm、胴部最大径12.0cm、底径6.0cmを測る。胴部最大径は中央付近に位置する。表面劣化のため調整等は不明である。170は復元口径12.7cm、器高19.2cm、胴部最大径15.3cm、底径5.8cmを測る。胴部最大径はやや下に位置し、I線部は広く開く。I線端部は丸く納める。表面劣化のため調整等は不明である。頸部と胴部に1条の削り出し突帯を持つ。171は残存高6.5cm、胴部最大径6.9cm、底径3.8cmを測る小型甕である。胴部最大径は中央付近に位置する。内外表面劣化のため調整等は不明であるが、底部付近にはユビオサエの痕跡を多く残す。172は残存高2.1cm、底径3.0cmを測る小型のものである。内面ユビオサエ、外面左上がりのヘラミガキを施す。179は残存高12.3cm、底径8.6cmを測る。内外表面劣化のため調整等不明である。胎土は団化していない破片も含めると径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、164・170は淡褐色を呈する。166は赤色酸化土粒を多く含む。

莖

173は残存高6.5cmを測る逆「L」字状I線のもので、断面三角形の短いI線を有する。I線部はキザミは見られないが、I線直下には12条のヘラ描き沈線を施す。内外表面劣化のため調整等不明である。174は残存高3.6cmを測る逆「L」字状I線のもので、I線部上面を斜行させる断面三角形の貼り付けI線を有する。I線部にはキザミを、I線直下に4条以上のヘラ描き沈線を施す。内外表面劣化のため調整等不明である。175は残存高9.0cmを測る如意状I線のもので、短く屈曲させるI線部直下に1条の貼り付け突帯を有する。突帯にはキザミを、突帯直下には4条1単位のヘラ描き沈線を2単位施す。内外面ナデ調整を施す。176は残存高4.2cmを測る如意状I線のもので、僅かに屈曲させるI線部を有する。I線部のキザミは見られないが、I線直下には7条のヘラ描き沈線を施す。内外表面劣化のため調整等不明である。177は残存高5.3cmを測る逆「L」字状I線のもので、I線部上面を水平にする肉厚の貼り付けI線とやや強く張る胴部を有する。I線部を欠損するためキザミの有無は不明であるが、I線直下の沈線は見られない。内面ヘラミガキ、外面板状工具によるナデ調整を施す。178は残存高6.1cmを測る逆「L」字状I線のもので、I線部上面を水平にする断面三角形の貼り付けI線を有する。I線部にはキザミを、I線直下には5条のヘラ描き沈線を有する。内面表面劣化のため調整不明であるが、外面には縦方向の板状工具によるナデ調整を施す。180は復元口径11.9cm、残存高8.8cmを測る如意状I線のもので、I線部をやや強く屈曲させる。I線部にはキザミを、I線直下には4条のヘラ描き沈線を施す。内面板状工具によるナデ調整、外面縦方向のハケ調整を施す。181は復元口径24.5cm、残存高13.5cmを測る逆「L」字状I線のもので、I線部上面を水平にするやや肉厚の貼り付けI線を有する。I線部にはキザミを、I線直下には5条のヘラ描き沈線を施す。内面表面劣化のため調整不明であるが、外面には縦方向の板状工具によるナデ調整を施す。182は復元I線径25.9cm、残存高7.5cmを測る如意状I線のもので、短く屈曲させるI線部を有する。I線部のキザミは見られないが、I線直下には5条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため内外面調整等は不明である。183は推定口径17.0cm、残存高10.3cmを測る直線的なI線部を持つものと考えられる。I線部直下にはキザミを持つ貼り付け突帯を有する。突帯直下には5条のヘラ描

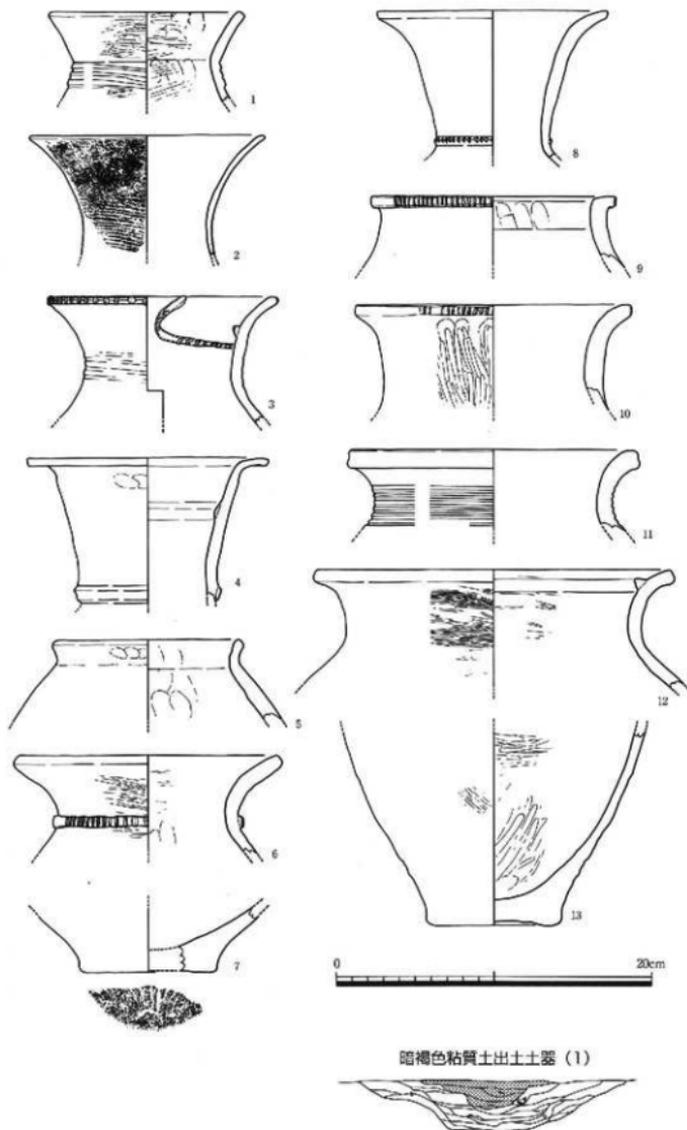


Fig.81 SD083出土土器 (1) (S=1/3)

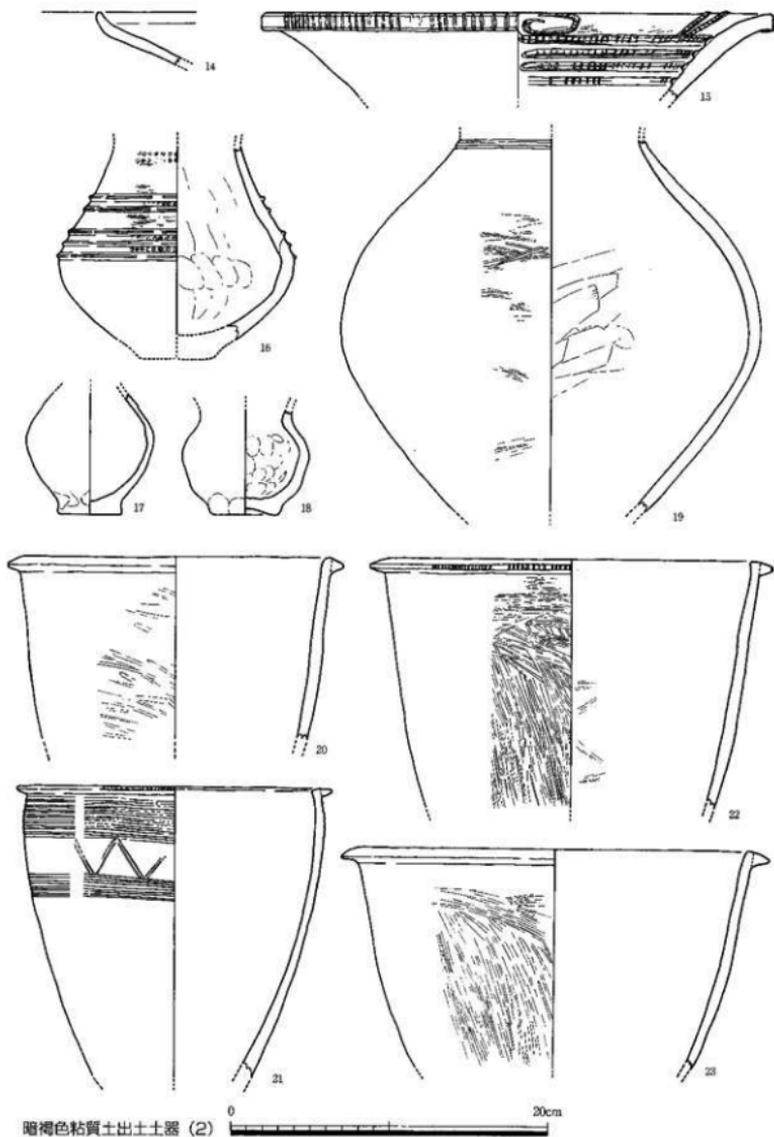
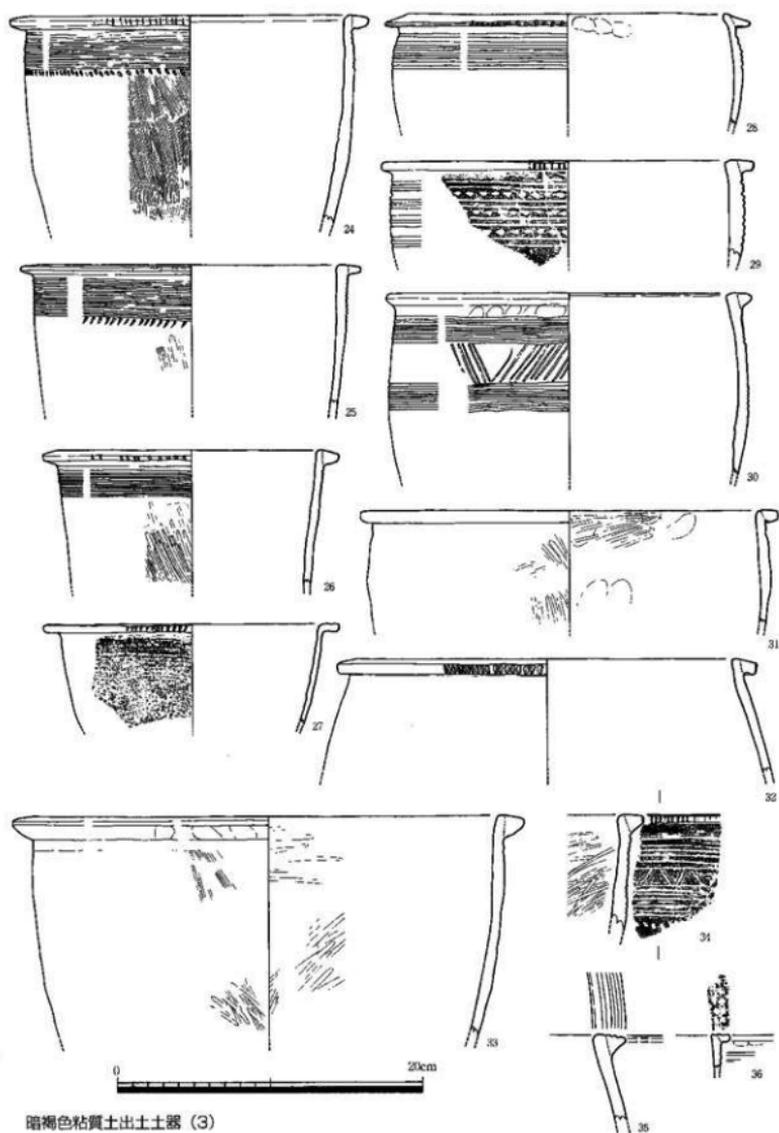


Fig.82 SD083出土土器 (2) (S=1/3)



暗褐色粘質土出土器 (3)

Fig.83 SD083出土土器 (3) (S=1/3)

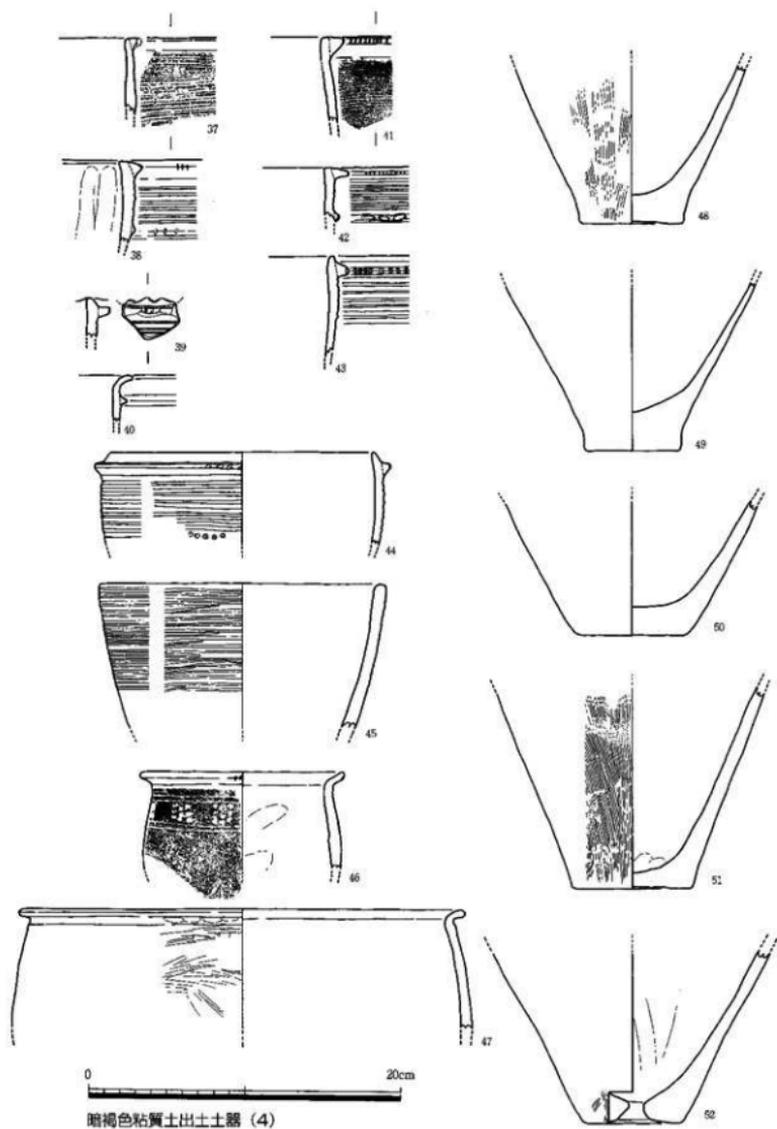
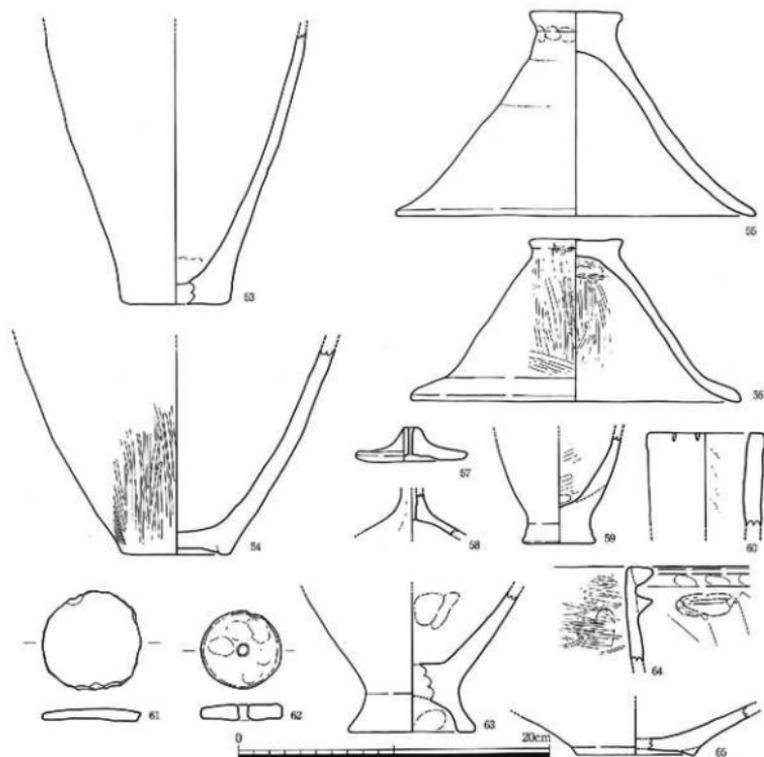
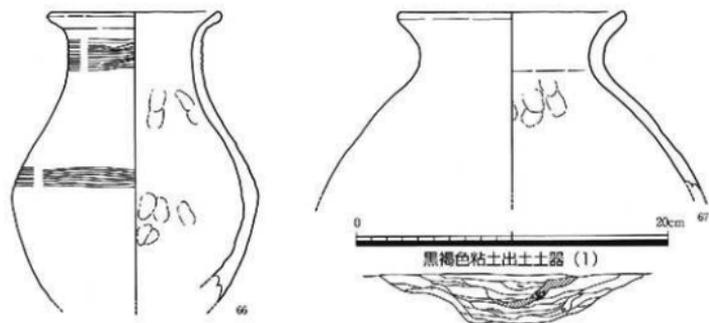


Fig.84 SD083出土土器 (4) (S=1/3)



暗褐色粘質土出土土器・土製品 (5)



黒褐色粘土出土土器 (1)

Fig.85 SD083出土土器・土製品 (5) (S=1/3)

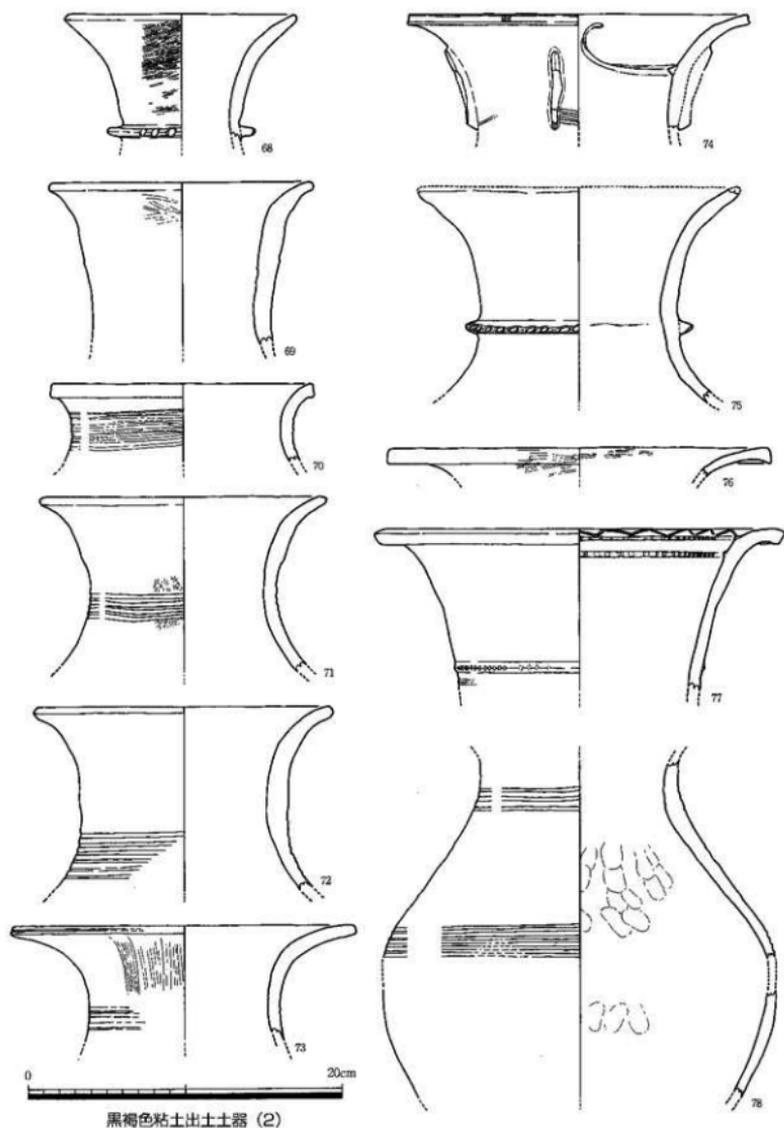
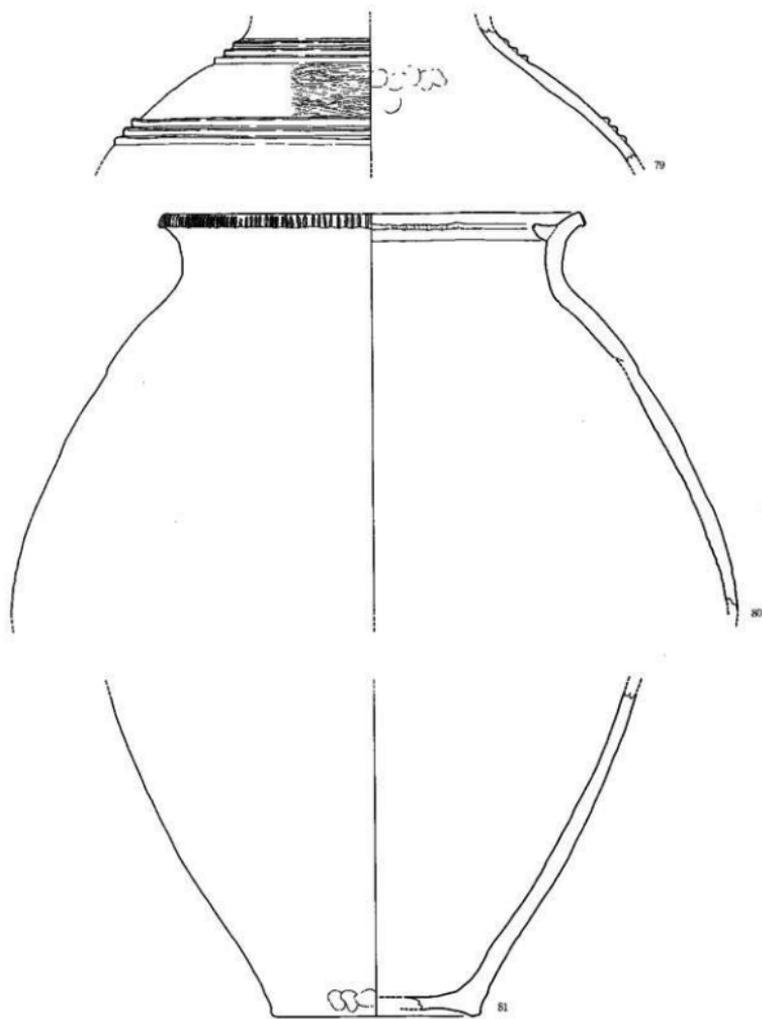


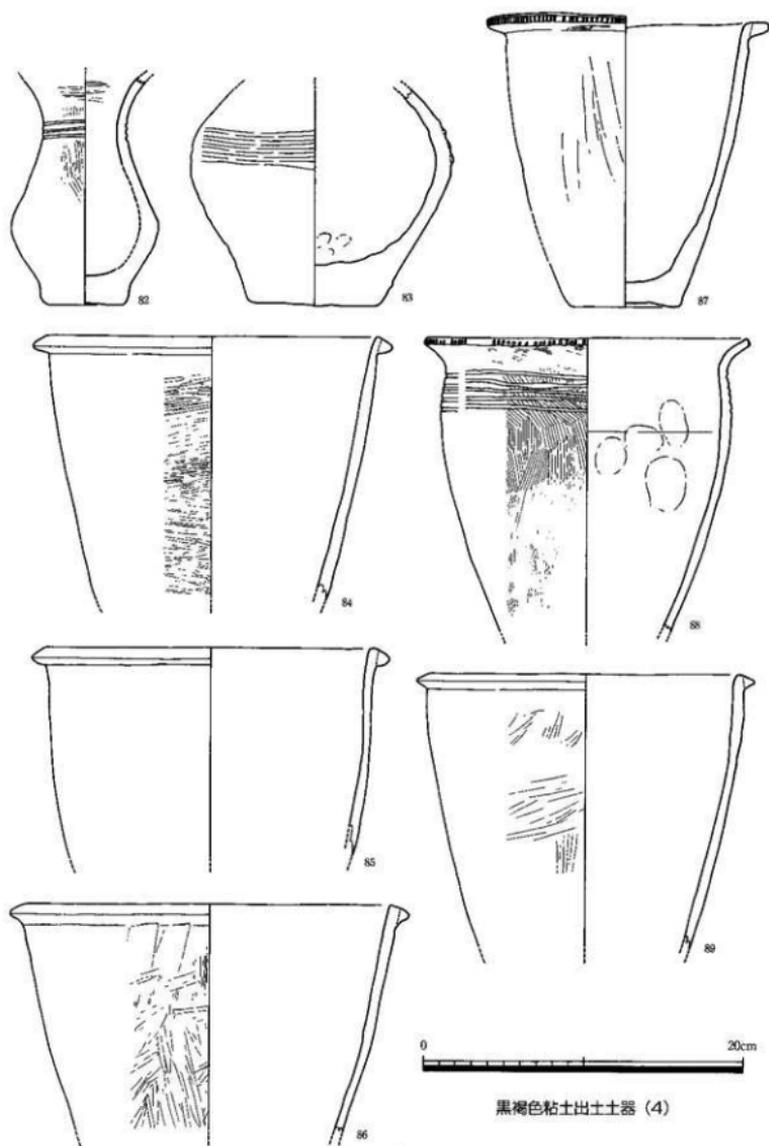
Fig.86 SD083出土土器 (6) (S=1/3)



黒褐色粘土出土土器 (3)

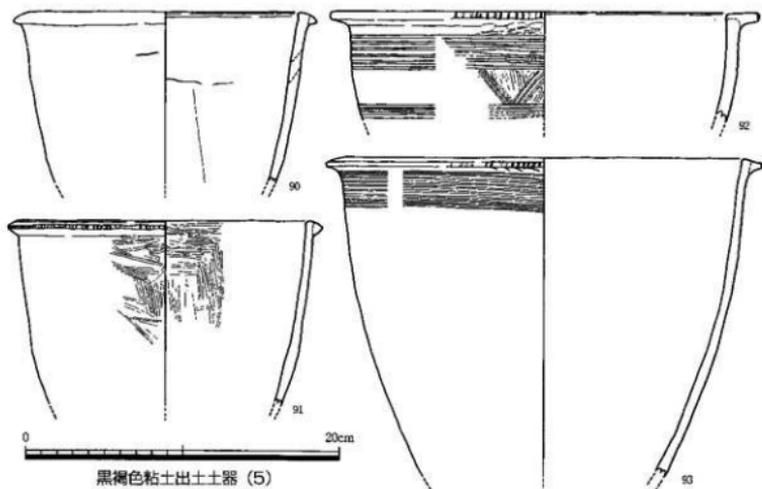


Fig.87 SD083出土土器 (7) (S=1/3)



黑褐色粘土出土土器 (4)

Fig.88 SD083出土土器 (8) (S=1/3)



黒褐色粘土出土土器 (5)

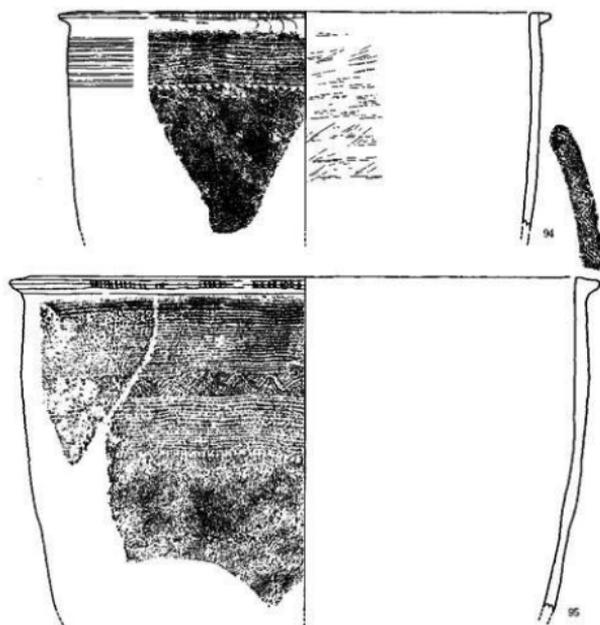


Fig.89 SD083出土土器 (9) (S=1/3)

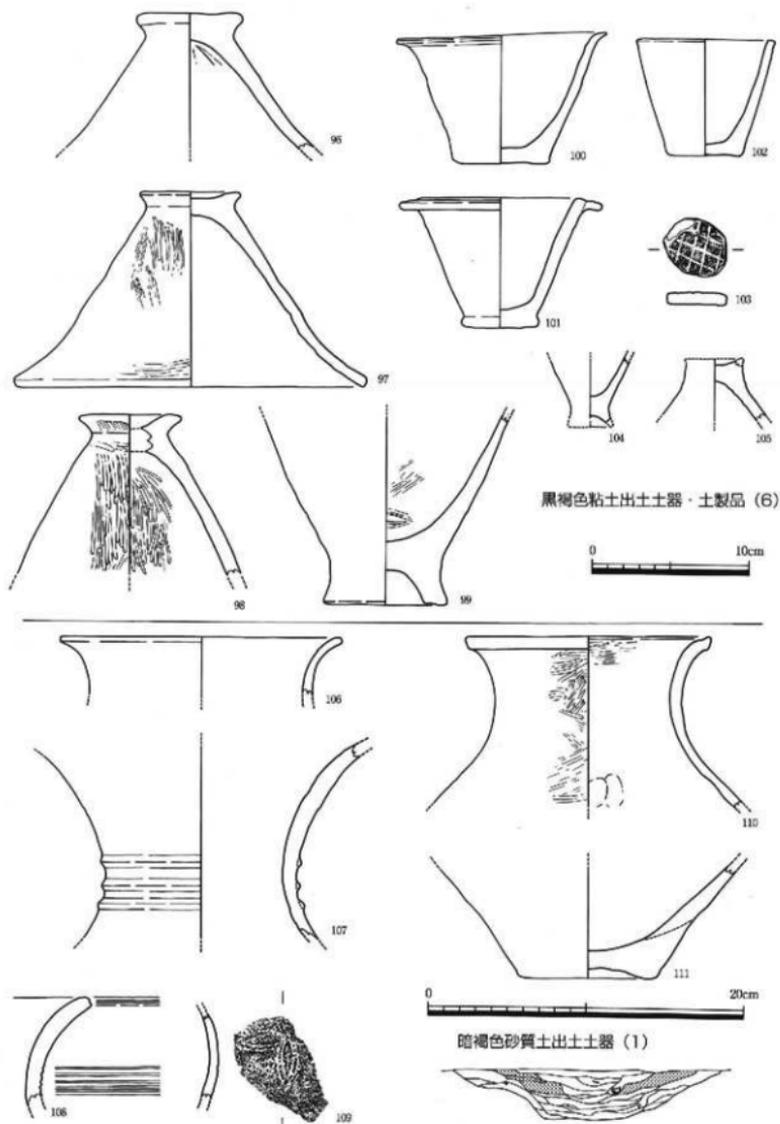


Fig.90 SD083出土土器·土製品 (10) (S=1/3)

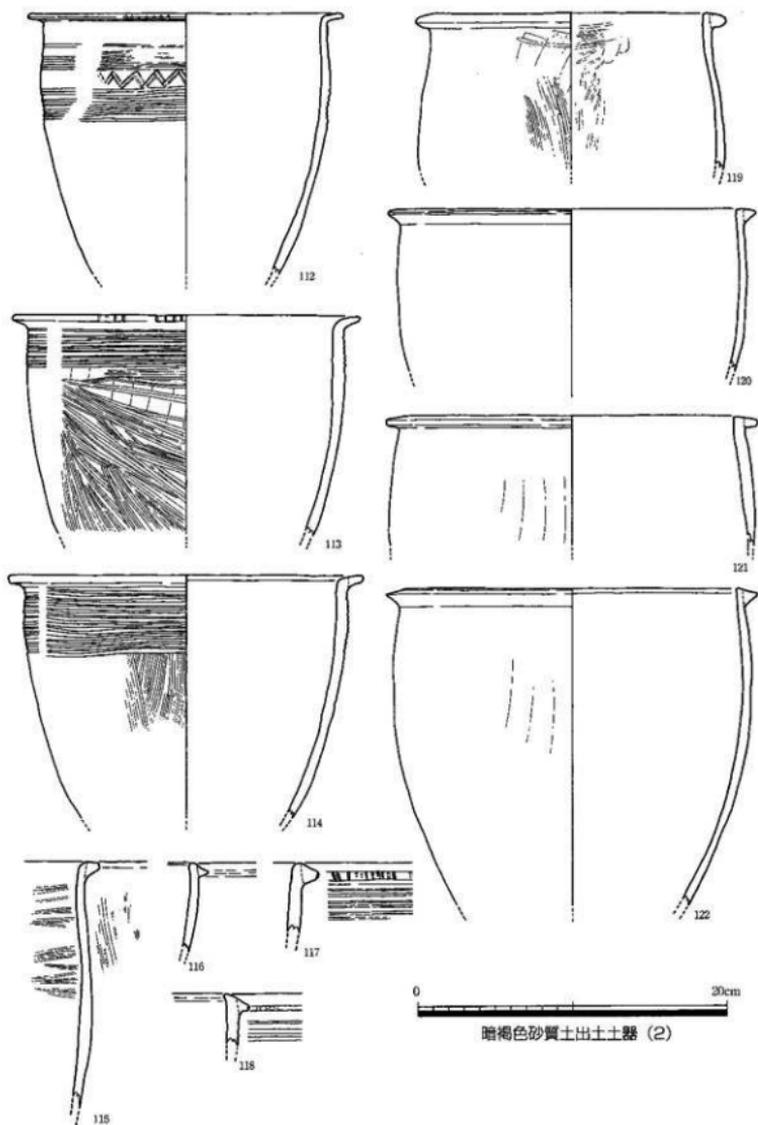


Fig.91 SD083出土土器 (11) (S=1/3)

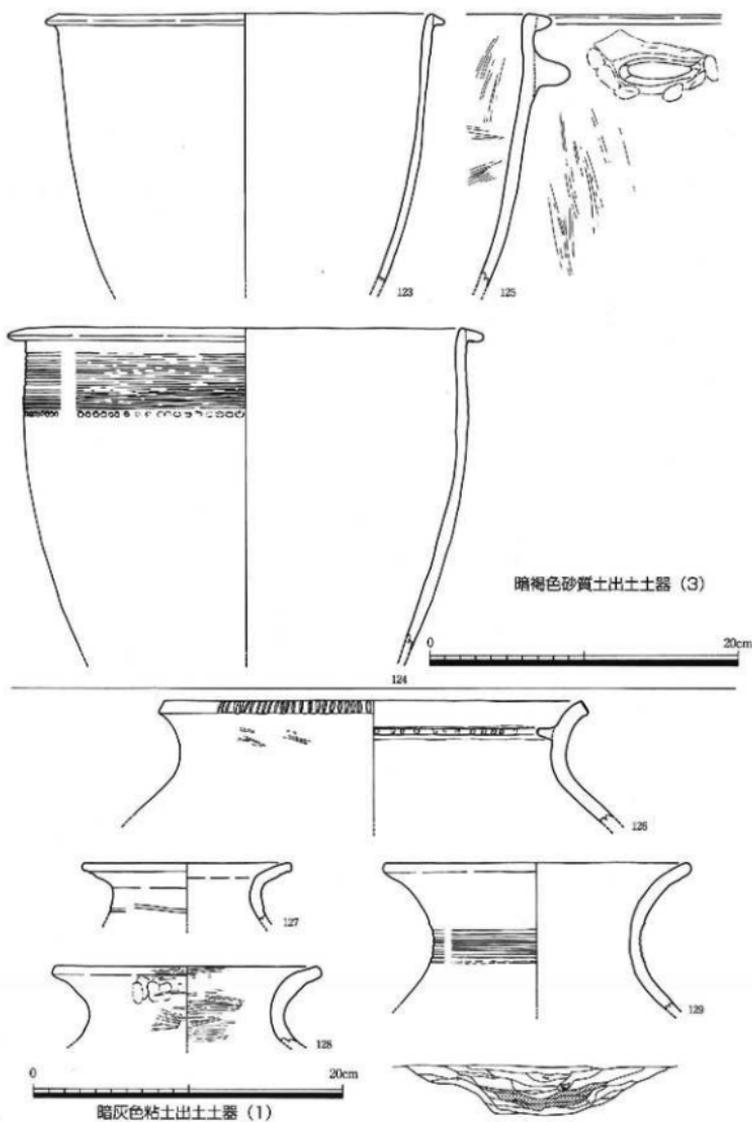


Fig.92 SD083出土土器 (12) (S=1/3)

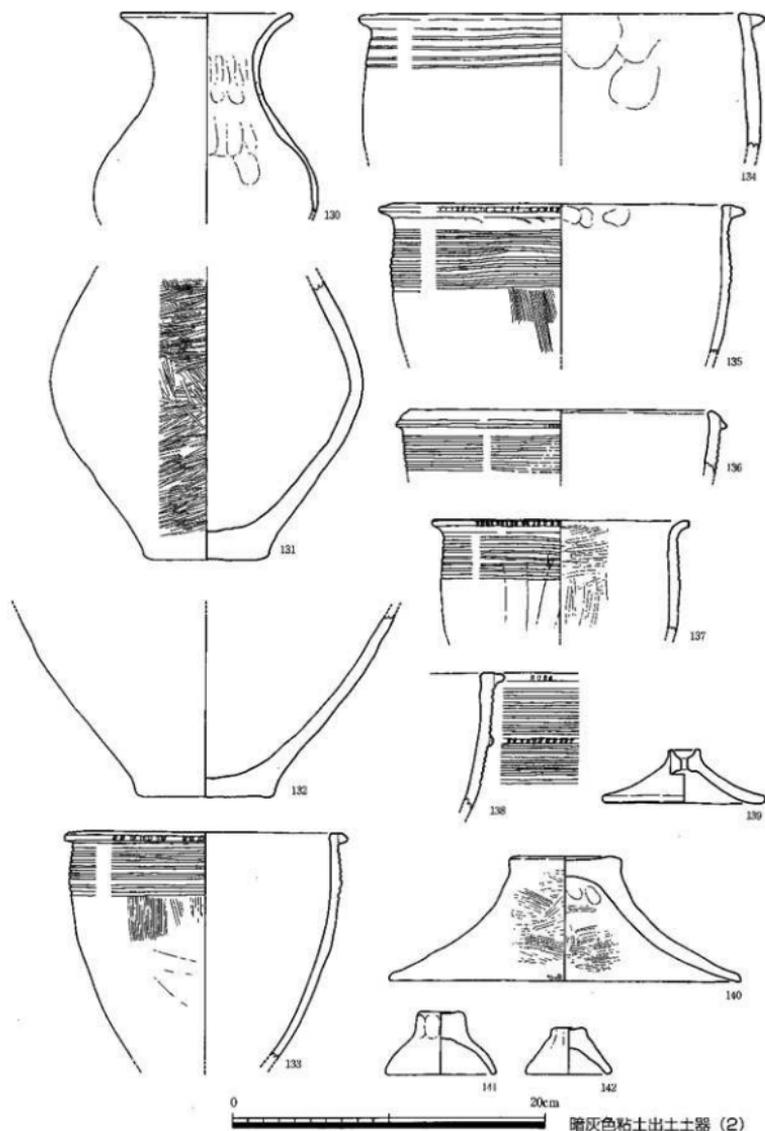


Fig.93 SD083出土土器 (13) (S=1/3)

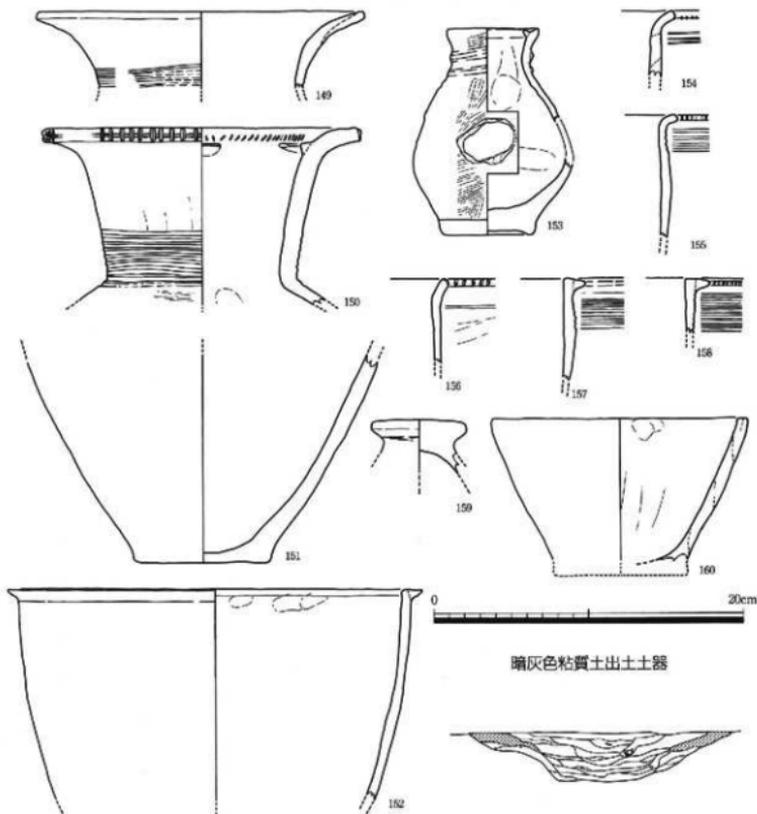
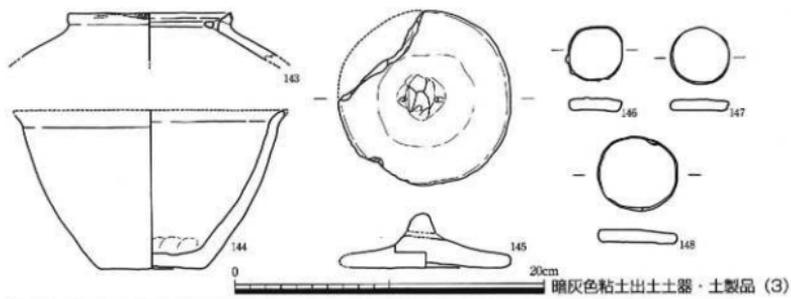
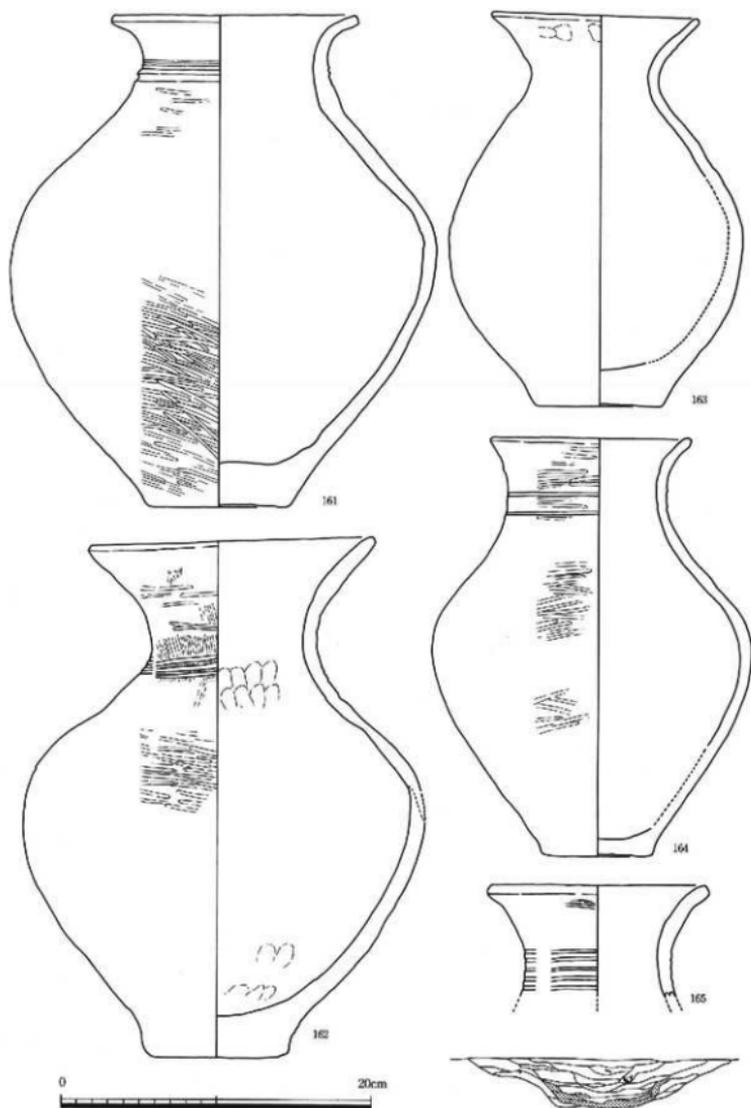


Fig.94 SD083出土土器・土製品 (14) (S=1/3)



黒灰色粘土出土土器 (1)

Fig.95 SD083出土土器 (15) (S=1/3)

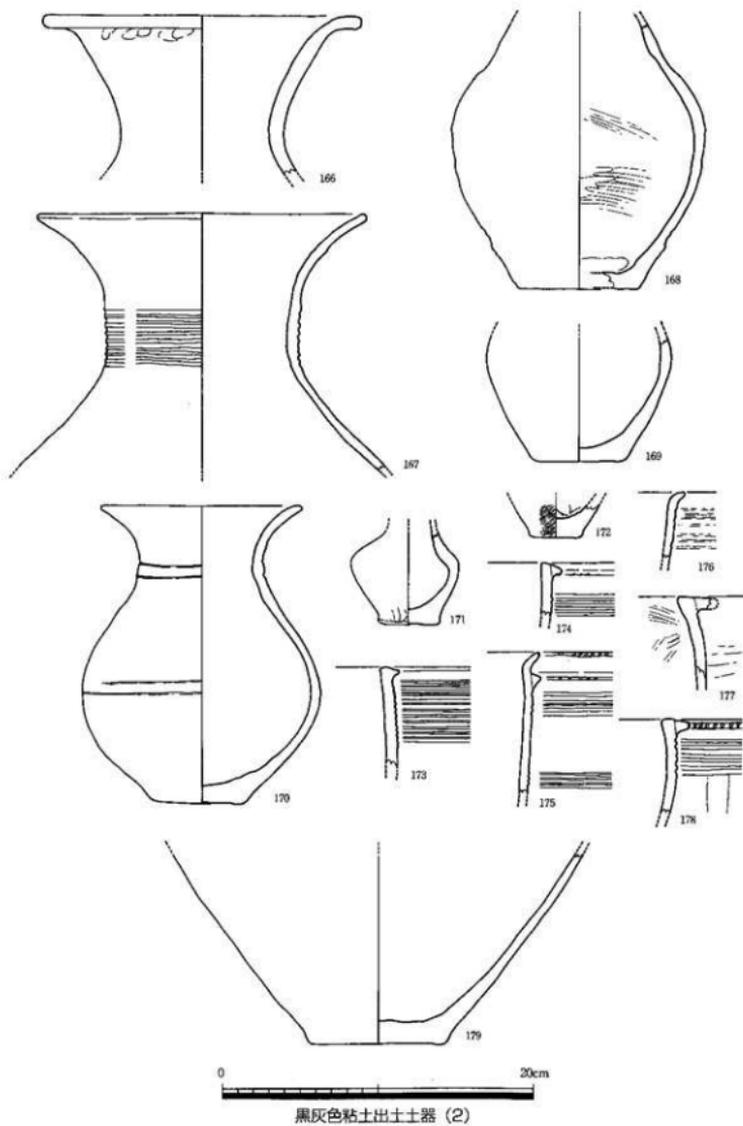


Fig.96 SD083出土土器 (16) (S=1/3)

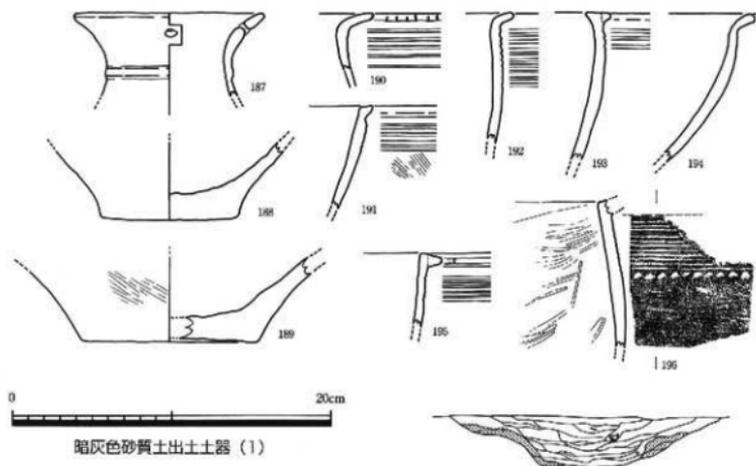
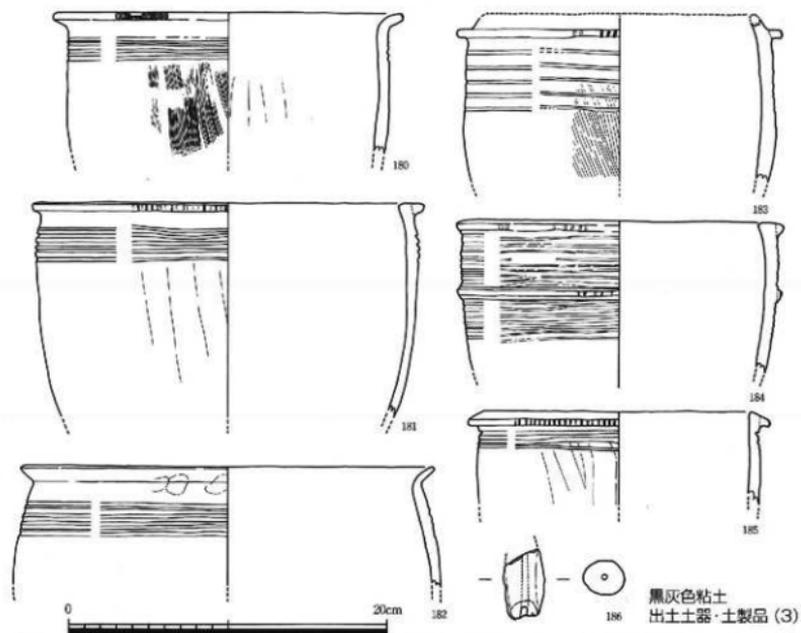


Fig.97 SD083出土土器・土製品 (17) (S=1/3)

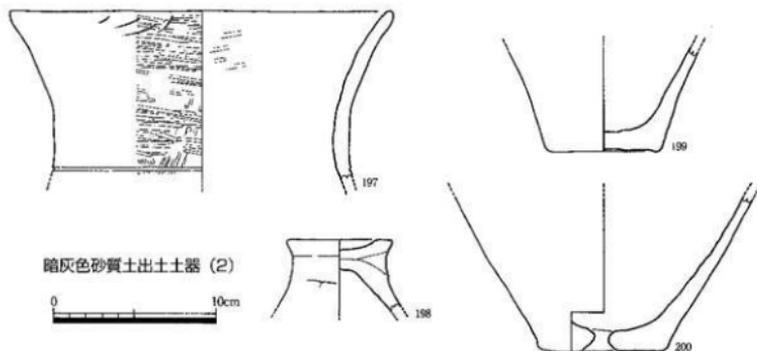


Fig.98 SD083出土土器 (18) (S=1/3)

き沈線を施す。内面表面劣化のため調整等は不明であるが、外面には縦方向のハケ調整を施す。184は復元口径20.5cm、残存高9.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、小さな断面三角形の貼り付け口縁と、口縁部直下に1条の貼り付け突帯を施す。口唇部および突帯にはキザミを施し、口縁部および突帯直下には合計15条のヘラ描き沈線を有する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。暗灰色粘土出土のもの(138)と同一のものである可能性がある。185は復元口径18.9cm、残存高5.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内面ナデ調整、外面縦方向の板状工具によるナデ調整を行う。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、174・180・181・184・185は暗褐色、175は褐色を呈する。182は赤色酸化土粒を多く含む。

土鍾

186は残存長4.4cm、幅2.6cmを測る。中心には径3mm前後の円孔を穿ち、端部には紐ずれの痕跡が残る。胎土は暗褐色を呈し砂粒が少ない。なお、この遺物は最上層である暗褐色粘質土出土の破片と接合した。

暗灰色砂質土出土土器 (Fig.97・98)

壺 (187~189・197)、甕 (190~193・195・196・199・200)、鉢 (194)、甕蓋 (198) が出土した。

壺

187は復元口径12.0cm、残存高5.3cmを測る。頸部から口縁部へやや強く湾曲し、口縁端部は丸く納める。内外面表面劣化のため調整等不明であるが、頸部には1条の削り出し突帯を有する。口縁部には焼成前穿孔の円孔を穿つ。188は底径8.7cm、残存高4.9cmを測り、直立気味に立ち上がった後緩やかに開く体部を有する。表面劣化が著しく調整等は不明である。189は復元底径11.0cm、残存高5.3cmを測り、緩やかに開く体部を有する。表面劣化が著しく調整等は不明である。197は復元口径23.5cm、残存高10.4cmを測る。頸部から口縁部へ緩やかに湾曲し、口縁端部は丸く納める。内外面横方向のヘラミガキを施す。頸部外面には1条のヘラ描き沈線を施す。胎土はいずれも径5mm程度の長石粒を多量に含むが、187・197は暗褐色、188・189は褐色を呈する。197は赤色酸化土粒を多く含む。

甕

190は残存高3.6cmを測る如意状口縁のもので、長く伸ばす口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁直下には5条以上のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等不明である。191は残存高6.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、短い口縁を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁直下には5条のヘラ描き沈線を施す。内面表面劣化のため調整等不明であるが、外面にはハケ調整の痕跡が残る。192は残存高8.2cmを測る如意状口縁のもので、短く屈曲させる口縁を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁直下には10条のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等は不明である。193は残存高9.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部内外に突出する。口唇部のキザミはみられず、口縁直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を行う。195は残存高

4.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、肉厚の断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを施し、口縁直下には5条のヘラ指き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等は不明である。196は残存高9.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部を欠損する。口縁直下には11条のヘラ指き沈線と山形の刺突文を施すが、沈線は脚指き文の可能性も考えられる。内外面ヘラミガキを施す。199は底径7.0cm、残存高6.4cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。劣化のため調整等は不明である。200は底径8.0cm、残存高9.6cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。底部には径8mmの焼成後穿孔が見られる。劣化のため調整等は不明である。胎土は大半が径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するが、192は淡褐色、195・200は赤色酸化土粒を多く含む。

鉢

194は残存高9.3cmを測る如意状口縁を有するものである。弱く「S」字を描く口縁部と体部を有し、口唇部のキザミや口縁部直下の沈線等は見られない。内外面ナダの後ヘラミガキを行うと考えられる。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

甕

198は天井部の破片である。復元天井部径6.5cm、残存高4.4cmを測る。内面ナダ調整、外面板状工具によるナダ調整を行う。胎土は暗褐色を呈し砂粒が少ない。

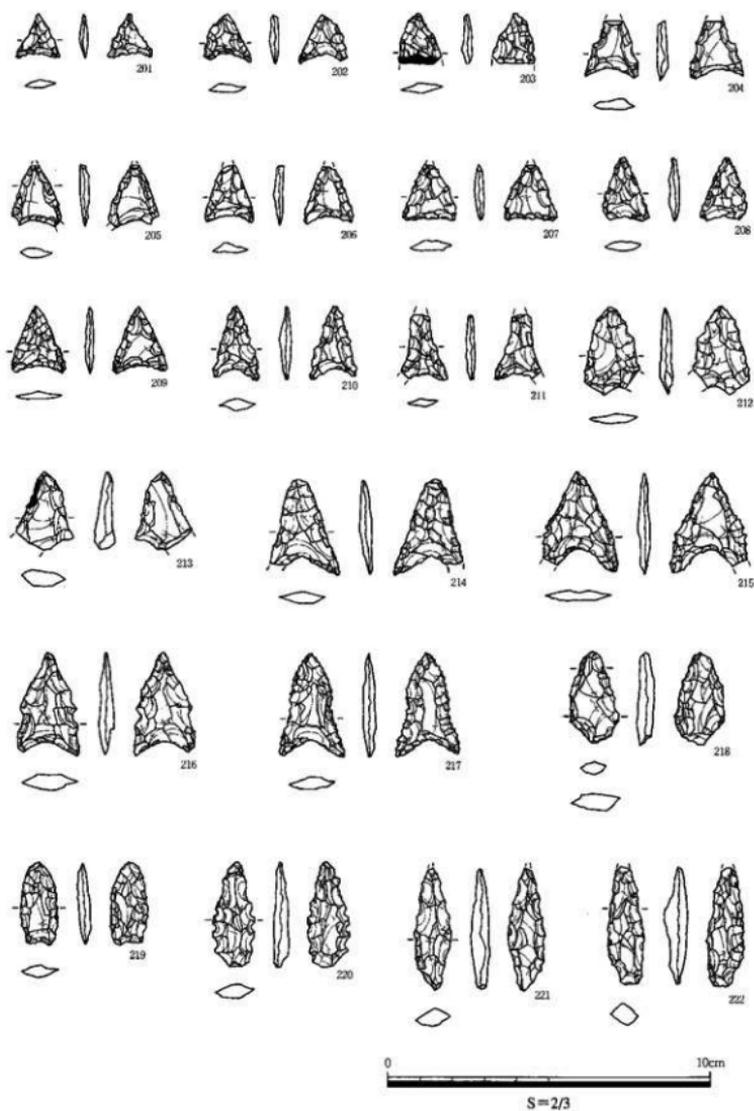
石器 (Fig.99~113)

暗褐色粘質土出土石器 (Fig.99~107)

石鏃 (201~222)、石鏃未製品 (223~232)、石鏃 (233~240)、石鏃未製品 (241~245)、石匙 (246)、スクレイパー (247~250)、打製石包丁 (251~258)、楔形石器 (259)、板状剥片 (260)、石核 (261)、磨製石包丁 (262・263)、磨製石包丁未製品 (264)、扁平片刃石斧 (265)、磨製石鏃 (266)、大型始刃石斧 (267)、磨製石斧 (268)、敲石 (269)、くほみ石 (270)、砥石 (271)、砥石兼敲き石 (272)、軽石 (273)、台石 (274) が出土した。

石鏃

石材はすべてサマサイトである。201は小型の平基式の石鏃である。両面を調整する。最大長1.4cm、最大幅1.4cm、最大厚0.3cm、重量0.3gで完形である。202は小型の凹基式の石鏃で、両面に素材面を残す。切先と逆刺を折損する。最大長 (1.5cm)、最大幅 (1.5cm)、最大厚0.3cm、重量 (0.4g) である。203は基部を欠損する。最大長 (1.5cm)、最大幅 (1.3cm)、最大厚 (0.3cm)、重量 (0.6g) を測る。204は凹基式の石鏃である。両面に素材面を残す。切先を折損しており、最大長 (1.8cm)、最大幅1.7cm、最大厚0.3cm、重量 (0.9g) である。205は平基式の石鏃で、腹面に素材面を残し、切先を欠損する。最大長 (1.9cm)、最大幅 (1.5cm)、最大厚 (0.3cm)、重量 (0.8g) を測る。206は平基式の石鏃である。腹面に素材面を残す。切先を欠損し、最大長 (1.8cm)、最大幅1.5cm、最大厚0.3cm、重量 (0.7g) である。207は平基式の石鏃で、腹面に素材面を残す。切先を折損し、最大長 (1.8cm)、最大幅 (1.7cm)、最大厚0.3cm、重量 (0.7g) である。208は平基式の石鏃である。全体に調整を施し、素材面を残さない。最大長1.9cm、最大幅1.5cm、最大厚0.4cm、重量0.6gで完形である。209は凹基式の石鏃である。腹面に素材面を残す。最大長2.1cm、最大幅1.7cm、最大厚0.2cm、重量0.6gで完形である。210は凹基式の石鏃である。両面に素材面を残し、やや鋸歯状に調整を施す。最大長2.3cm、最大幅1.5cm、最大厚0.5cm、重量0.7gを測り、完形である。211は凹基式の石鏃で、切先と逆刺を折損する。両面に調整を施す。最大長 (2.1cm)、最大幅 (1.5cm)、最大厚0.3cm、重量 (0.6g) を測る。212は凹基式の石鏃である。腹面に素材面を残し、一方の逆刺を折損する。最大長 (2.7cm)、最大幅 (1.8cm)、最大厚0.5cm、重量 (1.5g) である。213は両面に大きな素材面を残す。切先は作り出されているが、基部は粗い調整と折損である。石鏃の未製品の可能性も考えられる。最大長 (2.4cm)、最大幅 (1.8cm)、最大厚0.7cm、重量 (2.0g) を測る。214は凹基式の石鏃である。両面に調整を施すが、腹面部部に自然面を残す。逆刺の一方は他方に比べ短く作り出されている。切先を欠損する。最大長 (3.0cm)、最大幅2.2cm、最大厚0.4cm、重量 (1.5g) を測る。215は凹基式の石鏃である。腹面に素材面を残し、刃部は2~3mmの鋸歯状に調整されている。逆刺の一方を折損する。最大長 (3.1cm)、最大幅 (2.3cm)、最大厚0.4cm、重量 (1.8g) である。216は凹基式の石鏃である。両面に素材面を残し、作部中央の縁辺に屈曲がある。最大長3.2cm、最大幅1.9cm、最大厚



暗褐色粘質土出土石器 (1)

Fig.99 SD083出土石器 (1)

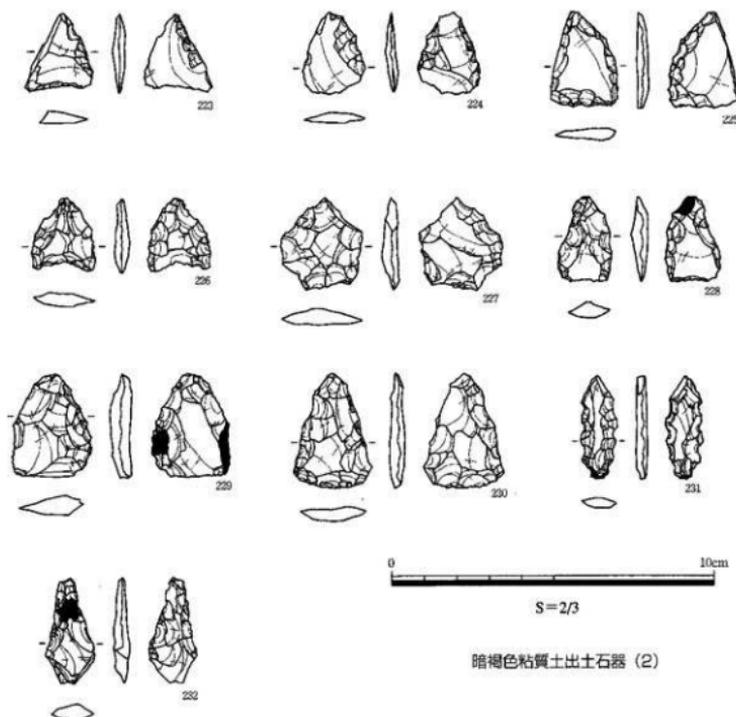
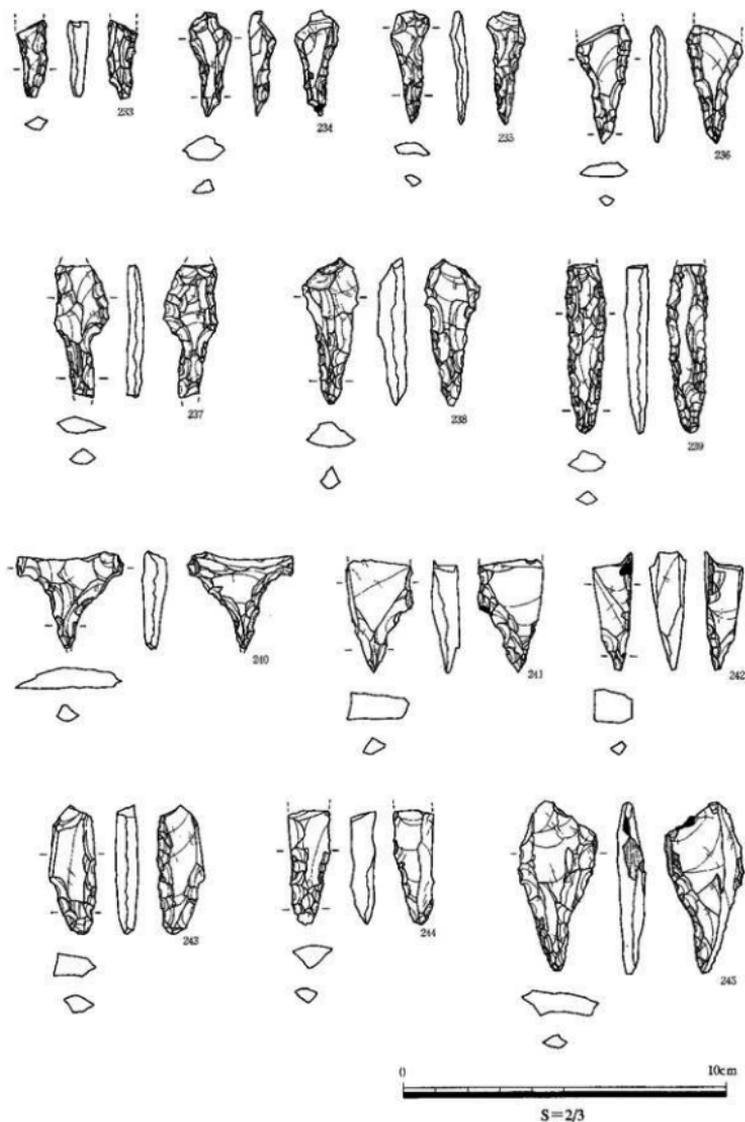


Fig.100 SD083出土石器 (2)

0.5cm、重量1.8gを測り、完形である。217は凹基式の石鏃である。両面に素材面を残し、作用部の切先に近い縁辺に弱い屈曲が見られる。刃部は1~2mmの鋸歯状に調整されている。最大長3.2cm、最大幅2.0cm、最大厚0.4cm、重量1.5gを測り、完形である。218は凸基式の大型の石鏃である。両面に調整を施す。完形で最大長2.8cm、最大幅1.5cm、最大厚0.6cm、重量2.3gを測る。219は凸基式の石鏃である。背面に素材面を残す。最大長2.6cm、最大幅1.2cm、最大厚0.4cm、重量1.0gで完形である。220は凸基式の石鏃である。両面に調整を施し、刃部は2~3mmの鋸歯状に調整を施す。最大長3.2cm、最大幅1.3cm、最大厚0.5cm、重量1.7gを測り、完形である。221は凸基式の大型の石鏃である。両面に調整を施すが、切先を欠損する。最大長(3.7cm)、最大幅1.2cm、最大厚0.6cm、重量(2.0g)を測る。222は凸基式の大型の石鏃である。両面に調整を施し、切先を欠損する。最大長(3.7cm)、最大幅1.2cm、最大厚0.7cm、重量(2.6g)である。

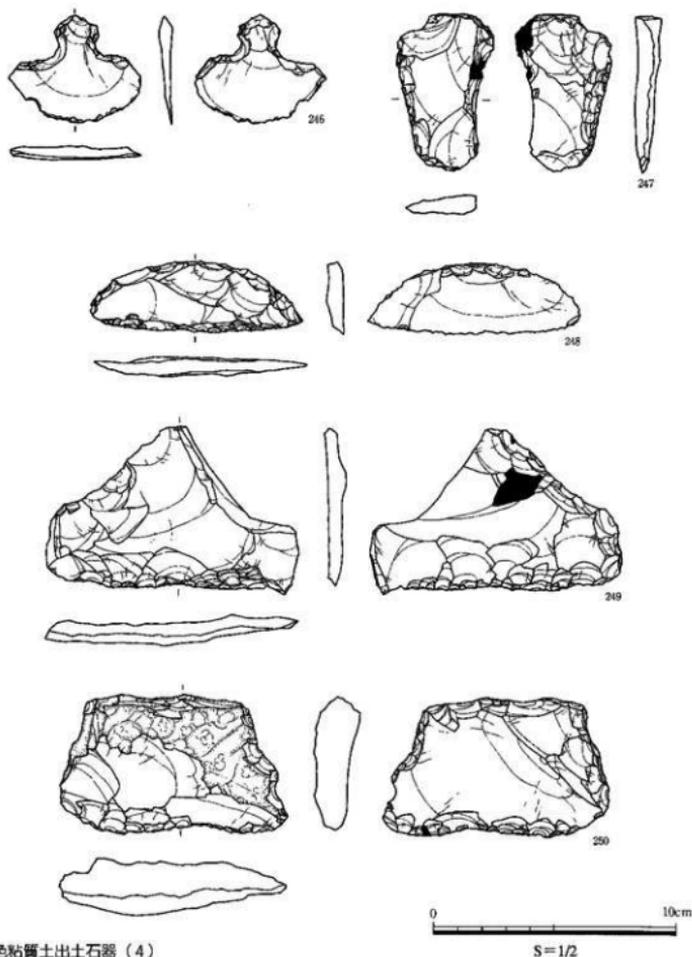
石鏃未製品

石材はすべてサヌカイトである。223は基部に調整を施し、側縁には折面から調整を加えている。最大長2.5cm、最大幅2.1cm、最大厚0.4cm、重量1.3gを測る。224は側縁に調整を施しているが、切先と基部の調整はみられない。最大長2.5cm、最大幅1.9cm、最大厚0.4cm、重量1.4gである。225は素材面を残して全体を調整した後、切先と側縁



暗褐色粘質土出土石器 (3)

Fig.101 SD083出土石器 (3)



暗褐色粘質土出土石器 (4)

Fig.102 SD083出土石器 (4)

を折損している。最大長2.0cm、最大幅2.1cm、最大厚0.4cm、重量2.7gを測る。226は両面に調整を施しているが、切先の調整が不完全である。最大長2.3cm、最大幅2.0cm、最大厚0.5cm、重量1.5gを測る。227は側縁全体に調整を施した後、切先から側縁中央にかけて折損している。最大長2.8cm、最大幅2.6cm、最大厚0.6cm、重量3.0gである。228は基部に若干の調整、側縁に調整を施している。石鏃の可能性も考えられる。先端部を欠損している。最大長2.6cm、最大幅1.7cm、最大厚0.5cm、重量1.9gを測る。229は側縁に調整を施しているが、切先の調整は行われていない。最大長3.2cm、最大幅2.5cm、最大厚0.7cm、重量4.9gを測る。230は側縁と基部に調整を施すが、切先は未調

整である。最大長3.5cm、最大幅2.5cm、最大厚0.5cm、重量3.7gを測る。231は側縁を5~6mmの筋溝状に整形しているが、切先は折損している。最大長3.2cm、最大幅1.1cm、最大厚0.4cm、重量1.3gである。232は側縁に調整が施されているが、切先と基部を折損している。石鏃の可能性も考えられる。最大長3.3cm、最大幅1.6cm、最大厚0.5cm、重量1.8gを測る。

石鏃

石材はすべてサヌカイトである。233は背面側に素材面を残すが、刃部と基部を折損している。最大長(2.4cm)、最大幅1.0cm、最大厚0.7cm、重量(1.4g)である。234は頭部と鏃部の境がなく、ほぼ一定の幅をもつ棒状の形態の石鏃である。基部の折れ面に調整を加え両面に素材面を残している。先端は非常に薄くなっている。最大長3.2cm、最大幅1.3cm、最大厚0.8cm、重量2.3gで完形。235は頭部と鏃部の境がなく、ほぼ一定の幅をもつ棒状の形態の石鏃である。完形で最大長3.5cm、最大幅1.3cm、最大厚0.7cm、重量1.4gを測る。236は頭部と鏃部の境が明瞭で、鏃部が細長い形態の石鏃である。両面に素材面を残し、基部は折損している。最大長(3.6cm)、最大幅1.7cm、最大厚0.5cm、重量(2.4g)を測る。237は頭部と鏃部の境が明瞭で、鏃部が細長い形態の石鏃である。腹面に自然面を残し、基部と刃部を欠損している。最大長(4.1cm)、最大幅1.7cm、最大厚0.6cm、重量(3.0g)。238は頭部と鏃部の境が明瞭で、鏃部が細長い形態の石鏃である。基部に自然面、腹面に素材面を残し、腹面中央の稜線から調整を加えている。最大長4.5cm、最大幅1.8cm、最大厚0.9cm、重量4.8gである。239は頭部と鏃部の境がなく、ほぼ一定の幅をもつ棒状の形態の石鏃である。腹面の素材面を残し、基部を折損している。側縁を丁寧な調整を施していることから、大型の石鏃の可能性も考えられる。最大長(5.2cm)、最大幅1.2cm、最大厚0.8cm、重量(4.5g)である。240は頭部と鏃部の境が明瞭で、鏃部が細長い形態の石鏃である。基部の折れ面に調整を加え、刃部を折損する。最大長(3.0cm)、最大幅3.3cm、最大厚0.8cm、重量(4.3g)を測る。

石鏃木製品

石材はすべてサヌカイトである。241は素材面から側縁部の折れ面に向けて調整を施す。基部を折損するが、先端は鋭利に調整されている。石鏃の可能性も考えられる。最大長3.5cm、最大幅2.1cm、最大厚0.9cm、重量6.0gである。242は側縁から素材面に向けて調整を施す。刃部の厚みは薄く、基部を折損する。最大長3.7cm、最大幅1.2cm、最大厚1.5cm、重量4.7gを測る。243は一方の側縁に丁寧な調整を施すが、他方の側縁は素材面から折れ面に向かって調整を一度加えるのみである。刃部は作り出されていない。石鏃の木製品の可能性も考えられる。最大長4.0cm、最大幅1.5cm、最大厚0.8cm、重量5.0gである。244は縦長の剥片を素材とする。基部を折損する。最大長3.5cm、最大幅1.3cm、最大厚0.8cm、重量3.2gである。245は側縁部の折れ面から調整を加えるが、刃部には調整が施されていない。側縁に自然面を残す。最大長5.3cm、最大幅2.5cm、最大厚0.9cm、重量8.7gを測る。

石匙

246は横長の剥片に調整を施してつまみを作り出し、刃部は未調整で微細な剥離痕が確認できる。一部に自然面を残している。完形で最大長4.4cm、最大幅5.4cm、最大厚0.5cm、重量9.0gを測る。石材はサヌカイトである。

スクレイパー

石材はすべてサヌカイトである。247は縦長剥片を素材としたスクレイパーである。素材となる剥片は自然面からの加撃によって得られている。刃部を欠損するものの、ほぼ完形である。最大長6.4cm、最大幅4.0cm、最大厚1.0cm、重量(23.1g)を測る。248は横長剥片を素材としたスクレイパーである。刃部は腹面からの調整によって形成されている。完形で最大長2.9cm、最大幅8.8cm、最大厚0.9cm、重量20.9gを測る。249は不定形刃器の範疇に入ると考えられる。刃部には微細な剥離痕がみられる。一部に自然面を残す。最大長6.6cm、最大幅10.5cm、最大厚1.3cm、重量55.5gで、完形である。250は背部には刃潰し加工が施され、刃部は磨滅している。背面体部に広範囲の自然面を残す。最大長5.7cm、最大幅9.4cm、最大厚2.3cm、重量102.7gを測り、完形である。

打製石包丁

石材はすべてサヌカイトである。251は完形の打製石包丁である。背部には刃潰し加工が施され、刃部は両面調整されている。片方に簡単な抉りを作り出す。光沢面が両面に確認できる。最大長12.1cm、最大幅4.5cm、最大厚1.1cm、重量56.3gを測る。252は完形の打製石包丁と考えられる。抉りは存在しない。刃潰し加工を施した背面の背部に光沢面がみられる。刃部は両面調整である。折れ面にも調整を加えている。最大長10.0cm、最大幅4.7cm、最

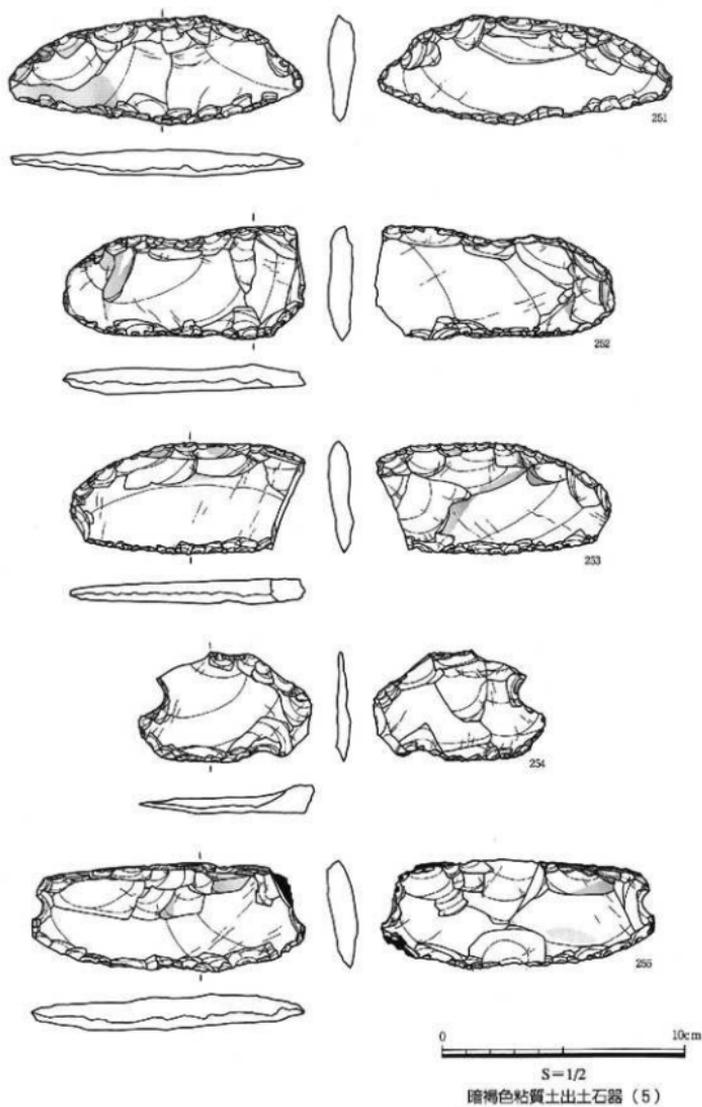
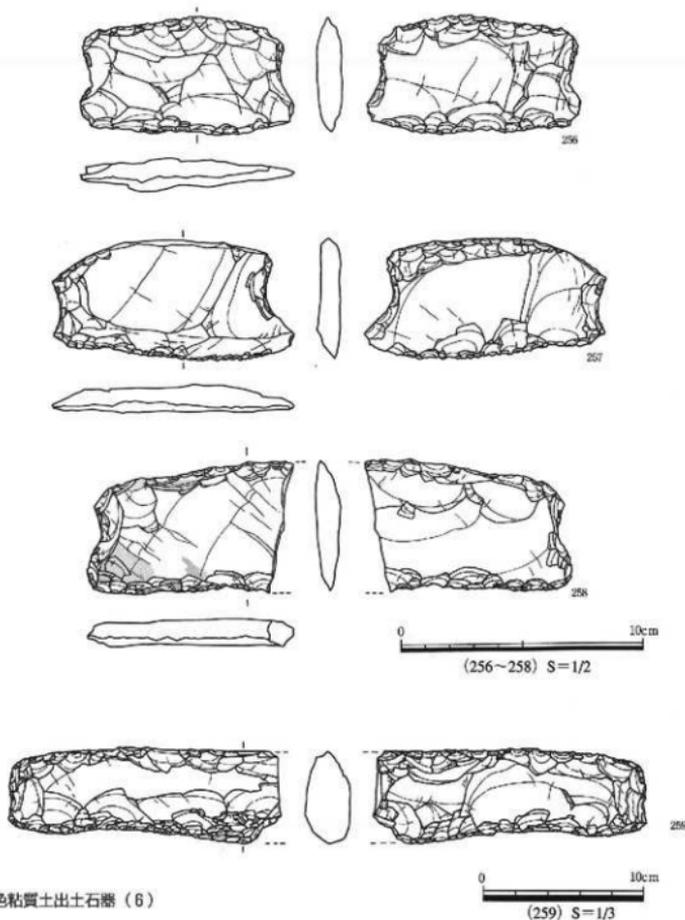


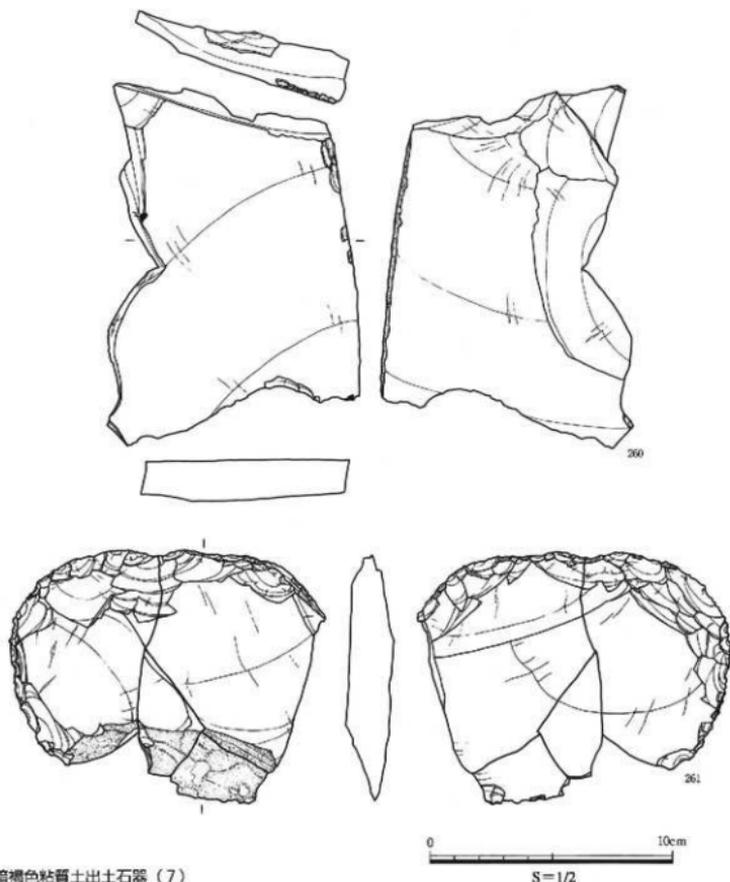
Fig.103 SD083出土石器 (5)



暗褐色粘質土出土石器 (6)

Fig.104 SD083出土石器 (6)

大厚1.2cm、重量61.6gを測る。253は背部に刃潰し加工を施し、刃部は両面調整である。背面の背部と刃部および腹面体部に光沢面がみられる。一部を折損し、最大長(9.7cm)、最大幅4.6cm、最大厚1.1cm、重量(54.2g)である。254は小型の打製石包丁である。背部と刃部の一部を折損する。背部に刃潰し加工を施し、刃部は両面調整である。最大長(7.2cm)、最大幅4.5cm、最大厚1.5cm、重量(26.0g)を測る。255は両側に挟りを持つ打製石包丁である。背部に研磨が施され、刃部は両面調整されている。背腹両面とも体部から刃部にかけて光沢面がみられる。最大長11.3cm、最大幅4.5cm、最大厚1.5cm、重量(73.5g)では完形である。256は両側に挟りを持つ小型の打製石包丁である。背部に明瞭な刃潰し加工はみられず、刃部は両面調整である。最大長8.8cm、最大幅4.9cm、最大厚1.4cm、重量53.8gを測り、完形。257は両側に挟りを持つ打製石包丁である。背部は折れ面に調整を施し、刃部は2~4mmの



暗褐色粘質土出土石器 (7)

Fig.105 SD083出土石器 (7)

鋸歯状に作り出されている。完形で最大長10.0cm、最大幅5.0cm、最大厚1.1cm、重量59.0gである。258は折損しているが柄りをもつ大型の打製石包丁と考えられる。背部には刃潰し加工が、刃部は両面調整が施されている。背面全体に光沢面がみられる。最大長(8.5cm)、最大幅5.3cm、最大厚1.1cm、重量(67.6g)を測る。

楔形石器

259は大型の楔形石器である。両刃部に激しい潰れがみられ、楔としての用途が考えられる。側辺部を折損しており、最大長5.9cm、最大幅(17.1cm)、最大厚2.8cm、重量(356.0g)を測り、石材はサヌカイトである。

板状剥片

260は板状剥片である。側面に自然面を残す。頂部の折れ面に調整を施しているが、それ以外に加工痕はみられない。最大長14.8cm、最大幅10.4cm、最大厚1.7cm、重量319.5gで、石材はサヌカイトである。

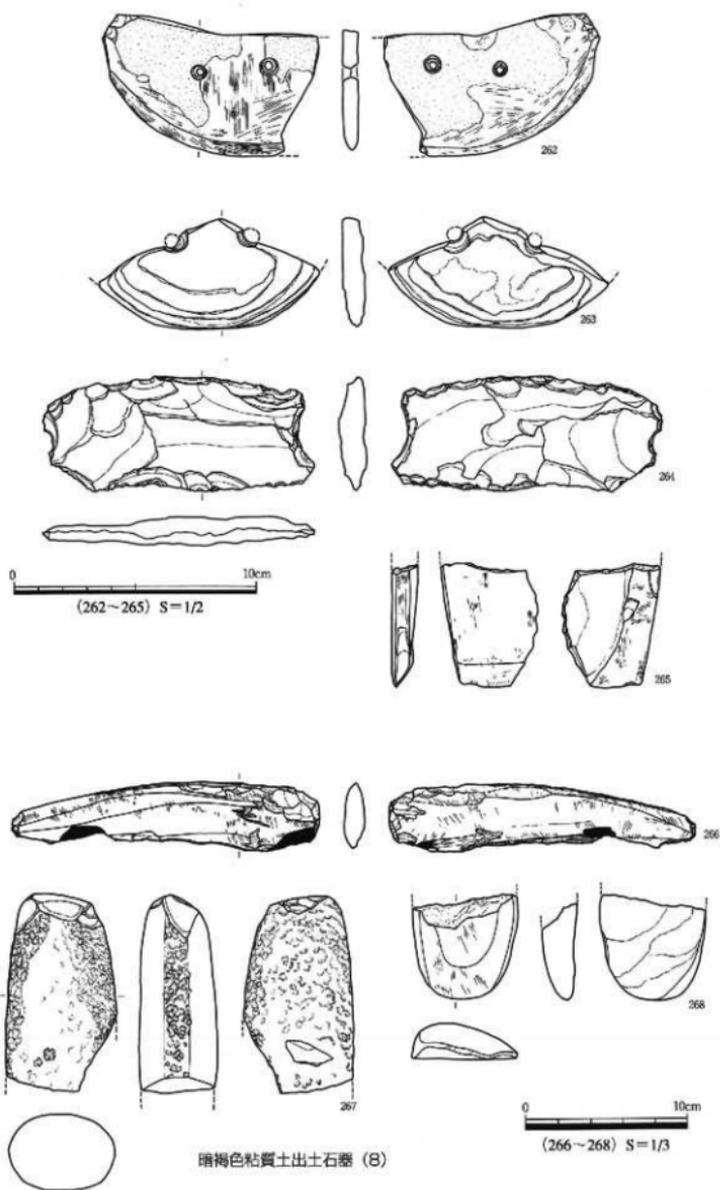
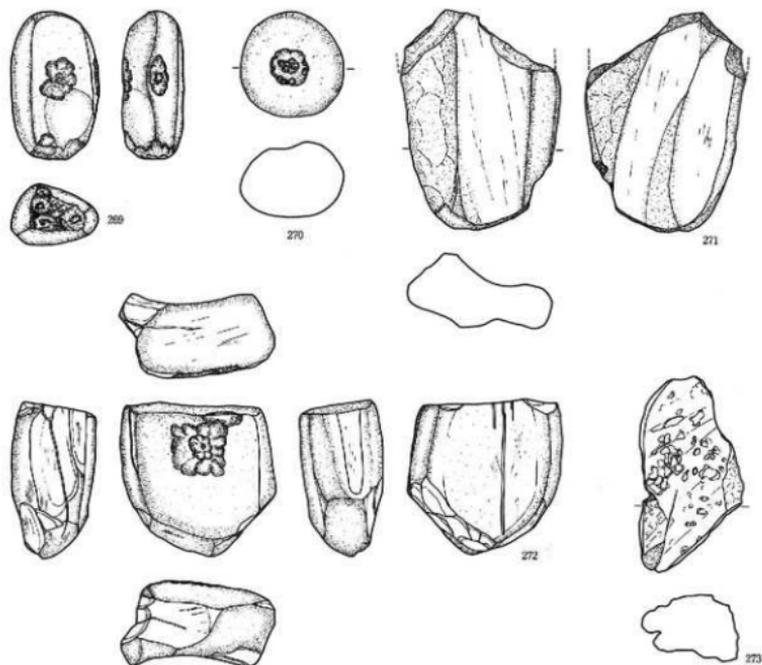
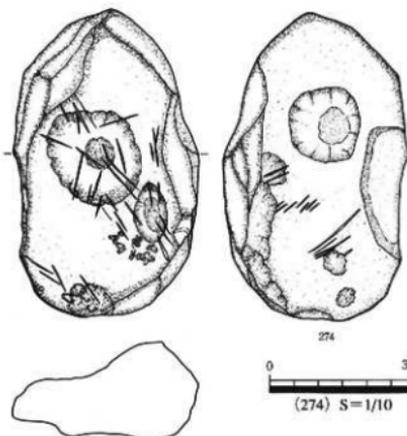


Fig.106 SD083出土石器 (8)



0 10cm
(269~273) S=1/3



0 30cm
(274) S=1/10



暗褐色粘質土出土石器 (9)

Fig.107 SD083出土石器 (9)

石核

261は接合資料で4点が接合する。4点とも明瞭な打点を残さず、石材に含まれる不純物で剥離している。最大長10.3cm、最大幅13.1cm、最大厚2.0cm、重量348.2gで、石材はサヌカイトである。

磨製石包丁

262は外湾刃半月型の磨製石包丁である。両刃で背部中央部と体部の一部には研磨が施されており、素材面のままである。欠損しており、最大長(9.0cm)、最大幅(5.7cm)、最大厚0.7cm、重量(51.1g)で流紋岩製である。263は紐部で折損しているが、外湾形で両刃の磨製石包丁と考えられる。全体に磨滅しており、層状に剥離している。特に刃部中央部の磨滅が著しい。最大長(9.1cm)、最大幅(5.5cm)、最大厚0.9cm、重量(44.7g)を測り、石材は緑色の結晶片岩と考えられる。

磨製石包丁未製品

264は両端に抉りを持ち一部に研磨痕を残すが、未製品としては厚みがなく、打製石包丁として使用された可能性も考えられる。最大長11.3cm、最大幅4.7cm、最大厚1.2cm、重量64.6gで、石材は流紋岩である。

扁平片刃石斧

265の刃部は完全に片刃で、縦方向の擦痕がみられる。欠損しており、最大長(5.1cm)、最大幅(4.0cm)、最大厚1.1cm、重量(27.6g)である。石材は青白色の結晶片岩である。

磨製石鎌

266は大型で刃部直線型の磨製石鎌である。全体に丁寧な研磨が施され、柄への装着部と考えられる抉りが存在する。刃部は抉り部から先端に向かって約9.8cmの間に設けられているが、先端部約2.2cm間には刃部は作り出されていない。一部を欠損するがほぼ完形であり、最大長19.2cm、最大幅4.2cm、最大厚1.3cm、重量(148.9g)。石材は緑色の緑泥片岩である。

大型蛤刃石斧

267は大型蛤刃石斧である。形成時の敲打痕を残し、体部中央から刃部にかけて研磨を施すものと考えられる。刃部を欠損し、最大長(12.3cm)、最大幅6.9cm、最大厚4.7cm、重量(666.0g)で、石材はヒン岩と考えられる。

磨製石斧

268は刃部に縦方向の擦痕がみられる。体部と刃部腹面を欠損し、最大長(6.5cm)、最大幅6.6cm、最大厚(2.2cm)、重量(129.5g)を測る。石材は緑白色の結晶片岩である。

敲き石

269は3箇所に敲打痕がみられる。最大長9.2cm、最大幅5.4cm、最大厚3.8cm、重量224.0gを測る。石材は硬質の砂岩である。

くほみ石

270は磨石の片面を使用しており、中央部がやや窪んでいる。最大長6.5cm、最大幅6.4cm、最大厚4.7cm、重量255.5gで、石材は軟質の砂岩である。

砥石

271は両面を使用しており、3.5~5.0cm幅の筋が3筋みられ、被熱によると考えられる割れがみられる。欠損しており、最大長(13.6cm)、最大幅(9.9cm)、最大厚(4.5cm)、重量(613.0g)を測り、石材は砂岩である。

砥石兼くほみ石

272は石のほぼ全面を砥石として使用している。窪みは砥石として使用された後付けられており、転用されたと考えられる。最大長9.6cm、最大幅9.5cm、最大厚5.3cm、重量590.0gで石材は、硬質の砂岩である。

軽石

273は加工痕がみられず、素材であると考えられる。遺跡付近では軽石は産出しないため、海岸部に打ち寄せられた軽石を遺跡内に搬入したものと考えられる。一部を欠損し、最大長11.9cm、最大幅(6.4cm)、最大厚3.6cm、重量(68.7g)を測る。

台石

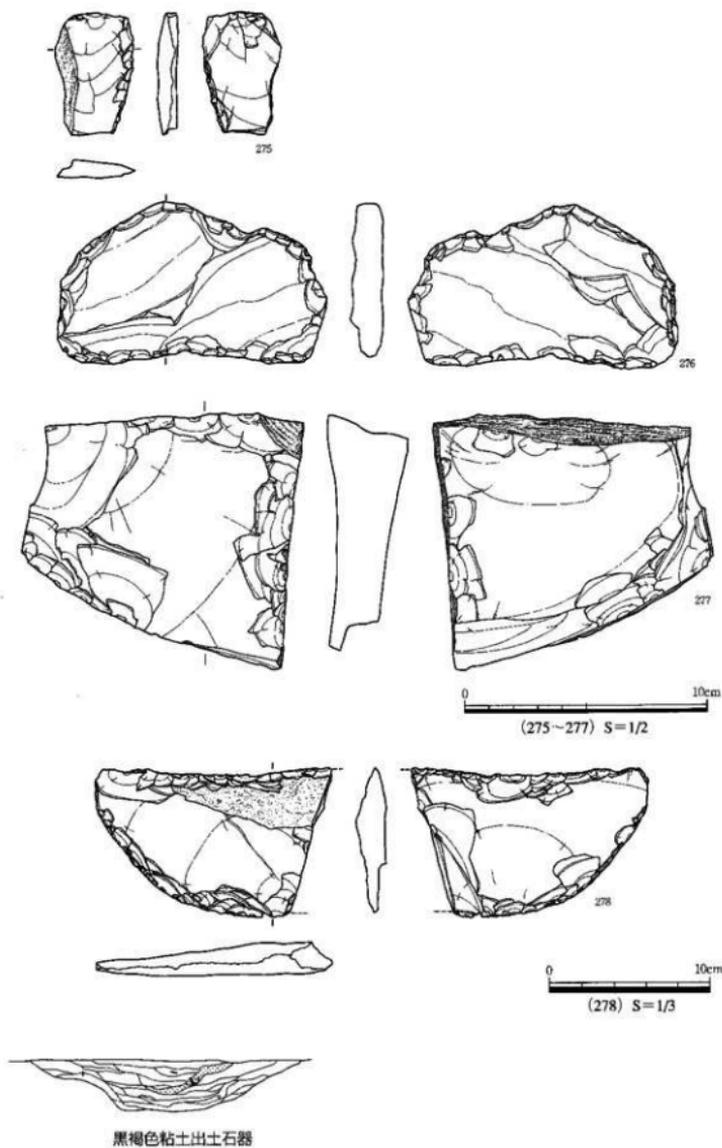


Fig.108 SD083出土石器 (10)

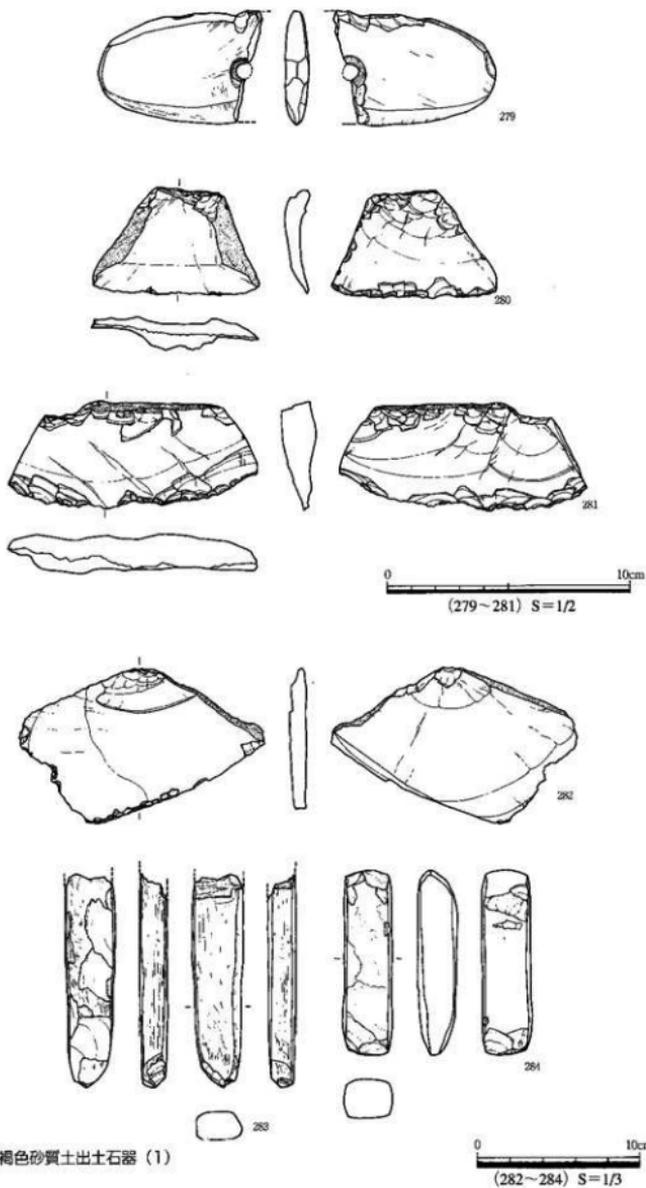


Fig.109 SD083出土石器 (11)

274は両極技法を用いた際の白石であると考えられる。両面に線状痕と窪みが確認できる。最大長31.5cm、最大幅19.0cm、最大厚9.5cm、重量7095.0gで、石材は硬質の砂岩である。

黒褐色粘土出土石器 (Fig.108)

スクレイパー (275・278)、磨製石包丁未製品 (276)、石核 (277) が出土した。

スクレイパー

石材はすべてサヌカイトである。275は縦長剥片を素材としたスクレイパーである。主要剥離面の打点はその後の調整により失われている。片方の側面に自然面を残し、他方の側面に両面調整を施して刃部としている。刃部には微細剥離がみられる。剥片先端部は折損している。最大長 (5.0cm)、最大幅3.3cm、最大厚0.9cm、重量 (14.2g) を測る。278は大型のスクレイパーである。背面の体部に自然面を残す。刃部は両刃で、両面調整によって作り出されている。先端部と基部を折損する。最大長9.3cm、最大幅 (14.8cm)、最大厚2.0cm、重量 (249.5g) である。

磨製石包丁未製品

276は荒削り素材の状態、素材面と剥離痕を有する。最大長11.1cm、最大幅6.7cm、最大厚1.4cm、重量112.2gを測る。石材は流紋岩である。

石核

277は板状剥片を素材とした石核である。二側面に自然面を残しており、剥片は自然面を打面にして剥離されており、明瞭な打点を残している。残りの二側面は折れ面であるが、折れ面に打点を観察することはできない。剥片剥離は打面を転移しながら行われているが、どの剥離にも製品として利用できるような剥片を剥離できたような痕跡はみあたらない。最大長10.5cm、最大幅11.7cm、最大厚3.4cm、重量444.0gで、石材はサヌカイトである。

暗褐色砂質土出土石器 (Fig.109・110)

磨製石包丁 (279)、スクレイパー (280・281)、二次加工ある剥片 (282)、柱状片刃石斧 (283・284)、扁平片刃石斧 (285) が出土した。

磨製石包丁

279は背部・刃部ともに直線的で長方形を呈すると考えられる。刃部は両刃で横方向の擦痕がみられる。緒部のところで欠損している。最大長 (6.7cm)、最大幅4.7cm、最大厚9.5cm、重量 (44.9g) で、石材は結晶片岩である。

スクレイパー

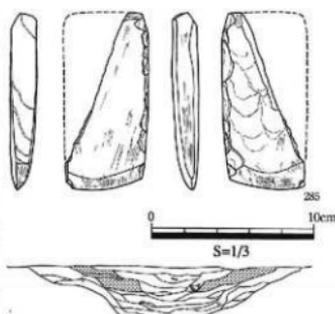
石材はすべてサヌカイトである。280は横長剥片を素材とし、主剥離面にはツインバルブがみられる。背部には刃潰し加工が施され、刃部は背面から片面調整が施されている。最大長4.4cm、最大幅6.9cm、最大厚1.2cm、重量24.6gで完形である。281は横長剥片を素材としたスクレイパーである。主剥離面には著しいバルブの発達が見られるが、打点は折れによって失われている。背部には自然面を残す。刃部は両面調整により形成されている。刃部中央部に磨減が認められる。完形で最大長4.5cm、最大幅12.5cm、最大厚1.6cm、重量77.6gを測る。

二次加工ある剥片

282は二次加工ある剥片である。大型の剥片を素材とし、剥片の側面は自然面である。剥片端部の折れ面から二次加工を加えているが、それ以外には目立った調整はみられない。最大長9.6cm、最大幅15.3cm、最大厚1.1cm、重量175.4gで、石材はサヌカイトである。

柱状片刃石斧

283は緑白色の結晶片岩製の柱状片刃石斧である。体部の一部と刃部に剥離痕がみられる。刃部は縦方向に擦痕がみられる。基端を欠損し、最大長 (13.2cm)、最大幅3.2cm、最大厚1.8cm、重量 (141.0g) である。284は柱状片刃石斧で石材は流紋岩と考えられる。刃部付近に剥離痕が見られ、刃縁は磨減している。最大長11.5cm、最大幅



暗褐色砂質土出土石器 (2)

Fig.110 SD083出土石器 (12)

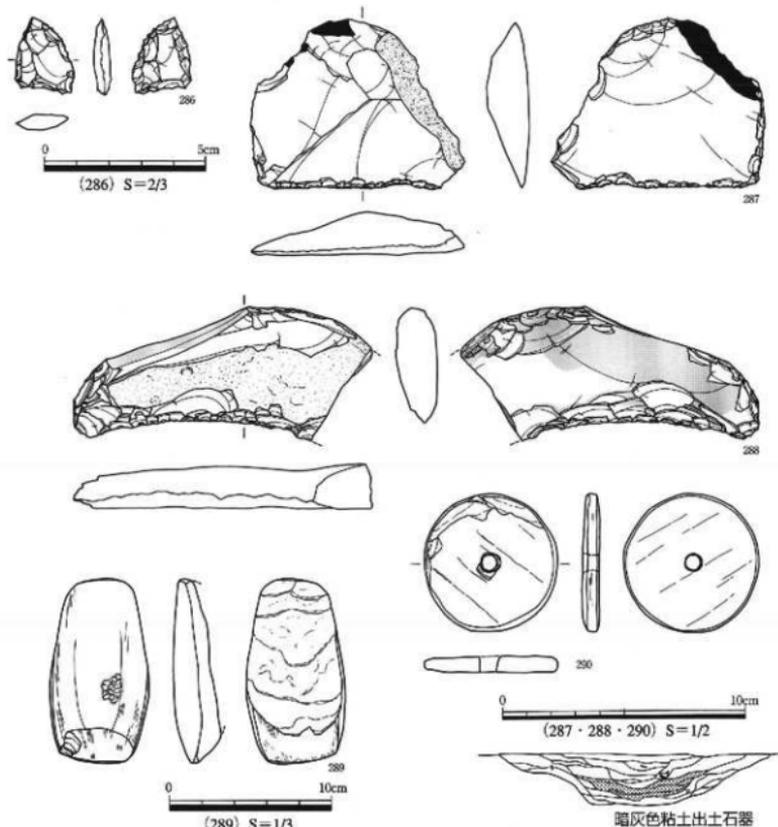


Fig.111 SD083出土石器 (13)

3.2cm、最大厚2.4cm、重量156.2gで完形である。

扁平片刃石斧

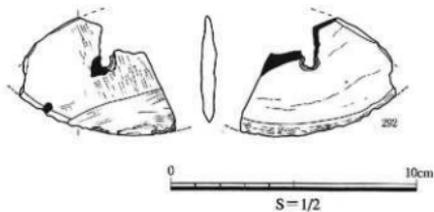
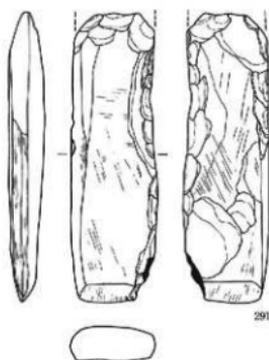
285は約半分を欠損するが、基端と側面の一部が残存するため、全体の形状を復元することが可能である。表面の刃部には縦方向の擦痕が、裏面の刃部には縦方向の擦痕の後、横方向の擦痕がみられることから、研ぎ直しが行われたと考えられる。基端と刃部付近の側面には丁寧な研磨が施されているが、裏面体部と基端付近の側面は素材面のままである。最大長11.0cm、最大幅5.2cm、最大厚1.7cm、重量(109.5g)で、石材は緑白色の結晶片岩である。

暗灰色粘土出土石器 (Fig.111)

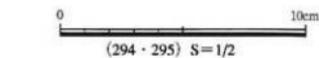
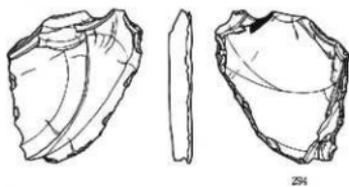
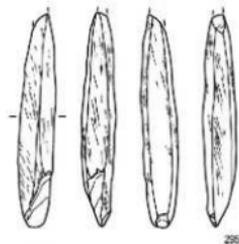
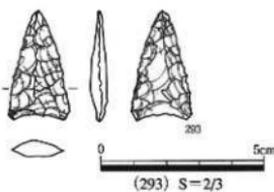
石鏃(286)、スクレイパー(287)、打製石鏃(288)、磨製石斧(289)、紡錘車(290)が出土した。

石鏃

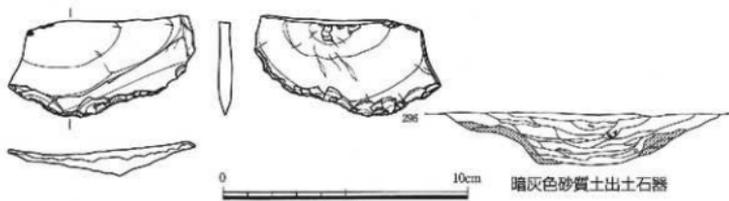
286は平基式の石鏃である。切先の調整がやや簡素であるため石鏃の未製品の可能性も考えられる。一部を欠損するが、ほぼ完形である。最大長2.4cm、最大幅1.9cm、最大厚0.6cm、重量2.1gで、石材はサヌカイトである。



暗灰色粘質土出土石器



黑灰色粘土出土石器



暗灰色砂質土出土石器

Fig.112 SD083出土石器 (14)

スクレイパー

287は横長剥片を利用したスクレイパーである。背部に調整を施し、刃部は剥片の端部と側縁に両面調整によって作り出されている。一部欠損しており、最大長6.9cm、最大幅9.8cm、最大厚1.7cm、重量(96.8g)を測る。サヌカイトである。

打製石鏃

288は背面体部に自然面を大きく残し、背部にも一部自然面が残る。背部に刃潰し加工が、刃部には両面調整が施されている。背部から腹面全体にかけて強い光沢面がみられる。基部を折損しており、最大長(12.3cm)、最大幅(5.5cm)、最大厚1.7cm、重量(130.5g)を測る。石材はサヌカイトである。

磨製石斧

289は磨製石斧である。体部の一部に敲打痕を残すものの、全体に丁寧な研磨が施されている。刃縁は磨滅しており使用の頻度が伺える。刃部には縦方向の擦痕がみられる。腹面を大きく欠損するが基部は残存しており、全体の形状は確認できる。最大長11.4cm、最大幅(6.2cm)、最大厚(3.0cm)、重量(287.5g)で、石材は緑白色の結晶片岩である。

紡錘車

290は紡錘車である。側面には研磨が施されているが、体部は素材面のままである。穿孔は両面穿孔である。最大長5.7cm、最大幅5.5cm、最大厚0.7cm、重量44.4gを測り、石材は緑黄色の結晶片岩である。

暗灰色粘質土出土石器 (Fig.112)

扁平片刃石斧(291)、磨製石包丁(292)が出土した。

扁平片刃石斧

291は扁平片刃石斧と考えられるが、幅が狭く、刃部はほぼ両刃である。側面には装束痕とみられる袈刈が確認できる。基端と刃部の一部を欠損する。最大長(11.9cm)、最大幅3.5cm、最大厚1.4cm、重量(108.6g)で、石材は緑黄色の結晶片岩である。

磨製石包丁

292は刃部と背部との関係から杏仁形を呈すると考えられる。体部の一部に研磨を施し。刃部は片刃で横方向の擦痕がみられる。欠損しており、最大長(6.4cm)、最大幅(4.8cm)、最大厚(0.6cm)、重量(24.0g)を測る。石材は安山岩である。

黒灰色粘土出土石器 (Fig.112)

石鏃(293)、スクレイパー(294)、小型円柱状石斧(295)が出土した。

石鏃

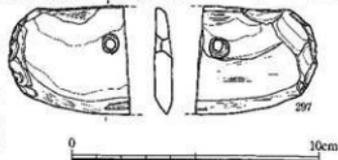
293は平基式の大型の石鏃である。腹面に素材面を残し、刃部をやや鋸歯状に調整する。切先を若干欠くものの、ほぼ完形である。最大長(3.4cm)、最大幅2.4cm、最大厚0.5cm、重量2.4gを測る。石材はサヌカイトである。

スクレイパー

294は素材剥片の打点は折損によって失われている。刃部は2ヶ所作り出されており、それぞれ腹面からの調整と背面からの調整が施されている。完形で最大長6.3cm、最大幅5.5cm、最大厚1.1cm、重量34.8g。石材はサヌカイトである。

小型円柱状石斧

295は円柱状を呈する小型の石斧である。体部と刃部には研磨を施し、刃部付近に剥離痕がみられる。最大長(8.7cm)、最大幅1.5cm、最大厚1.4cm、重量(21.6g)を測る。石材は安山岩系の岩石で



出土層位置不明 S=1/2
Fig.113 SD083出土石器 (15)

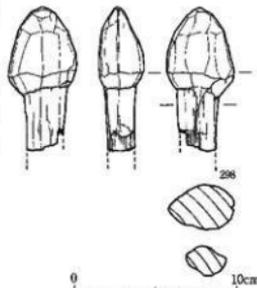


Fig.114 SD083暗灰色粘土
出土木製品 (S=1/3)

あると考えられる。

暗灰色砂質土出土石器 (Fig.112)

スクレイパー (296) が出土した。

296は横長薄片を素材とした薄片である。折れ面を打面として素材薄片を剥離しており、打点は明瞭でバルブも発達している。刃部は両面調整が施され、一部著しく磨滅している。完形で最大長4.2cm、最大幅7.6cm、最大厚1.2cm、重量26.5g。石材はサヌカイトである。

出土層位不明石器 (Fig.113)

磨製石包丁 (297) が出土した。

297は背部と刃部が直線のて全体が長方形を呈すると考えられる。背部の一部に研磨が施されているが荒制素材の状態をとどめている。刃部は両刃で横斜め方向の擦痕が認められる。欠損しており、最大長 (5.0cm)、最大幅4.4cm、最大厚0.8cm、重量 (24.4g) を測り、石材は黄白色の流紋岩である。

木製品 (Fig.114)

暗灰色粘土出土遺物

石椀形木製品 (298) が出土した。残存長8.9cm、最大幅4.2cm、軸幅2.5cmを測る。断面扁平な楕円形を呈し、全面的に面取り加工を施す。新聞発表等では男根形木製品としていたが、直接的な形態の祖形は石椀に求められると考える。

獣骨 (Pl.106)

暗褐色粘質土出土獣骨

1歳半～2歳のイノシシの下顎骨が出土している。解体痕等は確認できない。

暗灰色粘質土出土獣骨

3歳未満のイノシシの右顎骨が出土している。解体痕等は確認できない。

SD134出土遺物

土器 (Fig.115～118)

黒色粘土出土土器 (Fig.115・116)

壺 (1～8)、甕 (9～26)、壺蓋 (27) が出土した。

壺

1は復元口径15.4cm、残存高3.0cmを測る。口縁部は広く水平近くに開き、肩部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明である。2は復元口径14.9cm、残存高5.4cmを測る。11縁部は比較的緩やかに開き、端部をわずかに狭み上げる。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には3条のヘラ描き沈線を施す。3は復元口径20.5cm、残存高9.3cmを測る。口縁部は緩やかに開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には3条のヘラ描き沈線を施し、その後周辺を掻き取る事により削り出し突帯状を形成する。4は復元口径19.8cm、残存高10.9cmを測る。11縁部は緩やかに広く開き、端部に面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には4条のヘラ描き沈線を施し、その後周辺を掻き取る事により削り出し突帯状を形成する。5は復元口径13.4cm、残存高13.5cmを測る。緩やかに湾曲して開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。外面板状工具によるナデ調整の後ヘラミガキを施す。6は復元口径20.0cm、残存高8.1cmを測る。口縁部は緩やかに広く開き、端部に面を持つ。表面の劣化が著しく内面調整等は不明であるが、外面には横方向のヘラミガキを施す。頸部には3条以上のヘラ描き沈線を施し、その後周辺を掻き取る事により削り出し突帯状を形成する。7は復元口径23.0cm、残存高10.8cmを測る。11縁部は緩やかに広く長く開き、端部に面を持つ。内面表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、外面は頸部に細かい縦方向のハケ調整、その後横方向のヘラミガキを施す。また、頸部には11もしくは12条のヘラ描き沈線を施す。8は底径5.6cm、残存高5.1cmを測る。直線の開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。内面ナデ調整を施し、外面調整は劣化のため不明である。

甕

9は残存高4.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面をやや傾斜させる肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミは持たず、口縁部直下には2条のヘラ抜き沈線を施す。内外面ナデ調整を行う。10は残存高9.4cmを測る如意状口縁のもので、短く外反する口縁部とやや直線的な体部を有する。口縁部直下には5条程度のヘラ抜き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。11は残存高17.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面をやや内側に傾斜させる断面三角形の口縁を有する。口唇部にキザミを持ち、口縁部直下には4条のヘラ抜き沈線を施す。表面劣化のため内外面調整等不明である。12は復元口径21.8cm、残存高9.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の口縁を有する。口唇部にキザミは持たず、口縁部直下には5条のヘラ抜き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等不明である。13は復元口径21.1cm、残存高9.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を内側にやや傾斜させる肉厚の口縁を有する。口唇部にキザミは持たず、口縁部直下には2条のヘラ抜き沈線を施す。外面粗いハケ調整、内面ナデ調整の後横方向のヘラミガキを施す。14は復元口径16.3cm残存高5.8cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部を「く」字状に屈曲させる口縁を有する。口唇部にキザミは持たず、口縁部直下には3～4条のヘラ抜き沈線を施す。内外面劣化のため調整不明である。15は復元口径18.5cm、残存高3.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を外側に傾斜させる肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下には4条以上のヘラ抜き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整不明である。16は復元口径18.1cm、残存高8.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、やや丸く納まる肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下には6条のヘラ抜き沈線を施す。内面ナデ調整、外面縦方向のハケ調整を行う。17は復元口径19.0cm、残存高11.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする短い貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミは持たず、口縁部直下には8条のヘラ抜き沈線を施す。内外面ナデ調整を行う。18は復元口径20.9cm、残存高7.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面をやや外側に傾斜させる口縁を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下の沈線を持たない。外面板状工具によるナデ調整、内面丁寧なヘラミガキを行う。胎土は灰褐色を呈し、チャートを若干含むほかに砂粒をほとんど含まない非常に精良なもので、搬入品と考えられる。19は復元口径29.9cm、残存高7.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にし、端部を丸く納める貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミを持つが、口縁部直下に沈線を施さない。内外面表面劣化のため調整等は不明である。20は復元口径20.6cm、残存高9.8cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を内側に傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミは持たず、口縁部直下には4条のヘラ抜き沈線を施す。内外面劣化のため調整等は不明である。21は復元口径23.9cm、残存高5.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミは持たず、口縁部直下には4条のヘラ抜き沈線を施す。内外面劣化のため調整等は不明である。22は復元口径25.4cm、残存高8.8cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下には13条のヘラ抜き沈線を施す。内外面劣化のため調整等は不明である。23は底径6.8cm、残存高4.3cmを測る。直立気味に立ち上る体部を有する。劣化のため外面調整は不明であるが、内面には指頭圧痕及びナデの痕跡が残る。底部には径1.0cmの焼成後穿孔が見られる。24は底径7.2cm、残存高6.1cmを測り、やや広くひろがる体部を有する。劣化のため外面調整は不明であるが、内面には指頭圧痕及びナデの痕跡が残る。底部には径2.8cmの焼成後穿孔が見られる。25は残存高6.6cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部とやや直線的な体部を有する。口縁部直下には二又状突帯を有し、口唇部・突帯両方にキザミを持つ。突帯上に1条、下に2条のヘラ抜き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。26は底径5.8cm、残存高8.5cmを測り、直立した後縁やかに広がる体部を有する。内面表面劣化のため調整不明であるが、外面には縦方向のハケ調整を行う。外面にはヘラミガキの痕跡が残る。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、13はやや粒子が小さく、含有量も少ない。11は暗褐色を、13・25は淡褐色を呈する。16・26は赤色酸化土粒を多く含む。17は先述の通り明らかに他とは胎土が異なり、搬入品と考えられる。

壺蓋

27は残存高2.8cmを測り、天井部外面には一対のつまみと焼成前穿孔を有す。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み橙褐色を呈する。

暗褐色細砂出土土器 (Fig.116・117)

壺 (28~31)、甕 (32~36) が出土した。

壺

28は底径8.4cm、残存高8.8cm、胴部最大径16.3cmを測る。短く直立した後広く開く体部を有し、胴部最大径は比較的高い位置に来る。外面表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、内面にはユビオサエとナデ調整を施す。29は底径4.6cm、残存高7.5cm、胴部最大径10.5cmを測る。広く開く体部を有し、胴部最大径はやや低い位置に来る。外面表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、内面にはユビオサエとナデ調整を施す。外面肩部には3条のヘラ描き沈線を施す。30は残存高5.0cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部にはヘラ描き沈線を施すと考えられる。31は復元口径20.0cm、残存高7.3cmを測る。口縁部は直線的に長く伸びた後に比較的急に開き、端部を丸く納める。口縁内面には1条の貼り付け突帯を有し、口縁部内面には竹管文を有する。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、外面にはヘラミガキの痕跡が僅かに残る。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、28は淡褐色を呈する。

壺

32は復元口径25.4cm残存高17.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部は短い断面三角形の口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。内外面調整については劣化のため不明である。33は復元口径23.5cm、残存高10.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部は短い貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には4条1単位の沈線に挟まれた3条1単位のヘラ描き沈線による山形文を施す。内外面調整については劣化のため不明であるが口縁部内面には多数の指頭圧痕が存在する。34は復元口径17.3cm、残存高9.3cm測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部は短い肉厚の口縁を有し、直下に4条のヘラ描き沈線を施す。内外面板状工具によるナデを施す。35は残存高4.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部は短く外反する口縁を有する。口唇部のキザミや口縁部直下の沈線は見られない。内外面調整については劣化のため不明である。36は残存高5.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部は傾斜する断面三角形の短い貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミは持たないが、口縁部直下には7条のヘラ描き沈線を施す。内外面調整については劣化のため不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、36は暗褐色を呈する。

暗灰色粘質土出土土器 (Fig.117)

壺 (39)、甕 (37・38) が出土した。

壺

39は復元底径9.6cm、残存高5.9cmを測り、強く開く体部を有する。内外面ナデ調整を施し、底部内面にはユビオサエの痕跡を残す。胎土は淡褐色を呈し、砂粒は少ない。

壺

37は残存高3.7cmを測る如意状口縁のもので、口縁部は長く緩やかに外反する口縁を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内外面調整については劣化のため不明である。38は底径6.4cm、残存高4.4cmを測り、直線的に開く体部を有する。外面板状工具によるナデ調整を行うが、内面は表面劣化のため調整等不明である。胎土は37が淡褐色を呈する他はすべて橙褐色を呈し、5mm程度の長石粒を多く含む。

黒灰色細砂出土土器 (Fig.117・118)

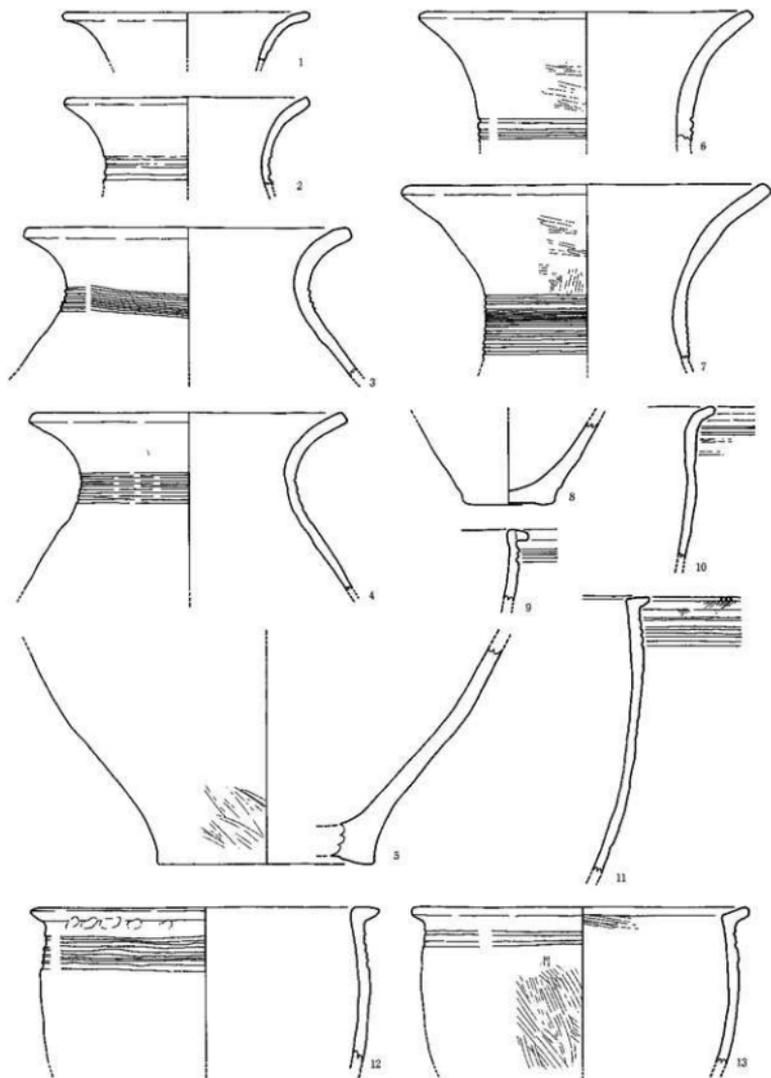
壺 (40・41・43)、甕 (44・45・46・47・48・49)、鉢 (42) が出土した。

壺

40は復元口径20.6cm、残存高5.3cmを測る。直立する頸部と弱く開く口縁部を有し、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく内面調整等は不明であるが外面にはナデ調整を施す。41は残存高5.2cmを測る。肩部であると思われ、掻き取りにより幅広の削り出し突帯を成形した後、ヘラ描きによる斜格子文を施す。内面劣化のため調整等は不明であるが、外面ヘラミガキを施す。43は底径7.9cm、残存高6.1cmを測る。広く開く体部を有し、底部と体部の境界は不明である。外面表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、内面にはユビオサエと板状工具によるナデ調整を施す。胎土は40・41が淡褐色を呈し砂粒が少なく、43は橙褐色を呈し5mm程度の長石粒を多く含む。

壺

44は残存高6.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部を内外に肥厚させ、貼り付ける。口唇部にキザミを、



黑色粘土出土器 (1)

0 20cm

Fig.115 SD134出土土器 (1) (S=1/3)

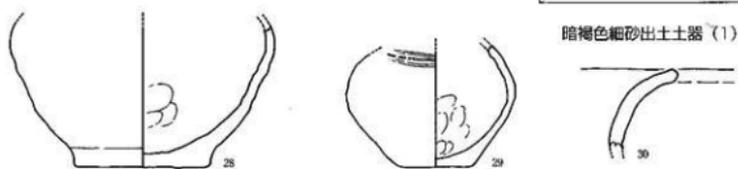
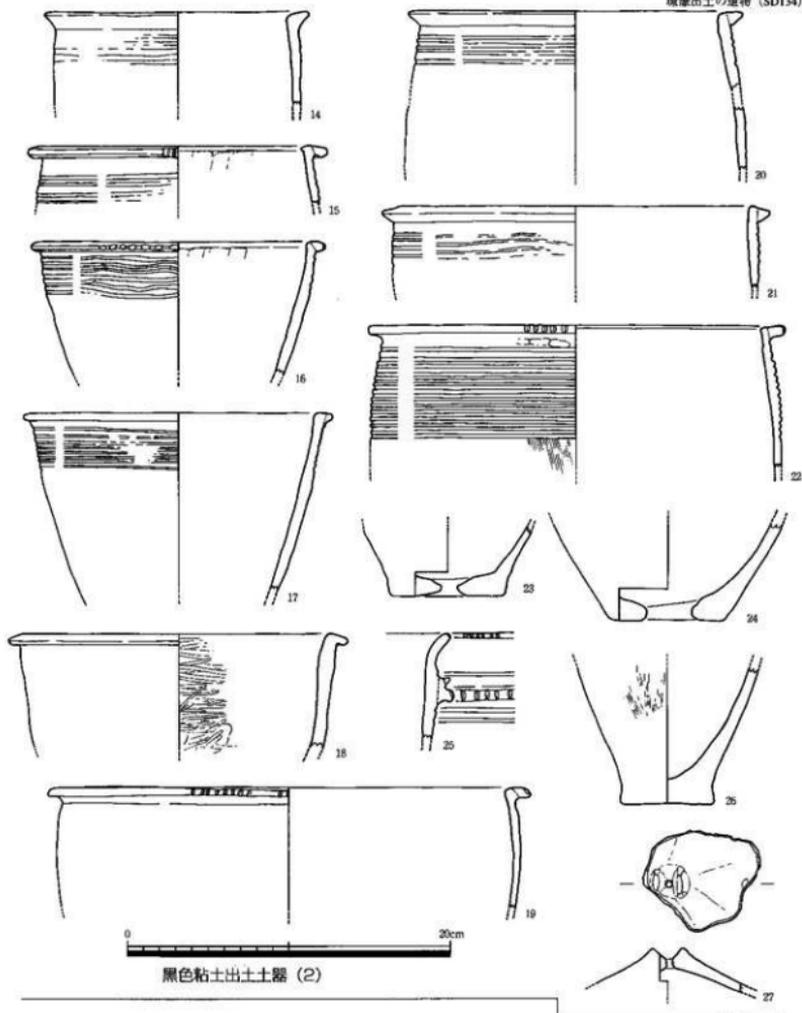


Fig.116 SD134出土土器 (2) (S=1/3)

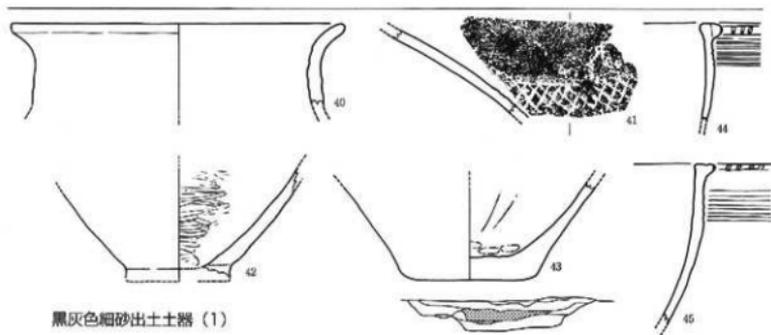
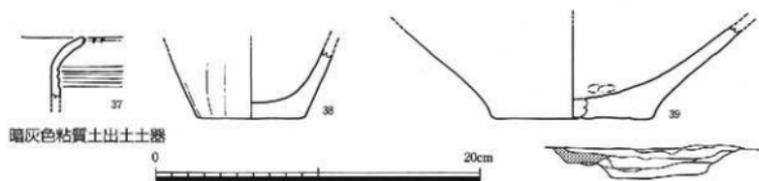
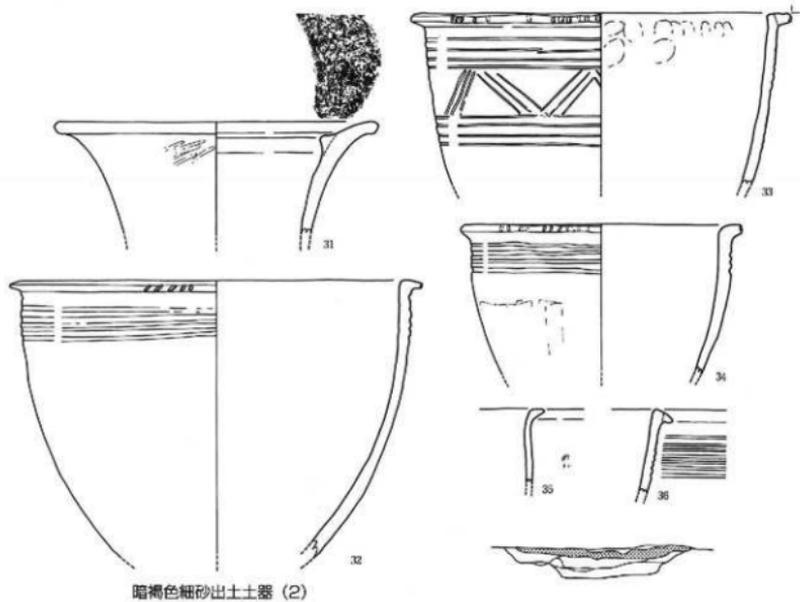


Fig.117 SD134出土土器 (3) (S=1/3)

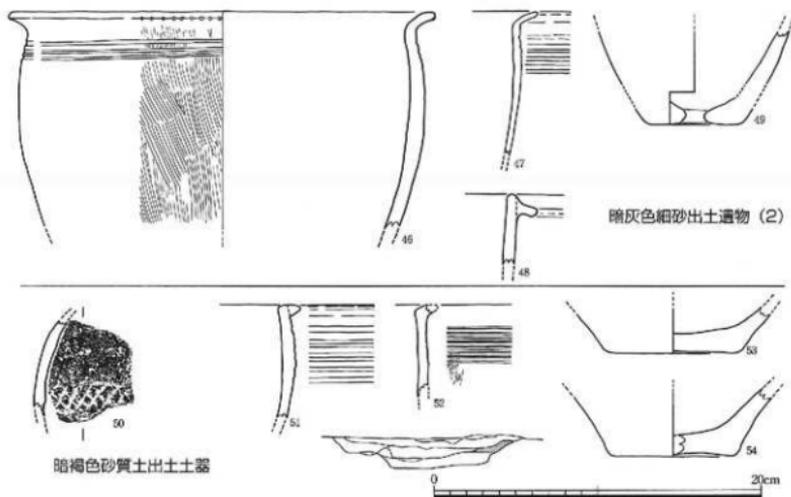


Fig.118 SD134出土土器 (4) (S=1/3)

口縁部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。内面ナデ調整を施すが、外面は劣化のため調整等不明である。45は残存高10.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の口縁を有する。口唇部にキザミ、口縁部直下には4条の沈線を施す。外面ナデ調整を行うが、内面は劣化のため調整等不明である。46は復元口径26.0cm、残存高13.5cmを測る如意状口縁のもので、口唇部にキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。外面縦方向のランダムなハケ調整を施すが、内面は劣化のため調整等不明である。体部外面には口縁部から5cm、7cmの位置に帯状に煤が付着する。47は残存高9.0cmを測る如意状口縁のもので、器壁は薄い。弱く外反する口縁部とやや直線的な体部を有する。口唇部のキザミは見られず、口縁部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。48は残存高4.4cmを測り、直立する口縁部と直線的な体部を有する。口縁部直下には1条の貼り付け突帯を有する。口唇部、突帯ともにキザミを持たない。内面表面劣化のため調整等不明、外面にはナデ調整を行う。49は復元底径5.9cm、残存高5.8cmを測る。緩やかに開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は不明瞭である。底部には径1.1cmの焼成後穿孔が見られる。劣化のため調整等は不明である。胎土はいずれも橙褐色を呈し5mm程度の長石粒を多く含む。

鉢

42は残存高7.2cmを測り、円板状の底部と直線的に開く体部を有し、内面密なヘラミガキを施す。外面は劣化のため調整等不明である。蓋の可能性もあるが、内面のヘラミガキの密なことや円板状の底部形態などから鉢と考えた。胎土は橙褐色を呈し5mm程度の長石粒を多く含む。

暗褐色砂質土出土土器 (Fig.118)

壺 (50・53・54)、甕 (51・52) が出土した。

壺

50は頸部の破片である。残存高5.9cmを測る。幅広の削り出し突帯を成形した後ヘラ描きによる斜格子文を刻む。53は復元底径8.4cm、残存高2.9cmを測る。緩やかに開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は不明瞭である。劣化のため調整等は不明である。54は復元底径7.4cm、残存高4.2cmを測る。やや外反気味に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。劣化のため調整等は不明である。胎土はいずれも橙褐色を呈し5mm程度の長石粒を多

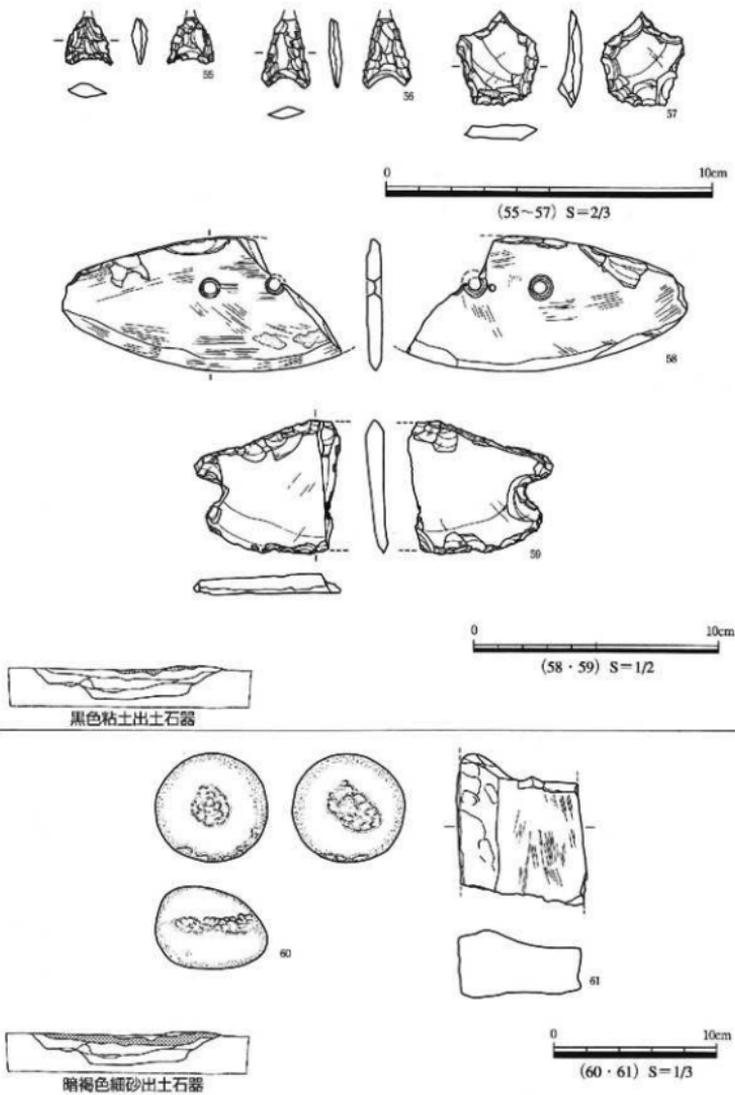


Fig.119 SD134出土石器 (1)